
東方創滅記

葉っぱ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方創滅記

【Nコード】

N6604T

【作者名】

葉っぱ

【あらすじ】

物作りが大好きな少年が妖怪になってしまった、そんな彼が入手した能力は「創造と消滅を使える程度の能力」だった。感想もえると嬉しいです。

最強設定ではないです、努力して最終的に強くなります。オリキャラ、勝手な設定もあります。

プロローグ 日常の最後（前書き）

初めて書いた小説です、読みにくいと思いますがよろしくお願いします。

プロローグ 日常の最後

ある日の学校

おれの名前はサツキ、とある高校に通っている学生だ、家ではいろいろな物―（自分の部屋で）を作っているためみんなから自分の部屋は「サツキ工場」と言われている、作っている物は役に立つものからゴミになるようなものだ。

「なあサツキ、今日一緒にゲーセンに行かないか？」

今、おれに話しかけたのは親友のカズヤだ。

「ああ、べつにかまわねけど・・・」

「全然よくないでしょ、わたしは早く掃除終わらせたいからその話後にしてくれる？」

「りょーかい」

「サチー少しぐらい許してくれよーってかお前も一緒にいかねえか？」

「うるさい、行かせてもらうわ」

はあーこいつは素直じゃないな

「最初からそう言えよ」

「……そんなことより掃除終わらせましょうよ」

「おお、すまんすまん、今ほうき持って来る」

「掃除する気なかったんかい！」 「掃除する気なかったの!？」

まあ、いつものことだからしょうがないか……。

掃除も終わり今はゲーセンに向かっている。

「サツキーサチー、モンハンしながら行こうぜーこいつ倒せないんだよ」

「歩きながらしてもまともに戦えないだろ、ゲーセンについたら一緒にしてやるから待ってろよ」

「わーったよ、まあ確かにそうだな、だけどちゃんと手伝ってくれよな!」

「モンスターはなに？」

「ジェン・モーランだ」

「「……………」」

「ん？どうした？」

「さくって・・・とりあえずゲーセンに・・・」

「そうね、行きましょう」

「無視するなよおおお！！」

だって、あいつ倒せないなんて・・・

数分後

横断歩道を歩いていると女の子が道路の真ん中に座って何かを見ている、

「サ・キ」

何を見ているんだ？

「サツキ！」

「うおっ、なんだ？」

いきなり呼ばれてビックリしたぜ。

「なんだ、じゃねえよさつきから聞いてるじゃん、いいお守りゲツトしてるか？」

呼ばれていたのか、気づかなかったぜ。

「ゴメンゴメンちょっと余所見してたよ、いいお守りは今のところないね」

「ふうんそっか、ところで何を見てたんだ？なんかエロイもんでもあったのか？」

「お前と一緒にするな、おれはエロくない」

「サツキはあんたと違うからね」

「な！じゃあなに見てたんだよ」

「ああ、あそこに女の子がしゃがんで・・・！！」

ヤバイッ！

「おい！どこ行くんだ！！」

女の子の後ろの方からトラックがかなりのスピードで走ってくる、向こうは気づいてないのかスピードを緩めない、女の子に気づいているのはおれだけみたいだ。

「おい！サツキ！あぶねえぞ！！！」

後ろでカズヤが何か叫んでいる、しかしそれに構っている暇はない、トラックはすぐ近くに来ている、間に合うか！？

「っ！間に合え！」

抱えて逃げる時間はないとふんで抱きかかえた瞬間後ろをふり向きながら投げる。

「カズヤ！受け取れ！！」

「うおお！あぶなあああ！」

よし、後は逃げるだけだった？

こんなときに限ってほどけた靴ひもをふんでよろけてしまった。

「サツキ！うしr・・・」

大きな鈍い音が鳴り少しおくれでブレーキの音が聞こえる、サチが最後に何を言ったかはよくわからなかった。

体がふわりと浮いたのを感じてさっきのは自分がトラック撥ねられたのに気づいた、当たったときに痛みは感じなかった。

「サツキ！しっかりしてサツキ！」

サチの声が聞こえる、体中がかなり痛い、意識がなくなりそうにな

る、しかしおれは意識がなくなる前に聞いた。

「女の子は・・・大丈夫・・・か？」

「大丈夫だ！おれがしっかりキャッチした！」

その言葉を聞いて安心したのか意識がなくなっていく・・・

「よかつ・・・た・・・」

「「サツキイイイ！！」」

意識がなくなる直前、女の子がこっちを見ているのに気づいた。

プロローグ 日常の最後（後書き）

読みにくかったと思います、これからも読んでくれると嬉しいです。

第一話 サツキ、妖怪になる（前書き）

これを読んでくれてるってことはお願いを聞いてくれたのでしょうか、
ありがとうございます！！これからも読んでくださいつつつつ！！
！

第一話 サツキ、妖怪になる

『これ、起きるか』

う．．ん．．あと5時間．．

『5分ではなく5時間とは．．おまえすごいやつじゃな．．．いから起きるか』

しかたない．．おきるか．．。

「．．．．」

目をひらくと変なおっさんと女の子がいた。

「おっさん．．だれ？」

「おっさんではない、神じゃ」

ふむ．．なるほど．．。

「あ、警察いますか？女の子を誘拐した変な「だから神じゃ！」

「おにいちゃん」

女の子に呼ばれる、おにいちゃんか．．いい響きだ。

「なんだい？え」と

「わたしユキ! さっきは助けてくれてありがとう!」

ユキちゃんというのか、なるほど。

「このおっさんになにかされなかったか?」

「このひと私のおじいちゃんだよ」

・・・・おっさんを見る、にやにやした顔でこっちをみている。

「おっさん」「神様と呼べ」

「・・・その神様なんでおれの前にいるんですか」

「おぬし覚え取らんのか」

おっさんは驚いたような顔をしている

「なにがだよ」

「おぬしがさっきユキをたすけてくれたじゃろ」

・・・・さっきの記憶が蘇る、あわてて体を見るがどこにも異常はない。

「いまここにいるのはお前の魂じゃ、わしがここに連れてきた」

・・・・ということは・・・おれ、死んだのか・・・、ちくしょー・・・まだやりたいことたくさんあったのになあ・・・カズヤとサチと一緒にモンハンもしてないし、製作途中のハンドソニック(

っぽいもの）もまだ作り終わってない、親孝行だとしていないんだけどなあ……。

「未練はあるか？」

おっさんがおれに聞いてくる。

「もちろん、あるよ」

「しかし、もうお前は死んでしまっている、あの時代に人間として蘇らせるわけにはいかん」

やっぱりそうですよね……。

「やっぱりそうだよな……」

「じゃが、蘇らせることは可能じゃ」

「は？ さっきは蘇らせることはできないって……」

「人間としてはの」

意味が分からん、誰か説明してくれ。

おれの考えを読んだのかユキちゃんが話します。

「おじいちゃんはこの時代に人間として生き返らせるわけにはいけないから、別の時代に別の生き物として生き返らせるって言うてるんだよ、わたしのせいで……ごめんね」

ユキちゃんが分かりやすく説明してくれる。

「なるほど、気にしないでいいよ、生き返らせてくれるんだからさ、ただ・・・」

ユキちゃんが首をかしげる。かわいい。

「？」

おっさん、もとい神様を見ながら言う。

「できれば人型の生き物にしてくれないかな？二足歩行で高い知能を持ってる生き物として」

「それはなぜじゃ？」

「いや、おれさ、物作りが好きなんだ、でも知能がないと何も作れないだろ、だからさ・・・人間に近いか同等の知能を持つ生き物として生き返らせて欲しい」

おっさんの目を見ながらはつきり言う。

「わかった、いいじゃろう」

「ありがとう」

「10分ほど待っておれ」

「ああ」

希望を聞いてくれてよかったぜ。

10分後

「おっさん」

「神じゃ」

「神様、ありがとな・・・」

「わしの孫を助けてくれたお礼じゃ、できればあの時代に生き返らせたいのじゃがな・・・」

「べつにいいよ、ところでどんな生き物として生きかえらせてくれるんだ？」

「それは秘密じゃ」

「えーいいじゃーん」

それぐらい教えてくれてもいいと思うんだけどな。

「・・・おぬしのようにあまり欲のない人間に出会ったのは初めてじゃ、普通のやつらだったら金持ちにしてくれとかモテモテにし

てくれとか言うもんじゃったからの・・・」

「・・・」

「じゃからの、わしからのお礼とサービスの気持ちを込めて能力を
やろう」

へー何の能力だろうか。

トントン

ユキちゃんが足をつつく。

「おにいちゃん、これ」

手紙と一冊の本、そしてお気に入りの肩掛けのバックを渡される。

「あっちについたら読んで」

「うん、ありがとう」

「それじゃあ起動するぞ」

「ああ」

「おにいちゃん、ばいばい」

視界が白くつつまれた

「どこだ、
ここ」

う・
・
・
・
ん
・
・
・
。

目が覚めると森にいた、結構大きな森のようでどこを見ても木がた
くさんある。

「そういえば」

ポケットから手紙を取り出す。

「えーと、なにになに」

こんにちは、ユキです。

サツキさんは今は妖怪として生き返って、おじいちゃんから能力を
もらったと思います

能力は何もないところから物を作り出す『創造』、そして存在して
いるものを完全に消してしまう『消滅』の二つです。

たぶん弥生時代の森にいます、まずは北に向かって歩いて
森を出てください、しばらく歩くと村があるとおもいます。

ユキより

……なるほど自分には妖怪になったのか……って言うて
る場合か！！

落ち着け、とりあえず落ち着くんた、落ち着いて素数を数えるんだ、
まだあわてるようなときじゃない。

「とりあえず本でも読むか」

とりあえずもらった本を読むことにした。

『能力の説明…『創造』について』

『創造』とは何もないところに何かを作り出す力である、作れるものは自分の想像力と知識によって決まる。

作る際には妖力や体力を消費するため気をつける必要がある。

『能力の説明…『消滅』について』

『消滅』とは存在しているものを消し去ることである、消せるものは自分が消したいと思ったものだが例外もあるので過信するのはいけない。

『創造』と同じように妖力や体力を消費する。

「なるほど、とりあえず実践あるのみだな！」

とりあえず最初は『創造』のほうをやって見よう。

剣を作って見るか・・・、必要なのはイメージだな、とりあえず木刀をつくってみよう。

「マジかよ・・・」

一瞬空気が乱れたかと思うところには自分のイメージどおりの木刀があった

「これはすごいな、もしかすると考えたものなら何でも作れるんじゃない……？」

もう一度やって見る、次はボールを作ってみよう。

「……これはすごいぞ、もしかするとあれもできるかもしれない……！」

Angel Beatsの白髪の女の子が出していたあれだ！

「Handsonic」

……すげえ、おれこんな物まで作れるなんて、おっさん、ありがとう。

右手にはアニメで見た通りの剣があった、よしもっと色々作るぞ！

「次は『消滅』だな、これは消えろーって考えればいいのか？」

さっき出したボールに向かって念じてみる、しかし何も起こらない、こっちはまだできないのか？

しかしその考えは数秒で崩れ去った、消えたのはボールではなくて地面の一部だった、詳しく言うなら自分の手が向いている地面の一部だった。

「この能力は、手からでるのか？」

つぎは手をかざしてさっきと同じように念じてみる、すると今度はさっきと違ってボールは消え去った。

「これもすげえ・・・っ！」

全て消したあと急に体に力が入らなくなる、体力を使いすぎたのだろうか？

「いったん休むか・・・」

数十分後

おれは本の能力の説明について読んでいた。

「なるほど、連続で使用すると体力と妖力が大きく削られるのか」

それからまだこっちでは妖怪として生まれたばかりの扱いのようで、妖力が少ないみたいだ、下級妖怪の下の方ぐらいの妖力しかないみたいだ。

これに関しては長く生きれば生きるほど大きくなるみたいだ。

まあ、とりあえず・・・

「能力を使っているいろいろしてみるか・・・」

色々作りながら生活していると500年たってました。

第一話 サツキ、妖怪になる（後書き）

東方の小説を書いてるのに誰もでていないというこのおかしき、次に出す予定ですごめんなさい、次も見てください。

第二話 サツキ、土着神の頂点の所へ（前書き）

はじめての東方キャラが出ます、最初に出る東方キャラは『消されました』です。

くそ！サツキのやつ邪魔しやがって！！

第二話 サツキ、土着神の頂点の所へ

前回からのあらすじ

女の子助ける↓トラックに撥ねられる↓おっさん、もとい神様に蘇らせてもらう↓おれ、妖怪です↓500年経っちゃった↓今回のお話へ・・・

このおれ、サツキは今森を歩いていた、何故かというと同じ場所にずっと住むことが出来ないからである、年をとっても見た目が変わり変わらないため化け物ではないかと疑われ始めたからである。

まあ、とある一人には一瞬で見破られたけどね！

それから能力について色々分かったことがあった、まず創造の力だけで物を作る、ここでは仮に剣としよう、すると鉄ができるわけだがこのままだと強度が足りない、そこで消滅の力を少し加えると・・・
・なんということでしょう、とても丈夫になりました、たぶん消滅の力が働いて相手の攻撃を若干弱めると同時に向こうの武器の強度が少し消え結果的に自分の武器が強くなるというわけだ。

それより・・・

「・・・ここはどこなんだろうか・・・」

絶賛迷子中である。

しばらく歩いているといきなり白い蛇が襲ってきた。

「Handsonic」

しかしそれを一瞬で切り捨てる、おれはこの500年で下級妖怪から中級妖怪の中の上くらいの力になった。

『シャー!』

うお!この蛇再生しやがった!しかも二匹に分裂してる!

「ツチ!消えろ!」

『!』

白い蛇は苦しみながら消えていった。

「最近蛇によく襲われるな・・・、このへんは蛇が多い地域なのか?」

こここのところ毎日蛇に襲われている、そろそろ勘弁して欲しいぜ・・・

『『『シャー!!!!!』』』

また出やがった!何でこんな目に!

3日前

「うーん、次はどこに行こうか・・・」

前の村をでてしばらくたつが新しい村が見つからない、ん？あれは蛇か？

「弱ってるな、治療しよう」

おれは薬を作り出し蛇に使ってあげた。

「早くよくなるといいな」

おれは蛇を抱えた。

「道の真ん中にいちゃ危ないから森の中に入れるか」

今になって思うがここで森に入ったのが間違いだったのだろう。

現在

「ちくしょー！あの時森に入るんじゃないくて森の入り口に置いてくんだっ！！！」

森の中に入ったあと何があったかと言うと同じ種類の蛇が襲い掛かってきたのだ、いきなりのことだからおれは逃げてしまった、あの時適当に走ったから迷子になったのだろう。

「おまえも結構元気になってきたな」

『シャー』

もちろんあの時治療した蛇である、傷が結構治ったときに逃がそうとしたがどこまでもついてくるので連れていくことにしたというわけだ。

「なあ、おまえここの森の抜け方わかるか？」

『シャー』

「なにいつてんだろ、おれ」

蛇に話しかけてもこっちの言葉が分かるわけないだろ……。

『シャー』カプツ

「あだっ！！」

蛇を見るとついてこいと言わんばかりに首をクイッククイッと動かしている、……ここはついていくか……？

『カプッ』

「あだっ！！ついていくからついてくから！」

『シャー』ズルズル

「痛ててて……」

噛まれたところが少し痛むが気にしないでついていこう。

数十分後

「おおおおおおお！！！！森を抜けたああああああ！！！！」

『シャー』

「ありがとう！！白蛇！！」

『シャー』ズルズル

蛇は森に戻って行った、ここまで連れてこようと思ったからついてきたのかな・・・、だとしたらとても嬉しい、恩返しをしてくれたのだから。

「うーん、まずはあそこの神社に行くべきかな？」

おれは村に住む際に村長に許可をもらいに行く、しかしこの村は村長の村と思える建物がないため大きい神社に目をつけたわけだ。

「さて、行くか」

おれは神社へと歩き出した。

神社への階段を上っていると綺麗な湖が見えた、子供たちが泳いだり、大人の人が釣りをしたりしている。

「綺麗だな・・・あとで湖の名前を聞いとかないな」

とりあえずおれはさきに村長のところに行かないとな。

「でっかい神社だな」

遠くから見ても大きいだろうと思ったが予想以上に大きかった。

「ご利益がありそうだな、賽銭でも入れるか」

村での生活で手に入れたお金を取り出し、箱に投げ込む。

「さて、何を願おうか……」

よし決めた。

「やっかいごとに巻き込まないように……かな」

っ！っ！強烈な殺気を感じその場から離れる、さっきまで自分がいた場所に鉄の輪っかが突き刺さっていた、ちくしょう！ご利益なんてないじゃないか！！！！

??? SIDE

私は目を疑った、理由は簡単だ、妖怪が神社に来ている、来ているだけならまだしもお願い事をしているのである、『やっかいごとに巻き困れないように』じゃないよ！やっかいごとに巻き込まれてるのはこっちだよ！ただえさえ戦争中で戦力が減っているのに妖怪にここを荒されるなんて冗談じゃない。

「先手必勝だよ・・・うらみはないけど悪く思わないでね・・・神具「洩矢の鉄の輪」！」

食らえ！！私は鉄の輪を投げつける、が、しかし。

「な・・・よけただと!？」

何者だアイツ！私の鉄の輪をよけるなんて・・・ただ物じゃないね・・・。

私は妖怪に見えるように広いところにでた。

「おまえ！何者だ！」

「おまえ！何者だ！」

それはこっちのセリフだ！というセリフをギリギリで引っ込めた、よく考えればこっちは妖怪だった、神社に参拝しているほうがおかしいのだろう。

そんなことを考えてると向こうから大きな声が飛んできた。

「答えろ！ここで何をしている！」

「おれの名はサツキ、なになって、神社にお願い事してただけだ、べつに襲おうってわけじゃない」

「んなもん信じられるか！死ね！」

うおおおおお！襲ってきやがった！

「落ち着けて！えーと女の子！」

とりあえずハンドソニックを作り出し鉄の輪による攻撃を防ぐ。

「ぐぬぬぬぬ、おまえ、ここに何しに来た！」

ソードと鉄の輪で戦いながら向こうは聞いてくる。

「この村に住む許可をもらいに来ただけだ！」

「行け！おまえら！」

いったん離れたかと思ったら白蛇をたくさん呼び出した。

『『『『『シャー！！！！！！』』』』』』

聞く気無しなら聞くなよ！！

おれはハンドソニックで蛇を切り捨てながらいったん離れる。

「出ですよ！ゴーレム！」

『ゴオオオオオオオ！！』

石の巨人を作り出し蛇と戦わせる。

「落ち着いて話を聞いてくれ！」

「うるさいうるさいうるさい！妖怪の話なん・・・か・・・え？それ本当かい？」

・・・誰と話してるんだ？

「誰と話してるんだよ、えーと女の子」

「えーと・・・話を聞こうじゃないか、いったんそちらも戻せ」

「あ・・・ああ、わかった」

ゴーレムを消すと向こうも白蛇たちをもどす。

「で・・・なんでいきなり話を聞いてくれる気に？」

「い・・・いやーちょっと聞いてやるかって気持ちになってねー」

目が泳いでいるぞ、嘘ついてんなおまえ。

『シャー！』

「ん？あ！おまえあの白蛇じゃねえか！」

「あっ・・・できちゃダメだって！」

『シャー！』

「ごめんなさい！ちゃんと正直に言います！」

女の子が白蛇に謝っている。

「いやーえーと・・・いきなり攻撃してごめんね、私の名前は洩矢諏訪子、ちよっといまある国と戦争中でね、いまここを攻撃されるわけにはいけなかったからさ・・・ごめんね」

諏訪子さんか、えーと。

「洩矢諏訪子さん、あのお話があります」

「何でも言ってよ、それから諏訪子でいいよ」

「諏訪子さん、しばらくこの村に住ませてもらえないでしょうか？お察しの通りおれは妖怪でして・・・10年たつと別の村に移るようにしてるんです、妖怪だから見た目が余り変わらなくて・・・」

「うーん、住ませたいのはやまやまなんだけどねー残念だけど村に住ませるわけにはいかないよ」

「そうですか・・・」

やっぱりだめか・・・妖怪と分かってて住ませる物好きはいないだろうからな・・・

「村はダメだけど・・・私の神社と一緒に住まないかい？神社なら部屋がたくさんあるし好きに使ってもらっても構わない」

「そうですか！ありがとうございます！」

おお、やった、しばらくの間野宿しないで済むぞ！

「いやいや、かまわないよ、それにしてもあんたなかなか強かったね」

「おれは優秀な能力を持っていますからね」

妖怪の強さを決めるのは純粹な力だけじゃない、能力も関係してる、例えば10の力を持つ妖怪と7の力を持つ妖怪が戦えば前者が勝つだろう、しかし後者の妖怪が自分の力を倍にする能力を持っていたら？結果は14の力になった後者が勝つだろう、それほど能力

は重要なのだ。

「へー、どんな能力なんだい？」

「それは言えません、妖怪にとって能力を知られるのはとても危険なんです」

「それは対策をたてられるからかい？」

「まあ、そんなもんです」

「ふーん、そっか、まあとりあえず入ってよ」

諏訪子に神社の中に案内される。

「結構広いんだな」

「うん、一応この国を治めているからね」

「え？ 諏訪子が治めてるのか、てっきり・・・やば」

「てっきり・・・なんだい？」

うおおおやべえ！！怒ってらっしゃる、どうにかいいわけを考えるんだおれ！

「あれだよあれ！」

「なにがあれなのさ」

「この！この神社の神様が治めてるもんだと思ったんだ！！！」

「この神様は私だよ」

「へーそうなんです・・・か・・・えええ！！」

「そういえば言ってなかったね、すまない」

おれ、神と戦ってました・・・あれ？ちょっと待てよ？

「その・・・諏訪子は何でおれを一発で倒すことが出来なかったんだ？」

「・・・さっき戦争してるって言ったのは覚えてるかい？」

ああ、それはもちろん。

「おぼえてるさ」

「いまその戦争の方に私の力の7割ほど割いてるんだ、さっきの白い蛇も私の力の塊みたいなものでね」

森に白蛇が多かったのも戦争中だからか・・・おれ、切りまくったけど大丈夫かな・・・。

「まあ、気にしないでいいよ、それより今は神社を案内しよう」

「ありがとう、助かるよ」

「あの部屋が寝室で、あそこが温泉だよ、好きに使ってもらってかまわないよ」

「ありがとう、あとで使わせてもらうよ」

「それじゃあ私は行くよ」

「ちょっと待ってくれ、聞きたい事があるんだ」

「?べつにいいけど、なんだい?」

「階段を上ってる途中にあった池だけどあの池はどんな名前なんだい?」

「・・・名前はないよ、でも戦争に負ければあの池は綺麗な青から真っ赤に染まることになる、それだけはなんとしても避けなければいけない・・・なに言ってるんだろうね、あんたに言っても意味ないのね」

「・・・」

おれは何も答えることが出来なかった。

夜

食事

「諏訪子、ご馳走になってもいいのか？」

「うん、いいよ！一人で食べるのは淋しいからね、一緒に食べるとおいしいもんだよ」

「そういうものなのか？」

入浴

「サツキ！一緒に入ろう！」

「それはさすがに無理だ！」

「えーいいじゃないか！」

「だめだって！」

夜 自分の部屋

「ふう・・・今日はつかれたな・・・」

ゴーレムを作って戦ったのは久しぶりだった、本気で戦ったわけではないがとてもつかれた。

「寝るか・・・」

布団に入ると・・・

ガラガラ

「サツキ！一緒に寝るよ！！」

「もう勘弁してくれ！」

「ほら、戦って仲直りしたら友達じゃないか！」

「ん・・・まあたしかにそうだが・・・」

「よし、一緒に寝よう」

諏訪子が布団に入ってきた、いや、友達でも男女で寝るのはまずいだろ・・・。

「ほら、自分の部屋に戻らないと・・・ってもう寝てんのかよ・・・」

諏訪子が部屋に入ってきてからのここまでの時間約10秒である。

「まあ・・・寝るか」

諏訪子の隣に行き一緒に寝た、べっ・・・別にやましいことはしてないからな!!

早朝

諏訪子SIDE

「そうか、前線を突破されたか・・・もうそろそろ私もでないといけないみたいだね・・・」

隣ではサツキがぐっすり寝ている、これならこっそりでも気づかないだろう。

「ありがとう、ミシャグジ、すぐ準備する」

『シャー』

着替えを5分ほどで済ませ、サツキにちょっとでかけてくるという書きおきをしておいた。

「じゃあサツキ、行ってくるよ」

もちろんサツキは答えない。

「じゃあ行こうか、ミシャグジ」

『シャー』

私たちは戦場に飛んで行った。

第二話 サツキ、土着神の頂点の所へ（後書き）

どうでしたでしょうか、評価だけでなく感想をくれると嬉しいです。

第三話 土着神話VS中央神話（前書き）

こんにちは、葉っぱです、感想を書いてくれると嬉しいです。
タイトルは、いいの思いついたらかえる予定です。

第三話 土着神話VS中央神話

朝

「う．．．ん．．．」

ガバツ

おれは布団から体を起こし隣を見る。

「朝か．．．あれ？諏訪子がないな」

もう起きてんのか？とりあえず探すか。

「おーい諏訪子ー、どこだー」

廊下を歩きながら名前を呼ぶが返事がこない、どこかに出かけてるのだろうか？

まあとりあえず飯でも食うか。

諏訪子SIDE

「ミシヤグジ、今の戦況はどうなっている？」

空を飛びながら聞く。

『簡潔に言いますと、とても悪いと言ってもいいでしょう』

結構戦力を送ったんだけどね・・・それほどまで相手は強いのかい・・・

「敵の名前は分かるかい？」

『おそらくですが・・・八坂神奈子が出て来たのかと思われます・・・』

ははっ、そりゃあどれだけ戦力を送っても勝てないわけだよ。

「負けるわけにはいかないよ、八坂神奈子」

このおれサツキは森で絶賛迷子中である、あれ？デジャヴ？

なぜなら諏訪子の置き手紙を発見したからだ、内容はこうだ。

『ちょっと戦ってくる、ちゃんと帰ってくる』

戦ってくるじゃねーよ！おれも連れてけよ！！結構心配してるんだぞ！

「にしても・・・おれって空飛べねえのか？」

今になって思えば妖怪になって一度も空を飛んでない、ゲームでは普通に飛んでただけだな。

挑戦して見るか、どうせこのままじゃあ道に迷ってるだけだし。

数分後

結論から言うと飛べませんでした、しかし、それであきらめるおれじゃなかった、自力で飛べないなら、翼を作ればいいじゃない！！

「おお！飛べた！」

よし、これで迷子脱出！

「さてと・・・諏訪子の力の探知でもするか・・・」

諏訪子SIDE

「よし、ついた」

家をでて数十分、私は戦場に到着していた。

「みんな、戻っておいて」

私はミシャグジに割いている力を自分に戻す。

『やあ、そこにいるのは洩矢諏訪子じゃないか、こんなところに何の用だい?』

私は声のしたほうを睨みつける。

「私が戦争に参加しちゃいけないのかい？八坂神奈子！！」

『いや、別にっ！』

ブーン！ドオン！

柱が数本飛んでくる、私はそれを受けるのではなく避けた、正面から受けるのはできるだけ避けたかった、なぜならこの神、攻撃力はバカでかいのである。

「流石だね、力はかなりあるじゃないか、それじゃあ次はこっちから行くよっ！」

とある戦場で神同士の戦いが始まった。

そのころ

「こっちだ！」

おれは諏訪子の力を感じ、そのほうへ全力で向かっていく、なぜならやばいほどにでかい力だったからだ、しかも諏訪子の方が少しだけ小さい。

「おれも手伝うからな！」

迷子でも歩いていた方向がよかったのか、あと三十分ほどでつきそうだ。

諏訪子SIDE

「フッ！」

私は弾幕をたくさん飛ばす、ねらいはもちろん神奈子だ。

「そんなものかい！そんなんじゃないあ私にや勝てないよ！」

全てを弾きながらこっちに近づいてくる、しかし、予想通り！

「食らえ！」

私は水の球を連続で作り出し、ぶつける。

「うっ！」

目潰しだ、そして・・・

「いけええええええ！」

岩の柱を作り出し何本もぶつける。

よし、いけたか？

「結構やるじゃないか、でもね」

岩の中からでてきて私にこういった。

「火力が足りないよ」

その瞬間上から横からたくさんの御柱が飛んできた。

「っ！」

受けるわけにもいかなかったので私は避けるに集中する、しかし。

「どこみてんだい？こっちだよ」

「なっ！」

ブウン！ガッ！

「ううううう！」

神奈子が御柱でスイングしてきた、ギリギリでガードしたが腕一本はやられただろう、しかしすぐに再生させる。

火力が足りない・・・か、なるほど、たしかに私じゃあれはできないね、でも火力が足りないなら・・・。

「技術でなんとかするしかないよね！神具「洩矢鉄の輪」！！」

これが私の武器、最先端の武器の威力に驚くがいい！

「りゃ！」

「ぐっ！」

鉄の輪が神奈子の体に傷を作っていく、これならいけそうだ。

「流石に強いね、この武器でそれだけ耐えるなんて流石だ」

「フン、こっちはたくさんさんの国を攻めたんだ、この程度じゃ倒れやしないよ、それに・・・」

「なんだい？」

「その武器が鉄だったことに後悔するがいい」

「何を言って・・・クッ！」

蔓が私を拘束しようとかっちにたくさん飛んできた、さっきまではこれの時間稼ぎだったってことかい！でも、これぐらい、簡単に切り裂ける！

蔓を数十本切った辺りで異変は起こった

「切れないだと！」

驚いて武器を見るとキラキラと光っていた鉄の輪は赤茶色になっていた。

「うわっ！」

蔓に手足を拘束され、宙に持ち上げられる形になった、頭に乗ってる帽子が地面に落ちる。

「このっ、放・・・ぐっ」

「動かないほうがいいよ、動けば動くほど苦しんで死ぬことになる、死ぬなら苦しまずに一発で死んだほうがいいだろ？」

神奈子が御柱を何本も作り出す、あれでとどめを刺すつもりか・・・、このままじゃ受身もガードもできない。

「・・・・・・・・」

どうやらあの置き手紙の約束は果たせないみたいだ。

「逃げるのはあきらめたかい？」

そんなわけないじゃないか、最後まで抵抗するに決まっている、負けるにしても最後まで戦い続けなきゃいけない、私には国民を守る必要がある。

「いけっ！」

帽子に命令を出し神奈子に攻撃させる、だが相手はとても強い、数十秒もすればさっきの状態に戻るだろう。

「くそっ、なんだこの帽子！」

その間に私は蔓から逃れようと動き続ける、しかしだんだん力が入らなくなっていく、どうやらこの蔓は力を吸い取っているようだ。

「ちっ！少し遅れたけどとどめを刺すよ、洩矢諏訪子、それじゃあ死んでくれ！」

御柱が私に向かって飛んでくる、私はあと数秒の命だろう、力の入

らない体ならなおさらだ。

「詰み・・・かな・・・」

『消し飛べ!!!!』

誰かの声が聞こえた、もちろん神奈子じゃない、とすれば・・・

「サツキ・・・」

私は友の名を呼んだ

第三話 土着神話VS中央神話（後書き）

どうも、葉っぱです、楽しかったですでしょうか？

次の話はサツキVS神奈子です、よろしければ感想ください。

第四話 サツキVS神奈子（前書き）

どうも、今回はサツキの本気を出させようと思います、もちろん勝つのは『消されました』です。またかコンチクショー！！

どうぞ、見てください。

第四話 サツキVS神奈子

前回までのあらすじ

死んでしまつて妖怪として蘇る↓500年経っちゃった↓ロリ神登場！一緒に住むことに↓諏訪子VS神奈子↓今回のお話へ

諏訪子SIDE

「貴様・・・何者だ！」

神奈子がサツキに向かって叫ぶ、しかしサツキはそれを無視して私の方に近づいてくる。

「諏訪子、大丈夫か？」

「・・・まあ、なんとか助かったみたいだよ・・・」

ズババババ

サツキが私を拘束している蔓を全て切り裂く。

「遅くなってごめんな、ちょっと迷子になってた」

「大丈夫、私が勝手にしたことだから」

神奈子がサツキに向かって御柱を飛ばす。

「消し飛べ」

サツキは片手で防ぐ、いや、消している。

「諏訪子、あとは俺に任せてゆっくり休んでいてくれ」

「お言葉に甘えさせてもらおうかな・・・あいつ強いから気をつけてね」

「ああ、泥舟に乗ったつもりでいてくれ」

「沈んじゃうじゃないか・・・」

私は笑いそうになるが、笑う力も残っていない。

普通なら中級妖怪ほどの妖力のサツキが勝てるとは思わないだろう、しかし、さっきの攻撃が効かないのを見て私はサツキに任せることにした。

「じゃあ、行ってくる」

「・・・・・・・・うん」

力を吸われ過ぎたのだろう私はそこで意識を手放した。

間に合って本当によかった、あと数秒遅ければおれの目の前で諏訪子はやられていただろう。

「おまえ・・・・・・・・いまからおれが何するか分かるよな・・・・・・・・？」

目の前の女に一応聞いておく、まあ返答は一つしか考えられないけどな。

「命乞いでもするのか？」

やっぱりその返事だろうな、予想はしていたけどやっぱり腹立つな。

「命乞いするのは貴様だろ？おれに攻撃をあてれなかった神様？」

「……おまえ、相当死にたいようだな……」

「ハッ、死ぬのはお前だ、駄神め」

おれは500年生きてきた中で一番強い敵と戦うだろう、しかし負ける気はしなかった、なぜなら友達を傷つけた相手だから手加減をする必要がないからだ。

「これでもくらってな!!」

「Handsonic Ver2」

高速戦に特化した武器を作り出し、前に走り出し、距離を縮める、もちろん柱を避ける気はない、なぜなら勝手に避けてくれるから。

「Distortion」
ディストーション

自分の周りにとあるバリアを作り出す、すると柱が右に曲がっていった、そのあとすぐにバリアを消す、妖力と体力の消耗が大きいからだ、これから動き回るのに体力を失い過ぎるわけにはいかない。

「なっ！何故当たらない！」

「そんなことよりお前の目の前にいるおれに注意を払ったらどう・・・だっ！」

ハンドソニックを思いっきり振る・・・が柱でガードされた、なるほど、近接攻撃は柱で防がれ距離を取ればそれを投げつけられる・・・か・・・。

「めんどうな柱だな」

「フンッ、そんなのお前の知ったことか！」

一瞬で距離を開け柱を投げつけてくる、しかし、おれはそれを叩き落とした。

銃弾に比べりゃ遅すぎるぜ、あの500年間練習してたからな。

「いつまでもこんなこと続けても意味がないな・・・」

「こっちには意味があるよ、そっちの燃料切れを待つというね・・・」

面倒な奴だ、しかたない、できれば使いたくはなかったが・・・

「おい、駄神、名前はなんだ？」

「今更知リたがっても遅いよ、知リたきやいっぺん死にな」

「そうか・・・じゃあこっちもいわないでおこう、殺す前に聞きたかったんだけどね・・・」

「殺される前に・・・のまちがいだろう」

「いいや、こっちが合ってるよ」

いきなり爆発音が鳴った、もちろん音の発生源は駄神のすぐ近くだ。

「おまえ・・・何をした」

いまのをもろに食らった神が聞いてくる、爆弾を作り出したのだ、だがそれを教える必要はない。

「おれの名前を知ればそれがなにか分かったのにな・・・」

おれはさらに爆弾を作り出し、駄神の近くで爆発させる。

「うぐっ！」

「それだけじゃないぜ？」

パン！ 渴いた音が響く。

「うがああああ！」

拳銃を作り出し撃ったのだ。

「まあここまではただのお遊びさ」

おれはとあるものを駄神のすぐ近くを取り囲むようにに作り始める、だが拳銃で撃っているので気づかない。

「おい駄神、その体でこれに耐えたら許してやるよ」

おれは結界を作り出しさっき作った物質と一緒に駄神をその中に閉

じ込める、さっき作り出したのは水素と酸素、その二つの気体がある中にピンを抜いてある手榴弾をつくりだす。

「水素爆発って・・・知ってるか？」

もちろん知ってるわけがないこの時代では水素爆発どころか酸素も水素も発見されてないだろう。

おれは結界が壊れないように妖力をたくさん込める。

「吹っ飛べ」

一瞬後、戦場に巨大な爆発音が鳴り響いた。

なんで、あまいんだろうな・・・おれ

あの後諏訪子はもちろんのこと、何でかは知らないがあの駄神も連れて帰ってしまった、諏訪子をひどい目に遭わせたやつなのになんでだ？

「チッ、なんでおれがこいつの手当てまで・・・」

とりあえず薬を作りだして、包帯も・・・

まずは諏訪子に薬を塗り湿布を貼る、諏訪子はざっと見たところ全身に打撲とすり傷だった、とりあえず治療のために服を脱がし湿布を貼っていく、あんまり貼り過ぎるのもいけないのでとくにひどい箇所を中心に貼っていく、数日もすれば治るだろう。

次は駄神か・・・こいつは・・・やけどと切り傷だな、やけどによく聞く薬と包帯か、治療なんかしたくはないが、おれの責任だしちよっとやりすぎたしな・・・さっさと作るか、おれは薬と包帯を作り出し駄神に塗ることにした、さて塗るか、おれは服を脱がし薬をやけどしている場所に塗り始めた。

おれは治療を終え服を元通りにすると体が思い出したかのように急に疲れが出てきた。

「くそ、こんなときに・・・」

おれは意識を失うように眠った。

諏訪子SIDE

「サツキ、起きて」

「ZZZ・・・」

「サツキ、起きて」

「ZZZ・・・」

「もうしょうがないなあ・・・ねえねえ、サツキに攻撃してみないかい？一発もあてれなかったんでしょ？」

私は神奈子に話しかける。

「そ・・・それはそうだが・・・寝ているところに攻撃するのは・・・」

「はあ・・・じゃあ普通におこそう」

「サツキ、起きてよ、聞きたい事があるんだから」

少しずつだがサツキは目を開ける。

「おはよ・・・ZZZ」

「「寝るな!!」」

二人同時にツツコミを入れる。

「それはそれは、まったく寝ちゃおりませんよムニヤムニヤ」

「え？寝言なの？どうしよう諏訪子、こいつ強い」

「うーん・・・水でもかけよう」

私は水の球をサツキの顔を覆うように作り出した。

「ぶわっはあ!!」

「あ、起きた」

「サツキおはよう」

「ああ、おはよう、いきなり殺そうとするのはどうかと思うんだが・
・」

「まあ聞きたい事があったからね」

「まあ聞きたい事があったからね」

諏訪子はおれを起こすとそういつてきた、聞きたい事ってなんだ？

「なにを聞くんだ？」

「まあ聞くのは二つだけだよ、まず一つ目、神奈子を倒したのはサツキかい？」

「誰だそれ？」

「私だよ！」

諏訪子の隣にいた駄神が言う。

「まあ、おれが倒したけど・・・それがどうした？」

「じゃあ二つ目・・・私たちを治療したのは・・・サツキかい？」

「ああ、おれだが・・・っ！！」

強烈な殺気がおれを襲う。

このとき寝ぼけてなければなんとかいいわけを考えることが出来ただろう、しかし寝起きのおれの頭はそんなことは少しも考えていなかった。

「へっ・・・だってさ」

「なるほど」

二人の殺気が強くなる、今すぐ逃げなきゃヤバイ・・・おれの生存

本能がそう訴えかける。

「さらばだっ！」

「「逃がすか！」」

コケッ

足元にあった薬——（自分がさっき作ったやつ）に引っかかりとても
疲れているおれの体は思いっきりこけた

「サツキ・・・逃がしはしないよ・・・」

「治療の何がいけなかったのさ！」

「わからないなら分かるまで教えてあげる」

神奈子が柱を作り出す。

「諏訪子はなにもしないよな！」

「ニコッ

諏訪子は笑いながら鉄の輪だったものをとりだした。

「」

ヤベえ、さっきの戦いなんて目じゃねえ、それぐらいの危険度だ。

「なんかしらんが、ごめんなさい！」

「「分からなきや意味がないだろう!!」」

その日おれは地獄を見た。

夜

「あつ、きれいな川がある」

おれは川にいた。

「あ、向こうには死んだおじいちゃんがいるぞ、おーい」

手を振ると、おじいちゃんもこっちに向かって手を振ってきた。

「あ、渡し船だ」

赤っぱいいろの髪で胸の大きい女の人がいた。

「おねえさーん、向こう岸に連れていってもらえませんか？」

「あんた誰だい？」

「おれはサツキ、元人間の妖怪です」

「帰りな、あんたはまだここにくるには早いよ」

「わかりました、ではもどります、いつごろならいいでしょうか？」

「可能性があるのは二千年ちょっと後かな」

「わかりました」

「サ・キ」

「すま・、やりす・た」

声が聞こえる、この声は・・・

「おまえら・・・殺す気か・・・」

「おお！目を覚ました」

「さっすが」

「うっせ！おれは治療しただけなのになんであそこまでやられなくちゃいけないんだよ！」

思い出すだけで嫌になる。

「そのことなんだけど・・・ごめん、やりすぎた」

「私も感情的になりすぎたようだ、すまない」

「おれは治療しただけなのに・・・ひどいよ・・・」

部屋の隅に座る、おれの何がいけなかったのさ・・・

「いや・・・だって、裸をみられたわけだから・・・」

「治療してくれたのは嬉しいんだけど・・・裸を見られたわけ・・・」

・・・なるほど。

「勝手に治療してスイマセンでしたああああ！」

とりあえず、謝しておく。

さて、話題を変えよう。

「ところで質問だけど、おれどれぐらい寝てた？」

「半日ぐらいかな」

「結構力使ったつもりだけどそんだけしか寝てないのか・・・」

「あ、そっちの方なら私たちが目覚めて丸一日は寝ていたよ」

あれ？おれって半日は臨死体験してたのか・・・、よく生きてたな、おれ。

「そうか、ありがとう、ところで神奈子」

「なんだい？」

「なんでここにいるんだ？」

「いちゃ悪いのかい？」

「諏訪子に危害加えたじゃないか、あれについては？」

「もう謝ったよ、それから力だけじゃ人についてこないということに気づかせてもらった」

「・・・なら、いいか。」

「そのとおりだ、力だけじゃ人についてこない、それに・・・覇王は長続きしないからな、人徳でみんなを従わせるほうがいい」

「それもそうだな、盛者必衰だしな、力あるものはいずれ衰える、わたしはそのことを忘れていたよ」

「分かってるじゃないか、ところで・・・おまえら怪我はもう大丈夫なのか？」

おれが一番心配していたことだ。

「いちおう、普段どおりの生活はできるようになったよ、戦闘はまだ無理だけどね」

と、諏訪子。

「私はまだ少しやけどがのこってるけど大丈夫だね」

「そうか、ならいいや・・・それより」

「なんだい？」

「眠いから眠らせてくれ、倒れそうだ」

「わかった、じゃあ一緒に寝よう」

「ああ、っておい！それはいかんだろそれは！」

「さあ寝るよ！神奈子もおいで！」

「私もか！？」

「そうだよ、早く〜！」

「・・・まあ、いいか」

とりあえずは睡眠だ。

第四話 サツキVS神奈子（後書き）

どうも、葉っぱです、サツキVS神奈子どうでしたか？誤字、脱字、言葉の使い方がおかしいなどありましたら言ってください。

第五話 サツキ、都へ（前書き）

一気に時間が進みます、すいません。

第五話 サツキ、都へ

前回までのあらすじ

ロリ神登場↓諏訪子VS神奈子、神奈子マジ悪役↓サツキ、神奈子に完封勝利↓サツキ臨死体験↓一緒に寝る↓今回のお話へ

神奈子と戦ってから1000年ほど経ちおれは上級妖怪の仲間入りを果たした、しかし、まだまだ強くないといけない、なぜなら妖怪退治専門の職業、陰陽師が出てきたからだ、しかし本当にヤバイのがでるまであと200年ほどある、もちろん安倍清明だ、あいつが生まれてくる前にすくなくとも玉藻前とかいう九尾の狐よりは強くないといけないだろう、つまりおれはこの神社から離れることにした。

もちろん別れる時には結構心配された。

「サツキ、いつでもおいでね」

「ああ」

「歓迎するぞ」

「ここは諏訪子の神社だろ」

「しかし表向きは私だ！」

「へいへい」

何で知ってるかって？・・・おれはもとは平成の生まれだ。

それから能力についてだがいろいろわかった、まず、創造についてはどんな物かさえ知ってればなんでも作れるようになった。―（テレビやゲームが作れた）

消滅の方は消すものに気配や姿、外に漏れ出す妖力が消せるようになった、陰陽師がいるから逃げるときとても重宝するぜ。

さて、話が長くなったがいまおれは都に来ている、なぜならとても美しい人間がいると聞いたからだ、名前？はかぐや姫と言われているらしい、やっぱり男なら会いに行くべきだろう。

「さて、どこに行けばいいんだろうね・・・」

全く分からん、入って5分で迷子だぜ！

「あれ？あそこに人がたくさんいるな・・・行ってみよう」

人のたくさんいる場所に行き近くにいたちよっぴり年を取った男性に質問してみる。

「ちょっとすまない、質問だがこの人だかりはなんだね？」

「はあ？アンタ知らんのかい、いまここにかぐや姫っちゅー美人さんがおるんじゃ」

「ほう、なるほど、ありがとうございます」

『ちょっとアンタ！何してんだい』

「ゲッよしこ！」

「誰ですか？」

「わしの妻じゃ」

「……それはそれは。」

「ご愁傷様です」

「言わんどくれ」

「ほらアンタ！行くよ！」

「助けてくれ」ズリズリ

おっさんは引きずられていった。

「まあそんなことよりかぐや姫だな」

「……こっからじゃみえねえ……。」

「仕方ない、進入だ」

気配、妖力を消し、塀を上り中に入る。

声が聞こえてくる

『・・・・・・・・を持ってきなさいそうすれば考えましょう』

近づくとも五人の男性が誰かの前で膝をついている、あれがかぐや姫だろうか？

「なかなか綺麗な人だが・・・・・・・・あれは美女じゃなくて美少女だな」

美人なひととは聞いたがまだ体つきに幼さがでている。

さて、いったん帰るか。

ドンッ

「あ、すいませn・・・」

「・・・」

「どうも」ニコッ

「曲者！曲者じゃー！！！」

おれは全速力で逃げ出した。

夜11時

本当は7時ごろに来たかったが警備がおおく近づけなかった、さて、夜中だけとかぐや姫は起きてるかなっと。

おれは屋敷に忍び込む。

「こちらスネーク、屋敷への潜入に成功した」

さて、遊んでないで探しますか・・・。

かぐや姫は意外と早く見つかった、なぜならそこだけ部屋が暗かったからだ。

普通逆じゃないのかと思うがこれが普通である、なぜなら美人なひとは寝るのが早いと昔サチから聞いたからだ、こんなところで昔の知識が役に立つなんて思わなかったぜ。

「よし、入るか」

ガラガラ

あんまり音をたてないようにして扉を開ける、あれ？今思ったけどこれって夜這いじゃね？

「まあ、いいか」

よくないけどなにもしなけりゃ問題ない。

「そこにいるのは誰かしらね」

「ありゃ？起きてましたか」

「ええ、明かりを消したのはついさっきだもの」

「さいですか、ところでおまえさん、昼間何を言ってたんだ？なんか持ってこいとかいってたけど・・・」

「あなたには関係ないわ、ほっというてちょうだい」

「えゝいいじゃゝん」

「・・・いまもったけどあなた妖怪よね？」

「そうだけど何で分かったんだ？」

「こんな時間に普通人間は出歩かないからね」

なるほど、どうりで人を見なかったわけだ。

「これ食うか？」

おれは創造の能力で作ったチョコレートを差し出した。

「・・・毒とか入ってないでしょうね？」

「失礼な、そんなの入ってないよ」

おれはチョコを半分に折り片方を食べる。

「な？入ってないだろ」

「いただくわ」

かぐや姫がチョコを受け取り小さめの口を開けて食べる。

「とてもおいしいわね、これどうやって作ったの？」

「それは言えません」

能力とかいっても信じないだろ・・・。

「そう、そういえばあなたなんて名前なの？」

「おれか？おれの名前はサツキ、そっちは？」

「私は蓬萊山輝夜、よろしくね」

「おう、よろしく」

「ね、ねえ・・・」

「なんだ？」

「さっきのもう一枚ちょうだい」

「だーめ、太っちゃうぞ」

「!!!」

「ちょっと口開けてくれ」

「どうしてかしら？」

「いいから」

「わ、わかった」

輝夜はちょっと小さい口をあけた。

「・・・よし、オッケーだ」

「何したの？」

「虫歯って知ってるか？」

「知らないわ、なにそれ？」

「そうか、虫歯ってのは口の中がとても痛くなるものでね、耐えら

れないくらいのもなんだ、だからその原因となるものを消したんだ」

「そうなの、ありがとう」

「ああ、じゃあおれはもうそろそろ帰るよ」

「あ・・・」

「どうした？」

「ううん、なんでもないわ、陰陽師に気をつけて」

「ああ、また来るぜ、じゃあな」

輝夜SIDE

「またくるぜ、じゃあな」

彼はそういい残し去っていった、またきてね・・・なんて言う必要なかったわね。

私は月をみる、今日は新月、最後の日まであと約15日・・・もう時間がないわね・・・。

第五話 サツキ、都へ（後書き）

どうも葉っぱです、今回は戦闘は抜きでやってみました、どうだったでしょうか？

おもしろくてもおもしろくなくても感想をくれると嬉しいです。

第六話 サツキと月のお姫様（前書き）

どうも、葉っぱです、今回のお話はサツキと輝夜のお話です。

注意…とても長いです、たぶん今までで一番長いです。

第六話 サツキと月のお姫様

朝 サツキの家

よし！ついにできた！諏訪子たちから別れて約700年ほどかけて作っていた物がついに完成した、それは自分専用の空間である、どんなものかというと物を無限に入れる事の出来る空間である、今までは一回消して作り直してたので次からは手間と使う妖力と体力が省ける・・・っ！！

え？どこに住んでいるのかって？実は都の端の方に住んでいるのですよ、おかげで都にすぐに行くことが出来るぜ！

そういえば・・・昨日の夜に渡し忘れたものがあつたなあ・・・。

時間は流れ・・・夜

昨日は新月だったからまっくらだったけど・・・今日も全くかわら

んな・・・。

昨日と同じように塀をのぼり庭に下りる。

『輝夜様、今日はもう遅いのでお休みください』

ヤベツ、誰かいる。

『あとちよつと、あとちよつとだから、どっか行つててよ』

『そうはなりません、輝夜様がお休みするまで私は離れませんよ』

『うゝ・・・わかったわよ！おやすみなさい！』

ガラガラ ピシャツ

輝夜が部屋に入り明かりを消す、よし、行くか。

輝夜SIDE

「輝夜様、今日はもう遅いのでお休みください」

いつもいつもうるさいなあ・・・。

「あとちょっと、あとちょっとだから、どっか行っててよ」

しかし護衛は引き下がらなかった。

「そうはなりません、輝夜様がお休みするまで私は離れませんよ」

サツキはこないのかしら・・・。

「うーわかったわよ！おやすみなさい！」

私は扉を閉め明かりを消した。

バカバカバカバカ、サツキのバカ！また来るって言ってたじゃない！

「・・・サツキのバカ・・・」

私は、暗い部屋で一人つぶやく。

『バカとは失礼じゃないか・・・』

「サツキ！」

やった！今日もサツキが来た！

『サツキのバカ』

部屋に入る直前、輝夜の声が聞こえてきた、おれは中に入りこう言
った。

「バカとは失礼じゃないか・・・」

「サツキ！」

顔を輝かせやがって・・・そんなにお菓子が欲しいのか・・・？

「遅くなってすまないな、ほれ、今日はこれを持って来たぞ」

おれは今日の朝作り出した空間からお菓子を取り出す。

「これは・・・なに？」

「クッキーってお菓子と紅茶っていう飲み物だ、結構うまいぞ」

「ありがとう！」

うう、顔がまぶしい、ってかかわいい！世の中の男がほれるのも無理ないぜ！！

おちつけ、おれは妖怪、相手は人間だ、手を出しちゃ駄目だ。

「ねえサツキ」

「なんだ？」

「いや、なんでもない」

「いや、言えよ、気になるじゃないか」

「・・・今日来るの遅かったね」

なんだ、そのことか。

「あのな、輝夜、おれは妖怪だぞ、人の前にホイホイと姿を現せば陰陽師がワラワラでてくるじゃないか」

正直言って倒せるがめんどくさい。

「あ、そっか、だから来なかったのか」

「そうそう、だからちゃんと部屋にいればくるさ、安心しろ」

おれは輝夜の頭を撫でる。

「っ！！」

輝夜の顔が赤くなったきがするが気のせいだろう、暗い室内だしな。

おっと、忘れないうちに。

「これ、お前に渡しとくよ」

おれは空間から取り出した物を輝夜に渡す。

「なにこれ？」

「お守りみたいなもんだよ」

「お前みたいな美少女は妖怪に狙われ易いんだ」とつぶやく。

「基本的に陰陽師が退治するとは思うけど一応な、どうしようもないときに使え、使えばおれが助けに来てやる、まあ使わないに越し

たことはないがな、そっちに危害がないってことだし」

「っ！！なっ・・・何言ってるのよ！ババババババカ！」

「えっ？おれの助けは要らなかったか！？」

「そっちじゃないわよ！バカ！」

何を言ってるのかさっぱり分からん。

「あゝじゃあ使い方説明してもよろしいか？」

「う・・・うん」

少年？説明中
・・・

N
o
w
L
o
a
d
i
n
g
.

「わかったか？」

「ありがとう、使いかたは分かったわ」

「使いかたは？」

「ええ、使った後私はどうなるのかしら？何かしらの代償があるのかしら？」

代償か・・・そんなもんねえよ。

「いいや、代償なんかねえぜ？」

「それじゃあどうして私にここまでよくしてくれるの？」

「・・・聞きたいのか？」

「もちろん」

「教えてもいいが・・・そのかわりこっちからも一つ教えて欲しいことがあるけどいいか？」

「いいけど・・・なに？」

「おまえさん、おれがそれをやったあとにおれの名前を呼んだだろ」

「え・・・ええ、呼んだけどなに？」

あ のとき、輝夜が嘘をついたことぐらい分かっていた、しかしあえて聞かなかった、なぜなら聞いても絶対に答える事がないからだ。

「そのとき、本当に言いたかったことを教えてくれ」

「・・・いいのかしら、あなたが殺されることになるかもしれないわよ・・・」

「殺されるわけないだろ・・・おれは強いぞ！」

「・・・そうは見えないけど・・・教えてあげるわ、あの時私が何て言おうとしたか・・・」

「ああ、頼む」

「私ね、本当は人間じゃないのよ、月の住民なの」

「・・・続けてくれ」

輝夜はちよつと驚いたような顔をして話しを続ける。

「今月の満月の日・・・私は月に連れ戻されるわ・・・罪人としてね」

「ということはあと2週間ぐらいか・・・」

「なんでか知らないけどあなたにこの話しをしたくなったの、何ででしょうね？」

助けて欲しいんだろ・・・しかしおれはあえてこの言葉を口にしなかった、そんなことは話しを聞く前から分かっていたからだ、でなければあんな不自然な呼び方をするわけがない。

「それじゃあこっちも話すぞ」

「ええ、お願い」

「いやゝ実はな、お前が予想以上に綺麗で可愛くて守りたくなったんだよ」

「え!?! それだけ!」

「そうだぜ!」

「私が損してるじゃないの! さっきの話忘れなさい! 私も忘れてあげるから!」

「いやゝ無理無理ゝ」

損することはないさ、お前が二週間後・・・そのお守りを使えば助けてやるよ、全力でな・・・。

それから毎日輝夜のところに行ってたが気がつく和二週間経っていた、あの五人は結局振ったらしい。

おれは今自宅にいる、輝夜に今日は来ないでほしいと頼まれたのと頼まれるのを待機してるからだ、さて、しばらく見てましようかね・・・。

しばらく見ていると金色の乗り物が空から降りてきていた。

「あれか・・・」

輝夜SIDE

とうとう満月の日が来てしまった、来て欲しくなかった最悪な日だ、サツキは今日は来ていない、私がそう頼んだからである、部屋の扉を開けると庭にはたくさんの陰陽師と兵士がいる、そんなことをしても意味がないのを知っているのは私だけでみんなはどうにかなんと本気で思い込んでいる……。

『かぐや……』

名前を呼ばれ振り返る、私をしばらく育ててくれたおじいさんとおばあさんだ、目からは涙が流れ、しわくちゃな顔をさらにしわくちゃにしている。

私は空を見る、ほかの人間には見えないが私には、見える、地獄へ

と誘う金色の乗り物が・・・あと数分でここにつくだろう、私はそのときが来なければいいと思った、しかし時間と言うものは非常にも過ぎていき、人間の目にも見えるようになっていた。

『おい！きたぞ！！』

『迎撃準備だ！』

『モタモタするな！！』

乗り物が庭のすぐ近くまで来た、中から人が数人出てきて何かの呪文を唱えた、おそらく人間の動きを止めるのだろう。

『か・・・からだが動かん・・・』

『うごけ、動けええ！！』

空から声が聞こえた

「蓬莱山輝夜、こちらへ」

「・・・はい」

私は嫌々ながらも乗り物に近づく、そうしなければこの兵士たちは皆殺しにされるだろう。

「・・・永琳・・・」

私は乗り物に乗っている本当の家族のように慕っていた月人の名前を呼ぶ。

「なんでしょう、輝夜」

「……なんでもないわ」

「そうですか、ではこちらへ」

永琳が私に近づき手を取る、その瞬間に。

「本当は行きたくないのでしょう？」

私はほかの月人に見えないようにコクリとうなずく。

「でも今はとりあえず乗ってください、私が何とかするから」

「うん……」

私は乗り込む、そして空を飛ぶ船は動き出した。

「行ったか・・・結局呼ばれることはなかったな・・・」

おれは淋しくもありながら同時に嬉しさも感じていた、SOSが来なかったということは彼女も何の問題もなくついていったのだから・・・、しかしその考えはすぐに覆ることになる。

船が・・・落下したのだ・・・。

輝夜SIDE

「姫様、私の後ろへ」

船に乗って数分後、永琳が動き出した、月人の頭を三人ほど弓で吹き飛ばしたのだ、やっぱり強い、が、しかし月人は次から次へと出てくる。

「永琳、どうしよう」

「落ち着いてください姫様、とりあえず船を破壊して降りましょう」

ドゴン

永琳の弓が金で作られた床に穴を開け、船の心臓部分を破壊する。

「それでは姫様、行きましょう」

私たちは船を飛び降りる、しかし月人も追ってくる、永琳が少しずつ倒してはいるが少しずつ押され始めている。

「攻撃と防御が間に合いませんね・・・」

月に頭脳と呼ばれる永琳が絶望的、だが正確な情報を叩きだす。

「わ、私も戦う！」

私も永琳の予備の弓を持ち、矢を構える。

「いけません！姫様！」

永琳が私を押し倒した直後爆発音が響く、その爆発は永琳のからだの下半分を吹き飛ばしていた。

「え、永琳！永琳！」

「だい・・・じょう・・・ぶですか？姫様？」

「でも永琳！からだが！」

「私は・・・不老不死だから大丈夫ですよ・・・姫様」

どうしようどうしよう！永琳がやられ、月人はどんどん迫ってくる、私はどんどん追い詰められている。

「っ！そういえば！」

私は服を脱ぎ始める、首から提げたお守りを取り出すため、助けに来るといったあの妖怪を呼ぶために・・・。

「あった！」

お願いだから起動してちょうだい！私と永琳を助けて！

「起動・・・しない・・・どうして！」

爆弾が飛んでくる、私は永琳を抱えて移動する。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

息が切れてくる、ずっと部屋にいて運動しなかったからだろうか・・・、しかしこんなこと言ってもしかたない、言ったところで状況は変わらないのだから。

「えっ！行き止まり！」

来た道を引き返そうとすると月人がもうたくさん来ていた、もう逃

げ場はない。

「そんな・・・そんなの・・・ないよ・・・ねえ！助けてよ、助けに来てくれるんじゃないの？サツキ・・・私たちを助けてよ！サツキ！！」

お守りがひかり始める・・・そういえば忘れていた、このお守りの起動条件を・・・

サツキの声が蘇る・・・

14日前

「このお守りの起動方法は助けての言葉のあとにおれの名前を呼ぶことだ、忘れるなよ・・・」

「分かったわ、ああ、このお菓子おいしいわ」

「って聞いてんのかよ！」

「ちゃんと聞いているって」

「じゃあ言ってみろよ」

「助けてくでしょ」

「重要なところを聞いてないっ!？」

「え? ちがうの?」

「いいか、起動条件は・・・助けての言葉のあとにおれの名前を呼べ、そうすればすぐに来てやる」

「わかったわ」

なんで忘れていたんだろう、こんな簡単な言葉を・・・。

強い風が起き月人の一部が目を瞑り、一部が吹き飛ぶ。

「おせえよ・・・輝夜」

私の一番聞きたかった声が前から聞こえた。

爆発音が聞こえる・・・しかし助けに行くわけにはいかない、なぜならあのお守りを起動してないからだ、本当は今すぐにでも助けに行きたい、でもそれだけはすることはできない。

「早くおれを呼べよ・・・なにしているんだよ・・・っ!!」

!!いきなり爆発音が消えた、おれは輝夜がやられたかと思い外にでたが違った、ちゃんと爆発音は時々なっている。

「爆発音がなくなってよかった・・・おかしいこと言ってるな」

音がまたぴたりと止む、今度こそやられた、おれはそう思った、しかしその数秒あとに俺に声が響いた。

『サツキ・・・私たちを助けてよ!サツキ!!!』

よし!きた!!おれは声の発生源をコンマ2秒で特定し、漆黒の翼

を広げとんでいった。

「おせえよ、輝夜」

「サツキ！」

「先にあいつ等を片付ける」

おれは手を振り輝夜ともう一人の女性に結界を貼る、名前は『消滅結界』名前の通り全ての攻撃はこれに当たると消える。

「さて、あんたら」

おれは前にいるたくさん敵を見て、言う。

「おれは強いけど・・・戦うか？」

おれはハンドソニックを両手に、ディストーションの発動準備をして言う。

『勿論だ』

パン！

敵の隊長らしきやつが答え、銃を撃ってきた。

パキューン！

ちょっと高い音が響く、音の発生源はおれ、いやおれの前1メートル

ルぐらいだ。

『なにをした・・・』

「見てただろう？銃弾を切っただけだ」

『お前ら、やれ、総攻撃だ』

ディストーションを発動。

しばらく銃弾の音が響く、おれはそのあいだ色々な物を作り出す、今回作り出すのは水素と酸素ではない、なぜなら、向こうで火花が散っているため十分に集まる前に爆破するからだ、ダメージはほとんどない。

今、準備しているのは、おれが作り出した技だ、発動まで時間が少しかかるから丁度いい。

数秒か、数十秒だかわからないが、銃撃は続いた。

『打ちかたやめ』

隊長から命令が出ているようだ、銃声が止む。

「それで終わりかい？」

『化け物め・・・！』

「そのとおり、じゃあその化け物の技を見せてあげよう」

おれはしゃがみ、地面に片手をつける。

『土下座か?』

いやいや、何の冗談だそれ、やるとしたらお前らのほうだ、勿論したとしても許すつもりはないがな。

「死ね、そして消えろ」

その言葉が発せられた瞬間七色の炎の竜が出現していた。

『な・・・なんだそれは!』ザワザワ・・・

「さあ、続けようか」

属性は炎・水・雷・氷・土・光・闇。

おれが妖怪になっ**て**ず**つ**と作り出そうとし続けたオリジナル技だ、技の名前は『七色の竜』レインボードラゴン、1500年の修行の成果を受けてみる。

『グギャギャギャアアアアア!』

闇のドラゴンが叫ぶ、それに呼応するようにほかのドラゴンも叫ぶ。

「やれ、破壊竜の殺息」ドラゴンブレス

おれは妖力の9割を注ぎ込み、攻撃をする。

巨大な破壊音が響く、その攻撃のあとに立っている人はおろか、もとの姿をしている人もほとんどいなかった。

戦いはサツキが攻撃を始めて1分もかからなかった。

ちなみに倒したのは月人の軍隊の半数以上だった（地上に来たやつらは全滅）と言うのは余談である。

戦いも終わり、おれは座りこむ。

「ふう、疲れた・・・大丈夫だったか、輝夜」

「私は大丈夫だけど・・・永琳が」

輝夜は泣きそうな顔をしている。

「ちょっと待ってろ」

おれは永琳と呼ばれる女性に近づき息をしているか確かめる。

「息はあるな、よし、妖力を送り込むか」

おれは永琳の胸に手をあて妖力を送り始める、残り少ない妖力を送っていてとても辛い。輝夜の泣きそうな顔を見るほうが辛い。

「こんなもんかな・・・」

残っている妖力の9割を注ぎ込み様子を見る。

「1分もすれば目を覚ますよ」

「・・・・・・・・」

あれ？睨んでるなんでだ？

「う・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「お、目を覚ましたな、俺の名前はさっ「永琳！！」ぎゃああああ！！！」

輝夜に押しのけられる、まあしかたないか。

「まあ、とりあえず俺の家に来てくれ、話はそれからだ」

近づいてくる陰陽師の気配がビンビンにするからな！！今こられち

やあ一分どころか十秒持たないぜ！！

深夜 3時 サツキの家

「それじゃあ自己紹介を、俺の名前はサツキ、妖怪だ」

「私の名前は八意永琳、あなたが助けてくれたのね、ありがとう」

私は「言わなくて大丈夫だから寝てろ」 えええええええええ！

おれは輝夜に枕を投げつける、すると一瞬で眠り始めた、やはり疲れているようだ。

「永琳さん、奴らから逃げたということはこれからどこに行く予定ですか？」

「そういうわけではないわね、今のところどこに行く予定もないわ」

「それでしたらいいところがあります、明日の朝、行きましょう、だからもう寝ましょう」

今日は眠い、ってか寝ないと死ぬ。

「今日はここに泊めてもらってもいいのかしら？」

輝夜を見ながら永琳言う。

「勿論だ、永琳さんはあそこで寝てくれ」

おれはベッドを指差す。

「俺はあっちで寝るから」

「しかしあっちには何も・・・柔らかい椅子しかありませんよ？」

「?、だからあっちで寝るんだよ」

「ええ! いえ、私があっちで寝ます! サツキさんがあちらに」

「いやいやいや、客に失礼な真似はできないよ、いいからあそこで寝てよ」

言い争うこと数分・・・

「じゃあ一緒に寝ましょう! それなら万事解決です!」

「え!」

いや、女性と男性が寝るのは・・・。

「早く！」

「わかったわかった」

「それではおやすみなさい」

「ああ」

電気を消す、今日は全力で戦って疲れた、さっさと寝よう。

おれはここまで疲れたのは神奈子と戦ったとき以来だな、と思った、おれは目を瞑りそのまま眠りについた。

そのころ とある空間で・・・

「へえ・・・おもしろい妖怪もいるものね・・・」

とある女性が微笑んでいた・・・。

第六話 サツキと月のお姫様（後書き）

七色の竜がレインボーじゃないよ！というコメントが来そうだな・
・（笑）

第七話 サツキ、神社に帰還、そして勧誘（前書き）

どうも、葉っぱです、前回は長かったですね・・・（^^;）

第七話 サツキ、神社に帰還、そして勧誘

次の日の昼

おれたち三人は朝に起きれず、昼過ぎまで寝ていた。

「さて、行く準備するか・・・」

おれは最近使えるようになった無限空間に物を放り込む。

「永琳たちは温泉にでも入っていてくれ、おれはこの準備しとくから」

「ありがとうございます」

「よし、入ろう！永琳、早く早く」

永琳が苦笑しながら温泉の方に歩いていく。

「・・・さて、おれは準備を終わらせますかね・・・」

永琳SIDE

私は温泉に入り彼、つまりサツキのことを考えていた、なぜ私たち

にここまでよくしてくれるのだろうか？と。

「姫様、何故あの方は私たちにここまでよくしてくれるのでしょうか？」

私は半月ほどサツキと一緒にいた輝夜に聞いてみた。

「ああ、そのことなら・・・友達だからみたいだよ、このまえの半月の日に言ってた」

なるほど、友達だからしてくれているのか、・・・私はあまり準備を任せるのも悪いと思い先に温泉を出た。

部屋に入ると・・・サツキはベッドに倒れていた。

「サツキ！大丈夫！？」

私はあわててかけよる、・・・しかし、サツキは寝ているだけだった。

「Z z z . . . Z z z . . .」

私は気持ちよさそうに寝ているサツキをそのままにし、開きっぱなしにしている空間に物を入れていった。

夕方

「……やべえ！寝てた！！」

永琳たちが温泉に入った後ベッドに寝転がると、そのまま寝てしまっていたようだ。

『あ、サツキおはよう』

ソファーには輝夜が腰掛けている、輝夜はいきなり立ち上がったかと思うとどこかに行ってしまった。

『永琳！サツキ起きたわよ！』

なるほど、永琳を呼びに行ったのか……。おれはベッドから起き上がり声のした方に歩いていった。

「サツキ、よく眠れましたか？」

部屋に入ると永琳がそう聞いてくる。

「ああ、寝てしまつてごめん、行くのが遅くなつてしまったな」

「いいえ、構いませんよ、サツキさんは昨日妖力を使い果たしたのですから、まだ回復しきつてないのでしょうか」

永琳は気にしてないとも言つうように話してくる、おれは申し訳なくなつた。

『それよりも・・・早く行きましようよう！』

輝夜が玄関から叫ぶ、おれと永琳は苦笑しながら・・・。

「では、行きましようか」

「ええ、そうしましよう」

おれたちは家をでてとある場所に向かった。

夜

行く途中何度か妖怪に襲われたが、おれが攻撃するより先に永琳が弓を使う、俺の出番はなかった。

「もうそろそろつくぞ」

「ねえ、サツキ、あとどれくらいなの」

「あと少しだ」

輝夜はさっきから何度も聞いてくる、少しは別の事も聞いてくれよ・
・・。

そのまま歩いていると後ろから声が聞こえる。

「ねえ、永琳、飛んで行きましょうよ」

「それはいけません姫様、サツキさんが歩いているのに私たちが飛ぶのは失礼です」

・
・
・
・
え？

「な、なあ、もしかして・・・」

「何でしょうか？」 「何？」

数時間歩いたあとにこれを言うのは気が引けるが、言おう。

「お前たち、飛べんの？」

おれが歩いた数時間を返せ・・・。

歩けばあと二時間ほどかかるところを、飛んだため十分ほどで目的地までついた。

目的地は諏訪子たちのいる神社だ。

「まさか、お前らが飛べるとはねえ・・・」

おれは着地しながら二人に向かって話す。

「私はサツキさんが飛べないから飛べないのかと思ってました」

「おれもだよ、飛べるなら最初に言ってくれよ・・・」

おれは入り口に向かいながら、二人と話す。

入り口についたので扉を叩く。

トントン

『はいはい』

中から懐かしい声が聞こえてくる、この声は諏訪子だ。

ガラガラ

「よっ、諏訪子」

「……サツキィ!!!!」

諏訪子SIDE

トントン

扉を叩く音がする、まったく、こんな遅くに誰だい、ビシツと言ってやらないと・・・。

私は靴をはき、扉をあける、するとそこには友の姿があった。

「よっ、諏訪子」

「・・・サツキィ!!!!」

私はサツキに飛びつき抱きついた、なんてったって1000年ぶりの再会だ、嬉しくないわけがない。

「神奈子神奈子!こっち来て!!」

私は部屋にいる神奈子を呼ぶ、すると部屋から出てきた。

『なんだい・・・私は眠いん・・・』

神奈子は私を、いやサツキを見て固まった、眠そうな顔が一気に覚醒する。

『サツキ!!!』

こっちに走ってきたので私はサツキから降り被害がないように隠れる。

「神奈子、ひさしぶり」

え？なぜかって？それは・・・

「今までどこ行っとったんじゃあああああああ」

「え？ちよ、ぎゃあああああああああ！！」

御柱をサツキに投げつける事を予想したからだよ・・・。

諏訪子が神奈子を呼ぶと部屋から出てきた、とても眠そうだがこっちを見て一気に覚醒し、走ってくる、おれはこう言った。

「神奈子、久しぶり」

それに神奈子はこう答える。

「今までどこ行っとったんじゃあああああ!!!」

「え? ちょ、ぎゃあああああああああああ!!!」

御柱のオマケつきで・・・、おれは痛む体をおこし、用件を伝える。

「おい、ちょっと話があるんだ」

「「なんだい?」」

二人の神様は同時に答える、そしておれは二人にこう言った。

「そこの二人をしばらくお前らのところに住ませてやってくれないか?」

おれが指差した方向を二人は振り返る。

「・・・サツキ! あの二人は誰だい! まさか女を作ったんじゃないよね!」

「もしそうだったらただじゃおかないよ!」

二人がすごい剣幕でおれに言う。

諏訪子がマウントポジションを取り胸倉をつかまれ揺らされる。

「ち・・違う・・よっ」

胸倉をつかまれ、ガクガクと揺らされる体で答える。

「そうか、ならいいだろう」

手を離される、ってか、離すだけじゃなくて降りなさい、女の子が乗るようなポジションじゃないから、そう思いながら体を起こす。

「・・・」

諏訪子はそれを見ておれの上から降りた、よしこれで説明できる・・・。

「あの二人の事だが・・・」

少年？説明中・・・

N
O
W

L
o
a
d
i
n
g
・・・

「というわけだ、わかってくれたか？」

「なるほど、そういうわけならいいよ、神奈子、あの二人を案内してよ」

「わかった、おーい二人ともー!」

神奈子が永琳と輝夜を招き入れる、外にはおれと諏訪子が残された。

「サツキ、今日は泊まっていくんだよね?」

「えと・・・それは・・・」

「・・・」じー

諏訪子、そんな目で見るな、上目遣いでおれを見るな・・・反則的なかわいさだチクシヨウ。

「もちろんだ!」

おれがこう答えると諏訪子が顔を輝かし。

「本当!じゃあ部屋に案内するよ!こっち来て!」

諏訪子に手を引っ張られる。

「引っ張らなくても大丈夫だぞ・・・」

部屋は1000年前と同じ部屋だった。

あのあと食事をする、酒を勧められた、おれ以外はもう飲んでいて、結構酔っていた。

「いや、だから永琳さん、酒はおれ、ちょっと・・・」

「大丈夫よ、結構いいものよ、アハハハハ」

やばい、永琳さんが壊れてる・・・。

おれは神奈子を見る。

「おっ？ サツキも飲む気になったか？ 飲め飲め、酒はおいしいぞ・・・
・明日の朝には頭痛くなるけど」

・・・最後に嫌な言葉が・・・。

ガシッ！

後ろから誰かにしがみ付かれる。

「サツキ、いいから飲みなさいよ、おいしいんだから」

輝夜だった、振り払おうとするが、力が強いのか抑えかたがすごいのか外せない。

「よし、今の間に飲ませろ！」

「了解！」

神奈子の号令で諏訪子が酒を持って近づいてくる、ちょ、酒はやバ
いって・・・。

「ちょっと、おれ酒は飲まなムグツ！」

おれは諏訪子に無理やり酒を飲まされる、あれ？おもったより苦く
ない・・・？

おれは親にビールを少し飲ませてもらった事があるが、それとは違
って、少しあまくて飲みやすかった。

ゴクン

「結構、酒って、おいしいんだな」

「そうだろう、その通りだ、ほらどんどん飲め！」

「おうっ！」

これならどんどん飲めそうだ。

数分後、おれは酔ってしまった。

おれはあのあともう寝るという意味の言葉を残し部屋に入った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「なんでここにいるんだ？」

「一緒に寝ようと思ってね」

部屋にはおれ同様酔っている諏訪子がいた、あれ？さっきお前あつちになかったか？

「フフフフ、この神社は色々な仕掛けがあるのだよ、ほら」

諏訪子が指差した方向を見ると壁が回転式のものだった。

「・・・おまえよく作ったな・・・」

「うん、二人で作ったんだよ」

「そうか、すごいなく、じゃあ部屋に戻れ」

「え？それはないだろう、ひさしぶりに一緒に寝ようよ」

・・・なんか体が熱いな・・・なんでだ？酒を飲んだからだろうか。

「まあ、別に構わないが・・・」

「よし、じゃあ寝よう」

「ああ」

数十分後

おれは体が疲れてとても眠いはずなのに、なかなか寝付けなかった、なれない酒を飲むもんじゃないな・・・、そう思っていると諏訪子がおれに抱きついてきた。

「っ！」

おれはびっくりして声を出しそうになった、・・・一回外にでるか・・・。

おれは疲れた体で森を歩いていて、歩きまわれば眠くなるだろうと思っただからだ。

「やっぱり今日は明るいな」

昨日が満月だったからやっぱり明るい、それに風がちょっと冷たい。

「そろそろ戻ろうかな・・・」

おれはクルリと後ろを向いた。

おれは身構える、なぜなら変な空間がすぐ近くにあったからだ、空間移動系の能力をもっているやつかとおれは思った、しばらくすると中から誰かが出てきた。

「こんにちは、あなたがサツキさんかしら？」

「ああ、そうだが、何か用か？」

「私の名前は八雲紫、あなたに私の式になってもらおうと思ってね」

こいつは、何を言ってるんだ？式を作るなら少なくとも使役されるほうより強くなければいけない、だが八雲とかいうやつから感じられる魔力はどんなに多く見積もってもおれより小さい。

「式？なに言ってるんだ、拒否させてもらおう、ほかをあたってくれ」

「フフフフ、あなた、今の状況をわかっていいのかしら？」

今の状況？どう考えても妖力の多いおれにこいつが挑もうとしているようにしか見えない、どこかに味方がいるのか？

おれは周りを見渡し、妖力を探る。

「味方なんて連れてきてないわ、私ひとりよ」

たしかにこいつの言うとおり妖力は全く感じない、むしろいつもより少ないぐらいだ。

「じゃあどうやっておれを式にするつもりだ？」

ここで一番の疑問を問いかける、それに八雲はこう答えた。

「もちろん、あなたを倒してからよ」

!!

「おまえ・・・まさか・・・!」

いきなり八雲の妖力が膨れ上がる、これまでに感じたことのないほどに濃くそして強い妖力だった。

「私が力を全力で開放したまま歩いているとでも思ったのかしら？」

・・・やるしかない!

「はああああああ!!!!」

おれは妖力を全力で開放する、手加減なんかしたら確実にやられる!!

「あら? 結構いい妖力ね、でも私には敵わないわよ？」

悔しいがそのとおりだ、ただ、今が大チャンス、おれを完全になめてかかってくる初撃がおれの最大で最後のチャンスだ。

「いくぞ! 八雲紫!!」

スッ

八雲が構える、おれはハンドソニックを作り出し、八雲に向かって走り出す。

「あら？突撃なんて無謀ね、残念だわ」

八雲が巨大な妖力弾を発射する、しかしおれは何もせず走っていく、そしてギリギリのところまで……。

「ダブル！」

おれはもう一人のおれを作り出し、自分と分身の間を通らせるようにして弾を避け、切りつける、が。

「チッ！」

しかし防がれる、だがまだ手はある。

「スリーカード！」

もう一人を八雲の後ろに作り出す、それを八雲は空間に入って避けた、厄介だな。

「厄介だなんて思ったでしょう？私もあなたの能力が嫌だわ、自分を作り出すなんてね……」

八雲が後ろから現れ、また妖力弾を発射する、おれはそれを避け、さらに分身を作り出す。

「フォーカード！」

三人目の分身が八雲にむかって攻撃をする、勿論防がれるのはわかっている。

「ファイブカード！」

四人目、おれが作れる分身はこれが限界だ、だが、準備が整った。

そしておれは水素と酸素を一瞬で作り出し八雲の周りを囲むように配置する、さらに結界で閉じ込め中にピンを抜いてある手榴弾をたくさん作り出す。

「なにかしら？この丸いぶった・・・っ！！」

ドゴオオオン！！

二つの気体が手榴弾で爆発を起こし、結界内は煙で包まれる、おれは結界を解き分身を三人消した。

声が聞こえる・・・。

「フフフフ・・・あなたをなめてかかったわ・・・まさかこんなに強いなんてね・・・」

・・・森に充満している八雲の妖力がさらに強く、濃くなった、さっきまでの本気じゃないらしい。

「チッ」

おれはハンドソニックを消し、別の剣を作り出した、漆黒の片手剣だ、盾は使わない。

「じゃあちよっと本気でいくわよ」

八雲が持っていた扇子を振る、するとすごい突風が吹いた、飛ばされそうだ。

ザンツ！

おれは剣を地面に刺し、飛ばされないように耐えた、が、いきなり体が倒れる、八雲が地面に空間を広げ剣を飲み込もうとしたのだ。

「ダークネスウィング！」

おれは漆黒の翼を作り出し、地面を叩く、その勢いでおれの体は少し浮き上がり、変な空間から逃れた。

「あら？避けたの？」

ギリギリだぜ・・・酔ってなけりやもう少し簡単に脱出できたぜ。

「うるせえ、黙ってろ」

おれは八雲を切りつけるが結界で防がれ、攻撃が通らないどころか向こうの妖力弾に何度も当たっていた。

「ハア・・・ハア・・・ハア」

「息が切れてきたわね」

「だっ！」

おれは持っている剣を投げつける、八雲も投擲は考えてなかったのか驚く、が、剣はギリギリのところで空間に飲み込まれた。

「今のは危なかったわ、まさか得物を投げるなんてね・・・」

「おれの武器は剣だけじゃない」

おれは自分の空間に作りおきしていた手榴弾をピンを抜き三個ほど投げつける。

「あら？私に武器をくれるのかしら？」

手榴弾が空間に飲み込まれる、そのあと何かが背中当たる、後ろを向くと・・・

おれが投げた手榴弾が後ろの空間からおれの投げた早さで出てきていた。

「自滅ね、サツキさん？」

ドオオオオオン！！

おれのすぐ近くで手榴弾が炸裂する、やはりかなり痛い。

「あのドラゴン呼び出さないのかしら？あれなら倒せるかもしれないわよ？」

冗談じゃない、使っても避けられるだけだ、おれの妖力が減るだけしかない。

中距離から攻撃をしても自分にダメージがくるだけだ接近戦のみで戦うぜ。

ダッ

おれは八雲にむかって走り出す、途中妖力弾が何度か当たるが、これぐらいなら・・・！

「結界じゃ防げないぞ！」

おれの攻撃を結界で防ごうとした八雲はおれのパンチに吹き飛ばされる。

「痛いわね・・・」

しかし目立った傷は無く、こちらにむかってくる、あいつも接近戦か！？

「接近戦をするのはいつぶりかしら！？」

かなりの妖力が込めてある八雲の攻撃を腕で防ぐ、・・・左腕折れたな。

「だっ！」

おれはまたパンチをするが空間に腕は飲み込まれた、引き抜く前に空間が閉じ、おれの腕は肘から先が切れる。

「ぐ・・・」

「これで終わりよ！」

おれはさっき使わなかった、盾を作り出し防御する、その間に腕を再生する。

「……あんた強すぎるぜ……」

「あら？ありがとうございます、それじゃあ式になってちようだいね」

「断る……モードチェンジ、デリートモード」

おれは消滅のオーラを武器ではなく自分自身に纏う、これなら……！

「いくぞ、八雲」

おれはさっきと同じように攻撃しさっきと同じように八雲が防ごうとする、さっきまでと同じ、ただ一つを除いては……。

「えっ、あああああああ！」

おれの攻撃が八雲の手の骨を折る、まだだ、おれは蹴りを八雲の胴に入れ、吹き飛ばす、途中妖力弾が当たるがオーラが結構軽減してくれている、かなり痛いけど。

「くらえ、八雲！」

「なめるな！」

八雲の妖力がさらに膨れ上がり、おれと互角以上に、接近戦をする、途中おれの攻撃が何度か入るが、あまり効いていない、……面でやっちゃ駄目だ、点でするんだ。

おれは八雲と距離を取り、あることをする、それは体を覆っていたオーラを全て腕に集めることだ、この際防御は捨てる、全てを攻撃に回すんだ！

「そ・・・それは・・・まさか力を一点に集中したの!？」

「そのとおりだ！」

おれは八雲にむかって走り出す、この一撃を決めるために。

途中結界が妨害するが、それが効かなくて八雲は驚いている、戦いの途中で作ったチャンス、逃すわけにはいかない！

「消し飛べ!!！」

おれは勝利を確信した、なぜならもう八雲までの距離は一メートル、あと一步踏み出し腕を突き出せばおれの腕は八雲を貫くだろう、しかし・・・、八雲はニヤリと笑った、その笑みの意味に気づくのにたいした時間はかからなかった。

ザクッ

何かが体を貫く音がする、しかしそれは八雲の体から聞こえた音ではなく・・・おれの体から鳴っていた、おれは何かが刺さった場所を見る、そこには・・・。

おれは持っている剣を投げつける、八雲も投擲は考えてなかったのか驚く、が、剣はギリギリのところで空間に飲み込まれた。

「今のは危なかったわ、まさか得物を投げるなんてね・・・」

「おれの武器は剣だけじゃない」

おれの作り出した、漆黒の剣が突き刺さっていた、おれの投擲したスピード、込めた妖力で・・・。

「ぐあっ！」

「くらいなさい」

八雲の手が空間に消えたかと思ったら体中に痛みが走る、妖力弾を発射しているようだ、時々刺さるような痛みもあり、先を尖らせ硬化させた妖力弾もあるみたいだ。

八雲が扇子を振る、突風が発生し宙に飛ばされ、おれの体は巨大な木に剣と一緒に刺さる、おれは剣を抜こうとするが・・・。

「……やっぱり抜けない……」

おれの能力は、持っているおれ自身にも有効なようで、妖力を消され、力が入らない。

八雲が歩いてくる、おれを式にするのだろうか。

「だっ！」

おれは空間から手榴弾を取り出し投げつける。

「あら、諦めの悪いのね」

八雲が空間を開く、すると投げた手榴弾がおれのすぐ隣に落ちてきた。

「しまっ」

おれは逃げようとしたが剣が抜けず爆発を至近距離で受ける。

「ぐあっ！」

「あら？ごめんなさい、間違っただけあなたに刺さってる剣を押しちやったわ、ごめんなさいね」

八雲に剣を押されさらに深く剣がおれの身体に刺さっていく。

「くそっ……」

「勝負ありね、それじゃあ式にさせてもらうわよ……」

おれの体になにかのお札が押し付けられおれの中の妖力の性質が変えられていく感じがする。

「っ！ぐあああああ！」

苦しい、痛い、そんな感覚で脳が支配される。

「受け入れれば苦しみは一瞬で済むわよ、抵抗すれば苦しみは長くなるだけよ」

「だれが・・・そんなことするか・・・よ」

「そう、善意で言ってあげただけなのにね・・・」

「だったら式・・・にしないほうが嬉しいぜ・・・ぐあああああああ！」

「それは無理よ、このまま式になることを受け入れなさい、そうすれば楽になれるわ」

苦しみが数分ほど続く、頭がおかしくなりそうだ・・・。

「・・・もうそろそろかしら？」

・・・受け入れれば・・・この苦しみから解放されるのか・・・
それじゃあ受け入れてもいいかもしれない「サツキー!!!」

八雲がおれの前から離れる、さっきまで八雲がいた場所には赤茶色の輪が、八雲の肩には青白いものが突き刺さっていた。

「サツキ、大丈夫か」

おれの後ろからは神奈子がきて、おれに貼りっぱなしになっていたお札をはがし、剣を抜く。

「ゴホッゴホッ」

おれは地面に血を吐く、腹からは血が止まらずどんどん出てきている。

「あとは私たちにまかせてゆっくり休んでろ」

「・・・どう・・・して・・・」

質問をしようとしたが、出血がひどく、おれはそのまま意識を失った・・・。

覚えているだろうか？

「ファイブカード！」

『四人目、おれが作れる分身はこれが限界だ』、だが、準備が整った。

そしておれは水素と酸素を一瞬で作り出し八雲の周りを囲むように配置する、さらに結界で閉じ込め中にピンを抜いてある手榴弾をたくさん作り出す。

「なにかしら？この丸いぶった・・・っ！！」

ドゴオオオン！！

二つの気体が手榴弾で爆発を起こし、結界内は煙で包まれる、おれは結界を解き分身を『三人消した』。

作った分身と消した数が合っていないことを……。

諏訪子SIDE

私は夜中に体を揺らされ目が覚めた、起こしたのはサツキだった。

「なんだいサツキ……私はまだ眠いよ……」

「わたしはサツキですがサツキではありません、わたしはサツキ様の作り出した分身です」

「分身？その分身が何の用だい？」

「伝えたいことがあります……ちなみにここにはわたしの意思で来ており、サツキ様の意思はございません」

「いいから言いなよ」

「了解しました、諏訪子様、サツキ様はただいま森で戦闘中です」

それがどうしたというのだろう、戦闘ならここにいなかった1000年ぐらいの間に暴れ回ったと思うけど……。

「それがどうしたんだい？いつものことじゃないか」

「敵に問題があるのです、敵の名は八雲紫、サツキ様を式にしよう
とやってきており、サツキ様の戦いぶりを見て推測しましたがサツ
キ様の数倍の強さがあります」

「・・・サツキならそれぐらいの戦力の差は能力で埋めるだろう
？」

「・・・能力はほとんど効いておりません、このままではほぼ確実
に負けるでしょう」

私は絶句した、中級妖怪だったサツキが神奈子に勝った能力で、負
けているからだ。

「場所はどこだ！今すぐ言え！」

「わかりました」

サツキの分身は丸い球となり私の体に入ってきた、情報が私の頭に
流れてくる。

「神奈子！起きろ！」

私はかつて私を負かした友人を起こしにいく、彼女がいるといない
じゃ大違いだ、本当は今すぐにでも行きたいが、私一人が行っても
やられるだけだろう。

「・・・どうしたんだい？諏訪子・・・」

「サツキが殺される！いますぐ起きろ！説明はあとだ！」

「なんだって!!」

神奈子は起き上がり、私についてくる、廊下を走っていると別の部屋から永琳が出てくる。

「話は聞こえたわ! 私も連れて行って!」

戦力になるかどうかは分からないが連れて行くことにした。

「二人とも! 急ぐよ!」

私もうスピードで飛ぶが神奈子はもちろん、永琳もついてきた。

『ぐあああああああ!』

『もうそろそろかしら?』

サツキの近くにはとある女性が、多分八雲紫だろう、私は鉄の輪だったものを投げた。

「サツキー!!!」

八雲紫は私の攻撃を素早く飛んで避けた、その一瞬後、隣で風を切るような音が聞こえる。

「永琳、あんた弓の腕いいね」

「もちろんです、この弓で今まで姫様を守ってきたのですから」

私たちは地面に降りる。

『サツキ、大丈夫か』

『ゴホッゴホッ』

『あとは私たちに任せて休んでいろ』

『・・・どう・・・して・・・』

出血が多いのかサツキが意識を失う、サツキ、あとは任せておけ、お前は必ず守って見せる。

「あなたたち、その男の知り合いかしら？」

八雲が私たちに質問をしてくる。

「知り合いじゃない、友達だ」

「へー殺してもいいのかしら？」

「その体で何を言ってるんだい、こっちは神二人に弓の使い手だよ」

「それに、毒も打ち込んでいるわよ、治療したほうがいいと思いますが？」

永琳が私の言葉の後に続く、さっきの弓に毒を塗っていたようだ。

「確かに一旦引いたほうがよさそうね、次はないとそこの男に伝えておいてね」

八雲はスキマに入り、何処かに消えた。

「神奈子、サツキを連れて帰るよ、治療しなきゃヤバイよ」

私たちはサツキを連れ、神社に帰った。

第七話 サツキ、神社に帰還、そして勧誘（後書き）

ひゃっほう！！最長記録更新です！はははははは・・・ごめんなさい、長すぎでしたよね？まあそんなことより！今回はサツキの敗北を書かせてもらいました、どうでしたか？感想いただけると嬉しいです。

第八話 サツキ、始めての敗北の後（前書き）

どうも、葉っぱです、感想くれたら、それはとってもうれしいなつて・・・、何話の感想でもいいのでくれると嬉しいですよ。

第八話 サツキ、初めての敗北の後

諏訪子SIDE

「神奈子、消毒薬を持ってきてくれ！」

私はサツキの体を見る、ところどころから血が流れ出し、サツキは苦しそうに息をしている。

「止血しないと、包帯持ってこなきゃ！」

私は包帯を持ってこようと立ち上がる、すると永琳が近くに立っていた。

「諏訪子さん、これを使ってください」

たくさんの葉が永琳の渡した入れ物に入っていた。

「でもそれはアンタの葉だろう？」

「私は医者です！それに葉ならいくらでも作れます！」

永琳は手に容器を作り出す、痛み止めと容器にはかかれてある、永琳はそれを先に尖ったものがついている容器に入れサツキに刺した。

「なにしてるんだい！」

「この薬を入れればサツキさんは痛みをしばらく感じなくなります！」

永琳のいった通り、その薬を使うとサツキの荒かった息は少し穏やかになった。

「諏訪子！消毒薬と包帯持って来たよ！」

神奈子がそれをこちらに投げる、私はそれをキャッチし、永琳に渡した。

「出血がひどいわね・・・諏訪子さん、神奈子さん、この包帯をサツキさんに強く巻いてください」

永琳は薬をしみこませた包帯を私たちに手渡す。

「わかった！」

私たち三人はサツキに包帯を巻いていく、途中服を脱がしたが気にせず包帯を巻いていった。

「これで一安心です、一旦休憩です」

永琳がそう言い私たちは休憩する。

「ねえ、神奈子」

「なんだい」

「あのときサツキもこんな気持ちで私たちに包帯を巻いたのかな？」

私が神奈子と、神奈子とサツキが戦ってひどい怪我をしたときだ。

「・・・・・・・・あの時は悪いことをしたな・・・・・・・・」

「うん、怪我人治すときにはあんまり気にならないもんだね・・・・・・・・」

もちろん服を脱がすことだ。

私たちは座りこむ、私たちはそのまま寝てしまった。

朝

「うぐっ！ぐあああああああ！」

私たちはサツキの苦しむ声と漏れ出す妖力で目を覚めました。

「サツキしっかりして！」

「うがぁ！ぐううううう！」

傷口がまた開きはじめている、治療は万全のはずだ、どうして・・・？

「ゲホッゴホッ！」

サツキの口から血が出てくる。

「諏訪子さん！神奈子さん！サツキさんを抑えてください！薬を打ちます！」

「まかせて！」

私たち二人でサツキを押さえ込む、力が強く振りほどかれそうになる。

「神奈子！あの蔓でサツキを拘束して！」

あのかき私を拘束した蔓だ、あれなら少しは・・・。

「わかった！」

あのかきの蔓がサツキを拘束する、すると少しだけ抵抗が弱まる。

「永琳！今！」

「ええ！」

永琳が痛み止めと鎮静剤を打ちこむ、するとサツキが落ち着いた、開いた傷口が塞がってきている。

「二人とも、気づいたかい？」

「ああ」「ええ」

サツキの傷口が開いている間、感じられた妖力はアイツのものにと
ても似ていた・・・。

「八雲紫・・・」

昨日の夜、サツキが戦った、妖怪と・・・。

紫SIDE

「痛いわね・・・」

私は昨日の夜に刺さった弓を抜き、解毒をしていた。

「あのときあの剣を奪っててよかったわ・・・」

あのとき避けようと思えば避けた、あの時剣を奪ってなければあ
そこに倒れてたのは彼ではなく私だったかもしれない。

「・・・次は最初から全力でやるわ・・・もう手加減はしない!」

実力は彼より私の方が遥かに上だっただろう、しかし彼は私と互角以上の戦いをした、彼は力だけでなく戦闘技術も作戦を立てる頭もいい、次は油断しない。

「痛てて、あゝもう!痛い!」

早く優秀な式が欲しいわ・・・。

諏訪子SIDE

「八雲紫の妖力にとても似ている、まさかあのときやっていたのは・
・・！」

「どうした諏訪子！」

「神奈子！昨日の場所覚えてるか！」

「あ、ああ一応」

「今すぐ行って欲しい、あのときサツキが刺さっていた木に行ってきてくれ、そこになにかしらのお札があると思う」

お札さえあれば治療が出来るかもしれない、風で飛ばされてちゃ、サツキが式になってしまう可能性が高い！

「ああ、行ってくる」

頼んだよ、神奈子、私と永琳はあのときどんなお札だったかは見ていない、見ているのは神奈子だけだ・・・。

数十分後

「諏訪子！見つかったぞ！」

「そうかい！貸してくれ！」

神奈子がお札を見つけてきた、これでサツキを治せるかもしれない！

「神奈子、永琳、力を貸して」

「ええ、もちろんよ」

「何をすればいい」

式のお札の効果を消す方法は三つある、一つ目はこれを使った本人を倒すこと、しかしこれは八雲がどこにいるのかわからないし、勝てるかどうか分からない、二つ目はこのお札を使った本人以上の妖力で式の契約を打ち消すこと、しかしこれも八雲の妖力がどれぐらいなのか分からないためできない、三つ目はお札を完全に破壊してしまうこと、これが一番簡単で確実にできる方法だ、そのために神奈子に探しに行ってもらったのだ。

「このお札を完全に破壊する、手伝ってくれ」

「わかったわ」「任せろ」

永琳が炎の弓を、神奈子が小型の太陽を作り出す、私はミシヤグジ様を役する。

「それじゃあいくよ・・・ミシヤグジ！そのお札を焼き尽くせ！」

「力を解放！炎神の弓よ！そのお札を焼き尽くせ！」

「私の右手が真っ赤に燃える！勝利をつかめ！さっさとやれ！・・・わかったよ！」

お札に三人の攻撃が集中する、だが形が崩れ始める様子はない、八雲紫、いったいどれだけの妖力をこれに込めたんだい・・・？

『サラマンダーシールド！』

私たちが攻撃している方向のみを開けて何かがお札を包みこむ。

「姫様、なぜここに？」

「私だけ仲間はずれは嫌だからね、熱が逃げないようにしておくから燃やしちゃってちょうだい」

そのまま攻撃をすること数十秒、お札の形が少しずつ崩れ始める。

「形が崩れ始めた！あと少しだ！」

私はみんなを鼓舞し攻撃に集中する、さらに数十秒経過、お札は灰になって消えた。

「よしっ！これでOKだ！」

「はぁ・・・はぁ・・・疲れたわね・・・」

「ああ、だがこれでサツキは目を覚ますんだろう？」

「うん、半日もすれば目を覚ますと思う」

「ここは・・・？」

おれはなんだかよくわからない空間にいた、とても暗くなんでここに
いるのかわからない。

『またここに来たのか・・・』

「だれだ！」

おれは声のしたほうを振り向く。

「わしじゃ」

「おっさんじゃないか！」

「ああ、おまえ、このままじゃまた死ぬぞ、早く引き返せ」

「え？マジ？」

「その通りじゃ」

「そんなことよりユキちゃんは？」

「……………反抗期じゃ、わしは悲しい……………」

「……………ドンマイです」

『あ、サツキ！久しぶり！』

この声は！

「ユキちゃん！久しぶり、元気にしてた？」

「うん、私は元気だよ」

それはよかった。

「ところで……………おっさんが元気ないみたいだけどどうしたの？」

「……………おじいちゃんが私の誕生日忘れてたから無視してるんだよ……………ひどいよね……………」

……………そりゃあ反抗するようになるわ……………。

「おっさん」

おれはおっさんのところに向かい、小さな声で言う。

「ユキちゃんの誕生日」

「（。Д。）」ポカーン

素で忘れてたのかよ・・・。

「あ、おっさん、この世界でもインターネット使えるようにしてくれよ、ニコニコ動画見たいんだけど」

「任せろ！！インターネットぐらいいくらでもつないでやる！！」

お、ラッキー。

「じゃあおれ帰るよ、ひさしぶりに会えてよかった」

おれはおっさんに言われた通り、引き返す。

「あっちは明るいな・・・」

おれは明かりの見える方向に歩き出す、すると記憶が蘇ってきた。

おれは目を開ける、周りには諏訪子たちが疲れた顔をして寝ている。

「……………」

おれは痛む身体をおこし歩き出す。

「……………はぁ……………はぁ……………」

だが途中で倒れてしまう。

「……………自分の身体じゃないみたいだな……………」

いまサツキの妖力の9割は八雲紫の影響を受けている、つまり9割は八雲紫に支配されているようなものだ、ここまで動けるほうがかしいのだ。

『サツキ！動き回っちゃ駄目だ！』

後ろから諏訪子たちの声が聞こえる。

「ほら、まだ寝てないと駄目だって、まだ身体はボロボロなんだ」
でもおれは絶対に行きたくないが、行かないといけなくところがある。

「おれには、行くところがある……」

「その身体でどこに行くつもりだい」

そんなの決まってるじゃないか……。

「八雲紫のところに行かなきゃいけない……」

サツキはこれが自分の意思でないということはサツキだけが知らない、ほかの三人は式になりかけていることを知っているため、サツキの意思でないことがすぐに分かった。

「何を言ってるんだ！ あんたはこのまま式神になるつもりかい！」

……。

「……神奈子、たぶん今サツキは身体と精神のほとんどを支配されている、ほんとうに自分の意思で行くなら私たちを振り払って行くぐらい簡単にできるはずだ」

「……諏訪子……分かってくれるのか……、おれが本当に行きたいわけじゃないということを……。」

「ほら、サツキ、今は休んで身体と精神を治してくれ、一週間もすれば元に戻るさ」

涙が出てくる、そうだな、アイツのところに行くわけにはいかな
いよな……。

「……ありがっ！！ うぐあああああ！！」

身体が痛みだす、昨日八雲にやられた痛みだ。

「永琳！薬を！」

「ええ！ちよつと待ってちようだい！」

諏訪子と神奈子がおれを押さえ込み何か言っている、腕にチクリとしたかと思うと急に眠くなる・・・。

「今は眠りな、サツキ」

「う・・・ん・・・」

おれは睡眠欲にまかせ、そのまま意識を失うように眠った。

三日後

おれは紫のところに行こうとすることはなくなったが、まだときど

き身体に痛みが走る、痛みが走らない時は部屋に引き籠っていた。

「・・・なにがいつでも助けに行つてやるだよ・・・なにがおれに任せろだよ・・・おれはアイツ相手に何も出来なかったじゃないか・・・」

「サツキ、ご飯だよ」

「いない」

「でも少しぐらい食べないと・・・」

「いないって言ってるだろ！」

「っ！・・・わかった、ここにおいとくから食べてね」

・・・また強く当たってしまった、何をしてるんだよおれ・・・

「・・・おれは弱いよ・・・弱すぎるよ・・・」

おれは一人部屋の隅で泣いていた。

諏訪子SIDE

「神奈子、永琳、これからが本番だ、今日から最初の三日は身体が弱くなったが今日から二日ほどサツキは精神が弱くなる、サツキが何を言っても責めたりせずに励ましてやってくれ」

「わかった、そうしよう」

「心が折れれば式神になるのかしら？」

「なることはないが紫の元に向かおうとはするだろう」

「わかったわ」

サツキ、絶対に八雲に負けるなよ・・・！

数分後私はサツキの部屋の前にいた、ご飯を持って来たのだ、このところサツキは何も食べてない。

「サツキ、ご飯だよ」

「いない」

「でも少しぐらい食べないと・・・」

「いないって言ってるだろ！」

「っ！・・・わかった、ここにおいとくから食べてね」

やっぱり食べないか・・・私は戻るときサツキの声を聞いた。

「・・・おれは弱いよ・・・弱すぎるよ・・・」

・・・私は何も言わず立ち去った。

「諏訪子、どうだった？」

部屋に戻るとそう聞かれた。

「いや、食べないみたいだ、ただ・・・」

「どうしたんですか？」

「心がやられている、このままじゃ危ないかもしれない・・・」

私はさっき感じたことを伝える二人に伝える、ん？二人？

「ねえ、輝夜は？」

「そこに・・・いない!？」

「さっきまでいたと思うんだが!？」

今サツキに会うのはヤバイ! 探さないと!

輝夜SIDE

「脱出成功」

私は能力を使い部屋から脱出しサツキの部屋の前まで来た、励まさないかね!

「入るわよ」

私はドアを開けながら言う。

「……輝夜か・何しに来たんだ? おれを笑いに来たのか? それともバカにしに来たのか?」

「いや、ちょっと話に来たのよ」

「・・・おれってカッコ悪いよな、おまえにいつでも助けてやるだなんて言って・・・おれはアイツ相手に何も出来なかったのにさ・・・」

「何言ってるの、あなたは強いわ、この神社にいる誰よりも強いじゃない、事実私を助けてくれたじゃない、あの時サツキがこなかったら私はいまここにいないわ」

私はサツキを励ますのではなく事実を言った、サツキが八雲に負けたのも事実だけど、私たちを助けてくれたのも事実だ。

「・・・おれは弱いよ、どんなに修行しても、どんなに能力の研究をしても、あいつに勝てなかった・・・」

・・・。

「輝夜、おれってさ、今まで何をしてきたのかな・・・おれはさ、ずっと修行をしてきたしサボったこともない、おれは努力さえすればどんなやつにでも勝てる、ずっとそう思ってた、でも結果はこの有様さ、ボロボロにやられて、お前たちに助けてもらってさ・・・」

「サツk」

「おれさ、アイツの式になれば強くなれるのかな・・・？」

私は怒りを覚えた、責めるなどは言われたがもう我慢できない！

「何言ってるの！バカじゃないの！勝てなかったんなら次戦うときまでに強くなればいいじゃない！あなたは強くなるために修行してあの技を手に入れたんじゃないの！？あなたは強いわ！それはあなたが妖怪として生まれて努力してきたからじゃないの！？今回は相手の努力があなたを上回っていただけじゃない！今回駄目だったんなら次勝てるように修行するんじゃないの！？」

「輝夜！やめるんだ！」

部屋に入ってきた神奈子が私を外に連れ出そうとする、私は抵抗しながら言葉を続ける。

「あなたが今することはここで引き籠ってることじゃなくて！」

「やめるんだ！」

「勝つための！強くなるための努力をするんでしょが！！！」

「おれさ、あいつの式になれば強くなれるのかな・・・？」

おれは、アイツに勝てなかった弱い妖怪だ、でもアイツの式になれば強くなれるかもしれない・・・。

「何言ってるの！バカじゃないの！勝てなかったんなら次戦うときまでに強くなればいいじゃない！あなたは強くなるために修行してあの技を手に入れたんじゃないの！？あなたは強いわ！それはあなたが妖怪として生まれて努力してきたからじゃないの！？今回は相手の努力があなたを上回っていただけじゃない！今回駄目だったんなら次勝てるように修行するんじゃないの！？」

・・・。

「輝夜！やめるんだ！」

部屋に入ってきた神奈子が私を輝夜に連れ出そうとする、輝夜は抵抗しながら言葉を紡ぐ。

「あなたが今することはここで引き籠ってることじゃなくて！」

「やめるんだ！」

「勝つための！強くなるための努力をするんでしようが！！」

・・・！

「出るぞ、輝夜」

神奈子が輝夜を部屋の外に連れて行く、おれは輝夜に言われていたことを考えていた。

努力・・・か・・・言われればそうだな、おれは強くなるために努力して強くなったんだ、それを八雲のやつが上回っただけだ、おれは何ここで引き籠ってるんだ、修行をしようじゃないか、おれ！

おれは立ち上がり妖力を開放する。

「八雲紫・・・お前に式神にされるわけにはいかないぞ！」

おれは八雲の影響を受けている妖力をどんどん使用していく、しばらくすると少し楽になった。

おれは諏訪子の部屋に走りだす、そして扉を開ける。

「みんな！おれは修行する！しばらく帰ってこないからな！」

「サツキ！元気になったのか！」

「輝夜もやるじゃないか！」

「だったら拳骨したのを謝ってよ！」

「サツキ、怪我したらいつでも来るのよ」

「ああ！じゃあ行ってくるぜ！」

おれは二度目の修行に出かけた、次は負けなかったために・・・。

第八話 サツキ、始めての敗北の後（後書き）

今回は前回サツキを助けに行かずに寝ていた輝夜がサツキを助けるお話でした、どうでしたか？

ひゃっほう！今回は前回より短いぜ！やったね！さて、次の話はサツキと『消されました』の話です、見てくれよな！すいません見てくれると嬉しいです。

第九話 サツキの修行と不死の少女（前書き）

どうも、葉っぱです、今回は更新遅くてすみません、もしかしたら次も遅くなるかもしれないです・・・。

第九話 サツキの修行と不死の少女

竹林…夕方

おれが紫に敗れて一ヶ月ほど経とうとしていた、おれは都に行き今まで避けていた陰陽師どもと仲良くなり、修行で戦っている、それは陰陽師は結界を使うからだ、意味が分からん人はもう一度おれと八雲の戦いの記録を思い出して欲しい、八雲は結界を使っていただろ？つまりそういうことだ。

さて、おれは今何をしているのかと言うと・・・妖力の基本中の基本からの修行をしている、やっぱり基本は大事だよね！

「暗くなってきたな・・・腹減ったし飯でも食いに行くか・・・」

おれは都の定食屋にむかった。

「おっちゃん、いつものおねが〜い」

『あいよ、おっちゃんじゃなくて名前で呼べ、いつもありがとうな』

「ここの飯はうまくて安いからな!!」

『おっ、言うじゃないか、漬け物サービスしてやるよ』

「おお、ありがとう! おっちゃん!」

おれは黙々とご飯を食べ始める、しばらくすると白い髪の女の子が店の主人と言い争いをしていた。

『お金なら払うからいいじゃないの!』

『うるさい! 帰れ帰れ! おまえみたいな不気味なやつに食わせる飯はねえ!』

『・・・う、わかったわよ・・・』

・・・。

「おっちゃん、お持ち帰りってできるか?」

「うちじゃ、そんなサービスはしてない、すまん」

「じゃあ、器ごと買い取る、いくらだ?」

おれは財布を取り出し、店の主人に聞く。

「・・・銀一匁だ・・・払うのか？」

「大丈夫さ、ほれ」

おれは財布から取り出し二匁ほどおっちゃんに渡す。

「一番うまくていいやつを頼む」

「ほいほい、わかった、五分ほどまってる」

五分後

「ほれ、重箱に詰めてやったぞ、持ち運びしやすいはずだ」

「ありがとう、じゃあまた来るよ」

おれは店から出て女の子の姿を探す、女の子はゆっくり歩いていてすぐに見つかった。

おれは女の子が出てきた店を見る。

「団子屋か・・・、おーい、この店の団子全種類を3本ずつくれ」

「あいよう、お客さんでも来るのかい？」

これだけの数を頼むのが珍しいのか店主は聞いてくる。

「まあ、そんなところです」

「そうかい、300文だよ」

「ほい、ありがとね」

おれは団子を受け取り店を出る。

「あれ？いない・・・」

女の子はどこかに消えてしまったようだ。

「これ、どうしよう・・・」

おれは手元の重箱に入った定食と、団子を見る。

「とりあえず空間に放り込んどくか」

おれは空間にしまい込み、家に帰り始めた。

森林…夜

「曇った！うひゃあ、暗くて見えねえ……道が分からないぞ……」

おれの家は森の中にあり、夜になると道が暗くなる、半月〜満月の出てる日ならいいが今日は三日月だ、あんまり見えん。

「うわっ……！」

木の根に引っかかりバランスを崩す、やばい、倒れる！

おれは着ている物が汚れるなと思いつつ、流れに身を任せる。

ドンッ

「うわっ！」「うおっ！」

誰かがおれの倒れていった場所で夜が明けるのを待っていたようで、おれの体が覆いかぶさるように倒れこむ。

ムニッ

「あれ？やわらかごぼあっ！！」

「いきなり何するのよ！」

いきなり殴られた、でもあんまり痛くない。

「すみません、暗くてあんまり道が見えなかったもので」

「襲ったのかしら？」

なんでおれが人を襲うんだ！元人間だぞ！という言葉を読み込み別の言葉を言い始める。

「木に引っかかって転んだらあんたがいたんだ」

プライド？はっ、そんなもんは八雲と戦ったときに全て崩れ落ちたね！

「そう、夜中は妖怪が出るから都に戻ったほうがいいわよ」

・・・おれ、妖怪です。

「いや、この先に家があるんだけど道が暗くてね・・・」

「襲ってきた変態さんはこの先に家があるんだね」

変態だど！？何を言うか、おれはそんなじゃない！

「なんで変態なんだよ、おれ普通だぞ」

「でも、普通の人は夜にここにはこないと思うわよ」

「・・・いや・・・だから家があつちに」

空の雲がどこかにいき、月が顔を出す。

「お、道が見えるようになったぞ、これで帰れる・・・家に来るか？」

「何で行かなきゃいけないの？」

「一人でいてもつまらんしな、いろいろ話しをしようぜ、・・・あんたも普通の人間じゃないんだろ？」

おれはさっき『普通の人は夜にはここにこない』と聞いて陰陽師かと疑って妖力を使い雲を吹き飛ばしたのだが、それに全く反応しなかった、つまり人間で陰陽師じゃないが、わけあって町にいれない人と判断した、その考えはあっていたようで反応は予想通りだった。

「・・・よくわかったわね、ついていかせてもらおうわ」

「りょーかい、こけるなよ」

「あなたがこけたんでしょ・・・」

「・・・う、うるさい、こけてなんかないぞ！ただあそこで寝ようと思ってだな」

「さらにカッコ悪くなってるわよ」

「それも違う！ほら、さっさと行くぞ」

おれはからかってくる声を聞きながら家にむかった。

サツキの家…夜

「よし、到着……」

「大きい家ね……お金持ち？」

「まあ……一応」

お金も家も能力で作ったとは言出しにくい。

「まあ、入れよ」

「変な気おこさないでよね、大声出すからね」

「だからなにもしねえよ」

「ならいいけど……」

女性が先に入りおれが後から入る、おれはカギを閉め女性を部屋に案内した。

「電気つけるぞ」

おれはボタンを押しあかりをつける

「電気ってなnきゃ！」

部屋が一気に明るくなる、明るくなったことにより白い髪の毛の女性はいきなり……。

「みつ見ないで！私を見ないで！」

「何言ってるんだ？」

「……何も思わないの？」

「だから何が？」

「な……ならいいわ」

あれ？この女性どこかで……、あつ！

「おまえあのときの！おまえに渡すもんがあるんだよ」

「な、なに……」

「これだよこれ」

ドサッ

おれは空間から取り出した重箱と団子を女性の前に置く。

「あんた店でなにも食ってなかったからさ、持って帰ってきた、食え」

「・・・毒とか入ってるの？」

「入れてねえよ、殺すつもりだったら森で殺してる、ってかおれは人間は悪者以外殺さないし」

「で・・・でも」

グー

「腹減ってるんだろ？」

「・・・ありがとう、いただくわ」

おれは女性が食べおわるのをずっと待っていた。

「ごちそうさま、ありがとう」

「ああ、気にするな」

おれはお茶を用意し、女性と団子を食べながら話している。

「さて、まずは自己紹介とどうか、おれの名はサツキ、妖怪だ」

「妖怪！？まさか食べるの！？」

「だから・・・そのつもりなら森でとっくにしてる・・・」

「ごめん、取り乱したわ、私の名前は藤原妹紅、人間よ」

「あれ？藤原・・・？どっかで聞いた気が・・・」

あれは今から36日・・・いや、16日前・・・。

「あんたの親はかぐや姫に求婚したか？」

「・・・したわよ」

やっぱりそうか、なるほど。

「なるほどね、でもなんで藤原の人間が都にいけないんだ？」

「それは・・・、この髪と目がいけないのよ」

「は？綺麗な髪と目じゃないか、何が悪いんだ？」

「なんか不幸になるとかなんとか」

なるほど・・・。

「さて、ちょっとOHANASHIしてくるか・・・」

「ちょっとストップ！殺気がにじみ出てるから！殺しに行く気でしよ！！！」

「人を殺す？いやいや、おれはOHANASHIに行くのであって、人間を殺すなんてそんなことは微塵も考えておりませんよ」

「あ、そうなの・・・よかったわ」

「殺すのは人間の皮をかぶった化け物だから」

「行っちゃ駄目えっ！！」

ガシッ！

妹紅に身体をがっしりつかまれる、動けないぞ・・・。

「なにをするHA☆NA☆SE！！」

「じゃあここにいてよ！べつになにもしなくていいから！」

・・・。

「じゃあお前はおれに何をして欲しい」

「……一緒にいて行っちゃだめかな？」

「人間なんだろう？おれに許してもおまえの身体が耐えられねえよ」

普通の人間じゃなくてもおれについてくるのは無謀だ、あきらめたほうがいい。

「私はただの人間じゃないよ」

「うん、それは知ってる」

「私は、不老不死だから……」

………ッ！？

「はあああああああああ！?!?」

「いっ……いきなり何よ！あなたもやっぱり私のことが不気味なの？」

「じゃあおまえ、おれと似たようなもんだな！おれは不死じゃないけど、この身体は全く成長してない、つまりおれは不老だから年とって死ぬことはない」

妖怪になって千年ほど経ったころ、諏訪子たちに言われて気づいたのである。

「そうなの？じゃ……じゃあついていかせてよ、もう街には戻りた

くない、でも一人じゃ妖怪も倒せないし生きていけないもん」

「おれについてくるならおまえもある程度は戦えないとだめだ、修行しているからおまえも参加しろ」

「修行ってなにをするの？走りこみ？素振り？」

「効率的な妖力の使い方、まあおまえは先に妖術を使えるようにならないとな、まあ今日はあそこで寝な、おれはまだ起きてしなきゃいけないことがあるから」

「なにをするの？」

「ゲームだ、レベル上げしないといけないし」

「げーむってなに？」

「遊び道具だな、とても楽しいぞ、やってみるか？」

「うんっ！やってみる！」

おれたちは夜中までゲームをやっていた・・・。

朝..サツキの家

当然のように寝不足だ、頭が痛い・・・。

「クソッ、晴れてやがる・・・殺す気か・・・」

もう一回寝よう・・・。

『Z z z. . . Z z z. . .』

ベッドの上で妹紅が寝ている、起こさないでおくか。

「さて寝よう」

おれは自分の部屋に戻って布団に入り二度寝した。

昼..サツキの家

「う・・・ん・・・よく寝た・・・ん？」

「お・・・おはよう・・・」

妹紅がおれの部屋にいた、なぜいる・・・。

「なんでここに・・・？」

「起こしに来たんだけど・・・起こす前に起きたから」

「あ、なるほどね、とりあえず飯にしようぜ」

おれは空間から食べ物を取り出し、テーブルにならべていった。

「その空間便利そうね」

「ああ、結構便利だが・・・あげれないぞ？」

「わかってるわよ、ところで修行はどうするの？」

「ああ、もうやってる」

「え？今ここにいるじゃない」

「いや、外にいるよ、見てみな」

妹紅が窓に近づき外を見る。

「なんかあなたがたくさんいるんだけど・・・」

「おれの分身だ、あいつらに修行させておれはおまえとマンツーマンだ、おれは厳しくいかないからな！」

最近気づいたが分身の経験地はおれに入るらしい、それを利用して修行の効率を高めているというわけだ。

「やっぱり厳しい・・・厳しくないの!？」

「そうだぜ! おれの修行は楽しんで効率的だ!」

まあ、分身にやらせているだけなんだがな・・・。

「さて、まずは自分の妖力を感じてみよう」

「私妖怪じゃないけどそんなのあるの?」

「ああ、どんな生き物でも妖力はある、陰陽師だって妖力をつかって妖怪を退治してるんだからな」

これも最近、陰陽師と戦い始めて気づいた。

「さて、まあ瞑想してみな、おれが干渉しておまえの妖力を引き出してやるよ」

「う・・・うん」

妹紅が目を瞑る、かわいい、落ち着けおれ、潜在能力を引き出さなければ・・・。

「ちょっと触れるぞ」

おれは妹紅の肩に手を置き妖力を流しこむ、妖力を探すには妖力を流しこむのが一番だ。

「・・・・・・・・・・あった、よし、ちょっと力が抜ける感覚があるが我慢しろよ」

おれは流しこんだ妖力を妖力にのみ反応するようにし、一気に引き抜く。

「んっ・・・・・・・・・・はぁ」

「妖力あったぞ、結構多いほうだ、中級妖怪ぐらいはある、年月がたてば増えていくと思う」

「本当！？これでついていける？」

「ただだよ、妖力があってもそれで攻撃できなきゃ意味がないだろう、教えてやるからさ、がんばろぜ」

「うん！」

少年？少女修行中．．．．
O A D I N G ．．．．

N O W
L

夕方…サツキの家前

修行をしていて気づいたが妹紅の妖力は炎の技に優れているようだ、妖力が一点に優れているのは珍しいぞ、ちなみにおれは氷に優れているがほとんど使わない。

「妹紅、おまえはかなりいい妖力持ってるな、修行が楽そうだ」

「はあ．．．はあ．．．疲れたよ．．．」

「まあ、そういうな、明日からはしばらく楽だからな」

「うん．．．サツキ、お腹すいた」

「おう、飯食いにいくか！」

「えっ．．．あっ．．．」

「どうした？ いかないのか？」

「わ．．．私は．．．ここにいるよ、嫌われてるし．．．」

そういえばそうだったな・・・よし、ここはおれが何とかするか！

「妹紅、こっちこい」

「なに？」

「これに着替えてこい、これなら大丈夫だと思うぞ」

おれはとある服を作り出し、妹紅に渡した。

「着替えてくるね」

「おう」

数分後

「・・・この服動きにくいなあ・・・ひらひらしてるし」

「GJ!! 奏さん降臨だぜ!!! ひゃっほう!!!」

おれが作り出したのは奏さんが来ていたのと同じデザインの制服だった、白髪に赤い目だから分身した奏さんによく似ている。

「・・・何言ってるの?・・・髪結ばないとなんか落ち着かないなあ・・・」

そんなことはないですよ、あ、ハンドソニックつけましようか?

「まあ、気にするな、行くぞ!」

おれは妹紅の手を引き都に歩き出した、顔が赤くなってるが緊張してるからだろう。

「妹紅、この辺は滑りやすいから気をつけろよ」

「それは私に言うことじゃないよ、サツキ、手つかんでたら二人とも片方がこけたらもう片方もこけるんだけど」

「む、そうか、じゃあ離すよ」

奏さんと手をつないでいる気分だったんだけどなあ・・・まあいいか、都にいこう。

おれは一步踏み出し・・・滑ってこけた・・・。

「うおおおおおおああああああ!!!」

「手離しててよかった・・・」

いててて、服が汚れたな、汚れ消すか。

おれは身体にオーラを纏い汚れを消した。

「よし、行こう」

おれは先ほどのことをなかったものとして都に歩き出した。

都…夕方

おれは行きつけの定食屋にむかっていた、妹紅は周りを気にしている、自分の姿を気にしているのだろう。

「妹紅、ついたぞ」

「・・・うん、大丈夫かな・・・？」

「大丈夫だ、問題ないここの店主はおれの知り合いだからな」

人に化けている妖怪である、妹紅がおれの知り合いと分かれば大丈夫だろう。

ガラガラ

おれは扉を開け中に入る。

「おっちゃん、二人だ」

『おっちゃんじゃないぞ、あっちに座ってくれ』

「おう、ほら、行くぞ」

「・・・うん」

おれはおっちゃんに指定された席につき、注文する。

『少し待っててくれ』

「お店で追い返されなかったの初めてだわ・・・」

「だから大丈夫って言ったろ、おれは顔が広いんだ、これぐらい余裕だね」

「はい、持って来たぞ、まさかこの子がサツキの知り合いなんてな・
・悪い事したぜ・・・」

「だ、大丈夫だよ、慣れてるから・・・」

「おっちゃん、何かすることがあるんじゃないかと思うんだが？」

「勿論だ！今日はサービスするぜ！お嬢ちゃん！それからおっちゃんじゃねえ！」

おっちゃんは魚を妹紅のさらにたくさんをせる。

「こんなに食べれないよ」

「はははは、がんばって食べよ」

「食べるの手伝ってよ」

おれは笑い、軽くあしらう、おれはSじゃないぞ！

「もう食べれない・・・」

「まだ残ってるぞ」

「ううう、食べるの手伝って・・・」

「・・・まあ、いいだろう食えないのならな」

おれは妹紅の皿を受け取り魚を食べる、うん、うまい。

「ごちそうさまっと、おっちゃん、勘定！」

「ほいほい、おっちゃんじゃないぞ、20文だ」

「ほい、にしてもこの店安いな、もっと高くてもいいと思うんだが、うまいし」

値段から考えて、儲けはあんまりないだろう。

「はははは、よく言われるよ、だがこの都はいろんなところから人が来ている、旅人はあんまり金を持たないだろう、そんなとき入るのは安い店さ、だからこの店にはたくさん人が来るし、知り合いもたくさんできる、つながりは大切だからな、おまえも信頼できる相手がいるだろう？」

おれは諏訪子や神奈子、永琳と輝夜のことを考えた。

「そうか、ほれ、これやるよ」

おれは小判を差し出す。

「こんなのもらえないぞ、渡されても使い道が・・・」

「店の広さと席でも増やしな、昼間は行列ができるんだろ？」

「・・・そうか、ありがたく受け取らせてもらおうかな」

「じゃあ、そのうちくるぜ」

「おう、それより名前覚えてもらおうと嬉しいんだけどな！」

「はははは、そのうちな」

「おいおいおい、それはないだろう！」

ちゃんと覚えてるさ、おっちゃん……カズマ……。

「よし、帰るか！」

「うん！」

おれたちは家に帰り眠り始めた。

紫SIDE

「はぁ……はぁ……もうそろそろ寝ないと倒れるわね」

私は久しぶりに修行をしていた、彼と戦って一ヶ月・・・彼の方も修行をしているだろう。

「・・・明日はあそこに行こうかしら・・・」

私は布団に入りそんなことをつぶやく、次こそは彼を式神にしたい、そんなことを考えながら・・・。

数分もしないうちに私は眠りについた。

第九話 サツキの修行と不死の少女（後書き）

サツキと妹紅の修行・・・次は修行して時間がたったところから始めます。

裏第一話 サツキの死後、カズヤとサチ（前書き）

かなり短いです、1000文字もないです。

裏第一話 サツキの死後、カズヤとサチ

数日前友人のサツキが少女を助け、トラックに撥ねられた、サツキは病院で苦しみながら最後まで意識を戻さなかった、トラックの運転手は多額の賠償金を払うようだ、サツキが将来稼ぐ金額を考えれば当然のことだ、サツキの部屋からはノーベル賞をとれるような発明品がいくつかあった、音が出ない歯車や、エネルギー効率80%の発電装置が見つかった、発電に必要なのは有機物で発電に使えるものはいくらでもある、サツキのニュースは世界中に流され、ノーベル賞が送られている、ただサツキの両親はかなり悲しんでいる、おれたちがついていながらサツキを助けられなかったのが悔しい。

「なあ、サチ・・・」

「何・・・」

おれたちは集まりの中心だったサツキがいなくなり最近屋上で授業をサボっている。

「勉強しなくていいのか・・・？」

「・・・いまはしたくない」

「だよな・・・」

サチは勉強しなくなった今でも学年でTOP3のなかに入り続けている、勉強の必要はないだろう。

「・・・どうしてサツキが死ななきゃいけなかったのかな・・・？」

サツキなにも悪い事してないのに・・・」

「あいつはかなりいいやつだった・・・また会いたい・・・ここから飛び降りたら会えるかな？」

「やめなよ、サツキはそんなことしても嬉しくないと思うよ」

「・・・おれが代わりに死んでたらよかったのに・・・」

おれだったら死んでも悲しむような人はほとんどいない、両親は他界していて親戚しかいないからだ。

「あんただって夢があるでしょ、3人・・・店を作るんじゃないかなかったの？」

おれにだって夢はあった、おれとサツキとサチで店を作ることだ、おれが料理、サチが仕入れ、サツキが料理に使える道具を作る・・・今となってはもう叶わない夢だ・・・。

キンコーン

一日の終了のチャイムだ、さて、帰るか・・・。

おれたちはサツキが事故にあった横断歩道に来ていた、今はたくさんの花や物作りの材料が置かれている。

「・・・・・・・・」 「・・・・・・・・」

『おにいちゃん、おねえちゃん、サツキにもう一回会いたくない？』

後ろから声が聞こえ振り返るとあるときサツキが助けた少女が立っていた。

裏第一話 サツキの死後、カズヤとサチ（後書き）

最後の声は一体誰なのか・・・っ！！！！
・・・ユキちゃんですね、はい。

第十話 サツキの修行、鬼のところへ・・・（前書き）

スイマセン！遅くなりました！！ごめんなさい！！

・・・さて今回の話は・・・タイトルどおり修行と鬼の話です。

第十話 サツキの修行、鬼のところへ・・・

夕方・・都近くの森

妹紅の修行を続けて数ヶ月。

『燃えろおおおお!!』

『クギヤー!!』

妹紅は中級妖怪程度なら一人でも倒せるようになっていた、もうそろそろかな・・・？

「妹紅！」

「ふう・・・はいはい！」

「おまえももうかなり強くなってきたじゃないか」

「勿論だよ！いい師匠がいるからね！」

いい師匠か・・・おれはただ基本を教えただけなんだけど・・・

「おれは基本を教えたただけだ、あとはお前が自己流でやったものだろう？」

「ううん、サツキが少し弱らせた妖怪と私が戦うように仕組んだりしてたでしょ？」

はははは、ばれてたか。

「さて・・・おれは今度とあるところに行くんだが・・・おまえも来るか？」

「・・・うんっ!!」

妹紅は笑顔になりうなずいた、やべえ、超可愛い・・・。

「さて、暗くなる前に飯食いに行くか！」

「私もうおなかぺこぺこだよ！行こう行こう！」

「はははは、そう急ぐな、飯は逃げないぞ」

「逃げないけどおいしい物はすぐに誰かの口の中にいくんだよ！」

グルメレースの歌詞を真に受けてやがる・・・。

「へいへい、じゃあいくか！」

夕方…定食KAZUSAKI

「おっちゃん、いつもの」

「おっちゃん言うな！席に座っててくれ」

「ははははは」

おれと妹紅は席に座りしばらく待つ、すると料理が出てきた。

「ほい、おまちっ」

「ありがとうございます！いただくぜ！」

「いただきます」

食事を開始し、しばらくすると裏口から誰かが入ってきた、誰だろ・
・・？

「あいつは俺と一緒にこの店をやってるサキだ、おーい！」

「・・・何？」

「常連さんだ、挨拶頼む」

「・・・！・・・サキです、この定食屋で仕入れを担当しています、
勿論妖怪です、能力は言えません、今後この店をよろしく願
います」

なんかおれみて驚いた気がするが・・・気のせいだろう、うん。

「ここにはいつもお世話になってるよ、おれの名前はサツキ、まあ妖怪だ、能力は言えない、よろしくな」

おれは右手を差し出す。

「……」(スッ)

サキさんは右手を差し出しおれと握手した。

「あ、そういえばカズm・・・おっちゃん、しばらくこの店こなくなるよ、ちよっと行くところがあってね」

「名前で呼べよー!!言い直すのはよけいにひどいぜ!!」

「なんのことやらさっぱりですなあ」

「なに〜!?!」

おれたち四人はしばらく笑いながら話した、さて、もうそろそろ行くか。

「じゃ、おっちゃん、サキさんまた今度!」

「ありが「ほら!行くぞ!」ちよまっ!まだお礼言っとなっ!」

『また来いよ!』

『いつでもどうぞ!』

おれはカズマとサキの声を聞きつつ家に帰った。

夜…サツキの家

「さて、明日の朝出発するわけですが・・・荷造りします、この空間に荷物を放り込むのを手伝ってください」

「わかったわ」

おれたちはその辺の物を適当に投げ入れていく、しばらくすると部屋はきれいになった。

「よし、綺麗になった・・・あとは明日の朝を待つだけだ」

「もう寝ましようよ」

「そうだな、分身消すか・・・」

おれは分身を消す、すると疲れが一気に出てきた、これはすぐに眠りそうだ、分身に修行させるのはとても効率的だが経験値と共に疲れも一気にくるのが弱点だ。

おれは早く寝ようと布団に入りこみ妹紅はベッドに入り込むかと思っただが・・・。

「なんでおれのところにくるんだ？」

「・・・ベッドも空間に投げ入れちゃって・・・」

取り出そうかと思ったが眠くて探す気になれない。

「・・・入りな、風邪ひかれちゃ困るしな」

「へへへ・・・ごめんね」

「いいから寝るぞ」

時刻はもう深夜2時だ、おれは妹紅と一緒に眠り始めた、あれ？おれってよく女性と寝ているような・・・。

朝…サツキの家

眠いな・・・、おれはそんなことを思った。

おれはまだ疲れが残っており、脳内が満場一致で睡眠を可決し、要求しているが、それに逆らい目を開ける。

「眠い・・・」

『すう・・・すう・・・』

妹紅はまだ隣で寝ている。

「さて、起こすか・・・おい、起きろ朝だぞ」

「うにゃ・・・ねむい・・・」

妹紅が起き上がり目を擦っている、おれはその場に妹紅を残し朝食の準備を始めた。

「えーと・・・どこに置いたかな・・・」

おれは空間を探り道具を探す、どこかな・・・お？あつたぞ。

おれはテーブルと皿、そしてパンとジャムやハムを取り出し、パンを焼き始める。

「さて、分身に寝てもらうか・・・」

おれは分身を作り出し眠らせる、これで四倍の早さで疲れがとれるぞ・・・。

「おいしい、妹紅起きろー!」

おれは妹紅をベッドから引っ張り出しすに座らせる。

「飯食うぞ、あとで寝ていいからいまは起きて食え」

「はーい・・・」

おれはパンにジャムを塗って食べたりハムを挟んだりして食べ始める、十分もすれば食べ終わってしまった。

「ほら、行くぞ、外に出ないと危ないぞ」

朝…サツキの家前

おれは手を振り消滅の力で家を完全に消してしまう、後には空き地が残った。

「妹紅、おぶってやるから眠るときな」

「うん・・・」

妹紅はおれの背中におぶさりすうすうと寝息を立て始めた。

「・・・行くか」

おれは漆黒の翼を展開し、妹紅に風や、音がこないように結界を掛け、飛び始めた。

昼…とある山

距離がかなり離れたことにより、眠らせていた分身が強制的に解除され、疲れが一気にとれる、もう眠くない！

「あそこに降りるか」

おれは漆黒の翼を消しながら小さな広場に降りていった。

ッ！・・・気のせいか・・・？

誰かが近くにいる気がするが姿はどこにもない、変な感じだ、この山は全体がこうなってるのか？

「妹紅、起きろ」

「もう起きてるよ、よく眠れたわ、ありがとう」

おれは妹紅を起こし昼食を食べ始める、昼は妹紅が焼き鳥を作ってくれた、これがかなりうまかった。

「妹紅、焼き鳥焼くのうまいな、昔やってたのか？」

「いや、今日が初めてだよ、ただ屋台がやってたのをやってみた」

こいつ焼き鳥で店作れるんじゃないか・・・？

「お前スゴいな・・・それよりもうそろそろ行こう、夜になる前に」

「うん」

おれたちは頂上に向かって歩き出した、ずっと誰かに見られている

気がしたがどこにも人や妖怪は見えない、おれの気のせいだろうか・
・・？

『いんや・・・気のせいじゃないよ』

「ッ！誰だ！」

おれは妹紅を後ろに下げ剣を作り出す。

『流石だねえ・・・私に気づくなんてね・・・』

7メートルほど離れたところに何かが集まり始める、数秒後そこにはちいさな女の子がいた。

「妹紅、さあ行こう」

「そうね、こんなところで時間を無駄にすることないわ」

さうって、早いところ鬼たちの場所に行かないとなっ！

「待ちなよ」

おれは腕をつかまれる、あれ？おれはアイツの手が届く範囲にはいなかったはずだが・・・？

「なるほど、おまえは身体を霧にできるのか・・・どうりでずっと視線を感じてたわけだ、こりゃあ妖力は探知できても姿は見えないな」

小さな鬼は腕の一部を霧のようにして、おれのいるところまで手を

伸ばしていた、手首から肩まで霧のような状態になっている。

「あんたらどこに行くつもりだい？」

「・・・アンタら鬼の住居だ、案内を頼みたいが教えてはくれないだろう？」

「ははは、そりゃ勿論だ、知りたきゃ私を倒していくんだね！」

「あ、別に教えてもらわなくてもいいです、もう見つけたんで」

「え？どうしてさ！」

「いや、おまえがここにすがたを現したから探知がかなり楽にできた、さっきまではアンタの妖力が山を覆っててよくわからなかったんだよ」

おれの索敵能力、つまり妖力を探知する能力がとても高く、上級妖怪の妖力なら十キロ離れても感知することができ、下級妖怪なら約一キロ先まで感知することが出来る、普通の妖怪よりも10倍索敵能力が高い・・・らしい、諏訪子が言ってた。

「・・・・・・・・しまったあああああああ！！！！」

さて、鬼のところも分かったしさっさと行くか・・・。

「と言うわけで行かせてもらいま・・・うおっ！」

「行かせるわけにはいかないよ！」

「どういうつもりだ？」

「さっき言ったとおり行かせるわけにはいかない」

「おれと戦うのか？」

「勿論、さっ！」

「うおっ！」

強い力で引っ張られ木に投げつけられる、ちっ、なかなか強いぜ・・・。

メリメリメリメリ・・・ドスン！

おれが投げつけられた木が折れ、倒れる。

「すまない、すぐにもどす、妹紅！先に行つてろ！」

おれは木を作り直し鬼と向き合う。

「あれ？誰？」

「さっき投げ飛ばしたじゃん、忘れたのかい？」

「いや、おれを投げたのは腰ぐらいまでの身長の子……」

「能力で身体を大きくしてるんだよ、普通の状態じゃお腹までしか攻撃が届かないからね」

お腹以上に危険な場所への攻撃がきそうなんですが・・・？

「なるほど、じゃあ次はこっちが攻撃してもいいかな？」

返事を待たずおれは走り出す、鬼は妖力弾を発射してくるがおれは身体を少しずらしながら避ける。

「だっ！」

おれは乾いた地面に妖力弾を投げつけ、視界を悪くする、この状態は長くは続かない、数秒ぐらいだろう。

砂で悪くなった視界が徐々に晴れていく、おれは頭が見えた瞬間に、全体重をのせた回し蹴りを当てた。

バキっ！

「うぐっ！」

鈍い音はおれの脚から発生していた、攻撃をした、おれの脚から。

「イテテテテ、痛いねえ・・・鬼の肉体に痛みを与えるなんて・・・
アンタ強いよ・・・」

「・・・骨折れたな・・・、仕方ない・・・アクセルスピード！」

おれは自己強化のオリジナルの妖術を使う、これは名前の通り徐々にスピードが上がっていくものだ、その代わり持続的に妖力を消耗し、時間経過と共に、消費妖力も大きくなっていく、しかし脚の骨が折れているおれにはこれを使わなければ一気にやられるだろう。

「ウォーターミサイル！ブリザード！」

凍りついたミサイルが鬼に向かって飛んでいく、しかし鬼は正面から受け止め、ミサイルを投げ返してきた。

「ッ！消えろ！」

ミサイルを消し立ち上がる、こいつ強い・・・普通に戦えば負けるな、ちよつと力を解放するか・・・。

「おや？妖力が上がったね、抑えていたのかな？」

「勿論だ、常に全開にしてちゃあ、会いたくないやつにすぐに見つかってしまうからな」

「なるほど、いい戦いになりそうだ！」

おれは妖力を脚に流しこみ骨を治す、ここからは妖力の開放具合は本気じゃないが・・・それ以外は本気だ！

実のところおれはまだ全て解放していない、ここには技術力を磨くために来たからだ、パワーで勝つんじゃないくてテクニックで勝たないといけない。

「だっ！」

おれは妖力を手に流し、攻撃を開始する、鬼相手に接近戦を挑むのは気が引けるが受け流しの練習もしないといけない。

「っ・・・結構痛い・・・」

「当たり前だよ、鬼の皮膚はとても強いんだから、まあ痛みはあるしダメージも小さいけど一応ある」

「なるほど、そりゃあ・・・倒せるじゃないか・・・」

おれは鬼と打ち合いながら会話をする、結構危ないがいい情報が得られた、面で攻撃じゃなくて点で攻撃すればいいかな？

「食らいな！」

鬼が手に何か妖力を集めている、・・・あれを食らったらヤバいな・・・。

ドゴンッ！

おれが避けたことにより、地面に鬼の手が突き刺さる・・・地面を破壊しないで貫通かよ・・・。

おれは一旦距離をとり自己強化の妖術をかける。

「ソニックアシスト、スピード」

おれは早さをどんどん強化し、接近戦に戻る。

「おや？また来たのかい？」

「当然！さっきまでとは違うぞ！」

さっきまでとは違いおれは鬼に回りこみながら攻撃を加える、手の強化にまわす妖力が足りないため、おれの手の骨が少しずつ砕けていく、正直言ってもう攻撃したくない。

「はぁ・・・はぁ・・・」

おれの手からは血が流れ始める。

「ぐう・・・痛い・・・」

鬼はお腹の一点が変色していた、おれの攻撃によってできた傷だ。

おれは更に攻撃を加え始める、これ以上はヤバイな・・・。

おれは自分の手を見てそう判断する。

「アンタいい方法を考え付いたね・・・一回の攻撃で大きなダメージを与えることが出来ないなら小さなダメージを積み重ねる、鬼と戦うには最高の戦い方だ」

「その代わりおれの手はもうボロボロだけどな脚もまた折れたし」

おれはもう片足しか無傷の状態が残ってはいない、最後の一撃に使うには万全の状態で当てるしかない・・・！

「もう妖力はあまり残っていない、もうそろそろ決めるぞ」

「そうだね・・・こい！」

おれは片足に残った妖力を集め始める・・・、アクセルスピードの

おかげでもうそろそろ妖力がなくなる。

ダッ！

おれは走り出し、鬼の前まで一気に距離を詰める、鬼はダメージの蓄積されてる箇所を防御を固めおれの攻撃に備えている・・・計画通り！

おれは先ほどと同じように残った妖力で、砂埃を起こし視界を悪くする。

おれはおれは鬼の肩につき、空中に飛び上がる、狙いは頭・・・脳震盪を起こさせる！

攻撃は狙い通り無防備な箇所へ吸い込まれていった。

ガッ！

攻撃を当てたおれの身体は鬼のすぐ隣に着地した。

「あぐっ！」

鬼がおれの方に倒れ始める、脳震盪を起こしたみたいだ。

「よし勝っ」

最後の最後に油断したおれに妖力の込められた拳が近づいてくる、最後の攻撃で両足の骨の折れたおれはその場から動けず、その拳はそのままおれの腹に吸い込まれていった、倒れながら攻撃したようだ。

「ぐっ！」

押し倒されながら攻撃されたおれは先にその場に倒れる、意識が途切れる一瞬前に鬼もおれの上に倒れてきた。

『やれやれ・・・女の子に頼まれたからここに来れば・・・楽しいことしてるじゃないか萃香・・・』

そのころ、空にて・・・

『あやややや、これは・・・』

とある妖怪がこの戦いを見ていた・・・。

背中がなんか暖かくて柔らかい、ベッドにでも寝てるのだろうか？
おれは目を開け周りを確認する。

「どこだここ？」

何処かの部屋に居るみたいだが暗く、なにも見えない、畳の香りは
するから何処かの和室だろう。

「とりあえず起き上がるか・・・」

おれは手を畳につけグツとおきあが・・・痛てえええええ！！！！

「ぐおおおおあああああ！……！……！手があああああ！……！」

ドン！

「うおおおお足がああああ！……！」

ガラガラ

『起きたみたいだね』

おれは声が聞こえたほうに身体を向け、身構える。

「誰だ？」

おれは誰が居るのか確認しようと目を凝らす、逆光となつてほとんど見えない。

『そう身構えなくてもいい、私は妹紅っていう女の子に頼まれてここに来た鬼の星熊勇儀だよ』

おれは構えを解き、質問をする。

「なにしにきた？」

鬼は部屋の中に入ってくる。

「宴会をするから迎えに来たのさ」

おれは勇儀という鬼に身体の前で抱えられ部屋の外に連れて行かれ

る。

「おいっ！星熊とやら言ったか！おれは食べてもうまくないぞ！昔おれを食べたやつが一週間ほど苦しんだ拳句身体から水分が抜けてミイラのようになって死んだんだからな！！だから食わないほうが！」

「あはははははは！！何言ってるんだい、あんたを食べるわけないだろう、うちのトップクラスの実力を持った萃香と互角の勝負をしたんだ、互いに本気じゃなかったみたいだがすごいよ」

おれを食うわけじゃないのか・・・よかったぜ。

「・・・おれの負けだよ、おれは両手両足折れてるんだから、運がよかっただけさ」

「運も実力のうちさ、まあそれよりもう着くよ」

「そうか・・・ありがとう、もうおろしてくれても・・・」

「気にしないでいいよ、おろしたところであんた動けないだろ、それに・・・」

ガラガラ

『おっ！あれがうちの四天王の一人と互角に戦った妖怪か！おれと勝負だ！』

『何言ってるんだい！私が最初だよ！』

『ああん！お前ら如きが戦うなんて100年早いんだよ！戦うのはおれ様だ！』

・・・・・・（。D。）

「おろしたらあんた死ぬけ」「このままでする願います」ん、わかった」

今おろされたら確実に死ぬ、冗談抜きで。

彼らは大人数で喧嘩を始めていた、あれに巻き込まれたらヤバイ。

「うるさいよあんた等！この子は今怪我してるんだ！」

おおお、流石です勇儀さんありが「だからこの子の怪我が治ったら存分に戦いな！」うおおおい！！！！

『それもそうだな、戦うなら万全の状態が良い、今日は酒を飲みまくるか！』

『』『おおっ！！！！』』

宴会が始まった・・・。

おれは今手と足がほとんど動かせない状態なので食べさせてもらっている、かなりいいシチュエーションだ・・・

『おらっ！死ねや！！』『くたばりやがれ！！』

近くで喧嘩・・・いや殺し合いが行われていることをなしにすれば・・・。

「勇儀さん、これは・・・」

「いつものことだから気にしないでいいよ、ほら、これも食べな、怪我が治りやすくなるぞ」

勇儀さんに食べさせてもらいながら会話をする、妹紅と萃香というさっきおれが戦った鬼は二人で話していた。

『あんたの連れ強かったねええ！！あんたも強いのかい？戦わないかい？』

『いや、私はあんまり・・・』

『手加減するからさ、勝負しようよ勝負！』

萃香はおれとの戦いでできた傷が完治しているようで、妹紅を誘っ

ていた『さあ、戦おう!』スクツ ガシツ『やめてええええ』ズルズルズル あ、連れてかれた。

『サツキイイイイ・・・』

声が離れていく妹紅を見捨てておれは食事を再開、いや食べさせてもらい始めた。

「勇儀さんは参加しないの？」

おれは周りを見ながら聞く。

「いんや、参加しないよ」

ほっ、勇儀さんは喧嘩しない人のようだ、これならあんし「私はアンタの怪我が完治したらアンタと戦わせてもらうよ」助けてええええええ!!!

「ななな何を言ってるんですかぁ・・・お、お、おれがあなたに勝てるわけが」

「萃香と私は同じぐらいの強さなんだ」

安心できねえええええ!!! ってか危険だ!!!

「さあ、わたし達も酒を飲むよ!!!」

数分後・・・

『ふははははは! あんた等がこの力の勇儀と言われる私に勝てる訳

がないだろう!!」

『『ギャアアアアアア!!』』

酒で酔って暴れ始めた勇儀さんを見ておれは思った。

「このままじゃ死ぬ……ほんとに」

宴会はそのまま朝まで続き、おれたちはそのまま眠った。

第十話 サツキの修行、鬼のところへ・・・（後書き）

どうも、葉っぱです、次は鬼とサツキの本格的な修行に入ります、サツキは勇儀と戦うのか！？そして（萃香に）連れ去られた（喧嘩に誘われた）妹紅の運命は！？

次回の葉っぱの作品にご期待ください！！

サツキ「おわらねえよ！？」

第十一話 サツキ、修行開始!! (前書き)

どうも、葉っぱです。更新が結構時間かかりました、テスト勉強してるから時間あんまりとれないです、次もすこし遅いと思います。

第十一話 サツキ、修行開始!!

おれは目を覚ますと周りを確認した。

『『『『『ZZZ... ZZZ... ZZZ...』』』』』

「.....逃げよう」

今このおれサツキは宴会場、もとい死の戦場を脱出しようとしていた、このままここにいたら死ぬ・・・あ、ほら今寝返りで畳に穴開けたし・・・。

部屋には穴がたくさん開いていたおそらくほとんどが勇儀が開けた穴だろう、寝るときまではなかったし。

「這って進むのは難しいな・・・」

鬼がそこら中で寝てる上に両手両足骨折中である、当然だ。
血まみれの鬼たち←

『サツキ、どこに行くんだい?』

() つ勇

鬼←

() つ勇儀が・・・ → —

勇儀←

∩ 鬼←

△
()

(Ⅱ。O。Ⅱ) ↑酔ってる

サツキ←

折れた角↓△

() つ? ↑酒

両手足骨折↓() (∴ つ。D。)

つ

助

→鬼たちをぶっ飛ばした本人

() つけ

—

「……………(∴。D。)」

「……………(Ⅱ。O。Ⅱ)」

「ちょっとトイレに……………(∴。D。)」

「案内するよ(Ⅱ。O。Ⅱ)」

「風に当たりに行こうかと(∴。D。)」

「歩けないだろ、抱っこしようか?(Ⅱ。O。Ⅱ)」

「ちょっと昼寝をしに(∴。D。)」

「いい場所があるんだ、一緒に寝るかい?(Ⅱ。O。Ⅱ)」

……………困った逃げれない……………詰んだか……………

ガラガラ

「勇儀〜!」

「あ、萃香じゃないかどうしたんだい？」

「いい情報がありますよフッフッフ」

萃香がおれを見ながら笑う、なんか嫌な予感が・・・。

「早く教えなよ」

「サツキの怪我を」

おれ逃げて！！早く脱出！！おれは全速力で這って逃げ始める。

「早く治す方法は」

あと少し！数メートル！！

「妖力を送り込む事だってさ！妖力が回復しさえすれば怪我はすぐ治すことが出来るみたいだよ！」

よし、扉に着いた！おれは部屋の外に身体を出す。

ガシッ！

身体を掴む何か、たぶん萃香の手だろう。

「逃げたら駄目だよ」

うわっ、やめろ、HANNA☆SE！！

「なるほど！サツキちょっと来てもらおうよ」

勇儀に担がれどこかに連れて行かれる・・・。

「・・・・・・・・／（＾Ｏ＾）／」

「はははは！やっと戦えるね！！（　〓　＾　〓　）」

殺される・・・おれはそんなことを思った。

おれが連れてこられたのは最初目が覚めたときにいた暗い部屋だった、寝させてくれるんだろうか？

「サツキ」

「はい？昼寝ですか？」

「服を脱いで」

一瞬脳の機能がフリーズする

「……は？今なんと？」

「いや、素肌のほうが妖力が送りやすいから……」

「いやいやいや！それはヤバいって！おれ元気！超元気だから治療
いらない！だから今すぐおれをなに脱がしてんだよ！？」

「いや、手が折れてるから脱げないだろう？」

「そういう意味じゃない！」

こいつ……酔ってるからこんなことしてんのか！？このままじゃ
ヤバイ！

「消えろ！」

おれは回復しきってないけなしの妖力を使い、勇儀の酔いを消す。

「あれ？なにしてんだろ……サツキ！何服脱いでいるのさ！」

「勇儀が脱がしたんだよ……！」

「はっ！まさかあるとき……覚えてないな、うん」

……酒飲むと本能で動くようだ、気をつけよう。

「……それより勇儀さん、服を着せてほしいのですが……」

「ああ、すぐ着せる」

おれは服を着せてもらい、質問をする。

「素肌の方がいいとか言ってたけど手をつないで送り込むのは駄目なのか？」

「……それもそうだね……」

おれは勇儀に妖力を受け取りつつ、丁度いいのでそのまま眠り始める。

「ま、こんなもんかな、じゃあしっかり寝な」

「言われなくてもそうするさ」

『萃香!!』『ごめ〜ん!!』

眠りにつく直前……遠くから二人の声が聞こえてきた……。

妹紅SIDE

私は宴会場に居る萃香と勇儀を見つけると近づくと、なんかケンカしてるなあ・・・。

「萃香！お前また私の心を少し操ったろ！！」

「証拠もないのにそれはひどいなあ！」ニヤニヤ

・・・見てられないので止めに入る、巻き込まれることは覚悟している。

「二人ともストップ〜！」

ボンッ！バキッ！

喧嘩に巻き込まれ腕の骨が折れ、片腕が吹き飛ぶ、しかしその瞬間吹き飛んだ腕は炎となり再生する、不老不死の私の能力だ。

「熱い！」「熱っ！」

「鬼は炎は平気じゃないの？」

私は人間の頃に鬼は炎は平気と聞いたことがある、疑問に思い聞い

てみた。

「いや、だってアンタの炎は普通の炎じゃないからね」

「すごい熱い炎だよ、鬼の私でも火傷するかもしれない」

私の炎ってそんなにすごいのかな・・・？

「でもこっちが攻撃しないとその炎でないよね」

そのとおり、昨日無理やり戦わされることになったとき萃香に炎の妖術を使ってもなにも感じてなかった、自衛のためにしか発動しないのかな・・・？

「まあ、そこは修行でなんとかなるだろう、手伝おうか？」

「・・・うん・・・」

お願いしたほうがいいのだろうけど、了承したら最後ボコられるだろう、私が決められないでいると後ろから声が聞こえてきた。

「やればいいじゃないか、手伝ってもらいな、おれはしばらくお前の修行手伝えないし」

「そうなんだよねーサツキは・・・なんでここに居るの!？」

骨折れてるんじゃないの!？

「ああ、さっき治った、まだ完全には治ってないけどちょっと動くぐらいなら大丈夫」

四人作り出して五倍のスピードで回復させたのだろうか？

「それじゃお願いします、あの炎をいつでも出せるようにしたいです」

「この伊吹萃香に任せなさい、私が責任もって殴・・・修行してあげるから」

「いま殴るって言おうとしたよね!？」

「まあいいじゃないか、手伝ってもらいな」

「・・・サツキがそういうなら・・・」

私は萃香に修行してもらうことにした。

「さて、勇儀、おれにも修行を・・・」

「殴ればいいのかな？」

「まあそうだけど違う、受け流しの練習をさせてくれ」

「は？力の勇儀といわれている私の攻撃を受け流し！？失敗したら吹っ飛ぶよ！！プレッシャーが大きすぎるよ」

それを見込んでの頼みなんだけどなあ・・・。

「だからお願いしてるんだよ、精神状態も身体の状態も余り良くない状態で攻撃特化の攻撃を受け流す・・・これほどの練習ができるのは今しかない、頼む・・・」

「・・・わかった、でも死んじゃっても知らないよ？」

「勿論それぐらい覚悟してる」

「・・・アンタも命知らずだね・・・」

「アンタも？おれの前にもこんなことをしたやつがいるのか？」

「ああ、一月ぐらい前に来て結界の強化をしたいとか何とか・・・勿論何度も破壊したけど」

・・・八雲だな・・・あいつここに来たのか・・・妹紅に会ってなかったらここでばったり会うことになってたな・・・。

「そうか、まあそんな事をしたやつがいるならおれも・・・」

「名前は忘れたけどその妖怪は吹っ飛んで複雑骨折したから」

・・・紫の防御力を軽々上回るとは・・・ヤバイ・・・。

「サツキが来た日の朝に帰っていったね」

・・・昼に来て良かった・・・！本当に良かった・・・！！

「まあいい！修行開始だ！」

おれと勇儀、妹紅と萃香は修行を開始する、強くなるために・・・。

「ほらほらどんどん行くよ！」

勇儀の拳が唸りをあげて飛んでくる、当たれば確実に折れるだろう、おれはシールドをはり、斜め向きに受ける。

ピシッ！

「おっと！」

・・・シールドにヒビは入ったが受け流しには成功、あとはこれを続けるだけだ・・・！

おれはこの修行と組み手を一月程続けることにした。

妹紅SIDE

「さて、まずあの炎だけど普通の炎じゃないみたいだよ、どうやって出してるのかは分からないよね」

それが分かるんなら修行なんてしていない。

「うん、でもあの炎が出てる間はなんか身体が何か違う感じがするんだよね・・・」

「まあとりあえずあの炎をだそう」

ボン！

腕が吹き飛びあの炎が現れる、萃香は手を引っ込め炎の様子を見ている・・・。

「なるほど、妹紅、その炎かなり強いよ、たぶん炎技では最上級クラスの威力だ」

「え？ そんなに？」

「うん、この炎、完全に使いこなすのは無理かもしれない、でも好きなときに出せるようにはなろうじゃないか！！」

「うん！がんばるよ！！」

それからしばらく、サツキ以外の師匠に初めて修行してもらった。

「痛い！」

おれは殴り飛ばされ、木にぶつかる。

「だから、正面からぶつかっちゃ駄目だよ、すこし斜めからぶつかってずらしながら避けるんだ」

そう言ってもなあ・・・やっぱり難しい・・・。

「やっぱり性格面の問題かな・・・アンタ真面目な性格だし・・・」

・・・そうなのか・・・？

「まあ、実践あるのみだ、続けよう」

「うう・・・わかったよ」

「ほら行くよ！」

バリバリ！

「ギャアアアアアア！」

おれは夜まで何度も吹き飛ばされることになった・・・。

夜…山の広場

「はぁ・・・はぁ・・・疲れた・・・」

妖怪になって今まで何度も修行して来たが、これほど疲れるのはいつぶりだろうか？

「アンタすごいね、今まで鬼に修行つけてもらいに来た妖怪は何人もいたけど逃げなかったのはアンタが初めてだよ」

勇儀が岩を破壊しながらおれに話しかける。

「そうなのか？おれの前に来たやつはどうしたんだ？」

もちろん八雲紫だ。

「休憩時間に逃げ出した、次の日には帰ってきたからメニュー増やしてやった」

紫ざまぁ！

「へー今までのやつは？」

「休憩時間が来る前に逃げた」

勇儀はその辺の岩をどんどん破壊する。

「・・・そうか、なあ勇儀・・・」

「なんだい？」

「おれにもそれ教えてくれよ、岩を破壊するやつ」

勇儀は驚いたような顔をしている、変なことをいったのだろうか？

「アンタ本気かい？」

「ん？まあ本気だが？」

あれ覚えたら紫の結界も破壊できそうだ。

「メニューを減らして欲しいって言う妖怪は何人もいたけど増やして欲しいって言ってきたのはアンタが始めてだ」

「へー、まあいいさ教えてくれよ」

「まあ・・・別にいいけど」

おれは岩の破壊の稽古もつけてもらうことになった・・・。

「えーと・・・こうかつ！」

ピシッ

岩にヒビが入る、むむう・・・だめか。

「アンタ筋がいいじゃないか、腕に力を集めるのがうまいね」

「まあ、結構修行してましたからねっ！」

ビシビシッ！

さらに拳を叩きこみ、岩のヒビが大きくなる。

「ちょっと力にムラがあるね、こんな感じだよ」

勇儀がおれの手を取り妖力を調整する、ちょっと恥ずかしいな・・・。

「あ、ありがとう」

なるほど・・・この感覚を覚えればいいのか・・・。

おれは勇儀に調節された妖力の感覚忘れないようにしつつ、拳をさ
つきの岩にぶつけた。

ズドン！

岩は碎けず、腕が貫通した。

「・・・あの、これ・・・」

腕が抜けない・・・どうしよう。

「自分で何とかしなよ」

「できないよ！もう妖力切れだよ！」

さっきの攻撃で勇儀からもらった妖力がもうほとんど残ってない、どうすんだこれ。

「しょうがないね・・・ほいつ」

勇儀が岩の上にチョップをする、すると・・・

バリバリバリ！

「・・・勇儀、力強いね・・・」

「力はほとんど入れてないよ、あんたが岩にヒビ入れてたから楽に砕けただけさ」

「・・・そう、か・・・あ、もう駄目だ」

妖力切れで立ってられない、おれはその場に倒れる。

「サツキ！大丈夫かい！？」

「大丈夫・・・じゃないです」

「よし、戻ろう！」

勇儀がおれを担ぎ、鬼の屋敷へと歩きだす。

「ありがとう、助かるよ」

「どってことないさ、アンタは寝ときな、少しでも寝とかないとだめだよ、メニニュー増やしてんだから」

「お言葉に甘えさせてもらおうかな・・・」

おれは勇儀の背で眠り始めた、一定のペースで来る振動が丁度いい。

次の日 鬼の屋敷…早朝

おれは目が覚めると暗い部屋にいた、あの時の部屋だろうか？

「・・・身体の調子がいいな・・・」

昨日と違っていたのは身体の調子と妖力の量が良かったことだ。

「今何時だ？」

おれは腕時計を確認する、時計の針はこの時間をさしていた……。

(3時)

……寝すぎだろおれ……

「急いで起きないと！」

おれは起きあがり部屋の外に出る、すると……。

夜中の3時かよ……起きて損した、もう一回寝よう。

おれは分身を作り出し、全員で眠り始めた。

数週間後の朝、おれは目覚めると勇儀のところにむかった。

「勇儀、今日のメニューは？」

「ん？自分からもらいに來たのかい、そうだねえ・・・そうだ！」

「お？なんだ？」

「酒を買ってきてくれ、50樽ぐらい、徒歩で」

「徒歩でか・・・距離にもよるが結構時間かかるぞ？」

「だいじょうぶだいじょうぶ、往復2キロぐらいだから」

「そうか、じゃあ行ってくる」

おれは酒の店に歩き出した。

数十分後、おれは酒屋に來ていた、やっぱり飛ばないとおそいな・・・
・まあそれが修行になるんだろうけど・・・。

「始めまして、鬼の住居よりお使いに来ました、サツキと申します」
まずは挨拶だ、しっかりしないと！

『おお、そうかい、あそこにあるから持って行っとくれ』

「了解です」

おれは分身を作り出し二つずつ持たせる、本体のおれは五つを積み重ね、運び出す。

7往復目はおれが一樽余分に持ち、50樽を運んだ、結構疲れるな。

「勇儀く運んだよ、昨日の続きか？」

「いや、走りこみだよ」

「ついさっきまで走ってたんだが・・・」

「そう言えばそうだね、じゃあ始めようか」

おれは夜まで勇儀とのマンツーマンの修行を続けた・・・。

鬼の屋敷…夜

「あゝ疲れた・・・」

おれは部屋に戻ると、すぐに分身を作り出し、眠らせる。

「身体の調子は・・・後少しか・・・」

もう身体の調子が戻り次第、修行をやめることになるだろう、妹紅はここに置いてくつもりだ。

「・・・後、数日か・・・」

さて、寝よう・・・身体の調子を元に戻さなければ・・・。

修行を開始して一月・・・おれは受け流しを覚え、勇儀とも何度も組み手をした、勿論骨折は何回もしたぜ！！

「勇儀、今日までありがとう」

「ああ、気にしないでいいよ、それより私と戦ってくれ」

「え？修行中何度も・・・」

「いやいや、あれは全然本気じゃないよ、私がやりたいのは一対一の制限なしの全力勝負さ」

「・・・あれで本気じゃないとかヤバいつて！地面普通に貫通したよ！？おれのシールドを紙みたいに突き破ったよ！？」

「あんたも本気で萃香と戦ったんじゃないだろう？」

「・・・よくわかりましたね、なぜわかったのです？」

「アンタの目と動きを見れば分かる、鬼に嘘はつけないもんだよ」

「・・・なるほど、流石四天王の一人、今まで戦ったやつらと違ったというわけか・・・」

「・・・本気では戦えません、本気で戦えばある妖怪に見つかってしまいます、その妖怪には絶対に会いたくないのです」

「・・・その点は問題ない、山を萃香が覆ってくれるからあんたの妖力が漏れ出すことはないよ」

・・・だったら本気で戦ってみようかな、今の実力を知りたいし。

「では本気で戦いましょう、能力使用は？」

「勿論ありだ、私も全力でやるからね」

おれたちは山の広場に向かった。

おれは妖力を解放する、ひさしぶりの全力だ・・・。

「勇儀、全力で行かせてもらおうぞ・・・」

「こいサツキ！」

おれは手に自己強化をし、妖力を流しこむ。

ダッ

おれは一瞬で勇儀の目の前に移動し、肩に攻撃をする、が全くダメ
ージがない・・・。

「いい攻撃じゃないか、じゃあ次はこっちだね！」

おれはシールドを作り出し受け流そうとする・・・が。

ドゴン！

「な・・・」

シールドは簡単に突き破られ、おれの身体に拳が突き刺さる。

いや、突き刺さるのは表現だよ？

「ぐっ！」

「おや？今のでいけると思ったんだけどね・・・」

「・・・ハハ、妖力を集中させたからね」

「なるほど」

「ちょっと強めの攻撃行くな！」

おれは妖力を口に集める・・・。

「アイスブレス！！」

おれの口から氷の息が流れ出す・・・その氷は地面を凍りつかせた。

「これのどこが強いんだい？」

・・・これは布石さ、強力な攻撃を放つための・・・。

「さあ？どこが強いんでしょうか？」

おれは氷の上をすべるようにして勇儀に接近する、すると予想通り・・・。

「近づいてくるとはいい度胸だね！さっきの攻撃を忘れたのかい！？」

勇儀の拳が唸りをあげてむかってくる・・・おれはそれを受け流した。

「おわっ！」

ズン！バリバリバリ！！

勇儀の足が滑り、地面に拳が突き刺さる、氷は全体がヒビ割れ、砕けていた・・・よし！攻撃準備は完了！

おれは地面に・・・いや地面に砕けた状態で散らばっている氷に妖力を流し始め、能力を加える。

「いててて・・・やるね・・・氷で踏ん張りを効かなくするなんて」

それは勿論計算のうちだ、仮にシールドが突き破られたらおれが地面に攻撃を加えていた、でもそれだと目立つから勇儀に攻撃させるように仕向けたんだ。

仕掛けにはしばらくかかる、時間を稼がないとな・・・！

「おらっ！」

おれは手に妖力を集中し攻撃を始める、胸には・・・恥ずかしくて当てられないな・・・。

おれは攻撃を肩と腹、足に集中して攻撃をする。

「しっかり避けなよ！！！」

勇儀の拳がおれに向かって飛んでくる、おれはそれを右手で受け止めた・・・つもりだった。

バキッ！

おれの腕が弾かれ肩に当たる・・・骨折したな・・・。

おれは能力を使い、すぐに元通りにする。

「受け止めれると思ったのかい・・・？」

「・・・攻撃力が高いな・・・」

「当たり前だ、能力を使ってるからね」

「へー、どんな？」

「教えられないけどヒントはあげよう、攻撃に関係する能力だ！」

勇儀が接近してくる、ヤバイな。

「サンダーボルト！」

指先から雷が飛び出す、それは勇儀に当たったが余りダメージがないようだ。

「食らいな！」

おれはシールドを作り、受け流しながら後ろに下がる、どうやら破壊されなくてすんだようだ。

「チッ！まだ時間かかるな・・・それじゃあこれだ！」

おれは勇儀の周りにピンを抜いてある手榴弾をたくさん作り出す、そして・・・。

「ひも状結界！縛！」

結界を作り出す、これで逃げられないはずだ！

「うっ・・・フン！」

バリバリ！

あ、壊れた・・・ってこっちに走ってきてやる！

勇儀が爆風で得たスピードを拳に込めて打ち出す。

おれはそれを身体を捻りながら避け、妖力弾を投げつける。

「痛いなあ・・・でも楽しいなあ！サツキ！」

「おれは殺されそうでひやひやしてるよ！！」

「あははは！気にしないでいいさっ！」

勇儀が一瞬で距離を詰め、おれに攻撃を加える、おれはそれを受け流しながら後少しで完成する仕掛けを終わらせる。

「よしできた！」

おれは巨大な妖力弾を投げつけ勇儀の視界を埋める。

そしておれはその間に距離をとった。

「勇儀・・・降参してくれないか？」

「は？何を言ってるんだい？まだ私は無傷だよ？」

「周りを見てみな」

勇儀がおれの言ったとおり周りを見渡す、空中には尖った氷の破片が浮かんでいた。

「・・・刺さるのを怖れて動きを鈍くするのが目的かい？」

「いや、これで倒せるんだ」

おれは軽く手を振り一本だけ勇儀に向かって飛ばす。

サクッ

「ッ!？」

「どうした？これで倒せるといったらう？」

おれが準備してたのはこれ、最初に尖った氷の破片をたくさん作り出し、消滅の能力を付加させる、すると鬼の防御を無視して突き刺すことが出来ると言うわけだ。

「できれば傷つけたくはないんだけど・・・」

「フン！そんなこと言ってちゃ真剣勝負にならないよ！ちゃんとやりな！」

・・・おれは手を振りおろす、すると数百個の氷の破片が勇儀に向かっていった。

勇儀の周りが氷の結晶で見えなくなる、おれの勝ちだろうか？

おれは一応受け流しの準備をし、待機する。

「・・・やっぱり立ってたか・・・」

「・・・あたりまえさ・・・かなりダメージは受けたけどね」

「・・・降参を「するわけないだろう」・・・」

「そうか、じゃあ攻撃をしよう」

おれは手に妖力を集中し走り出す、これなら倒せるだろう。

ニヤリ

勇儀が笑った気がした。

「行くぞ！三步必殺」

「・・・！？」

おれは一瞬足を止める、三步と言ってるから近距離に入ったら危険だ。

「一步！」

ズン！

「おわっ！」

地面が揺れ身体のバランスを崩す。

「二歩！」

勇儀が一瞬で距離を詰め、おれの目の前に立ち、地面を崩す、身体のバランスが崩れているおれはそのまま地面に倒れ始める。

「（ヤバイッ！！）」

勇儀が踏み込み拳を振るう、それはおれの顔に向かってきていた。

「三步！！」

ズウウウウウウン！！

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「何で外したんだ？」

勇儀の拳はおれの顔のすぐ隣に突き刺さっていた。

勇儀が手を引き抜き答える。

「アンタもさっきの氷の攻撃わざと外してただろ、当たったのも全て傷が浅い、あまり尖ってない氷をぶつけたからさ」

「・・・・・・・・そこまで見抜いてたか・・・」

勇儀はニヤリと笑い

「鬼に嘘はつけないもんさ」

と言った。

「それもそうだな・・・ところで勇儀」

「なんだい？」

「おれを地面から抜いてくれないか？」

さっきの攻撃と二歩目でおれの下半身は地面に埋まっていた、別に出れるがやらないといけないことがあるからな。

「・・・ほら、手出しな」

「サンキュ」

おれは勇儀の手を握った瞬間回復に特化している妖力を流しこんだ。

「!？」

「どうした？」

勇儀の身体の傷が消える、これでよし。

「何でもないよ」

と言っておれを地面から引き抜く。

「あゝ疲れたけど楽しかったな・・・」

「お？アンタも楽しくなったかい？」

「あたりまえさ、全力で戦ったのは久しぶりだからな」

「そうかい」

「ところで勇儀・・・おれとおれの前に来たやつ・・・どっちが強かった？」

「・・・いきなりなんだい？」

「教えてくれ、本当のことを頼む」

「・・・アンタの前のやつの方が強かったよ、アイツの本気の結界はかなり硬かった・・・まあ破壊したけど」

「破壊したのか・・・わかったありがとう」

「気にしないでくれ」

「・・・じゃあおれは帰りますかね・・・」

おれは漆黒の翼を展開し言う。

「あれ？妹紅っていう女の子はどうするんだい？」

「ここに置いてく！前の家にはいないって伝えといてくれ！」

「あ、ちょっと！」

「じゃな！」

おれは翼を羽ばたかせ、空に飛び出す。

「・・・行ってしまったか・・・、どうやって伝えるかなあ？」

勇儀は住居に戻っていった。

第十一話 サツキ、修行開始!! (後書き)

妹紅を置いていったサツキ、都に戻り始める、なぜなら最強の陰陽師が生まれたから! 次回を待っててください!

裏第二話 カズヤとサチも妖怪に・・・（前書き）

どうも、葉っぱです。

サツキ「テストは大丈夫なのか？」

葉っぱ「ん？テスト？ああ、まだ終わってないです」

サツキ「勉強しろや」

葉っぱ「すみせん」

裏第二話 カズヤとサチも妖怪に・・・

「サツキはもう死んだじゃないか・・・どうやって会いに行くのさ、死ねってか？」

おれは女の子に強い言葉をぶつける。

「違うよ、サツキの行った世界にあなたたちも送ってあげるだけだよ」

「サツキの行った世界？なにそれ？」

サチのいうとおりだ、わけがわからん。

「とりあえず私の身体に触れてくれるかな？」

・・・。

ピトッ

言われたとおりに手を肩の上に乗せる。

・・・あれ？サチはともかくおれは犯罪者になるんじゃないか！？

「大丈夫だよ、カズヤさん、私は周りから見えないし、私に触れて
いる二人も周りから見えないよ」

なるほど・・・。

「あれ？何で考えているこ・・・」

あれ？なんか周りの景色が歪んで・・・。

数秒後・・・おれとサチはどこかよくわからない空間にいた。

「おじいちゃん！！」

『来たか・・・カズヤ君にサチ君』

「私は女です」

「まあ気にしないでいいじゃないか」

「サツキ君は今、奈良時代初期の日本にいる」

「「ッ！！！」」

「あなたは何か知ってるの！？」

「答えてくれおっさん！！」

「神じゃ、おっさんじゃない」

・・・どっちでもいいだろ・・・。

「いいことがあるんじゃないが・・・どっちでもいいとは何じゃ・・・
いいことを教えようとしたのに・・・」

「オシエテクダサイカミサマ」

「普通に呼ばんか」

「おしえてください神様」

「お前たちもサツキの元に行きたいか？」

「……何を言い出す……こいつは……」

「行くとどうなるんだ？」

「こっちの世界のお前たちは行方不明になるな」

「なんじゃそりゃ……まあいいか……どうせ何もする気起きないしな」

「そうね……行かせてくれるのならお願い」

「あい、わかった、ちょっと待っておれ」

おれたちはそこで待つことにした。

「さて、準備ができるまでしばらく話そう」

「なんだおっさん」

「何？おじさん」

「……まあいい、お前たちは武術が得意みたいじゃのう」

「……まあ確かに……おれは剣道三段、サチは空手が二段だ。

「そうだな……まあ、でも一応五段の人に余裕で勝てるんだぞ！
制限があつて受けられないだけだ！」

制限さえなけりゃとつくに五段取つてる！！

「私は試験を受けるのがめんどくさいだけ、練習もサボってる」

「おれも練習はサボってるな」

「実力が落ちるぞ……」

「いや、練習するほうが落ちる、周りが弱すぎるから」

サツキと練習するほうがいいな、練習マシン作ってくれるしあいつ自身も強いし……。

「そのとおり！周りは弱すぎるわ！」

「まあいい……それより、準備ができた、今からどこに飛ばすか

と、能力を説明する」

「はい、これ」

女の子から何かのバッグと本を手渡される、サチももらったようだ。

「いまからお前たちを奈良時代初期の日本に飛ばす、能力はカズヤ君、キミは・・・だ、サチ君、キミは・・・だ、それでは飛ばすぞ」

「おう！」

「ええ！」

「言っておくが、サツキ君に会えるかどうかは君たち次第じゃが
んばるんじゃぞ」

おれたち二人は白い光に包まれる・・・意識が強制的になくなった
ようだ・・・。

目が覚めると・・・そこは森林だった・・・。

いや、雪国を真似たわけじゃない、本当に森林・・・ってか樹海？

「うおっ！ここどこだ！？」

「・・・樹海？」

サチもおれと同じことをいう。

「・・・そういえば本もらったな・・・あれに地図がついてれば・・・」

おれは本を開き目次を見る。

能力について・・・1

能力の使い方・・・7

あなたの実力（一週間に一回更新）・・・15

危険な妖怪（一週間に一回更新）・・・21

・
・
・
・

歴史・・・237

地図（現在地には星がつきます）・・・302

「あった！302ページだ！」

「わかったわ！」

おれたちは地図を開き現在地を確認する。

「あれ？意外と出口が近いな・・・」

「そうね、早く出ましょ」

おれたちは地図を見ながら歩き出す、おれたちは接近してくる敵に気づくことが出来なかった。

「あそこが出口かな」

「そうみたいね」

ガサガサ

近くの草むらが揺れる、おれは動物かと思ひ草むらに近づく。

「うっ」

草むらにはウサギの死体が転がっていた。

「どうしたの？」

サチがこっちに近づいてくる。

「くるな！」

「・・・！、いきなり何よ！」

サチが怒る、当たり前か・・・。

「いや、だか・・『グギヤアアアア!』」

おれの声は最後までサチには届かなかった。

「ぐあっ!」

おれは上から襲ってきた何者かに殴り飛ばされる。

「カズヤ!」

サチがこっちに走ってくる。

「来ちゃ駄目だ!」

おれはその辺に落ちてた木の棒を拾い、構える。

「・・・」

『グギヤアアア!』

おれを襲ったのは巨大なクモのような化け物だった。

サチの持っている本が少し光っている。

「カズヤ!! その妖怪は危険妖怪に分類されてるわ!」

マジか!! むむむ・・・。

「サチ! 先に逃げてろ!!」

「ダ、ダメよ!! 私も戦う!」

「いいから早く逃げ」

おれの持っていた木の棒が弾き飛ばされる、丸腰だ。

「グギャー!」

クモの妖怪が糸を吐き、おれとサチの動きを封じる。

「っ! 動けねえ・・・!」

「カズヤ、尖ったもの持ってない?」

「あるわけないだろう・・・」

妖怪になってNEW GAMEでさっそくGAME OVERか? 笑えねえ・・・。

「グギャー!」

クモの妖怪が襲いかかってくる、おれは思わず目を瞑る。

ズン! バキッ! グギャアアアアアアアアアア!

「・・・・・・・・ん? なんともない・・・」

「よくわからないけど助かったみたいね・・・」

目の前にはさっきの妖怪が転がっていた。

妖怪の身体が動く、まだ生きてるのか!?

『よっと、ふゝ・・・お前ら大丈夫か?』

中からは赤い髪の人が出てきた、誰だろう。

(サキ、一応逃げる準備はしておけよ・・・)

(わかったわ)

おれたちはささやき声で話す。

「おれの名前はサツキ、妖怪だ、おまえらは?」

裏第二話 カズヤとサチも妖怪に・・・（後書き）

葉っぱ「テストなんてキライだ！」

サツキ「いいから勉強しろ！」ドゴツ

葉っぱ「ぐぼあー！」

番外編なので早く出せましたが次回は本編なのでちょっと遅いですよ。

第十二話 サツキ都に帰還中・・・（前書き）

どうも、葉っぱです、多分テストは真っ赤になってることでしょ。

サツキ「だから勉強しろといったんだよ」

葉「だって〜ゲームしたかったんだよ〜」

第十二話 サツキ都に帰還中・・・

おれは森林、もとい樹海の中を歩いていた。

「・・・勇儀と戦ってすぐ出てくるのは失敗だった・・・」

勇儀と別れて数分飛んだところ翼が消えてしまった、蓄積疲労と妖力の使いすぎが原因だろう。

「妖力は有り余っているのになぁ・・・ところで・・・ここどこだろう・・・」

歩けばいつもどおり・・・絶賛迷子中だぜ!!

「ん・・・？向こうから何か聞こえるな・・・行ってみよう」

おれは妖力を限界まで抑え、声のしたほうに歩いていった。

『あははは！ホラホラ逃げないと痛いぞ！』

「痛いよう・・・」

数匹の中級妖怪たち（下の下）が一人の下級妖怪（上の上）をいじめているようだ、さて・・・殺る前に・・・。

「すみません」

『ああん？なんだお前』

「えと・・・その・・・その子も嫌がつてるみたいだしやめてあげたほうが・・・ほら足も怪我してる」

『ああ？うっせえぞガキ！そっち行つてろ、それとも参加するか？』
おれが妖力を抑えているからおれの実力に全く気づかない。

「・・・はあ・・・おとなしくやめてれば死なないで済んだものを・・・」

『ああ？お前なに言って・・・』

おれは妖力を解放する、中級妖怪共が黙る。

「さて、質問しよう、何故この子の足は怪我しているのかな？」

『そ・・・それはこいつが逃げるから・・・』

「ほほう、『さっきは逃げないと痛いぞ』と言ってたみたいでしたけど・・・？」

『それは・・・』

「さて、じゃあ参加しようかな」

『あ、それではおれは交代しますよ』

「いや、そこにいいい」

『へ？なにをギアアアアアアアアアアアアア！！！』

おれは目の前にいた中級妖怪の顔を殴りつける、名前を知らない妖怪は顔がグチャグチャになって倒れた。

『や、やべえ逃げろ！！』

妖怪のうち数匹が逃げ出す、おれはそれを見て・・・。

「ファイアレーザー」

ビー！

『グアアアアア！！』

指先から赤い光線が飛び出し、妖怪の足を貫く、妖怪たちはその場で倒れ、のた打ち回る。

『おまえらやっちまえ！！』

逃げてても無駄と判断し、残った妖怪たちがおれに襲いかかってくる、はあ、鬼のところで修行してきたばかりなのに接近戦か・・・。

「はあ、とりあえず飛んでろ」

おれは右手と左手で一匹ずつ妖怪を吹っ飛ばす、そして残った一匹は足を叩きつけ、踏みつける。

「さて、次は向こうかな・・・」

おれはさっきレーザーで足を貫いた妖怪のところへ歩き出す。

「あははは、逃げないと痛いぞ」

おれはさっきの言葉を言う。

『やめろ、こっちくるな・・・!』

「ハンドソニックVer3」

ザクッ

『グアアアアア!』

おれはハンドソニックをつき刺し、にやりと笑う。

「逃げてみるよ、次はもっと痛いぞ、あと3秒だ」

3・・・2・・・1・・・0

「ハンドソニックVer4」

グググググバリッ

『ギュアアアアアアア!』

ハンドソニックの大きさが変わったことで、妖怪の身体を二つに分

ける。

「さて・・・次は誰かな・・・？」

『『ギヤアアアアアアアアアア!!』』

妖怪の断末魔が樹海に響き渡った。

おれはさっきの子に近づき、そっと手を差し出す。

「大丈夫か？」

「ひっ！」

・・・怖がってるな・・・当たり前か。

「おれはお前に危害を加えようなんてしてないさ」

おれはさっきの子の手を握り、妖力を流しこむ。

「え、あ・・・」

回復に特化した妖力で傷が消える、するとおれの手を握り、立ち上がった。

「おれの名前はサツキ、妖怪だ、キミは？」

「・・・ルーミア、一応妖怪です・・・」

「そうか、どうしてさっきはやられてたんだい？」

「・・・私はまだ数十年しか生きていない妖怪です、私はほかの妖怪よりも妖力の成長が早いみたいで・・・」

「なるほど、それでか・・・」

普通中級妖怪になるまでに300〜500年ぐらいかかる、さっきのやつらはそれが許せなかったんだろう。

「・・・もう暗いな・・・おれはここで夜が明けるのを待つけどお前は どうする？」

「・・・一緒にいたいです、私一人でいたらまたいじめられる・・・」

「どうやらこの樹海にはさっきの妖怪たちのグループがあるようだ、

都に戻って清明と会う前にここをなんとかしないとな・・・。

「・・・了解、じゃあちよつと離れててくれ」

「・・・」

ルーミアが隣からおれの後ろに移動する、そしておれは能力で家を作り出す。

「あれ？ いまどうやって・・・」

「ああ、おれの能力、どんな能力かは秘密だよ」

おれたちは中に入った。

「この部屋暖かい・・・」

「ん？ ああ、外は寒いからな、今から食事の準備する、そこに座って待っててくれ」

おれはルーミアをソファアに座らせ、調理に取り掛かる。

・・・スパゲティでも作るか・・・。

少年？調理中・・・
ng・・・

N o w L o a d i

「ほれ、スパゲティだぜ、結構うまいぞ」

おれはスパゲティをルーミアに出し、飲み物を取り出す。

「あ・・・ありがとう・・・」

・・・食べないのかな・・・？・・・あ、もしかして毒が入ってたりするかもしれないと思ってたり・・・？

おれは自分の皿とルーミアの皿を取替え食べ始める、するとルーミアも食べ始めた。

「・・・ごめんなさい・・・時々毒を盛られる事があったから・・・」

「ん？気にしてないさ、初対面のやつを警戒するのはとても大事さ」

「・・・ありがとう」

食事が終わり、おれはルーミアに風呂に入るように言った、べつに変な意味じゃない。

「・・・やっぱり服が破れてるな・・・」

おれは脱衣所に行き、ルーミアの着ていた服を取り出す。

「・・・作り直そう」

おれはまず汚れを落とし、どんな服かを見る。

「えーと元の形はこんなもんなかな」

おれは形を覚え、服を作り出す。

「さて、戻しに行こう」

おれは脱衣所に行き、元の場所に服を置いてきた。

しばらくするとルーミアが部屋に入ってきた。

「あの・・・これ・・・」

「気にするな、おれが能力で作っただけだ」

「ありがとう・・・」

「・・・それからこれ、あんまりうまくないけどもとのやつも修繕しといた」

ルーミアはそれを受け取り、何度もお礼を言う。

「・・・今日は遅いからもう寝な、おれはまだやることがあるし」

「わかった」

ルーミアが上に上がりおれはアイテム作成に取り掛かる、今作っているものは相手の攻撃を無効化してくれるアイテムだ。

「うーん、ここをこうすれば・・・あれが・・・」

こうして夜は過ぎていった・・・。

サツキの家…朝

「・・・やべえ、寝るの忘れてた・・・」

おれはすぐに分身を作り出し、睡眠をさせる。

「うーん、少しでも物作りを始めるとこれだなあ・・・」

自重しなければ・・・。

しばらくするとルーミアが起きてきた、もうご飯の準備はできている。

「おはよう、ルーミア、もうご飯の準備できてるぞ」

おれとルーミアは席につきご飯を食べはじめる。

「なあ、ルーミア・・・おれは今日出かけるところがあるけどお前も来るか？きても楽しくはないけど」

「行く、一人でいてもいじめられる」

・・・やっぱり組織を早いところつぶさないとな・・・。

「わかった、ちゃんとはなれずについてこいよ」

「うん」

集団の場所は大体わかっていて、数キロ先にたくさんの妖怪が集ま

っている、歩けば昼前には着くだろう。

「よし、じゃあ行こう」

おれは分身を消し、家を消し、たくさんの妖力が集まっているところへ向かった。

「ルーミア、おれの背中に乗るか？」

「いい、自分の足で歩く」

「・・・そうか」

数時間ほど歩くと、洞窟が見えてきた、あの中からたくさんの反応を感じる。

「・・・あの中だな・・・おれが先行くから離れずついてこいよ」

洞窟の中に入るとたくさんの妖怪たちがいた、おれたちを待っていたようだ。

「・・・洞窟の入り口は塞がれたか・・・」

たくさんの妖怪がおれとルーミアを包囲している、まあ問題ない。

「・・・これはこれは・・・あまりうれしくないお出迎えですねえ・・・」

『うちの若いもんがお世話になったそうじゃないか・・・』

まずは挑発、やりすぎるぐらいが丁度いい。

「あら？ここの組織はあんなゴミみたいなやつを仲間にな？あはははは笑えるねえ・・・」

『今の状況分かってんのか？』

「フフフフあっはははははははは！！！」

『壊れたか？』

「今の状況分かってんのか？」

おれは妖力を解放する。

「勝負だ、名前は知らんが・・・ここで死んでくれ」

おれは分身を四人作り出し、ルーミアを守る、そして本体のおれは一直線に組織のボスに向かっていく。

『ボスに向かうたあ、いい度胸だ！』

『死にやがれ!!』

ボスの近衛部隊らしき妖怪たちがおれに向かってくる。

「はっ、お前らじゃ敵にならねえよ!!」

大多数を相手にするほど楽なものはない・・・、なぜなら・・・。

「出でよレッドドラゴン! ファイアーブレス!!」

『クギヤアアアアア!!』

目に見えるやつは全員敵なのだから・・・。

『『『グアアアアアア!!』』』

おれに向かってきた妖怪たちが燃える、残った妖怪たちは足を止めた。

「さて・・・やるかい?」

おれは妖力の数%を使い作り出した炎の竜を消し、ここのボスのほうを向く。

『その必要はない』

何処かから声が聞こえる、しかし暗くてあまり見えない。

『ぐああああああ!!!!』

ボスが何者かから攻撃を受け、倒れる。

「ルーミア！外に出るぞ！！」

おれとルーミアは外に飛び出し、洞窟の入り口を見る。

「・・・ルーミア、先に帰っててくれ」

「どうして！？」

「どうやら・・・」

洞窟から謎の人物が出てくる、身長は低いようだ。

「ヤバイ戦いになりそうだ・・・」

おれは前に出る。

「あら、逃げたのかと思えばまだいたのか」

「・・・おれが近くに居るのは妖力でわかってただろ」

「それもそうだな・・・さて、覚悟してもらおう、八雲紫」

「・・・あれ？おれ間違えられてる・・・？」

「ちょっと待て名前が違「名前か？わ・・・我が名は安部清明、この辺の妖怪を退治しにきたらおまえに出くわした」・・・」

は？・・・安部清明？・・・しまった、最強の陰陽師が生まれたってことはもう成長して陰陽師になったってことか・・・最強の陰陽師になるのを知ってるのはおれだけだからこの時代の人は生まれたときは陰陽師になるかどうかはわからないじゃないか・・・。

「そっちが何もしないのならこっちから行こう」

しかたないと思いつつおれは妖力を腕に集め、攻撃の準備をした。

攻撃が飛んでくる、おれはそれを受け流す、しかし手ごたえがない、受け流しても手ごたえ、つまり力を込めてる気がしない。

「————」

どうやら詠唱をしながら攻撃しているようだ。

「————」

詠唱を終わらせるわけにはいかない！

おれは清明に向かって走り出す、が、しかし・・・。

「詠唱完了だ・・・我が腕に力を・・・青龍！」

清明の腕に変化が起こった、青と緑が混ざったような色のオーラが腕から出ている。

「くらえ」

清明が軽く手を振る、おれはそれを受け流そうとする、するとおれ

の腕が吹き飛んでいた。

「なに・・・!?」

「そんなこと言ってる暇はないだろう」

やばい！

おれは昨日作った試作品の身代わり君に妖力を流す。

「うぐっ！」

攻撃のダメージは防げたが、攻撃の勢いは消すことが出来ず、後ろに吹き飛んだ。

「む・・・？今のはいけると思ったんだが・・・」

今のを普通に食らったらヤバイ・・・。

「アイスブレス!!」

おれの口から氷の息が流れ出す、地面を凍らせて機動力を奪うしか・・・。

「我が背に翼を・・・朱雀!!」

清明の背中に赤く輝く翼が現れる。

「・・・チツ・・・ヤバいなあ・・・」

「ほらほら行くぞ!!」

受け流しは不可、多分防御の結界も不可・・・だったら避けて攻撃か・・・。

清明の拳をギリギリのところで身体を捻って避ける、よし今だ!!

「出でよ! レッドドラゴン!」

『グギャアアアア!』

おれの作り出した炎の竜が爪を振るう。

「我が身体に鉄壁の守りを・・・玄武!!」

清明の身体に黒いオーラが現れ、レッドドラゴンの爪を受け止める。

「!??・・・ファイアーブレスだ!」

「朱雀! お前の力を見せてみる!!」

清明の背中の翼がレッドドラゴンの炎を吸収する。

「もっと打ちこんできたらどうだ? まあ私が回復するだけだけだな!」

おいおい・・・嘘だろ・・・。

一旦引くしか・・・。

「フラッシュ!!」

清明の目の前で光が発生する、このまま攻撃してもいいが今は逃げる。

おれは森林の中に入り、身を隠す。

『見つけた! 八雲紫!』

もう見つけやがった!!

おれは隠れてた場所から飛び出す。

ズドオオオオン!!

おれが一瞬前までいたところに光の柱が突き刺さってた。

「やばい・・・マジで死ぬ・・・」

『それで終わり? 八雲紫』

おれは八雲じゃないのに・・・逃げるしか・・・。

ズドオオオオン!!

おれが逃げようとした方向に巨大な光の柱が降ってきた。

『逃げようだなんて思っちゃ駄目だよ』

・・・八雲にばれるかもしれないが完全解放するしかない!!

「はあああああああ!!」

抑えていた妖力を完全解放する。

「ダークネスブレード!」

おれは漆黒の片手剣を作りだし構える。

「ソニックショット!!」

おれは剣を振り衝撃波を飛ばす、同時並行で別の攻撃の準備も始める。

「そんなものは効かない」

「それぐらい分かってるさ!! ひも状結界! 縛!!」

「うっ!...この程度の結界すぐに解除できる!」

数秒もたたないうちに結界が解除される、しかし攻撃の準備は整った!! あとは隙を作るだけだ!!

「ストーンキューブ!!」

清明の近くに岩を二つ作り出す。

「マジックリード!!」

岩と岩の間に妖力で作ったひもを作り、一気に引き寄せる。

「むっ！我が足に神速を・・・白虎！！」

ドン！カラガラ・・・

どうやら清明は避けたようだ。

「スピードを上げたか・・・アクセルスピード！！」

おれもスピードを上げ、清明の姿を見つける、どうやら空にいるようだ。

「ダークネスウィング！！」

漆黒の翼を広げ、空に飛び出す。

「む、ライトブラスター！！」

清明がたくさん光の弾を打ち出してくる、おれはそれを避けながら清明に接近する。

「あの量を全て避けたか・・・」

「今度はこっちの攻撃だ！」

おれは空中に結界を作り出す。

「こんなところに結界をはってどうするの？」

「はっ！」

おれは自分のすぐ後ろに作った結界を蹴り、清明に突っ込み、横を通り抜けながら切りつける。

「なるほど、これが目的か・・・」

おれは結界を足場にしながら空中を移動する。

「アイスプリズン！！」

清明を氷の牢獄の中に閉じ込め、朱雀の効果が出ないようにする。

「メテオレイン！！」

おれは清明の入っている牢獄ごと巨大な炎で地面に叩きつける。

すると朱雀の効果が復活し、炎を吸収し始める。

「よしきたあ！！」

おれは地面に降り、清明に近づく、今はまだ炎を吸収している。

「ダークネスブレイド、モードチェンジ」

おれは漆黒の片手剣に消滅の能力を集める、漆黒の剣が白く輝く。

清明が炎を吸収し終わる、しかしそのときおれはもう剣を振りかぶっていた。

「オールデリート！！」

アクセルスピードで強化されたおれの動きは清明も避けられず、おれの攻撃をまともに食らった。

「うあああ!!」

清明が吹っ飛び、木に叩きつけられる、戦いが始まってから、この攻撃を当てるまでに妖力の6割は消費している、これ以上の戦いは避けたい。

「・・・どうやらさっきまで妖力を抑えてたようだね・・・」

「・・・ある妖怪にばれたくなかったんだ」

「へえ・・・この清明を前にして妖力を抑えるまでして会いたくない妖怪ってだれだい？」

あ・・・今がチャンス！おれが八雲紫じゃないと証明できる!!

「八雲紫だ!! おれの名前はサツキ！八雲紫に狙われている妖怪だ！」

「え？サツキ!？・・・サツキってあのサツキかい？」

「あのサツキが何か知らないけどおれの名前はサツキだ」

おれって有名なのか・・・？

「サツキの名前は陰陽師からよく聞いていた、修行につきあってくれる強い妖怪だと・・・」

「まあそうだが・・・」

おれと清明は話しだす、清明は身体の変化を元に戻した。

「いやゝすまないね、八雲と勘違いしてしまったよ」

「死ななかったんでいいです」

「そうなの、ありがとね」

「あの、清明さん、おれは今すぐここを離れたいのですが・・・」

「なんでだい？」

・・・なぐんか遠くからすごい勢いで接近してくる妖怪が・・・。

『やっと見つけたわ、サツキ』

あ、もうきた。

「清明！こいつが八雲だよ！！」

「なにっ！！お前が八雲か！」

「清明、おれの妖力を受け取ってくれ」

おれは清明に残っている妖力を渡し、清明の妖力を回復させる、清明はあまり妖力を使ってなかったようだ。

「ありがとう、これで万全の状態で戦える」

「あら？サツキが戦うんじゃないのかしら・・・？」

「うるせ、おれと戦ったほうがよかったと後悔するぞ」

清明はどう考えてもおれより強い。

「フフフ・・・陰陽師が私と戦うのね・・・」

「そのとおり、私と戦ってもらおう」

清明が前にでる。

「今まで私に挑んできた陰陽師はみんな最後には立ってなかったわ、この意味が分かるかしら？」

「ついさっきサツキと戦ったけど私は一度しか攻撃らしい攻撃はうけていない、この意味が分かる？」

「・・・わからないのなら教えてあげましょう、戦いでね！」

「言われなくともそのつもりだ!!」

清明と八雲が戦いを始める、おれは巻き込まれないように残っている妖力で結界をはった。

八雲SIDE

この陰陽師・・・私の実力が分からないのかしら・・・！

「言われなくともそのつもりだ！」

「いくわよ！」

私は結界を身体にはり、扇子をふる、普通の陰陽師ならここで吹き飛ばされそうになる風だった、しかし・・・。

「我が腕に力を・・・青龍、我が背に翼を・・・朱雀、我が身体に鉄壁の守りを・・・玄武、我が足に神速を・・・白虎」

今までの陰陽師と違い、身体を強化している、背中にできた翼を振ると私の発生させた風が消えてしまった。

「・・・あなた何者・・・？」

「あなたの知ってるとおり陰陽師ですよ」

陰陽師が一瞬で目の前に現れ、拳を振るう。

バキッ！

「なっ・・・私の結界が・・・陰陽師に・・・」

全力の結界じゃないとはいえこの結界を破壊されるのは初めてだった、結界を破壊した上に骨を折った。

「そういえば名前を言ってなかったね・・・私の名前は安部清明」
腕を振りかぶり、拳を突き出してくる。

「最強の陰陽師よ」

ズンッ

「あっ・・・ぐううう・・・」

「私を相手に本気でこないなんてどんな神経してるのかしら？」

「・・・一旦引くわ」

「彼は妖力を抑えた状態で二十分ほど戦ったわ、あなたが今解放している妖力の8割ぐらいで」

「・・・っ！」

サツキが私より長く・・・彼はどれだけ修行しているのかしら、私をもっとがんばらないといけないわ。

私はスキマを開き自宅にもどった。

「・・・なあ清明・・・」

清明が戻ってきた後おれは清明に話しかけた。

「なに？」

「・・・隠してたのかもしれないけどさ・・・」

「な・・・なにかしら？」

うん、言っちゃおう。

「お前って女？」

「なんでそうなるのかしら？」

「だってさっき八雲と戦ってるとき私って言ってたし、今もかしら

って言っただろ」

「そんなことは言っていないぞ」

「・・・和菓子は好きか？」

「うん！大好き！」

「これやるよ」

「わあ、団子だあ、私が食べて・・・も・・・しまった！！」

「年もまだ大人になってないだろ」

「・・・なんでわかったの？」

清明は帽子をはずし、髪をほどく、結構長いようだ。

「まあ一番の理由はそれかな」

おれは清明の服を指差す。

「え？これのどこが・・・？」

「胸の辺り、少し破けているからサラシが見えた」

おれは集中力が高いほうだ、戦闘中清明の次の動きはちよつとした踏み込みとか視線で読めたが、身体がついていけなかった、何が言いたいのかという清明の身体見てたらサラシが見えましたということです。

「ほう、目がいいんだな」

「まあな、格上相手に戦うときは相手を良く見るようにしてるし」

「私はサツキよりも強いのか？」

「かなり強いな、おれはお前に攻撃を当てるまでに妖力の6割はつかったからな」

「そうか、それよりもさつき帰らせた女の子のところには行かないでいいのか？」

「・・・それもそうだな」

「私もついていこう」

「りょーかい」

「あれ？ここに家が・・・」

家を作った場所に家が見えない、おかしいなと思い、近づくと家が崩れていた。

『サツキさま、申し訳ありません』

おれの分身が近づいてくる。

「なにがあった」

『ルーミアさんが自宅に帰ると言って破壊していきました』

「そうか、だったらいいや」

『サツキ様の試作品のアイテムがたくさん壊れました』

「・・・うん・・・別に・・・いい・・・よ・・・」

別に泣いてなんかないやい！！

『それでは私は消えます』

おれの作っていた分身が消え、情報が入ってくる。

「なあ清明」

「なんだ？」

「お願いがあるんだけどさ、おれを都までつれてってくれよ、道に迷ってるんだ」

「……いいだろう、貸し一だからな」

「えっ……なにか奢ればいいのかな？」

「ふふふふ、三河屋の団子をご馳走してもらおう」

「へいへい、じゃあ帰りますか」

「ああ、私についてこいよ」

おれたちは都に向かって歩き出す、まあ清明に会うつていう目的がなくなってるんだけどね。

第十二話 サツキ都に帰還中・・・（後書き）

清明登場！最強の陰陽師が生まれた！清明が陰陽師として活動を始めたとのことです。

八雲紫も少しだけ再登場、サツキとの戦いはもう少し後になりそうです。

さて次回は・・・何日かかるかな・・・？

十二・五話 番外編 日常？（前書き）

どうも、葉っぱです、危険だった教科は『ギリギリ』赤点回避できました、よかったです。

十二・五話 番外編 日常？

「なあ清明、今日はこの辺で休まないか？」

「それもそうだな・・・もうそろそろ暗くなる、野営の準備を始めよう」

「あれ？清明は外で寝るのか？」

「ん？何を言っている、この辺に宿はないだろう」

・・・あ、そうか、清明はおれの能力知らないな。

「まあそのへんは任せろ！」

おれは能力で家を作り出す、さて・・・寝よう。

「清明、好きな部屋で寝てくれ、もうおれは寝る、食べ物はいぞ・
・白い箱の中にあるから好きに食べてくれ」

「うむ、感謝する」

「じゃ、おやすみ」

おれは自室に入り、眠り始める。

夢を見た、人間だった頃の夢だ。

おれは部屋に籠り、いろいろな物を作っていた、今作っているのは
発電機だ。

「おいサツキ」

「ん？どうした」

「一狩り行こうぜ！！」

「わかった、ちょっと待ってくれ」

おれは発電機（製作中）を机の上におき、PSPを取り出す。

「サチは？」

「ああ、もうすぐ来ると思うよ」

「そうか、じゃあくるまでにクエストやっとくか」

おれはPSPを起動し、モンハンを開始する。

「あ、カズヤ、あれつけてやってみようぜ」

おれは部屋の広い空間に置いている機械を指差す。

「なんだこれ？」

「これつけるとゲームの中にはいった感覚が楽しめるぞ……試作品だけだな」

「ちょっと待て、いま嫌な言葉が最後に聞こえたぞ」

「あはははは、気のせいさ、さあやろう」

おれはサチが来た時のために、書き置きをして、部屋の広いところに移動した。

「PSPをこれに繋いでおけ」

「ああ、わかった」

カズヤとおれはPSPを機械に繋ぎ、ヘルメットをかぶる。

「さて開始しますか」

ゲームを起動し、集会浴場に向かう、するとカズヤが装備をせずに、
きていた。

「おいコラ、装備してこいや」

「ふっ、真のハンターとは装備なんかに頼らないのだよ・・・」

「そのセリフは一人で☆7ナルガ倒してからにしろ、初期武器で行
くなんておかしいだろ」

カズヤも装備さえちゃんと作れば結構いい線いくと思うんだけどな
あ・・・。

「まあ気にするな、よしクエストいくぞ」

クエストを開始する、倒すのはアオアシラだ、この機械はあんまり使わないから弱い敵と戦うべきだろう。

Now Loading . . .
うな感じですすすめます

ゲームの中にいるよ

『残り時間は50分です』

「クエスト開始だあああああ!!!!」

「おっしやあああああ!!!!」

おれたちはエリア6へ走り出す、途中ジャギイがいたが無視した。

「水が冷たいな、この機械感覚がったわるなんて結構いいな」

「だろ？脳波をつかってゲームできるんだぜ、だから剣をシステムにない動きで動かせるぞ、システムどおりに動かすこともできるけどな」

こんなふうにといいながら太刀をぐるぐると回転させ、気刃切りをする。

「おお！そりゃいいな！」

カズヤも太刀をぐるぐると回す。

「「っ!!」」

なんだか危険な感じがするな・・・。

おれとカズヤは背中合わせになり、敵の姿を探す。

「サツキ! あっちだ!」

「りょーかいだ!!」

アオアシラのほうに走り出し、太刀で切りつける。

『グオオオオオ!!』

アオアシラが爪でカズヤに攻撃をする。

「うおっ!!」

「カズヤ! 大丈夫か!？」

「痛いけど大丈夫だ!」

「カズヤ! いい忘れたけど痛覚なくすことできるから!」

「先に言えや!!」

おれたちはそのエリアでしばらく戦闘を続ける。

「気刃切り成功!! みWなWぎWっWてWきWたあああああああ
あ!!」

カズヤの太刀の色が赤色に代わる、攻撃力が高くなったな。

「サツキ、研いでくる」

「おう、じゃあ閃光玉！」

ブン！ピカッ！！

「ぐああああ目があああああ！！」 『グオオオオオ！！』

「カズヤがかかってどうすんだコラ！！」

ゲームの中に入るとこんなこともあるのか・・・。

「ムスカ大佐の気持ちがあった気がする・・・」

と、カズヤが言うので。

「バルス！！」

と言ってもう一発投げてやった。

アオアシラの閃光効果が切れ、普通に動き出す。

「うおっ！普通に動き出した！」

「と思ったら逃げた！」

「追うぞ！ペイントつけてないからだらだらしてたら見失う！」

「おう！」

移動中．．．
Now Loading．．．

エリア5に移動した、アオアシラはハチミツを食べていた。

「カズヤ、捕獲するぞ、シビレ罨してくれ」

剥ぎ取りかた分からんからしかたない。

「うはwwおkwwwwまかせろwwww」

「．．．．やっぱおれがやる」

「サーセンww」

テンションが高くなりすぎてるな。

ガサガサ．．．バリバリ！！

「カズヤ！捕獲玉！」

「おk！！」

捕獲玉を二個投げつけるとアオアシラは眠り始めた。

「よし、クエストクリアだ」

「よっしゃ！採取開始だ！」

カズヤが痛覚無効化を解除し、ハチミツをとりに行く。

おれはキノコでも採りますか。

ガサガサ

「お、何キノコだろ、少し焼いて食ってみよう」

おれは肉焼きセットでキノコを焼きはじめるという、システム無視の行動を始める。

「よし焼けた、さて食べよう」

パク、ムグムグ・・・ゴクン

バタッ、ビクンビクン

「しまった、マヒダケだった・・・」

これもシステム無視だからできる技である。

『うおおおお！！蜂に刺されたあああ！！』

遠くからはそんな声が聞こえてきた。

『クエストクリア！』

「さて報酬受け取るか」

マヒから復活したおれと、蜂に刺されて解毒薬を飲んだカズヤは報酬を受け取りに来ていた。

「全部アイテムボックスかな」

「全部売りで!!」

「アホ!!」

「金が増えたぜ!!」

「・・・もしかしたら装備渡せるかもしれないな・・・カズヤ、おれの家に来い」

「わかったぜ」

「まさか渡せるとはな・・・」

「もらったおれもビックリだ」

おれはゴールドルナ一式とシルバーソル一式を送った。

「まあこれでお前も防具を「おお、結構高く売れ」売ったら怒るぞ、装備しろ」

「りょーかい！」

「さて、いったん戻ろう」

「そうだな」

おれとカズヤはスタートメニューに追加されている、『ログアウト』を選択し、元の世界に戻った。

「あゝいい運動したぜ」

「まあ実際寝てるだけだな」

「でも疲れたぞ」

「サチももうそろそろ来る頃かな」

『おじゃまします』

『いらっしやい、サツキは二階よ』

『ありがとうございます』

ガチャ

「よう、サチ」

「あら、もうきてたの」

「いいじゃないか」

「サチ、モンハンしようぜ！」

「ええ、いいわよ、もう集会浴場かしら？」

「いやいや、あれにPSPをつないでくれ」

「なにこの機械？」

「おれが作った」

「ゲームをしてる感覚があるぜ！まあ実際にゲーム内の世界にはいつてやると言うのが正解かな！」

「おもしろそうね、やってみましょう」

サチがPSPを繋ぎ、ヘルメットらしきものをかぶる、おれとカズヤもヘルメットらしきものをかぶり、ゲームを開始した。

「来たわよ」

「おう、ペッコ装備か」

「広域＋２と早食い＋２だからサポートはばっちりよ」

「そうか、・・・にしてもカズヤ遅いな」

数分後

「スマン遅れた」

「「おそいよ！」」

「あはははは、じゃあクエストいこう！」

「何のクエスト行くの？」

「サツキ、なににする？」

「そうだなあ・・・。」

「ジョーさんでも行くか？」

「食われないかな？」

「こやし玉もってけ」

「はいはい」

「よし、行くぞ」

Now Loading . . .

『残り時間は50分です』

「よっしゃあああああ!!」

「いくぜえええええ!!」

「さっさと倒すわよ!」

場所は闘技場、すぐに行けるぜ。

「よし、けむり玉でこっそり近づくぞ」

おれはけむり玉を投げながら少しずつ接近していく。

「サチ、竜撃砲まかせた」

「はいはい」

キィィィィン・・・ドゴオオオオオ！！！！

『グギヤアアアア！！』

見つかった！

「カズヤ！いくぞ！！」

「りょーかい！！」

おれとカズヤは前に出て、斬りつけ始める。

「よっしゃああああ！白きた！！」

気刃切りが成功し、武器の色が変わる。

「サツキ！ジョーさん疲れてきてるから食われないようにしろよ！」

「サチ！気をつけろよ！」

「私はガンランスだから大丈夫よ！」

サチが竜撃砲を撃ちながら、答える。

「ちょっと研いでくるぜ！」

「カズヤ、気をつけろよ」

「まかせろ！」

カズヤが少しはなれたところで、太刀を研ぎ始める。

『グギャアアアア！』

あ、食われた。

『『カズヤあああああ！！！！』』

「ギャアアアアア！」

「こやし使え！こやし！」

「そうだった！・・・おら！」

こやし玉をぶつけられたジョーさんは、捕食をやめる。

「眠り生肉設置するか」

おれは罾肉を設置し、ジョーさんがかかるのを待つことにする。

するとすぐにジョーさんが罾肉を食べ、眠り始める。

「カズヤ、サチ、頭にGを置こう」

計6個の大樽Gを置き、起爆前に状態を整える。

「起爆は小樽で・・・」

ジジジジ・・・ドゴオッ!!

『グギャアアアア!!』

よし起きた! 閃光だ!

ヒュッ・・・カッ!

『グギャアアアア!!』

「今の間に攻撃だ!」

おれとカズヤが足元で気刃切りを、サチが頭に砲撃や竜撃砲を当てる。

「そろそろ捕獲いいんじゃないか!？」

「それもそうだな、罠設置しよう」

おれはシビレ罠を設置し、罠が間が来るように移動する。

「よしかった!!」

「捕獲玉!」

ボン! ボン!

捕獲玉を二つぶつけると、ジョーさんが眠り始めクエストをクリアする。

「ふゝ疲れた・・・」

「食われたなあ・・・」

「サポートも楽しくないわね・・・」

「まあいいじゃないか、さて、報酬受け取りに行こう」

「そうね」

「そうだな!」

「今度は売るなよ」

「・・・勿論さ!」

「おい、今の間はなんだ」

「何もないよ」

「まあ、いいからいきましよう」

「全部アイテムボックスと・・・」

「私もアイテムボックスね」

「全部売・・・受け取りで」

「・・・」

「なんだよ受け取っただろ」

「まあいいか」

「そうね」

「じゃあ帰ろう」

おれたちはログアウトし、元の世界に戻る。

「もう六時だな・・・」

「外が暗いぜ・・・」

「もう帰る時間ね・・・サツキ、この機械小型のものはあるのかしら？」

「ん？あるぞ」

「貸してちょうだい」

「ああ、ほれ」

「ありがとう」

サチに小型のものを手渡す。

「サツキ！おれにもおれにも！」

「オーケーほらよ」

カズヤに小型のものを投げる。

「今日はありがとね、また明日、学校で」

「ああ」

「・・・これで育成ゲームで・・・キャー！」

「動物かよ・・・おれはえr・・・なんでもない」

「じゃあまた明日な、一週間以内で返せよ」

「はいはい、じゃあな」

「また明日ね」

カズヤとサチが家から離れた頃思いだしたことをおれは叫ぶ。

「カズヤ〜！ちゃんと宿題しろよ〜！」

『やっべえ！忘れてたあ〜！！』

『なにやってんのよ！どれぐらい終わってないの！』

『全くしてないぜ〜！！』

『写させてあげないわよ！』

『えええええ〜！！』

おれは家に戻り自室に入る。

「さて、寝るか・・・」

おれはベッドに入り、眠り始める。

そこで目が覚めた。

「・・・・・・・・」

「おいサツキ、朝だぞ」

「・・・・清明か」

「うむ、清明だ」

さて、都に戻りますかね・・・。

「よっと」

おれはベッドから起き上がる。

「おいサツキ、カズヤとかサチと寝言を言っていたが誰だ？」

「・・・・・・・・気にしないでいいさ、さあ行こう!!」

「あっ、こら待て！」

おれは走り出す、都に早いところ戻って飯でも食いに行きたい。

「あはははは！追いつけるものなら追いついてみろ！アクセルスピード！」

「くっ！白虎！行くぞ！」

おれと清明は都に向かって走り出す、後少しで都に帰還だな・・・。

おれはそんなことを思いつつ、走っていた。

十二・五話 番外編 日常？（後書き）

この話は清明と一緒に都に戻っているサツキが見た夢です。
はぁ・・・ソード・アート・オンラインみたいなゲームやってみて
え・・・。

第十三話 帰還とお出かけ（前書き）

どうも、葉っぱです。

感想くれると嬉しいです。

第十三話 帰還とお出かけ

「ふはははははははははは！おれの勝ちのようだな！！」

都まではあと数キロほど、この調子なら勝てるぜ！

「サツキ！待つんだ！」

「そんなこと言って止めようたってそうはいかないぜ！」

おれはスピードを緩めずそのまま走り続ける。

「違うサツキ！そうじゃない！そっちの道は！」

足の裏にあった地面の力強い感覚が突如消えうせる。

「崖なんだよ！！！！」

「言うのが遅うわああああああああああ！！！！！！」

おれはそのまま落ちていった。

ヤバイヤバイヤバイ！落ちてる状態じゃうまく思考がまとまらないから翼が出せない！

あれ？下から地面が近づいて・・・おれが近づいているのか。

ガシッ

「うおっ」

誰かに背中を掴まれ、落下のスピードが徐々に落ち、それが0になる。

「ふー、間に合いましたね・・・」

妖力を感じるから妖怪かな？

「あの、下に降りますか？それとも空中にいますか？」

「じゃあ自分で飛びます」

おれは漆黒の翼を展開し、空中に浮かぶ。

「ありがとうございます、おれの名前は「分かっております」そっちの名前は？」

なんで知ってるんだとはあえて突っ込まなかった。

「私は天狗の射命丸と申します」

「そうか、ありがとう」

「さて、お願いがあるのですが・・・あなたのことを新聞に書いてもよろしいでしょうか？」

うーんまあ内容にもよるけど助けてくれたしいいかな。

「いいですよ、でもあまり悪く書かないでくださいね」

「了解です、それでは！」

射命丸と言う天狗はどこかに飛んでしまった、おれも上にいき
ますかね・・・。

おれは漆黒の翼を羽ばたかせ、崖の上に戻った。

「おお、サツキか、いま助けに行こうとしたところだったんだ」

清明の背中には朱雀の翼がついていた。

[illegible]

「そんな言葉私には意味ないぞ！」

数十分後

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．疲れた．．．」

「はあ．．．私の．．．はあ．．．勝ちだ．．．」

「あゝもう疲れた」

おれはその場に座りこむ。

「ふう・・・疲れたな・・・」

おれが座るのを待っていたかのように、清明もおれの隣に座った。

「よつと・・・ふう・・・」

・・・。

「・・・」サツ

「・・・」ススツ

「・・・」サツ

「・・・」ススツ

・・・。

「何で近づくんのだ？」

「じゃあ逆に聞こう、何故逃げる」

そ・・・そりゃあ・・・汗とかで・・・うん。

「おれ汗かいてるけど臭くないのか？」

「ん？べつに気にならないぞ」

「そうか・・・ならいい」

こういうのって男と女で変わるもんなのか？？

隣に座ったまま数分が経過する。

「じゃあそろそろ帰るわ、明日団子奢ってちょうだいね、友達も連れてくるからよろしく」

「へいへい、じゃあ明日どこに集合だ？」

「そうね・・・じゃあ三河屋の前に昼過ぎに」

「りょーかい」

「それじゃあ」

「またな」

おれは清明と別れた後、都の端にいった。

「よし・・・この辺かな・・・」

おれは空き地に家を作り出し、拠点を確認する。

「さて・・・やっぱりあの店いかないとな！」

おれは都の定食屋に向かった。

「カズ・・・おっちゃん!! 久しぶり!!」

「サツキ!! 久しぶりだな!! それとおっちゃんじゃねえ!!」

「サキさんは？」

「ああ、いまあっちにいるよ」

「そうか、じゃあいつものお願い」

「へいへい、ちょっと待ってな」

おれは食事をし、帰宅する。

「じゃ、また来るよ」

「おう、いつでも来な」

「また来て下さいね」

おれは自宅に戻り、アイテム作成を開始する。

「・・・ダメージはなくすことが出来ても衝撃は逃がせない・・・これは大きな問題だな・・・」

おれは清明と戦ったときに使った試作品のアイテムを改良していた。

「・・・衝撃を逃がせなければ、カウンター攻撃ができない・・・衝撃を逃がすアイテムでも作るか・・・？」

おれは試作品のアイテムを分解し、組み立て始める。

「・・・魔力石壊れてるな・・・取り替えよう・・・やっぱ強い攻撃一回で壊れるなあ・・・」

おれは研究に欠かせない魔力石を交換し、あることを思いつく。

「・・・衝撃を逃がすのではなく利用するのはどうだろうか・・・」

考えたことは衝撃を右半身か左半身に集め、身体を回転させながら裏拳とか回し蹴りみたいな感じで攻撃だ。

「これを実行するなら魔力石をたくさん内蔵する必要があるな・・・」

まだまだ改良が必要だと思いつつ、今日は睡眠をとることにする。

「明日は集合時間に間に合うようにしなきゃなあ・・・」

おれは眠り始める、時刻はもう2時を回っていた。

朝

目が覚めたおれは脳内会議で脳内議員が満場一致で睡眠を可決しているのを無視し、起き上がる。

「ねむ・・・」

おれはベッドから出て、顔を洗いにいく。

「冷てえ……」

顔を洗うと結構目が覚めたが、まだ少し眠い、このまま寝たい気分を抑えて、朝食をとり始める。

「……（モグモグ……ゴクン）」

食事終了！さて……早速修行でもするか……。

おれは都の周りを軽く5周ほど走り始める。

「……結構慣れてきたな……」

始めたばかりのころは1周目で疲れてきてたけど、今では5周走っても息が切れない、今度からもう少し増やすか……。

「さて……技術面の修行開始だ」

おれは氷の壁を作り出し、バラバラに破壊する、それを何回も繰り返し、たくさんの氷の破片を確保する。

自分が戦いながらじゃあ時間がかかる、だから今回は戦いを分身に任せる形でやって見よう。

「スリーカード！！」

おれは自分の分身を二人作り出し、戦わせ始める。

さて……おれは集中……。

おれは氷の破片に妖力を流し、硬度を強化する。

そして・・・。

「くらえっ！」

二人の分身を串刺しにした。

「「ぎゃああああ!!!」」

よし、これでいい!!

「「いいわけあるかああああ!!!」」ドクドクドク

あ、しまった、思考がつながってるんだった。

「よし、今はゆっくり休め・・・」「うるせえよ! だったら攻撃す・
・・」よし消えたな・・・ふう・・・」

なんか言ってたが気にしない、全く気にしない。

「さて・・・そろそろ行くか」

おれは団子屋へと向かった。

都に入るとなんか見られていた、なぜだろう？

まあ気にしないでおう。

「ちょっと早かったかな？」

「いや、遅いぞ」

「げっ、清明！」

むむう・・・もう少し早く来るべきだったな。

「さ、食べましょ」

「へいへい」

あれ？　そういえば誰か連れてくるんじゃない？　清明の後ろのやつか？

「誰か連れてくるんじゃないのか？」

「ああ、私の後ろにずっと隠れているよ」

「そうか、はじめまして、おれの名前はサツキ、君の名前は？」

「その・・・芦屋道満・・・です」

「私の弟子だ、よろしく頼む」

おれは微笑みながらよろしくと言った。

「じゃ、お金を渡すんで食べてきてくださ「おまえも来るんだよ」
・・・え？」

なぜおれも行くんだ・・・女の人と食事・・・お茶かな？やったことないぞ・・・これは・・・。

「なんとしても誤魔化して逃げなければ・・・！！」

「・・・・・・・・」

「清明、おれ実は今日用事が・・・」

「嘘だろ」

ばれた！何故だ！！

「チッ、もっと大きな嘘をつかなければ・・・！！」

よし、これだ！！

「実は知りあいが大怪我してて」

「いや、嘘つこうとしてることは知っているからな」

「・・・・・・・・マジ？」

「・・・・・・・・マジだ」

もう仕方ない、あきらめよう。

「では、このサツキと一緒にさせていただきます」

「ああ、一緒に食べよう」

「・・・・・・・・よろしくおねがいします」

「で、何を注文するんだ？」

「そりゃあ全種類3本ずつだろ」

「そんなに食えるのか？20種類はあるぞ」

「あの・・・！私はそんなに・・・！」

「ほらみろゝみんなお前みたいに甘い食べ物ブラックホール胃袋じや『青龍！』アガスツ！！」

ドクドクドク・・・

殴られた、青龍のオーラつきで・・・、つか血がどんどん出てんだけど・・・。

「もう一度言ってみろ」

「流石清明、おれにはできないことを平然とやってのける！」

プライドなんてあるわけない！

「じゃあ注文頼む」

「すいませ〜ん！全種類3本ずつで！！」

「それでいい」

殴られた場所が痛いな・・・。

「あゝいてえ・・・」

おれは清明に聞こえるようにわざと少し大きな声で言ってみた。

「む・・むう・・すまなかった」

あれ？謝られたよ？

「いや、別に謝ってもらいたかったわけじゃ・・・」

道満が立っておれの頭に手を当てる。

「イテッ！」

おれは離れようとするが・・・。

「・・・その・・・ちょっとじっとしててください・・・」

と、いったのでおとなしくすることにする、するとだんだん痛みが取れてきた。

「・・・回復の陰陽術です・・・痛みはとれましたか？」

「あ・・・ああ、ありがとう」

おれは礼を言っておく。

『団子お待たせ』

「おおっ！来たぞサツキ！道満！」

清明、少しは静かにしてくれ・・・。

おれはとりあえずみたらし団子に手をのばす。

「おっ、結構うまいな」

「そうだろう、私はよくここに来てるからな」

「・・・おいしいです・・・」

そういえばあんまり清明たちのこと知らないな・・・聞いてみよう。

「なあ、二人とも年はどんぐらいなんだ？」

「「・・・」」

「あれ？・・・なんで答えてくれないんだ？」

「女性に年の事を聞くのはどうかと思うぞ」

「・・・失礼ですよ・・・」

「・・・なんかごめん」

「まあいいさ、私も道満も14歳だ」

「へー14さ・・・え？ほんとなの？」

「もうすぐ15だな」

「・・・はい、そのとおりです・・・」

ということは現代で考えると今は13歳？

「しまった・・・」

「どうしたサツキ」

どうりで身長が低いわけだ・・・。

「さて、おれは食べ終わったし帰らせてもらってもいいかな？」

おれは席を立ち、会計をしようとする。

「女性を残していくとは何事だ、そこで待ってろ」

清明はさっきまでおれが座っていた席を指差す。

「へいへい・・・」

おれは席につき、二人が食べ終わるのを待つことにした。

「ごちそうさま、サツキ」

「・・・ごちそうさまです・・・」

「はいはい、じゃ会計してきますよつと」

おれは店員に会計してもらい、お金を払った。

「じゃあおれは用事があるからさらばです」

「なにをするんだ？」

「ん・・・、修行だけど？」

「ほほう」

清明が意味ありげな笑みを見せる。

「それじゃあ・・・」

ダッ

おれは嫌な予感を感じてダッシュで逃げ出す。

「縛！」

清明が詠唱破棄でおれを拘束する。

くそっ！なんて強いんだ！！

「っ！！放せコラアアア！！」

「道満と戦ってみな「断る！！」拒否権があると思うの？」

この状況、どう考えても拒否権があるようには思えない。

「うーんそれじゃあ・・・断る！！」

戦ってたまるか！

「はあ！？普通ここは常識的に考えて受けるところでしょーう！」

「おれを常識と言う名の鎖で縛るのはあきらめたほうがいいと思うぞ！！！」

「それって、私は人間失格ですって言ってるものじゃない！！」

「おれは妖怪だぞ！？」

「あーもう！いいから戦いなさいよ！！」

「断固断る！！このサツキ、戦うことは謹んで遠慮させていただきます！」

「遠慮も何もないわよ！いいから戦いなさい！！」

おれと清明はしばらく言い争いをした。

「じゃあ仕方ない、一戦だけだぞ・・・」

「ええ、お願いするわ」

「はぁ・・・なんで13の女の子に攻撃しなきゃいかんだ・・・」

「14よ・・・??」

「こっちの話だ、気にするな」

「そう、じゃあ闘技場に行くわよ」

少年？少女移動中・・・

「よし、戦いの準備はできたわ、勝敗はこちらで決めるからね」

「・・・それはいいんだが・・・このギャラリーはなんとかなら
ないのか？」

闘技場には、たくさんの観客がいた、手になんか紙を持ってるこ
ろをみると賭け事でもしてるんだろう。

「なんとかならないわよ、じゃ始めてちょうだい」

「へいへい・・・」

おれは初期位置に向かい、構えを取る。

「じゃ、始めようか、道満」

「・・・その・・・殺してしまわないように気をつけます！」

「・・・え？」

おれは清明の方を見る。

「ああ、いい忘れてた、道満は私の次に強い陰陽師だ」

「・・・（。D。）」

やばい・・・死ぬかも・・・。

第十三話 帰還とお出かけ（後書き）

次回は戦いです、よろしくお願いします。

第十四話 サツキVS道満(前書き)

どうも、はっぱです。

今回は短めです。

第十四話 サツキVS道満

「やばいよ・・・」

清明の次に強いとか・・・もうやばい・・・。

「よしっ、それでは始め!!」

清明の合図と共に戦い・・・いや、デスマッチが始まる。

「・・・それでは行きます・・・!」

道満が詠唱をせずに、巨大な光のレーザー発射する。

「うおおおお!マジかよ!!」

おれは防御や受け流しは無理と考え、避けることにする。

「・・・読んでいました・・・!」

道満がこっちに接近してくる。

「アイスブレス!!」

おれは氷の息を吐き、動きを止める。

「清明の次に強いならこれぐらい余裕だよな!!・・・アイスブリズン!」

おれは道満を氷の牢獄に閉じ込め、大技を当てることにする。

「だっ！」

おれは地面の氷を砕き、破片を確保する。

「さあ行くぞ・・・フローズンレイン!!」

氷の破片が浮かび、道満に向かって飛んでいく。

「玄武!!」

な・・・! アイツも清明と同じ技を使えるのか!?

おれが発射した氷の破片は黒いオーラにほとんど弾かれた。

「・・・でも清明と違って少しは攻撃を当てることが出来るようだな」

道満の手には少し傷がついていた。

「・・・そのとおりです・・・」

清明と違って攻撃を当てれるのならいける!!

「アクセルスピード!!」

おれは自己強化をし、スピードを上げる。

さっきの攻撃は手数で当てた・・・だったらたくさんの攻撃を当て

てオーラを削って大技を・・・！

「行くぞ！スリーカード！！」

おれは分身を二人作り出し道満の両手を掴ませる。

「！・・・動けな・・・！」

ここで攻撃するのは危険だ、青龍を使えば簡単に拘束を解除される。

「ノーペア！」

二人の分身が妖力の塊となる。

「よしきた！ファイアバースト！！」

ドゴオオオオオオオ！！！！

分身だった妖力の塊が2つの炎の柱となる。

おれの予想通り玄武のオーラは腕に集まっているようだ。

「出でよ！レッドドラゴン！！」

清明には受け止められたが今回は・・・！！

「…………我が妖力を用いてこの場に顕現せよ！青龍！！」

『グオアアアアアアアアアア！！！！！！』

道満の声と共にオーラとは違う本物の龍が目の前に現れる。

「おいおいおい・・・冗談だろ・・・？」

道満の作り出した（召喚した？）青龍はおれの作り出したレッドドラゴンを一瞬のうちに倒してしまった。

「おい清明！これやばいって！！どうなってんのさ！？どう考えてもお前より強いだろ！？」

おれは回避行動に専念しながら清明に質問をする。

「いや、私のほうが強いぞ？それとこれはただの独り言だが、陰陽師には四天王という強い人たちがいてだな、私と道満はそのうちの二人なんだ、私は技の清明、道満は力の道満と言われている、呼び出せるのは道満が今呼びだしているように青龍を、私は朱雀を呼び出すことが出来るんだ、まあオーラを纏わせるのはべつにどうてことはないがな」

陰陽師の四天王と対決・・・もう嫌だ・・・、でも攻撃の道満と言われているように彼女の攻撃には正確性と自分の防御があまりできていないようだ。

『グオアアアアアアア！！』

道満の青龍がおれに襲いかかってくる。

「・・・ライトアロー！！」

おれの隙を狙って道満が攻撃を仕掛ける。

「仕方ない・・・青龍には頭数で仕掛けるか・・・！ファイブカード！！おまえら！頼んだぞ！」

「」「」「おうっ！！」「」「」

おれは分身を四人作り出し、時間稼ぎをさせる。

「・・・青龍！やれっ！」

『グオアアアアアア！！』

「「ぎゃあああああああ！！！」」

あ、二人やられた。

「・・・ライトアロー！！！」

「ぎゃあああああああ！！！」

あ、またやられた。

「おれはまだ残ってるぜ！ブリザード！」

おれの分身が時間を稼ぐために攻撃をする。

「ぐあああ！チッ、やることはやったからな！！！」

「ああ、こっちも準備完了だ」

分身が消え、おれ一人が残される。

おれは地面に手を当て、創造の能力をフルに使い始める。

「……出でよ！七色の龍^{レインボードラゴン}！！」

おれは輝夜を助けるために使った技を今度は倒すために使った。

おれの後ろに七匹の龍が現れる。

「もういっちょ！！龍^{ドラゴンフィールド}の領域！！」

おれは周りの状態に干渉をする、するとそこらじゅうに炎がでてきた。

「おまえら！相手はあの龍だ！ほかには手を出すなよ！！」

「「「「「グオアアアアアア！！！！」」」」」

「グオアアアアアア！！」

おれの龍たちと道満の龍が空中で戦いを始める、一匹じゃやられたけど今回は七匹でしかも妖力もかなり込めた、きっとやってくれるだろう。

「さて……道満続きをやるうか」

「……もちろんです」

さて……ここからが本番だ！

「ここからはさっきまでのようにはいかないぞ!!」

おれは漆黒の剣を二つ作り出し、両手で持つ、いつも片手剣で盾を持たなかったのはそのためだ。

「ソニックシュート!!」

おれの剣の先から球状の風の塊が飛んでいく、イメージは螺旋丸だ。

「・・・!」

お、避けたか、いい判断だ、だがおれが接近することを考えてないんじゃないのかい?

おれは両手の剣で一回ずつ切りつける。

「・・・そんなもの効きませんよ? ライトブラスター!」

道満の手からたくさんの光の弾が飛び出してくる。

「ふっ、ミラーカウンター!!」

おれは目の前に鏡をたくさん作り出す。

「・・・! 吸い込まれた!?!」

鏡の中にはいった光の弾は二つになって飛び出してくる。

「そのとおり・・・そして操作の主導権はおれのものだ!」

技術を磨いていた理由の一つは妖術や主導権を奪った魔法の操作のためだ。

「さっきの技、返すよ」

おれは手を軽く振り、光の弾を全て返す、それで勝負が決まる……はずだった。

「グオアアアアアア!!」

「なっ!」

道満の目の前に青龍が立ち塞がり、攻撃を受け止めた。

「……青龍! 今治療する!」

まさか……おれの龍たちは……!?

おれは後ろを見る、傷こそおっているもののまだやられてはいなかった。

「……よかった、まだ大丈夫だったな……、次は全力でいこうな」

おれは龍たちを合体させ、一匹の龍を作り出す、色は虹色……第二段階の龍だ。

「よし……これなら……」

向こうも治療が終わったようだ、おれは虹色の龍を向かわせる。

ギュアアアアアアア！！！

「さあ、つづきを始めよう・・・！ダークネスウィング！！」

おれは翼を広げ低空飛行で一氣に近づき、切りつける。

「嫌なオーラだぜ・・・！」

「・・・そっちこそ敵にはしたくないものね・・・！」

「そりゃどうもっ！」

おれは剣の切っ先から炎と氷の弾を打ち出す。

「ライトウォール！」

おれの攻撃が光の壁に弾かれる。

「・・・次はこっちの番です・・・！」

道満が青龍のオーラを纏っておれに突撃してくる。

ダメージ覚悟で突っ込む気か！？

「ウォーターウォール！」

おれは目くらましとある仕掛けのために水の壁を作り出す、当然物理的干渉はできないから道満の手が出てきた。

「よしきた！コールドチェンジ！」

おれは周りの温度を一気に下げ、水の壁を凍らせる。

「くっ・・・！」

すると道満の身体が途中で動かなくなった。

「・・・なめないで！」

道満が氷の壁に攻撃をし、破壊する。

「待ってました！！」

おれは道満が作った氷の壁に妖力を流しこむ。

「フローズンレイン！！」

狙いは一箇所絞る・・・！

おれは道満の両肩に集中して発射する、すると道満の肩の辺りのオ
ーラだけはがれた。

「おらっ！ストーンキューブ！」

おれは道満の身体を蹴り岩にぶつけ・・・一気に接近し、両肩に剣
を突きつけた。

「・・・おれの勝ちだな」

おれはアクセルスピードを解除し、出口に向かって歩き出す。

・・・なんか暗いな・・・。

おれは上をみる、すると・・・。

「・・・」

青龍と虹色の龍が落ちてきていた、当然おれはそれを避けきれずに・・・。

ドスン！！　プチッ！

押しつぶされた・・・。

『えーただいまの勝負は道満の勝ち！』

納得いかねえ・・・。

そんなことを思いつつ、結果を聞いていた。

戦闘後

「清明！あの結果は納得いかねえ！！」

「あの状況なら動ける道満のほうが勝ちでしょう！？」

「いや、おれが道満に剣をつきつけた段階でおれの勝ちだろうが！！」

おれと清明は喧嘩をしていた、喧嘩といっても悪い意味ではなく、友達同士の言いあいみたいなもんだ。

おれと清明が喧嘩をしていると何か聞こえてきた。

『へーあの子があのだ……？』

『この新聞に書いてあること本当なのか？』

『やっぱりそうなのかしら？』

・・・新聞？・・・まさかあの天狗・・・なんか書いたんじゃねえだろうな・・・！！！！

「ちよつとその新聞見せてくれ！！」

おれは新聞を配っている下っ端天狗から一部奪い取り、読み始める。

文々。新聞。

妖怪サツキ、鬼と引き分ける！

今月某日、とある山で鬼と戦う妖怪がいた、この私は止めさせようと思ひ間に割つて入ろうとしたところ、妖怪は鬼と互角に戦つていた、私はその妖怪をよく見ると赤髪の男性だった、赤色の髪で鬼と互角に戦える妖怪は私の情報網でもひとりしか知らない、最近よく名前を聞くサツキである。

知つてると言つても会つたのはつい最近のことであり、彼のことを噂でしか聞いた事がなかったため、彼の存在を認めていなかった、なぜならその噂は単騎で妖怪の軍隊を滅ぼしたり最強の陰陽師と戦い生き延びたという嘘のような噂だったからだ、そんな彼は妖怪の間でこう呼ばれている。

『赤髪の死神』『赤い閃光』『戦技無双』この三つが私が確認しているもので、まだまだあるだろう。

さて、話がそれましたが本題に入ります。

(中略)

それから私が新聞を出す許可をもらった後、彼は都の方に向かったそうだ、都に行けば彼に会えるかもしれない・・・。

「……このくそ天狗があああああああ!!!!」

おれのいる場所書くんじゃないやねえよ!! 今すぐ訂正版書かせてやる・・・!

「お・おいサツキ、どこに」

「おいこら! そこの天狗!」

おれは新聞を配っている天狗に話しかける。

『は・・はい、なんででしょう・・・?』

「今すぐこの新聞発行したやつが住んでる場所に連れてけ」

『いえ・・それは・・・』

「連れてけ」

『しかし・・殺されてしまいます・・・』

「今死ぬよりはいいだろ? おれが何とかする・・・、だから今すぐ連れてけ・・・」

『は・・・はい・・・』

よし・・・これでいい。

「よし行くぞ!」

おれは天狗を先に飛ばせ、後からついていくことにした。

「道満・・・サツキが怖いんだが・・・今戦ったら勝てるか分からない・・・」

「・・・私はこんなに強い人と戦ったの・・・？ 清明の方が強いんじゃないかったの・・・？」

「・・・いや、その言葉は忘れてほしい・・・」

清明と道満がおれが飛ぶ前に話していたことは聞こえなかったことにした。

第十四話 サツキVS道満（後書き）

感想くれると嬉しいです、それからサツキと紫を二十話までに戦わせようと思っています。

第十五話 妖怪の山、天狗と再会（前書き）

どうも、葉っぱです。

今さらですがこの前の清明と道満の言葉はある意味があります。

さて、今回は・・・タイトルで分かりますね、はい、ごめんなさい。

第十五話 妖怪の山、天狗と再会

おれは射命丸の家の前に来ていた。

『その・・・ここが射命丸様の家です・・・』

「わかった、もういいよ」

おれは下っ端天狗を帰らせ、一人になる。

コンコン

「・・・・・・・・いるか？」

返事がない、ただの空き家ようだ。

ドゴン！（ドアを破壊する音）

「じゃまするぜ」

不法侵入？器物破損？んなもん知らん。

「さて・・・適当な部屋で待っとくか・・・」

おれはとりあえず近くの扉に入り、待つことにする。

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・（ジー）』

「……アイツの子供か？」

部屋に入ると小さな天狗がいた、翼がまだ小さく、飛べないようだ。

「……こんにちは」

おれは挨拶をすることにする。

「……こんにちは……誰？」

「おれの名前はサツキ、妖怪さ、そっちは？」

「私は射命丸文、鴉天狗よ」

「そうかそうか」

しばらく遊びながら待つこと数十分、射命丸が帰ってきた。

『文、帰ってきましたよ』

部屋の外から声が聞こえる。

「あなたって不法侵入？」

「違うよ!!」

「そうなの？」

「ああ、ちゃんと玄関から堂々として入ってきたもん！」

ガチャ

「それにしては堂々と入りすぎじゃないかと・・・？」

あ、やっぱおれが破壊したってバレた？

ガッ！（射命丸の顔をつかむ音）

ギリギリギリ（アイアンクロー）

「痛い痛いたたたたたたた！！」

「そんなことはどうでもいい！おれはお前に用事があるんだ」

いや、私にとっては大問題なんですけど　という声は聞こえなかったことにした。

おれは射命丸の視界をふさいでいた手を離す。

「この新聞だよこの新聞！」

「あ！読んでくれたんですか！？ありがとうございます！す！」

抱きつこうとしてくる射命丸をおれは手で抑え、話しを進める。

「その前に・・・お前の名前何なんだ？」

「？ 知りたいんですか？」

「いや、作者が射命丸文の親と言う設定でお前のことを書いてるからやっぱり名前がないと不便だと・・・はっ！ いまおれはなにを！？」

「・・・おかしな人ですね、えっと私の名前はですね・・・射命丸あか茜ねですよ」

「そうか、じゃあ改めてよろしく・・・さて、話進めるぞ」

おれは、住んでいる場所がばらされると嫌だということを茜に伝え、訂正版を出してもらうよう、お願いした。

「なるほどなるほど・・・それじゃあついでに取材も・・・？」

「・・・まあ、いいだろう」

訂正してもらえるのならそれぐらい別にいいだろう。

「それでは質問です、あなたの能力は何でしょうか？」

「答えたくないです」

「わかりました、ちょっとあっち系の能力ですね」

なんかおれの能力が大いに誤解されてる気がする・・・！

「能力教えるよ！詳しくは言わないけど教えるよ！」

茜が目を輝かせ、メモの準備をする。

「・・・何もないところから何かを作り出す能力と、存在するものを消す能力だよ・・・」

いままで隠し続けた能力がたくさんの人にばれるな・・・。

「なるほど、それでは次の質問です」

取材は三十分ぐらい続いた。

「あのーお願いなのですが能力見せてもらえませんか？なんだか嘘みたいな能力なので」

「りょーかい、なんか作って欲しいものあるか？」

「・・・じゃあこの万年筆と同じものを・・・」

なんだ、簡単なもんだ、ほらよつと。

「・・・どうだ？」

「・・・すごいです・・・じゃあもう一つの能力も・・・」

「なに消せばいい？」

「じゃああそのみかんの皮だけ消してください」

・・・まあいいか、よっと。

「おおお！すごいです！」

と言って、みかんを食べだした。

「おれにもくれ」

「好きに食べてください」

「・・・じゃあこれもらおう」

おれは中くらいの大きさのみかんを一つとり、皮を剥き、食べ始めた。

おれは食べながら、茜に話しかける。

「なあ、この辺りで修行手伝ってくれる天狗はいないか？」

せっかく天狗の棲みかに来たんだしできることならしばらく一緒に修行したい。

「うーん、何の修行ですか？」

「攻撃の正確性だよ、できればスピードが速くて打たれ強い奴がいい」

「そんな天狗はいませんよ？」

「まじか!？」

「ええ、天狗はスピードを武器にして相手の攻撃を避けて攻撃しますから」

「そうか」

「ですから天狗に的でも持ってもらってください」

その発想はなかった！

「それはいい！手伝ってくれる天狗を紹介してくれ！」

「では明日までお待ちください、いきなり集めるのは無理ですので」

「はいはい、じゃあ二日後来るよ」

おれは山の中に家を作り、明日までアイテム作成することにした。

カチャカチャ

おれは身代わり君をいじっている。

「よし、少しばかり大きくなるが盾にすれば問題ないだろう」

おれは腕に装着するタイプの盾に内蔵することにした、これならた
くさん内蔵できる。

「さて・・・あとは衝撃を集める機能だな・・・」

いちおう右半身か、左半身に集めることはできるが、後ろから衝撃
が来るようにもしたい、肘に来るようにすれば完全なカウンターが
できるし。

おれは時計をみる。

「寝よう」

時間は1時、もう夜中だ。

おれはベッドにもぐるとそのまま眠った。

「よし、起きるか」

時間は6時、結構寝たな・・・。

おれは朝のランニングを始める。

「この辺の地形はよくわからんから何キロじゃなくて一時間にするか」

おれは家に分身を置き、迷わないようにした。

「さて、朝飯を食おう」

一時間ほど走ったおれは風呂に入り、汗を流した後朝飯を食べ始める。

食べようとしたところ外から声がした。

『サツキさくん準備できましたよ』

「りょーかい、今行く！」

おれは急いで食べ、外に出た。

「あ、来ましたね、まだ寝てるかと思いましたよ」

「おはよう、おれは起きてるぞ」

おれは茜についていき、修行場所に向かった、途中ターゲット破壊

の天狗の移動範囲を決めていることも聞いた。

「・・・50人か・・・結構集めたな」

「ええ、私は顔が広いんですよ」

「弱みでも握ってんのか？」

「な・・・なんのことやら・・・」

「マジかよ・・・」

「いえいえ、いまのは悪乗りで本当に顔が広いんですよ」

おれは一応信じて、修行を開始する。

天狗と修行 ターゲットを破壊せよ!!

「いい記事になるかも・・・」

おれはその言葉を見殺し、修行を開始する、50人の天狗は空に浮かび、おれが動き出すのを待っている。

「・・・自己強化はスピード系以外はよしだな・・・ってか使っても意味ないけど・・・」

別に戦いじゃないからスピード以外役に立たないだろう・・・。

「そのかわり能力は使わせてもらおう・・・！」

おれは漆黒の翼を広げ、空に飛び出す。

「スカイロード！！」

おれは空に道を作り、その上を走りながら少しずつ破壊していく、
以外に時間がかかる。

「はっ！」

おれは空に結界をたくさん作りそれを蹴りながら破壊していくことに
する。

数時間後

「おらっ！あと3個だな！」

後の3人の天狗はとても早い、普通に行ったら追いつけないだろう、
あいつらの移動範囲を特定して追い詰める・・・！

「アイスブラスター！」

おれは天狗が行こうとした場所に氷の広範囲攻撃をし、動きが止まったところを破壊した。

よし、次だ！

おれは次の天狗に狙いを定め、徐々に追い詰めることにする。

「サウザントスピア！ブリザード！・・・おらっ！」

あと一つ・・・どこだ・・・！

「・・・なにやってんだ？茜」

「なについて・・・私がターゲットを持ってるんですよ」

茜は私はとても速いですからと付け加えていった。

「まあ、いいけどなっ！」

おれは後ろにある結界を蹴り、一気に近づく。

「遅いですよ？」

茜はおれの後ろに周り、背中によりかかってくる。

「・・・まさか後ろに回られるとは思わなかったぜ・・・」

「あなたが遅いだけですよ、さあ続きを始めましょう」

茜はまた移動し、おれの後ろから消える。

「ちっ！追いつけねえ・・・」

追い込もうと思っても茜は速く、追い込むことが出来ない。

『普通に追いかけても私には追いつけませんよ！』

茜が遠くからそんなことを言った。

「・・・なるほど！わからん！」

『・・・・・・』

「冗談だ！ちゃんと分かったぜ！」

『それはよかったです！では続けましょう！』

茜の言った意味は簡単なことだ、目で見て追いかけるんじゃなくて、翼の動かしかたや、妖力の動きや強弱を感じて、次の動きを予測しろってことだろう。

「・・・」

おれは目を瞑り、妖力の動きを感じる。

「右に行くときは妖力が右に偏るな・・・ということは左に行くときは左に・・・？」

大体のことは分かった、反撃を開始しよう。

おれはとりあえず茜のいる方向に進み、妖力と翼の動きを感じる。

「・・・右か・・・？」

おれはとりあえず右に行く、するとその一瞬後に茜も右に移動した、
どうやらおれの考えは合ってる様だ。

そのまま予測をしながら続けるといつの間にか最初の距離の2倍ほどの状態になっていた。

「サツキさん、私の言葉の意味はわかりましたか？」

茜が飛びながら後ろを向き、おれに質問をする。

「・・・まあな」

それにおれは短い言葉で答える、距離が短いぶんちよとした予測ミスで距離を引き離される、ここでミスするわけにはいけない・・・！

「では次はどっちに行きますかね」

妖力はまだどこにも集まってない・・・まっすぐに飛んでいる。

そのまま数秒ほど飛んでいると妖力の動きに変化が起きた。

右に集まってきている・・・右か！

おれは右の翼を強く羽ばたかせ、右に曲がる。

「なっ、フェイントだど!？」

茜は一瞬だけ右に妖力を集め、左に妖力を移動させた・・・、すごいフェイントだ・・・。

「だがおれも負けてられねえ！」

おれは空中に結界と分身を作り出し、結界を蹴り、分身に投げ飛ばしてもらった、すると距離はさっきと同じぐらいに縮まった。

「・・・やりますねサツキさん、今のはいけると思ってたんですが・・・」

「・・・気づくのが早かったからな、おれの動体視力と反射神経なめんなよ」

「そうですか、では次のターンで最後になりそうですね・・・最後のターンまで後少しです、この的を見事に破壊してくださいね」

茜が手に持っている的を掲げる。

昼前に始めたのにもう暗くなってきている、これ以上は周りが見えなくなるだろう。

「言われなくてもそのつもりだ」

「それもそうですね、ではいきますよ！」

茜はまっすぐ進んでいる、これが時間的に最後のチャンスだ。

「……」

茜の翼に妖力の動きが現れる、妖力は・・・両方に集まっている、どちらかの妖力だけを散らせて旋回するのだろう。

「っ！」

茜の動いた方向は後ろだった、当然おれの方に来るため、どちらかに避けないといけない、しかし避ければもう逃げられるだろう。

茜はどんどん接近してくる・・・あれを使えば！！

おれは身代わり君を起動し、そのまま茜に突っ込むことにした。

「えっ！？避けないんですか！？」

「避けないさ！避けたら負けるからね！」

おれはそのまま茜にぶつかり、二人のスピードが一気に消失する、しかしその瞬間おれだけは一気に加速した、理由は簡単、衝撃をおれの体に右から来るように仕組んだからだ。

おれの身体は回転し茜の後ろに回りこみ、手に持っている的を・・・。

バリッ！

「おれの勝ちだ！」

的は50個中50個破壊、完全勝利だ、時間はかかったけど。

「いや、サツキさんすごいですね、取材させてもらってもいいですか？」

「・・・それがもともとの目的か!!」

「当たり前じゃないですか！私が何の見返りもなしに修行を手伝うとでも!？」

「・・・まあいいや、何の取材？」

「やっぱり内容ぐらい聞いておきたい。」

「プロフィールです」

「・・・もう・・・嫌だ・・・。」

「断らせてもら・・・させてくれないと居場所バラしちゃうぞ♪」
脅迫だ?!?」

修行手伝ってもらうんじゃない!!

「脅迫だなんて嫌だなあ〜♪」

「・・・(T-T)」

もう覚悟を決めよう・・・。

茜の家…夜

「では、何も出さずに取材もなんなので」

ということらしく、食事を出してくれた、腹が減ってたから結構嬉しい。

「・・・ところで取材はしないのか？」

「そうですね、では始めますか、身長・体重・年齢を教えてください」

「身長は170後半、体重は50後半、年齢は・・・1600くらいかな」

「なるほど、結構長い間生きてるんですね・・・、それでそれだけの妖力しかないんですか？」

茜はおれが普段表面に出してる妖力しか知らないのだろう、清明と戦ったという情報である程度の実力は分かるものだと思ってたんだけど……。

「……おれの噂知らないの……？」

「噂というと……？」

「清明と戦ってるし、昨日は道満と戦った」

「……そう言えばそうでした、忘れてましたね」

「それでも新聞記者かよ……」

「まあ気にせずに、次の質問です、普段やってることは？」

「アイテム作成と修行、あと友人と遊んでるぐらい」

そのあといくつかの質問に答えた後、取材は終了した。

「じゃ、おれは帰ってもいいかな？」

「……泊まってってくれると嬉しいです、私は今から出かけなきゃいけないので」

「……文の子守りか……？」

「文を見してもらえませんか？」

「わかった、任せろ」

おれは文の部屋に行くことにした。

「あ、サツキだ、どうしたの？」

「茜さんに頼まれた」

「・・・またお母さんいないのか」

文はちよつと暗い顔をする。

・・・。

「大丈夫さ！おれと一緒に楽しいことして遊ぼうぜ！！何かしたいことがあるか！？まあ最終的におれが決めるんだけどな！！」

「それって私が言っても意味ないんじゃない？」

「・・・よく気づいたな・・・」

まさかこんな子供がおれのいった事に気づくとは・・・、流石茜の子だぜ・・・！

「・・・外に行ってみたいな、いつも家の中にいるから」

「じゃあ行くか、外は結構寒いからちゃんと厚着しろよ」

子守りをしろとは言われたが、留守番しろとは言われてない、外に行っても大丈夫だろう。

「・・・茜も少しは家にいてやればいいのにな・・・」

『サツキさん、着替えました』

「ん、じゃあ行くか」

おれたちは外に出た。

「おゝ綺麗な星空だな・・・」

山にいるからか知らんが星がよく見える。

「？　これが普通なんじゃないんですか？」

「いや、おれが住んでた場所は人が多かったからここよりは見えなかったよ」

やっぱ砂埃とかが空にあるからな。

「さて、どこか行きたい所あるか？」

「……お母さんの所に行きたいな」

「……りょーかい、おれの背中に乗りな、飛べないだろ？」

「うん」

文はおれの背中に乗り、おれの肩を強く握った。

「……荒い飛び方をする気はないんだけどな……」

「さあ、行くか」

幸い茜の妖力が感じられる、迷わずに着きそうだ。

おれは背中の翼を羽ばたかせ、夜の空へ飛び立った。

「おゝ速いね！」

「そうだろ？おれは茜と比べると遅いけど妖怪の中では結構速いんだぞ」

「後どれくらいで着く？」

「うゝん」

このスピードで飛び続ければ・・・。

「あと10分ぐらいかな、まあそれまで話しをしようじゃないか」

「何の話？」

「そうだな・・・おれの武勇伝はどうだ？」

と、冗談を言った。

正直言って言いたくない、文も聞きたくないだろうしな。

「じゃあ聞こうかな」

「・・・・・・・・え？」

・・・・・・・・、ミスった・・・・・・・・。

「？　じゃあ聞こうかな」

いや、さっきの『え？』は聞こえなかったという意味じゃないんだ。

「・・・・・・・・じゃあ今までおれが戦った強い敵について・・・・・・・・」

おれは自分の黒歴史の一部をさらすことになった。

「そういえば文・・・・・・・・」

10分後

おれは精神的に疲れきった身体で着地し、工場らしき建物の窓から中を覗きこむ。

「・・・誰もいないね・・・」

「・・・いや、いるぞ、妖力は感じられるし」

見える場所にはいないから奥のほうにでもいるんだろうか？

「まあ、入ってみるか？」

「そうだね、戦技無双のサツキさん」

「・・・帰っていいか？」

「ごめんごめん、入ろ」

おれたちは扉を開けて、建物の中にはいった。

「暗いね・・・灯り持ってくればよかったな・・・」

「・・・ライトボール」

おれは手のひらに光の球を止めて、周りを明るく照らす。

「あ、明るくなった」

分かれ道にきた。

「茜の妖力は・・・あっちか」

おれは茜の妖力が感じれる方向へ、進んだ。

しばらくすると、扉から明かりが漏れている部屋があった。

「あそこだな」

「そうみたいだね」

おれたちは扉を少し開けて中の様子を窺う。

『よし、これで新聞はOKだね』

・・・ここで新聞かよ・・・。

なんてことを思っていると茜がこっちに近づいてきた。

あ、ヤバ

ガチャ

「・・・やあ、久しぶりだね」

「こんなところで何をしてるんですか？文を見とくように頼んだはずですけど？」

「ちゃんと見てるよ！」

「じゃあなんでここに？」

おれの後ろから文が顔を出す。

「私が頼んだから・・・」

「あ、文・・・？」

「ま、帰ろう」

おれは文をおぶって茜と一緒に空を飛び始める。

しばらくたっておれは質問をする。

「あんなところで新聞を書くなんて何してんだよ・・・子供ほっといて・・・」

「・・・あそこに忘れ物があつたんですよ」

「じゃあとつて帰ってくればよかっただろうに・・・」

「だって新聞のネタ忘れるじゃないですか」

「それは子供より大切か？」

「うっ・・・いえ、違うわ」

「そうだろ、文は寂しがってたぞ」

「・・・」

「今度からは・・・文に手伝ってもらえ」

「え？」

「文もやってみたいんだと、新聞記者の仕事」

ここに来る途中黒歴史を語った後に聞いた事だ。

「そういえば文、おまえは茜がどっかに行ってる事についてどう思うよ」

「・・・仕事だから仕方ないかな・・・」

「ふん」

「私を頼ってくれてもいいのに・・・新聞記者の仕事もしてみたいし」

「茜の教えを受けた新聞記者か、それは・・・ヤバイ新聞記者が二人になるな」

「なによそれ」

「あっははははははは!!」

「ふふふふ」

「まあ急いで行こうぜ!」

「うん!」

「文は私をもっと頼って欲しいんだとさ」

「でも、そんなこと私には一度も・・・」

「おまえもあんまり頼ったことないだろ？」

「それは・・・まあ」

「文もお前を見て育ってるんだよ、お前がしっかりしないとダメなんだよ・・・あれ？おまえが新聞記者がんなばったらヤバイことに・・・」

「む、なんですかそれ」

「あはははは、まあ気にするな」

もうすぐ茜の家に着くな。

「ま、おれもそろそろ帰るかな」

「ちゃんと訂正版は明日配つときますよ」

「ほう、それはよかった」

さっきのシリアスな雰囲気だった空気もよくなってきた頃・・・それを乱す妖力が現れた。

この・・・妖力・・・！

「八雲・・・紫・・・！！」

「どうしたんで・・・！」

茜も気づいたようだ、戦闘状態に入っている。

クパッ

おれと茜の10メートルほど先の空間が割れ、なかから手が出てくる。

「今日は邪魔をする陰陽師も妖怪もない・・・今日こそ私の式になってもらうわ・・・！」

濃く、そして嫌な妖力が空気を満たし、八雲紫が中から出てきた。

第十五話 妖怪の山、天狗と再会（後書き）

T A K E 1

紫ババアとうじょ（ピチューン！！

紫「殺すわよ」

葉「ごめんなさいです」

T A K E 2

紫登場！無理やり登場させた感もありますがそこはまあおねがいします。

裏第三話 再会と偽名（前書き）

どうも、葉っぱです。

今回は番外編です、お気に入り登録をしてて、紫VSサツキの期待をした方、申し訳ありません。

裏第三話 再会と偽名

「おれの名前はサツキ、妖怪だ、お前らは？」

サツキはおれとサチの身体に絡みついているクモの糸を取り払いながら聞いてきた。

・・・サツキだと・・・？ 本物か？偽者か？

「おっ、このクモの足で武器が作れるかも、もらっておこう」

・・・本物だ！！

サチもそう考えたらしく、名前を言おうと口を開きかけていた。

「おれの名前はカズマ！いちおう生まれたての妖怪だ！」

サチが驚いた目でこちらを見てくる。

「（あれが本物のサツキならなおさら正体がばれるわけにはいい、わかってくれ）」

ここにくるまえに神様が言っただことを思い出す。

「サツキ君の前では本名を漏らしてはいかんぞ、これはおまえたちをあつちの世界に送るための条件じゃ」

まあ文章として書かれてはないけど。

「・・・カズマっていうのか、そっちは？」

「私の名前は・・・サキ、一応私も妖怪です、よろしく」

「・・・・・・・・」

「どうしたんだ？ サツキさん？」

「・・・いや、何でもない、ちょっと考え事をしていただけだ、それからサツキでいい」

「そうか、よろしく、サツキ」

「ああ、そういえばどうしてこの森に入ったんだ？ ここは危険な森なのに」

「いつの間にか迷い込んだのよ、ほら、昔いた土地から離れたばかりで・・・ね？」

「あ、ああ、一緒に出てきたんだがおれたち道が分からなくてな、とりあえず見えた森に入っちゃって」

「ふーん、そっか・・・ん？」

サツキはさっきおれが見つけたウサギの死体を見つけたようだ。

「・・・・・・・・」

ザクッザクッ

サツキは手に剣を持ち、地面を掘り始めた。

「おれも手伝う！何か貸してくれ」

「・・・ああ、ほれ」

サツキは小刀をおれに渡し、作業に戻った。

そのまま掘ること数十秒、ウサギ一匹ぶんの穴が開いていた、おれとサツキはそこにウサギを埋め、土をかぶせた。

「・・・そういえばお前ら行くあてあるのか？ないならおれがいい場所紹介するぞ」

おれとサチは視線を一瞬交わし・・・。

「「おねがいします」」

「りょーかい、ついてきな」

サツキは歩き出し、おれとサチはついていった、途中何匹か妖怪が出てきたが、サツキがすぐに倒したため、おれたちが何もすることなく、目的地に着いた。

「サツキ？ここは？」

「ああ、おれの知り合いの神様がいる神社」

「妖怪が神社に行ってもいいの？」

「・・・まあ大丈夫だろ、おゝい諏訪子ゝ！」

『はいはゝい』

返事があってしばらくすると中から女の子が出てきた。

「ひさしぶり、サツキ・・・その人たちは？」

「さっきあそこの森で襲われてた」

「！！ それは大変だったね、あそこの森はクモの妖怪がたくさんいるんだよ、噂ではなんか軍隊作ってるらしいし」

「それでだな、この二人をここに住ませてやってくれ」

おれとサチは頭を下げる。

「うん、いいよ、そのかわりいろいろやってもらうからね」

即答かよ・・・、まあよかったけど。

「この辺も最近は妖怪が多いな・・・昔は少なかったのにな」

「そうだねゝ、神奈子サボってるのかな？」

『サボってなんかないよ・・・、今さっき100匹ぐらい倒してきたところだよ』

後ろから胸の大きな女性が現れた、でかい。

「……………」

うおっ！……サチが汚い物を見るような目でおれを見ている。

「最近この辺で大きな反乱が起きそうだよ、諏訪子も手伝って欲しいね……」

「だってもうここは私の支配地じゃないし」

「まだ国を奪ったこと恨んでるのか！？」

「いや、べつに……しょうがないなあ……手伝ってあげるよ……」

「おい、諏訪子、それよりこの二人を部屋案内してやってよ、おれはなんか作るから」

「また、アイテム作成かい？」

「ああ、いい物が手に入ったからな、クモの妖怪の足はいい鞭ができるぞ」

「よくつくるねえ……、まあその二人、ついてきてよ」

おれとサチは諏訪子についていく。

「この部屋とこの部屋だったら使ってもいいよ、中が散らばってるのは気にしないでほしい」

「部屋を貸してくれるんならとても嬉しいよ、ありがとう」

「ありがとうございます」

おれとサチは礼を言い、部屋に入り、荷物を置いてきた。

「諏訪子どこだ？」

諏訪子を探しているサツキを発見、話しかけよう。

「サツキ、どうしたんだ？」

「ああ、武器作ったから使ってもらおうと思ったんだが・・・、神奈子と一緒にどっかいってるみたいだ」

「そっか、何を作ったんだ？」

「・・・今回は鞭じゃなくて剣を作ってみた、使うか？」

「・・・じゃあ、もらおうかな、装備は大事だからな！」

「・・・そうか、ほれ」

おれは剣を受け取って腰に装備した。

「なに言ってるのよ、強い妖怪は装備に頼らないものよ、自分の拳でやるべきだわ」

「・・・素手じゃ痛いだろう、まだ材料余ってるからなんか作ってやるよ」

「・・・ありがとう」

サツキの部屋

「散らばってるな」

「む、そのうち片付けるからいいんだよ」

「ところで何を作るの？」

「手に装着する武器、簡単に言えばメリケンサックを改良したものだ、10分でできる」

そういつてサツキはクモの足？を切り、形を整え始める。

「そう言えばお前たちを襲った妖怪についてなんだが・・・」

「どうしたんだ？」

「あいつになにかしたか？あの種類のクモの妖怪は縄張りに入るか危害を加えるかしない限り襲ってこないんだが・・・」

おれはおっさんに飛ばされたときに発生したとても強い光を思い出す、あれをクモの妖怪が危害を加えられてると判断されたのだろう

か？

「・・・いや、『おれたちは』なにもしてない」

「そうか・・・よし、できたぞ、サキさんどうぞ」

「ありがと、ありがたく受け取らせてもらうわ」

「まあ気にするな・・・ところで提案があるんだが・・・」

「「?」?」

「一緒にクモの妖怪を退治しないか？」

裏第三話 再会と偽名（後書き）

今さらですがこの話はカズマ（カズヤ）とサキ（サチ）がこの世界に來た時の話です、クモの妖怪たちを倒したら裏話は終了して、サツキと合流させる予定です。

第十六話 宿敵との再会、そして再戦（前書き）

どうも、葉っぱです。

最近色々あって更新が遅れております、できるだけ早くやってるので許してください。

第十六話 宿敵との再会、そして再戦

「今日は邪魔をする陰陽師も妖怪もない、今日こそ私の式になってもらうわ……！」

濃く、そして嫌な妖力が空気を満たす。

「……茜……今すぐ文を連れてここから逃げろ」

「でもあの妖怪かなり……」

「……ああ、正直言って勝てるか分からん、でもやるしかない……！」

「だったら私も……」

「文を守りながら戦うのか？はつきり言うがあいつを相手に何かを守りながら戦うのは無理だっ！」

おれは紫に超スピードの石を投げつける、すると紫の開いた空間に飲み込まれて消え……、おれの目の前に出てきた、おれはそれをキャッチし、茜を見る。

「あいつに攻撃をすればこれみたいに高確率で自信に帰ってくる、まだアイツは力を解放しちゃいない、逃げるなら今だ、早く行け」

「……」

「早く行け……！」

おれの本気の意味が伝わったのか茜は猛スピードでおれたちがさっき来た方角、つまり紫とは正反対の方向に飛んで行く。

おれは空き地を見つけ、紫を見て、首を振る。

空き地に向かって飛んでいくと紫もおとなしくついてきた。

おれと紫は地面に着地する、距離は10メートル、接近するには微妙な距離だ。

「・・・いいのかしら？あの天狗と一緒に戦わなくて」

「お前相手じゃあ何かを守りながら戦う自信はない、それに・・・」

「・・・？」

「全力で戦う時の邪魔になる」

「フフフフ、あの時の負けっぷりを忘れたのかしら？」

紫の妖力が膨れ上がっていく、あの時とは比べ物にならない大きさだ。

「・・・あのときのおれは酒で酔っていてね、あの時と同じと思っちゃいけないぜ？」

「あら、その言葉をこの戦いが終わったときに言えるのかしらっ！」

紫が扇子を振るい、風が吹く、おれはそれを円錐型のシールドを作

り、風を流す。

「・・・いちおうあの時とは違うみたいね、あのときは地面に剣を刺したはずだけれど」

「だから言っただろう、あの時とは違うってっ！」

おれは脚に妖力を集中させ、紫に向かって攻撃をする。

「くっ！」

バリバリバリ！パリーン！！

「うおっ！」

おれの体が弾かれる。

結界こそ破壊できたものの、そこから先につなげることが出来ない、これは厳しい。

「あなた攻撃力が高いわね・・・」

「・・・防御の才能は捨てて攻撃とスピードだけを鍛えたからな、こうでもしないとお前と互角に戦うことはできなかった」

「私はその逆をしたわけね」

なるほど、どおりである時より硬いわけだ。

「ウォーミングアップはここまでにしましよう、あなたも私もね」

紫の妖力が膨れ上がる、あの時よりも大きい。

「望むところだ・・・！」

おれも妖力を解放し、構える。

「おらっ！」

おれの手にある剣が紫の結界を切りつける。

「くっ！」

紫が結界の中から大小さまざまな妖力弾を打ち出してくる、鏡を使う暇はなさそうだ。

おれは後ろに下がり距離をとり、手榴弾を二つ作り出した。

「おらっ！これでも食らえ！」

そのうちの片方のピンを抜き、紫に投げつける。

「あら？武器をくれるのかしら？」

紫の空間に手榴弾が吸い込まれ、おれの後ろから飛び出してくる。

今だっ！！

おれは後ろの開いた空間が閉じる前に、もう一つの手榴弾を投げ込み、こっちに向かってきていた手榴弾をキャッチし、紫の前にある空間に向けて投げた。

ギン！

空中で金属同士がぶつかり合う音がし……。

ドゴオオオオオオ！！

「きゃっ！」

……。

「どうやらお前の空間はつながっているようだな、どちらかに何かをいれればもう片方から出てくる、そんなシステムだろう？」

「どうして気づいたのかしら？」

「……ただの勘かな」

「そんな理由で見破られたのね・・・」

ダッ！

おれは一気に近づき、切りつける。

ギイン！

「っ！小規模結界か！！」

「そのとおり、そして・・・『無限の超高速飛行体』」

なにやら技名を宣言したかと思うと・・・。

「ぐあっ！」

たくさんの妖力弾が飛んできた、それもただの妖力弾と違って、とても密度が高く、破壊力も大きい。

「・・・腕がやられたな・・・」

おれは腕を再生し、構える。

「今のはなんだ？八雲紫」

「教えるんでも？」

ですよね、修行の成果を簡単に教えるわけがないよね。

「・・・まあいいさ、こっちもいろいろ技を開発したことだし・・・
こっからは全力で行こうかな」

おれは開発した技を発動する。

「アクセルブレイカー！アクセルスピード！」

この状態は長くは続かない・・・長くて2時間だろう、短期決戦を
決める必要がある。

「行くぞ紫！」

「くっ！」

「どうした紫！さっきまでとは全然違うな！」

強化されたおれの攻撃は紫の結界を紙細工のようにどんどん破壊して
いく。

「二重結界!！」

バリバリ!

「おらぁ!」

バリン! ドスツ!

おれの拳は紫の体を貫通した、再生能力が低い紫にとっては致命傷だろう。

「・・・? 抜けない・・・?」

「フフフフ・・・引かかったわね・・・、私が何の策もなしにここまでやられると思うかしら?」

「・・・しまった・・・驕り過ぎたぜ・・・。

「さっきと違って今度は零距离からだけど・・・、あなたなら大丈夫よね」

紫が何かを取り出し、技を宣言する。

「『弹幕結界』」

おれと紫の周りに結界と妖力弾が現れる。

「まさか自分ごとやる気か!？」

「こうでもしないとあなたに確実に当てる事ができないからね・・・
ゲホッ」

紫が少し血を吐く、身体を貫いているのだから当然だろう。

「やりなさい」

紫が指示を出す、するとたくさんの妖力弾がおれめがけて飛んできた。

「しかたない！」

ズダダダダダダダ！！！！

紫SIDE

やったわ、サツキは避けきれずに当たったわ、今回はさっきと違って零距离からの攻撃、流石のサツキでも耐えられないだろう。

風が吹き、砂埃がどこかに飛んでいく、私はサツキの姿を確認するが……。

「どこにもいない!？」

私の身体には腕だけが残っていた、もしかするとさっきの攻撃で消滅してしまったのかもしれない。

「……惜しいことをしたわね……」

サツキはかなり強い妖怪だった、彼が私のことを手伝ってくれたら私の夢も早くかなえることが出来ただろう。

『そうだな、お前の攻撃を避けるのに腕一本切り落とすのは惜しいことをしたぜ』

声がしたほうを振り返ると、10メートルほど先に、片腕をなくしたサツキが立っていた。

「あら、生きてたのね」

「……あたりまえだ、さて続きをやろうか」

サツキは腕を再生して私と対峙した、この回復力には驚かされる。

・・・腕を切り落とすのはすこし浅はかだったな・・・マジックミラーだしときゃよかったぜ。

互いかなりの妖力を使っている、長期戦になればなるほど妖力の総量の少ないおれが不利になるだろう、でもだからといって焦ったらいけない、冷静さを失えばそこが弱点となる。

クラッ

おれの体が傾く、すこし出血し過ぎたようだ、腕を切り落としたのだから当然だろう、頭がボーッとする。

「あら？身体の調子が悪いようね」

紫はおれの体が少し傾くのを確認していたらしい、なんていう観察力だ、傾いていたのは1秒もなかったのに。

「まあ、好都合だね、早めに決着をつけないといけないし」

紫が空間に片手を入れ、おれの後ろから妖力弾を発射する、そしてもう片方の手からはおれが接近するのを防ぐように妖力弾がばら撒かれている。

「ちっ！嫌な戦い方だぜ！鏡の迷宮！アイスブラスター！」
ミラーワールド

おれは周りにたくさんの鏡を作り出し、そこに向かって氷を発射する、すると氷の量は二倍になった。

「いきなり数が増えた・・・？あなた何をしたの？」

「教えるわけねえだろ」

さっきのおかえしだ。

「くらえっ！」

おれはアイスブラスターを紫の周りを囲むように配置し、一気に発射する。

「二重結界！」

しかし、紫に作り出した二つの結界に阻まれ、一つ目を傷つけるぐらいしかできなかった、攻撃力が低いから当然か・・・。

「だったら接近だな！」

おれは紫が行動を始める前に接近し、片手剣に妖力を込め、切りつける。

ガッ！バリバリバリ・・・。

すると結界の途中で片手剣が止まってしまった。

「やばっ！」

おれは剣を引き抜こうとするが紫が結界を再生しているので、上に引き上げることが出来ない。

「食らいなさい！」

紫がどこからか傘を取り出し、おれに向かって攻撃をしてくる、これぐらいなら防げるだろう。

おれは妖力を込めた手を突き出しガードしようとするが・・・。

「残念、引かなかったわね」

と言って紫がさっきまでと同じようにカードを取り出し何かを宣言する。

「『八雲出傘』」

さっきまですこし古いかなと思うような傘はおれの剣と同じぐらいの力を得て、おれの手を、いや、おれの腕までを切り裂いていった。

「しまっ！」

紫が攻撃に転じ、次はその傘を突き出してくる。

ザクッ！

おれに体から鋭い音が鳴る、八雲の傘はおれの肩を貫いていた。

「ガッ！」

「フフフフ、私はあなたの反撃も予想してるけど……どうするかしら？」

紫はもう既に結界を作り出し、自分を守っている。

「……そりゃあ……攻撃しかないだろう」

「どうやって攻撃をあてるのかしら？」

おれは傘が刺さったままになっているにもかかわらず走るような感じで前に進み……。

「こうやってだよ！」

ガッ！ ザクツ！

鈍い音の後に鋭い音が響いた。

おれは結界に突き刺さったままになっている片手剣の柄を妖力を込めた手で殴り、結界内に押し込む、すると八雲はそれを予想していなかったらしく、その攻撃を避けることができなかった。

「うっ！」

紫は結界を解いて後ろに下がった。

今おれの身体には八雲の傘が、八雲の身体にはおれの片手剣が刺さ

っている、これを抜こうと下手に動けば接近されてやられるだろう、安全に抜くには相手が近寄れない状況を作るか、相手以上の早さで抜く必要がある。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに向かいあったまま数秒がたつ。

「・・・・・・・・そろそろ互いに本気で戦わないか？」

「・・・・・・・・あら、あなたは本気じゃないのかしら？」

「いや、妖力自体は本気だが戦闘技術は全てだしじゃない」

「私は技かしらね」

さて、互いに確認も済んだことだし・・・・・・・・そろそろあの技を使うか・
・。

「・・・・・・・・虹色の龍の力を我が身体に、出でよ我が力の象徴、虹色
の龍！レインボードラゴン！」

これは清明と戦ったあとに考え付いたものだ、清明は四匹の聖獣の力を自分に付加していた、ならばおれの龍だったらどうか？妖力が回復してからすぐに試してみた、結果から言うところ成功だった、おれの体には虹のようなオーラで包まれていた。

「『二重黒死蝶』」

そして紫の方は・・・背中から名前にもあるように蝶の羽のような形をした黒いものが出現していた、そして紫の体は黒いオーラが包んでいる。

技が発動すると、おれに刺さっていた八雲の傘はおれの体を包んでいるオーラで消滅し、紫に刺さっていたおれの片手剣は朽ちて、ロボロになって最後には消えてしまった。

「・・・強そうじゃないか」

「・・・あなたのそれはあの陰陽師の入れ知恵かしらね・・・！」

お互い様だろ、とはあえて言わなかった。

「さて・・・紫・・・」

「それじゃあサツキ・・・」

『『第二ラウンドを始めよう』』

第十六話 宿敵との再会、そして再戦（後書き）

どうも、サツキも紫も状態変化です、サツキの場合は力の象徴、紫の場合は死の象徴です、そのためサツキの場合は傘がオーラで潰されて分解されて塵に、紫の場合は朽ちて消えました。

・・・なんか中二っぽい・・・？

コメントくれるとうれしいです。

第十七話 全力の制限時間（前書き）

どうも、葉っぱです。すいません、なんかキャラのステータスとかいろいろやってたら本編が遅くなりました、すいません。

第十七話 全力の制限時間

「ここからが本番！さっきまでと同じと思うなよ！！」

おれの身体は虹色のオーラで包まれ、小型の龍のような姿になっていた。

この姿を維持できるのは最大30分・・・今の消耗状態なら15分ほどだろう、それまでに決着をつけなければ。

「それはこちらのセリフよ！」

空中でおれと紫の攻撃がぶつかり合う。

「イコールスピード！イコールブレイカー！ドラゴンブラスター！」

おれは消費妖力を抑えるために、アクセル系の妖術をやめ、強化された状態を維持するイコール系の妖術を使った。

「四重結界！！」

バリバリバリン！！

「チツ、三枚かよ」

さっきまでなら攻撃あてれたんだがなあ・・・。

「次はこっちね、『弾幕結界』」

紫を結界が包み、そこから攻撃が飛んでくる。

「ダークネスブレード！」

おれは漆黒の剣を二本作り出し、弾幕を避けながら、相手に接近する。

「シールドブレイカー！！」

おれは防御破壊の攻撃で紫の結界を破壊し、もう片方の剣で切りつける、が。

バギン！

「なっ・・・剣が折れた・・・？」

「『八雲巾傘』」

「うおっ」

剣が折れた事なんか気にしてる場合じゃねえ！

おれは結界を破壊した方の剣で防いで、後ろに下がりながら、折れた剣を投げつける、すると・・・。

パラパラパラ・・・

「触れている場所から剣が朽ちていった？」

さっき刺さっていた剣はなにか別の方法でやったと思っていたが、

あの黒いオーラが剣をダメにしているようだ。

「おらっ！」

おれは回転しながらオーラの尻尾を叩きつけ、紫が追撃するのを防ぐ（もちろん防御された）。

「そんな剣効かないわよ!!！」

おれは剣に虹色のオーラを纏わせ、紫と空中で打ち合う。

ガァン！キィン！

「ちっ！剣じゃダメだな」

剣じゃ自分と相手の間合いがほとんど一緒だから時々防御に回る必要がある、今の所受け流しているが、予想外の攻撃がきたら危険だ、相手の攻撃範囲外で自分の攻撃範囲内に入って自分がある程度使える武器は・・・。

「フレアランス!!！」

おれは炎の槍を作り出し、少しだけ離れ攻撃し始める、少し不慣れだがそこはスピードでカバーだ。

さっきと比べ、少しだけ優勢となり、攻撃が少しづつ通り始める。

キィン！ザシユ！ガァン！

「くっ!!一本じゃ厳しいわね・・・」

紫がもう一本傘を取り出し、おれは押され始めた。

手数が足りない・・・、何か方法は・・・。

おれは一瞬後ろに下がり・・・。

「フレイムショット!!」

おれは炎の槍の先端部分を飛ばし、相手を牽制した後・・・。

「フレイムアタック!!」

おれは身体全体を炎で包みながら紫に突進した。

「くらいなさい!『八雲紫の神隠し』!」

紫の周りに空間が開き、紫がその中に入る。

おれは攻撃を中断し、索敵モードに入ったおれに後ろから声が聞こえた、振り向こうとすると後ろから妖力弾で攻撃され、おれは地面に向かって落ちていく。

・・・どうやっておれの後ろに回った・・・? あいつはおれより数段遅いはずだ。

おれの中で考えがまとまる。

「まさかあの空間を連続使用!?!」

おれは妖力弾で下に落ちていたのを脱出し、紫の姿を探す。

『・・・こっちよ』

おれがそっちのほうを見ると、別の方向から攻撃が飛んできた。

「おっと」

おれはシールドを作り、受け流す。

『あら・・・それじゃあこれはどうかしらねー防御しきれるかしら？』

その声の後に全方位から妖力弾が飛んでくる。

「ディストーション！！」

妖力消費は多いが仕方ない、受け流せる数じゃない。

おれはこのまま亀の甲羅に入ったみたいに攻撃を受け続けるのではなく、この状況を打破する方法を考えていた。

妖力弾はどうやら発射される瞬間に空間が開いているようだ、となればその妖力弾を発射する紫がどこかに隠れている・・・？

おれは光の弾を出し、丁度よく近くに開いた空間に発射する。

「フラッシュ！」

カッ！

向こうか！場所が分かれば・・・。

おれはデイストーションを発動したまま光ったほうに向かって行く、すると空間に入ろうとする紫を見つけた。

「逃がすか！ソニックシュート！！」

おれは一瞬で風の弾を作り出し、紫にぶつけようとした。

「逃げられたか・・・」

しかし近くで時々妖力を感じることが出来る、近くにはいるようだ。

「普通に追いかけたら追いつけない・・・か」

おれは茜の言葉を思い出していた。

紫SIDE

フッフフ、これなら攻撃を食らわずに攻撃をあてれるわ・・・、外を見てみましょう・・・。

クパッ

空間を開くと目の前には・・・

「よお！」

サツキがいた。

私は大急ぎで空間を閉じ、心を落ち着ける。

たまたまいただけよ、そうに違いないわ。

私はさつきとは少し離れた場所に空間を開く、すると・・・。

「おそいなく、次はつかまえるよ？」

サツキがまた目の前にいた、どうなってんのよ！

「次は・・・次は大丈夫・・・」

私はそう自分にいい聞かせ、空間を開く。

ガッ！（頭を掴まれる音）

ポイツ（空間から投げ出される音）

「はははははは！互いに時間が無いんだ！小細工は無しにしても
らおう！！ソニックショット！！」

私は結界を出して防ぐ。

え？どうして・・・どうして私にこの状態でいられる時間がないと
わかる・・・？

おれは空間の歪みと、開くまでの妖力を感じて、そこに分身を作り
出す。

お、捕まえたようだ、おれも向かうか。

「はははははは！互いに時間が無いんだ！小細工は無しにしてもら
おう！ソニックショット！」

おれは剣を振り、風の刃を放つが紫に簡単に防がれる。

「・・・私の妖力はまだまだあるわよ？互いに時間が無いんじゃない？」

「・・・お前に時間があるんならあれだけの妖力弾をおれに打つことはないだろ？持久戦に持ち込めば勝てるんだからなそれに・・・背中の羽が徐々に小さくなっていったる」

おれの指摘に紫は驚いた顔をする。

「・・・そ・・・そんなこと」

「もう最初の大きさと比べて三分の一ぐらいだ、小さくするにはやりすぎだと思うが？」

まあ時間が無いのはおれも同じだ、オーラがどんどん薄くなってる。

「・・・」

「そろそろ全力と全力でぶつかり合おうじゃないか」

おれは攻撃の準備をしながら話し続ける。

「・・・そうね、あの技を見切られたんじゃないかももう攻撃に出るしかないわ」

おれは紫の返事を聞き、攻撃を発動する。

「虹色の破壊剣!!」
レインボーブレイド

「『深弾幕結界　―夢幻泡影―』!!!!」

おれの体を包んでいたオーラが消える、この技は龍のオーラの守りをほとんど攻撃にまわし、破壊する剣だ、どうやら紫もあの羽を消して結界に使っているらしい。

「おれの破壊剣に耐えられるものなら耐えてみる!!」

「あなたの攻撃を私が防いであげるわ!!」

この攻撃は一回きりの必殺剣・・・外したらダメだ・・・絶対に当てる!

おれはさっきよりも密度の高い弾幕を避けながら進んでいるが近づくほどに密度が高く、全方位に発射してるため回り込むことが出来ない。

チッ、妖力がどんどん減って行ってやがる・・・。

このままでは後数分でこの状態は終わるだろう、紫より先にそうなればおれの負けは確定する。

だとしたら・・・

「突っ込むしかねえよなあ!!!!」

おれは翼を羽ばたかせ、当たる事を気にせずにMAXのスピードで突っ込んだ。

紫SIDE

妖力が足りない・・・。

この攻撃をもうすこし早く発動してればこういうことにはならなかっただろう。

「あの攻撃・・・当たるわけにはいかない！」

私は弾幕の密度をどんどん上げる、ここでサツキの攻撃を防げば私の妖力はほとんど底をつく、このままサツキの妖力切れを待つしか・

『突っ込むしかねえよなあ！！！！』

！？

それだけなんとしても防がないといけないと思い、私はさらに弾幕の密度を上げる、しかしサツキは当たっても再生しながらどんどん突っ込んでくる、このままではじきに私のところまで辿り着くだろう、あと数秒の時間、私は弾幕を消し、サツキの攻撃に備えた。

よし、抜けた！これなら確実に当てれる！！残り時間は後わずか・
・この攻撃を当てれば・・・！

「いっけええええええええええ!!！」

おれは虹色に輝く剣を振り下ろす。

ビキビキビキ・・・
バリバリバリ・・・

おれの攻撃力と紫の防御力が均衡する、ここで後少しの衝撃を与えれば結界は壊れるだろう、おれの剣と紫の結界、どちらが上か・・・

このままじゃダメだ、妖力で後押しを・・・！

おれはわずかに残っている妖力を使い、妖術を発動する。

「ドラゴンブースト!!!」

空から龍の形をしたなにかが飛び出し、おれの剣にぶつかり、衝撃を与える。

バリオン！！！！

ピ
キ
・
・
・

紫の結界が壊れた、これならいける！

「くらくらええええええええええ！」

紫の羽はもう消えこの攻撃を当てる事は簡単だった、おれはそこで油断をしてしまった。

「……『永夜四重結界』！！」

これが剣を当てる一発目ならこの結界を簡単に破壊できただろう、そして・・・

バリーン！バギン！

油断をしてなければ剣にヒビが入っていた事に気付いただろう。

ヒューン……カッ！

虹色のオーラが消える、そしておれの全力の制限時間は切れる。

第十七話 全力の制限時間（後書き）

次回で決着をつける予定です、妖力が互いにもうほとんど底をついているので、すぐに終わります。

第十八話 勝負の決着と紫の夢（前書き）

どうも、葉っぱです、ただいま0…45分です、眠い・・・わけがない。

紫SIDE

妖力が尽き、もう空にいられる時間はほとんどない、さらに前からサツキが突っ込んでくる。

・・・私の負けね・・・。

私は目を瞑り、攻撃を見ないことにした、当てないでほしいと思っただが、今までの事を考えると当てるのが当然だろう、情けをかけるような相手じゃない。

・・・攻撃がこない・・・？

私はおそろおそろ目を開けると・・・。

剣を私の目の前で止めたサツキが空に浮かんでいた。

「・・・なにしてんの？」

「・・・妖力切れ」

私とサツキの身体が地面に落ちはじめた。

「・・・はあ！？なにやってんのよ！このままじゃ死ぬわよ！？」

「うるせえ！保険をかけなきゃ倒せたんだよ！！」

「保険ってなによ！！」

「下見ろやコラ!!」

私は下を見る、するとサツキの分身が二人、受け止める体制で準備をしていた。

あゝ妖力切れかゝ、・・・まあ妖力のこつても当てなかったけどな。

もうすぐ二人の分身が受け止めてくれるだろう。

ぼすっ

おれと紫は分身に抱えられ、地面まで降りていく。

おれと紫はその場に倒れた。

「紫・・・あのときお前に妖力が残ってたかどうか?」

「なに言ってるのよ？」

「最後だよ」

「そりゃあ………あなたはどうかなのよ」

「……当てないよ、おまえの妖力が残ってなかったし、残ってた
ら残ってたで弱めの攻撃で落としたな、それに……お前がおれを
狙う理由が分からねえからな」

「……」

「教えてくれ、なんでおれを式にしようとしたんだ？」

「……笑わないなら教えてあげるわ」

「笑わないから教えろ」

紫は恥ずかしそうな顔をしながらおれを見て、話し始めた。

「私には夢があるのよ」

「ふんふん、それはすごいね」

「まだ終わってないから最後まで聞きなさい」

「zzz……」

「教えないわよ？」

「起きてるよ？」

「……まあいいわ、私には夢があるの……妖怪と人間が共存できる世界を作るっていう夢がね……昔はみんなも私の夢のことをすごいって言うてくれたわ……でもそのうち……」

『まだそんなこと言ってたの？私あれ冗談かと思ってたんだけど？』

『夢見すぎだろ』

『すっげー笑えるわ、そんな本気で考えてんの？』

『いいかげん現実見なよ、人間と妖怪は一緒に住めないって、食べる食べられるの関係なんだから』

「……みんなは変わってしまったわ、私もそれを聞いて諦めようかと思った、けれど……」

「……都にいたおれを見てから諦めきれなくなったってか？」

紫に初めて狙われる前は都に行ってた、それを見て妖怪でも人間社

会に入れたのだから自分の夢もできるかもしれないと思ったのだから。

「だったらどうして式にしようと思ったんだ？」

これが一番の疑問点、さっきの話なら別におれを式にしなくてもいいと思うが……？

「……私を絶対に裏切らない味方がほしかった……昔は私も一緒に夢をかなえようとする友達がいたわ、でも……みんな最後には私のことをバカにしてどこかに行ってしまったわ……私は……昔のように一緒に目的をもつ友達と行動したかった、そして……友達と遊びたかった、でも……」

……。

「もう無理ね……あなたに手加減をされて負けるようじゃ夢をかなえるなんてできないわ」

……。

「その夢……おれも手伝ってやるよ」

「え？」

「おれは仲間や友達は絶対に裏切らない、そして夢も笑わない、おれも昔はそうだったからな」

おれは紫の話を聞いてると人間の頃を思い出していた。

小学校低学年時代

『サツキ、夢を書けとは言っただけだな・・・実現できそうな夢を書けよ・・・』

「でも先生、夢を書けって言ってたじゃないですか」

『まあ、確かにそうは言っただけだな、発明家になりたいっていうのはちょっとどうかとおもうぞ?』

先生に夢を否定された。

小学校中学年時代

『サツキ、おまえ友達と遊ぶ気ないのかよ』

「え?」

『だってお前いつも何かいじってるじゃんかよ、おれたち必要ない

じゃん』

『そうだよ、こいつなんかほっというてどこか行こうぜ』

「あ、ちよつと・・・・・・・・・・・・・・・・グス・・・・」

友達を全員失った。

小学校高学年時代

『あのひといつもなんかいじってるよね〜』

『きもちわる〜い』

「・・・・・・・・」

『うわっこっち見た』

おれはクラスから孤立した。

でも、中学校に入って・・・・。

「サツキは物作るのが得意なんだって？」

「・・・そうだけど・・・何？」

「発明家になりたいらしいけどさ、発明家に鳴ったらさ、おれの夢も手伝ってくれねえか？」

「私のもお願いするわ、まあカズヤと一緒にんだけどね」

「・・・どんな夢なの？」

「フッフッフ、良くぞ聞いてくれた！我が友よ！」

「いや、話したの初めてだよ！？」

「そんなことは些細な問題だ！」

「あなた些細なんて言葉使えるのね・・・知らなかったわ・・・」

「あゝ？それぐらい使えるつつうの！！！」

「・・・クス」

「お！笑ったな、よし今日から友達決定だかな！」

「・・・ああ！よろしく！おれはサツキ、まあお前らと同じ普通の中学生だ」

「おれの名前はカズヤ、よろしくう！！！」

「私の名前はサチ、これからよろしくね、まああなたがこいつと同じぐらいの頭の悪い中学生ではないと思うけどね」

「あゝ？」

「あははははははははは！！」

「」

夢を笑わない友達が二人できた、紫にはそんな友達がいたのだろうか？

おれは夢を笑わない、だから・・・。

「だから・・・おれが友達になってやる、そしてお前の夢に協力させてもらおう」

「・・・！・・・最初はみんなもそんなこと言ってたわ、あなたには分からないでしょ？友達に嫌われたことはないでしょう？」

「・・・そんなことはないさ、昔はおれも一回孤立してね、周りからは嫌われていたよ、でもな・・・おれの夢を笑わない友達ができるから変わった、クラスみんなに友達がおれの発明品を勝手に見

せてな、周りからの評価が変わった、みんなはおれのことをバカにすることも変な目で見ることもなくなった、夢を叶えたいなら・・・分かってくれる人が友達じゃないとダメなんだよ」

「・・・、本当にいいの？」

紫は涙を流しながらおれに聞いてきた。

「ああ、よろしく頼む、おれの名前はサツキ、能力は創造と消滅を使える能力だ」

「・・・私の名前は八雲紫、能力は境界を操る程度の能力よ」

「これから長くなると思うがよろしく」

おれは身体を少し回転させ、紫の方を向き、右手を差し出した、そして紫は・・・。

ガバッ！

おれに抱きついてきた。

「あの・・・ちよつとここは握手のなが「うわああああああん！
」れじゃ・・・ない・・・まあいいか・・・」

「うううううう・・・グス・・・ヒック・・・」

紫は泣き出した、おれは紫の頭を撫でながら泣き止むまで待つことにした。

数分後

紫から解放され、歩ける程度に妖力が回復したおれは、山に作りっぱなしになっている家に歩き始めた。

「ごめんなさい、とり乱してしまったわ」

「気にするな」

あと10分ぐらいでつくかな？

「あ、そういえば紫、ある程度の見通しは立っているのか？」

「いえ、全然？」

「……まあ詳しい話は明日からで、今日は休もう」

おれはドアを開け、家の中に入る。

「紫はあの部屋使ってくれ」

「ええ、ありがとう、休ませてもらうわ」

「おう、ちゃんと寝ろよ」

・・・おれの方もだけどな・・・。

「ええ、おやすみ」

「おやすみ」

パタン

紫が部屋に入り、おれはリビングに残される、そして・・・。

「さて、ゲームでもするかな・・・」

ゲームすることにした、睡眠？そんなものは分身に任せる！

おれは分身を二人作り出し、さっきの二人も合わせて四人にして、睡眠をとってもらうことにした。

第十八話 勝負の決着と紫の夢（後書き）

今回は短めでした、紫との決着は引き分けor無効試合という形で終わりました、納得がいなくてもこれでどうか・・・おねがいます。

さて、次回は・・・金曜までに出せるといいなあ・・・。

サツキ「まあがんばれよ」

紫「せっかく私とサツキが手を組んだのよ？早く更新するべきだと思うわ」

サツキ「いや、でも作者の都合が・・・」

紫「作者なんてどうでもいいわ、大切なのは読者よ！」

葉「っ！！！・・・がんばります！！」

サツキ「おまえって案外Sなんだな」

紫「なんのことやらさっぱりです」

第十九話 楽園創造の話し合い（前書き）

どうも、葉っぱです。

文章評価ありがとうございます！とても嬉しいです！これからもがんばります！！

第十九話 楽園創造の話し合い

数日後の朝

「あ．．．気持ちいいわ．．．」

「そうか．．．」

おれと紫は同じ部屋にいた。

「あ．．．そこそこ．．．」

「．．．そろそろ位置を変えないか？」

「．．．ダメよ．．．私はこのままがいいわ」

．．．。

「いいから変わってくれ」

「嫌だ」

「変わっ「嫌だ」．．．」

．．．。

「．．．さつさとマッサージ機返しやがれやあああああああああ
ああ！！！！！！！」

「これは私が使うのおおおおおおおおお!!!!!!」

「あゝあゝ!!」

「ちょっとぐらいいいでしょう!？」

「それで何時間使ってるか教えてやろう、二時間だ、そしておれが使ってたのは五分だ、わかったら返しなさい」

「そのような事実は認められてませ〜ん、っていうかもう一つ作れば？」

「うるせえ! さっさと返せ! 妖力が残ってないからもう作れないんだよ!!」

まあ妖力はある程度回復しているが、それを身体の回復にまわしているため回復が終わる予定の午後まではほとんど使えない。

「・・・仕方ないわねえ・・・はいどうぞ」

紫はマッサージ機から移動し、ソファーに座った。

「あゝ気持ち〜」

おれはマッサージ機に座り、身体の疲れを取りながら、今後についての話をすることにした。

「で・・・いまのところ今後の見通しがないわけだが・・・」

「ええ、そうよ」

「ノープランはだめだろ、今日中になんか考えよう」

「えゝめんどくさいなゝ」

「・・・まさか今まで少しも考えてなかったのか？」

「ええ、そうだけど・・・何？」

「・・・いいから考えるぞ」

「・・・はゝい」

おれはフワイトボードを用意し、準備を始めた。

「さて、まず最初は、どんなのを作るかだが・・・どんなのが作りたいんだ？」

「そうねゝ、どんな妖怪も来たがるような世界を作りたいわね・・・」

なるほど、どんな妖怪も来たがるってことはおれにとっても魅力的なんだな・・・。

「どんな妖怪もか・・・人間は？」

「まあそれはその辺りから・・・」

「その辺りから？」

「拉致すればいいでしょ」

「犯罪ダメ絶対、お前の能力なら神隠しだから、神隠しになるから」

「じゃあどうすればいいのよ？」

「・・・そうだな・・・、人がたくさんいる場所に作れはどうだ？
まあ多すぎるのもあれだが」

「・・・それはいいわね、そうしましょう」

よし、作る場所を決めるといふ第一の関門突破だな。

「さて、次にだが」

「えーまだするのぉ？」

「うるせえ、このペースで足りるかどうかもわからねえんだ、休憩
時間は無しだ、ほしかったらどんどん考えを出せ」

「わかったわ」キリッ

「どんだけ休憩がほしいんだコラ」

「十時間ぐらい？」

いや、おれは時間を聞いたんじゃないんだけど・・・。

「単位間違ってるだろ」

「え？十日もいいの！？」

「なんで増やすほうにいくんだ！減らせ！十分だよ！」

「ええ！？少なすぎるわよ！」

しばらく話しあった結果、休憩は三十分に落ち着いた。

「さて・・・議題に戻るぞ」

「・・・わかったわ」

「まずは協力者が必要だ、おれは全力で手伝うがどう考えても手が足りない、妖怪と人間、双方の協力者が必要だ」

「妖怪だけじゃないの？」

「ああ、妖怪は人間を食べる、そして人間はそれを退治する、そんな関係なんだ」

「何が言いたいのか？」

「たとえば・・・ひとつの部屋に空腹状態のライオンがいる、しかし食料はない、どうなると思う？」

「・・・共食い？」

「そうだ、妖怪だけをひとつの世界に閉じ込めると妖怪は妖怪同士で潰しあうことになる・・・そして最後には残った一人が飢えて死ぬだろうな」

「たくさん妖怪を連れてくれば」

「ただ最後が来るのが少し遅くなるだけだ、だから増える妖怪を退治できる人間がいて、そして妖怪が食べ続けても大丈夫だけの人間が必要なんだ」

「・・・それもそうね、それじゃあそっちは私が探しておくわ、あなたは妖怪の協力者をお願い」

「・・・探すのは楽なんだけどなあ・・・」

「りょーかい、じゃあ休憩時間だ、意外にこの議題は早く終わったから一時間していいぞ」

「やった！」

紫は嬉しそうにどこかに行ったようだ。

「・・・おれも休憩しますかね・・・」

おれは仮眠をとることにした、あとでお菓子を食べながら紫と話す

ことにしよう。

五十分後、おれは目を覚ました。

「・・・紫のやつ探さないとな・・・」

目を覚ますとまずは紫を探すことにした。

「・・・妖力隠してて普通じゃ見つからんな・・・索敵モードに入るか・・・」

おれは目を瞑り、意識を集中する。

「・・・見つけた、なんであんな遠くに・・・」

紫はどうやら都の近くにいるようだ、迎えに行つてやるか、15分ほどでつくだろう。

能力で戻ってきて、すれ違いになるのもあれなので、書置きをして出かけることにした。

紫SIDE

妖怪を退治できる人間なら心当たりがあるのよね、まあ危険なんだけどね。

と言うわけで都に来ました。

「・・・会いたくないんだけどねえ・・・！」

交渉に失敗すると死ぬ可能性がある、妖力が回復してきているとはいえ、まだ五割ほど、妖力を身体の回復にまわしていたため完全に戻ってはいない、戦闘になれば勝率はほぼゼロだろう。

「・・・協力してくれるかしら・・・？」

私は妖力を一瞬だけ解放すると、陰陽師がワラワラと湧いて出てきた、これぐらいなら大丈夫、でも私が探しているのはもっと大物だ、こいつらに構っている暇はない。

「『八雲紫の神隠し』」

私は空間をたくさん開き、陰陽師の後頭部辺りに開き、硬質化した小規模妖力弾を発射し、気絶させた。

「少し移動しましょう」

ここじゃ交渉場所にしては風景が悪い、もっといい場所に行こう。

「ここかしらね・・・」

私は見晴らしのいい場所に座席を用意し、椅子に座って待つことにした。

数分後

・・・来たわね。

ドガガガガガガ!!

光の小さな弾がたくさん飛んできた、結界を張っというてよかったわ。

「ようこそ、そこに座ってちょうだい」

「その必要はないわよ」

「・・・話すことなんかないわ、滅してもいいかしら？」

最強の陰陽師安部清明とその弟子の芦屋道満が現れた。

「あらあら、物騒なことを言うのね、若い頃から怒ってばかりいると苦労するわよ」

私はなめられないようにしつつ、戦闘を避けるために全力を注ぎはじめた。

「何のつもりかしら？」

「私は話し合いに來ただけよ、戦おうなんて微塵も思っていないわ」

「・・・あちらに陰陽師がたくさん倒れてましたよ？」

「殺してないわ、氣絶させただけよ」

私は間を取り繕うため、空間を開き、仮眠中のサツキの家から食べ物と飲み物を取り出した。

「まあ、食事でもどうぞ、お菓子もあるわよ」

すべてサツキのものだが、気にすることはないだろう。

「・・・」

「・・・」

「団子をどうぞ」

「「いただきま・・・しまった!」!」」

なに、この子たち、かわいい。

「まあほしいのなら座ってちょうだい」

清明と道満は椅子をチェックした後座った。

「で・・・ムグムグ・・・話しはなんだ？」

「ムグムグ・・・内容にもありますが・・・最後まで聞いてあげますよ」

「・・・怒るな・・・怒っちゃだめだ、私だって寝転がりながら食べたりするし。」

「ええ、二人には協力してほしいことがあるの」

「「断る」」

即答か・・・、まあ妖怪の話を聞くような人間はいないわよね、か
といって今から帰るわけにはいかない、プライドがうんぬんとかじ
やなくて、逃げようという素振りを見せたら確実に殺られる・・・！

「最後まで聞いてくれてもいいと思うんだけどねえ」

「おまえのいう事は聞かない」

「・・・あなたは自分の立場が分かってるの？」

「もちろんよ、戦っても勝てる気がしないからこうして交渉してるわけよ」

しかたない・・・これはこっちにも協力者がいることを言って、協力してくれる人がいるほど魅力ある話ということを教えよう。

「この話には協力者もいるのよ？」

「へえ、あなたに協力するなんてどんな物好きなんでしょうね」

「あなたたちも知ってるわよ」

その瞬間二人の目が私を敵と見る目で睨んできた。

「まさかとは思うがその協力者は・・・！」

「・・・さつさと教えてください・・・！」

「サツキよ」

「「殺す！！」」

私はとっさにその場から離れる、するとその一瞬後にさっきまで座っていた場所に光の刃が降り注ぎ、椅子を粉々に砕いていた。

「あれは防げる気がしないわ・・・！」

あんなの食らったらやられる、こんなときにサツキの技術力がうらやましく感じる。

「・・・出でよ青龍！！」

「零式封魔砲！！」

清明が私を牽制し、道満が自身の強化を行う、いい連携だ。

「・・・本気で戦わないとねえ・・・!!」

逃げることはできない、そして勝つこともできない、ならば私にできるのは少しでも長く戦うことだ。

サツキ、早く来て・・・。

「・・・妖力の乱れ、そして破壊音・・・紫誰かと戦ってる・・・」
「？」

・・・おれは走っていく（迷子中）のをやめ空を飛んで行くことにした、一分ほどでつくだろう。

清明SIDE

「むっ新手か！ってサツキか」

「・・・なんのようですか？」

「サツキ！きてくれたのね！」

サツキは紫を無視し、私たちに話しかける。

「何してんの？」

「妖怪退治」

「・・・それは分かってるんだ、分かってるんだけど・・・」

「おまえはアイツの式か？」

これは確かめておかないといけない。

「いや、違うけど？」

「なぜあいつに協力する？」

「友達だからかな、何日か前になった」

「なるほど、数日前に感じた大きな妖力はお前たちだったのか」

数日前の夜中に二つの大きな妖力が現れたが、そこは妖怪の山であることと、潰しあってるような妖力の減りかただった。

「・・・つぶし合ってたから干渉しませんでした」

「ま、わかったところでこの戦いはしゅうりよ「零式封魔砲」アガスッ!!」

「なぜ私たちを呼ばなかった」

「・・・呼んでたらあいつ封印するか殺すかしただろ？」

「あたりまえだ」

「おれはあいつを倒したかったんだよ」

「なるほど、わからん」

なんの違いがあるんだ？

「殺さずに勝負の決着をつけたかった」

「・・・お前の言いたいことはよくわかった」

「おお！わかってくれたか!!」

私はサツキの両肩に手をのせる。

「ちょ、清明、なにしてんのさ・・・」

サツキの顔が少しだけ赤くなるが無視することにした。

「寝てろ」

ゴンッ！

「あがつ!!」

私はサツキに頭突き（青龍強化状態）をするとサツキはのた打ち回った、結構軽くやったつもりなのだな。

「八雲、話は聞いてやろう」

地面で転がっているとそんな声が聞こえてきた、どうやら交渉は成功したようだ。

「・・・あら、ありがとう、話させてもらおうかしらね」

紫は清明と道満に自分はどんな人間も妖怪も来なくなるような夢のような世界をつくりたいこと、そしてそれには人が足りないということ話を話し始めた。

「私の計画には今の所サツキだけが協力してくれてるわ、でももっと協力者が必要なの、あなたたちに頼めないかしら？」

「私の計画じゃなくて計画立てたのはおれだ、おまえはおれにやらせてただろう」

紫はなるほどぐらいしか言っていない気がする。

「で、私たちに何をしてほしいんだ？」

「あなたたちクラスの実力を持つ人間を育ててほしい」

「つまり陰陽術を教えろと」

「簡単に言えばそうなるわね」

「・・・無理ですね、時間が圧倒的に足りません」

「まだ若いが私たちクラスとなると普通なら数百年かかるぞ？」

「じゃあお前らはどうやって化け物レベルになったんだよ」

化け物という言葉に紫の体が反応したが、無視する事にした。

「・・・私たちは天才だったからな、最初に妖怪を倒したのが二歳

だったし」

二歳で・・・おれが妖怪で二歳の時は逃げ回ってたぞ？

「ねえ、あなたたち・・・人間をやめる気はないかしら？」

「「は？」」

「なに言ってるんだ？紫」

「私の能力で二人を妖怪にする、あなたたちの許可さえあればすぐにするわ、今日はもう帰るから考えと言ってちょうだい」

紫がおれの手を引き、あるきだす。

ズルズルズル

「紫、おれは都に用事があるんだが？」

ピタッ

「何の用事かしら？」

「妖怪の協力者に心当たりがあるからそれを」

「そう、じゃあ先に帰ってるわ」

紫は空間を開き、入っていった、するとその一瞬後に遠くに紫の妖力を感じた。

「さて・・・おれも行くか」

おれは都の定食屋に向かった。

定食KAZUSAKI

「おい、おっちゃんいるか？」

「おっちゃんはいませんよ〜カズマはいますけどね」

いるじゃないか、というツツコミはしないことにした。

「おっちゃん、サキさんも連れてきてくれ」

「・・・告白？」

「ちげえよ！！おまえも話しを聞くんだよ！！」

「おれもか！？」

「そうだから連れてきてくれ」

「へいへい、難しい話は無しでお願いしますよっと、おいしいサキ〜来てくれ〜!」

「はいは〜い、あら、久しぶりね」

「ああ、さて、カズマ、サキ、話にはいるぞ」

「おれの名前知ってるじゃないか」

「それほど重要な話なんでしょ」

分かってくれて何よりだ。

「さて、内容についてだが・・・かくかくしかじか」

「うんちゃらかんたら〜」

「ほにゃららら〜」

説明中・・・・・・・・

「というわけだ、協力してくれ」

「するのは構わんが・・・なにすればいいんだ?」

「まあそれはそのときがきたら呼ぶよ」

「大体どれぐらい？」

「数百年後」

「・・・別に今言わなくてもよくなかったか？」

「・・・。」

「そう言われればそうだな・・・ま、今日は帰りますよっと」

「おう、またな」

「さようなら、サツキ」

「じゃなカズ・・・おっちゃん、サキさん」

「おいコラアアアアア！！名前で呼べや！！！！！！」

「ははははははは！サラバだー！！」

おれはドアを開けると一目散に逃げ出した、あいつら能力優秀だから喧嘩は面倒だ。

「行ったか・・・サキ・・・いや、サチ、戦いの準備をしておこう」

「？　なんで戦い？」

「夢を叶えようとすれば必ず邪魔者が現れるんだよ」

この店を作るとき陰陽師に襲われたのを思い出した。

「・・・それもそうね・・・カズヤ」

第十九話 楽園創造の話し合い（後書き）

カズヤのいった言葉の意味するものは近々分かるかもしれませんが・
・（今の所いつにするか未定）

サツキ「紫、おれの団子がないんだが」

紫「おいしくいただきました」

ガッ

葉「ちよつとサツキさん！？おれに怒るのはちよつとおかしいですよね！？」

サツキ「気にするな、お前がこのストーリーにしたんだ、なにも問題はない」

葉「メタ発言キター————（。△。）————！！！！ぎゃああああああああ！！！！」

第二十話 話し合いの後日（前書き）

こんにちは、葉っぱです。夏風邪で倒れました、まだすこしだるいですがこれからがんばります、下に質問がありますので答えてくれると嬉しいです。

第二十話 話し合いの後日

あの話し合いから数日がたったある日、清明と道満の使いがきた、ちなみにもう家は都の端の方に移している。

「こんにちは、サツキ、八雲紫さん、私は森近と言う家のものです、えー、八雲さん以後お見知りおきを」

「おー森近か、あんたの店にはよく世話になっている」

「こちらこそ儲かっておりますよ、・・・そろそろ名前で呼んでくれませんかね？」

森近はアイテム作成の材料を分けてくれる、優しい店主だ。

「私が八雲紫、都に住んでる人間なら名前ぐらいは聞いたことあるでしょう」

「ええ、もちろんですとも」

「ま、それより本題に入ってくれ」

おれは話をいったん打ちきり、別の話題へと変えた。

「それもそうですね、では本題に入らせていただきます、清明さまと道満さまの返事は屋敷で話したいとのことですよ」

「了解、ありがたいな、ほれ、これはいつものお礼だよ、霧雨つてやつにやるんだろ？」

おれは発明品の杖を手渡した、これ一本で攻撃から防御に回復までなんでもサポートしてくれる魔法の杖だ、おれの妖力が練りこんであるため、ちょっとしたことじゃびくともしない。

「お、ありがとうございます、これからもよろしく頼むよ」

「ああ、こちらこそよろしく」

と言って、森近は帰っていった。

「・・・なあ、紫、拒否されたらどうすんだ？」

「・・・まだ考えてないわ、彼女たち以外は今のところ考えてない」

「・・・さて、どうなるもんかねえ・・・」

清明の屋敷

「おーい！清明！来たぞー！」

おれと紫は屋敷の前に来ていた、でっかい屋敷だぜ。

「いないのかしら？」

「んなわけないだろ、使いが来たんだし」

ギギイイイイイ・・・

しばらく話していると扉が開き、清明と道満が出てきた。

「よく来てくれた、入ってくれ」

「おう、お邪魔します」

「・・・こちらです、ついてきてください」

八雲が入ろうとすると清明が呼び止める。

「それから八雲はこれをつけるんだ」

「なんで？」

「陰陽師に攻撃されたいのなら構わんぞ？この屋敷には有名な陰陽師がたくさんいるからな」

と言った後清明は何個か名前を上げると紫はおとなしく受け取った。

「あら〜？紫は怖いのかな〜ん？」

そしておれはそれをからかうことにした。

「・・・ここであの日の決着をつけましょうか？今度は持久戦でじ

わじわとなぶり殺しにするけど？」

「ごめんなさい」

おれは即土下座した、あの時は持久戦でこなかったからギリギリ引き分けに持ち込めたが、持久戦ならほぼ確実に負ける、おれは妖力の総量が少ないんだ。

「お前たち！そんなところにいないでさっさとついてこい」

「へいへい」

おれと紫は清明と道満の後ろをついていき、客間に入っていった。

「さて、私たちの答えから行こうか」

おお、早速か？

「・・・今回の話についてですが条件次第では飲んでもいいです」

「その条件は何かしら？」

金品なら余裕、おれの技についてならまあ教えてもいい、できれば戦闘技術は避けたい。

「私たちが妖怪になることで妖怪たちの動きが活発化すると思う、それを抑えてほしい」

・・・全然違ったぜ。

「・・・今までは私たちがいたため都に妖怪が近づくことがありませんでした、私たち二人がいなくなることでもいままで私たちを恐れて潜んでいた妖怪たちが活発化すると思うんです」

・・・なるほど。

「その条件飲むわ、ほかには？」

「ない、それだけだ」「・・・ありません」

「家族とかには言ったのか・・・？」

「もう言った、どうせ長男が家を継ぐんだし私がいてもいなくても大して変わらない」

「道満は？」

「・・・もともと陰陽師になるのも反対してましたしもう親子の縁は切れてるか」と

「・・・そうか、じゃあ紫、任せたぞ」

「……はあ！？なに言ってるのよ！これはあなたの仕事でしょう！？」

「え？だってお前さっきの条件を率先して受けたじゃないか！」

「あなたに任せようと思っただけよ！」

「あゝあゝ！？」

「うるさいぞ、お前たち！」

あ、しまった。

「私はお前たち二人に条件を飲んでもらおうと思ったんだ、私たち二人の穴を埋めれるのはお前たちだけしかないだろう！」

「……私たちは二人に頼んだんですよ？」

……たしかに、そのへんの妖怪じゃこいつらには全く敵わない、しかしおれ達ならこいつらとも普通に戦える、それを考えての話なのだろう。

「……すまなかった、おれが間違っていたようだ、さっきの条件おれは受けよう」

「……私も受けるわ」

「それはよかった、それじゃあやっちゃってくれ」

「・・・おねがいます」

清明と道満が目を瞑り、紫に妖怪にされるのを待っている。

「・・・あなたたちは本当にいいのかしら？」

「もちろんだ、一番の問題も解決されたしな」

「・・・早くやっちゃってください」

「わかったわ」

紫がそう言ったのと同時に、たくさんの魔法陣のようなものが現れては消え、それを繰り返している、数秒後に一瞬光ったかと思うと魔法陣が消え、二人が倒れていた。

「・・・ふう、終わったわ」

紫はたくさんの妖力を消費したのか、とても疲れた顔をしている。

「大丈夫か？」

おれは紫の手を触り妖力を流しこむ、たいした量はないが、少しはマシなはずだ。

「ありがと、もういいわ」

おれは手を離し、清明と道満のほうを見る。

「さて、どうかしらお二人さん？」

清明と道満が起き上がり、身体を確かめている。

「・・・？　なんかこう、もっと化け物のような姿になっていると思っただが？」

「・・・以外ですね、まだ人間なんじゃないかと思うほどにいつもと変わりませんね」

「ええ、あなたたち陰陽師と妖怪の違いなんてあんまりないのよ、寿命と身体の再生能力を除けば私やサツキとほとんど変わらないわ」

「ほう、そうなのか」

「まあ人間の弱点の耐久力が増えたのはいいことだと思うよ、おれは」

「・・・今度からは守らずにどんどん戦えますね！」

「・・・！　ヤバイヤバイヤバイ！！！！このことを考えてなかったああああ！！！！修行の名目でやられ・・・殺される！！」

「サツキさん、あの時の勝負の続きをお願いできま」

ダッ（おれがダッシュで逃げる…アクセルスピード付き）

クパッ（目の前の空間が開く音）

入ってしまったと思った瞬間にはすぐに外に出て・・・。

「うおっ!!」

ドンッ!

清明にぶつかった。

「……サツキィ……全速力でぶつかるなんていい度胸じゃないか……」

なにこの子!? ほんとに14歳(数え年)か!? 元の世界じゃもう暴走族レベルじゃん!! 怖い!

「……さて、この前の続きを始めましょう、サツキさん」

おれは両腕を掴まれ引きずられていく。

「紫何とかしろ!」

おれが紫にそう言うとき紫はジェスチャーで何かを伝えてきた。

(無理なので頑張ってください、やりすぎてゴメンネ!)

「裏切り者オオオオオ!!」

おれはその日何度目わからない地獄を見た。

「さて、ストレス発散兼妖怪の身体になれる修行もできたし、ここまでにするか」

「……おれ、よく生きてたと思うよ……」

あれから半日、屋敷から抜け出して都に出たおれは清明と道満に襲撃され続けていた。

「……いい汗かきましたね」

「身体中が痛い……、なんか背中に刺さってる……」

おれは背中に手を伸ばし、背中についていた光の刃を抜く。

「それにしてもサツキ、妖怪というのもいいもんだな、疲れが取れ易い」

「妖力があればな、そしておれは妖力が残ってない、分けてくれな
いか？」

「やりかたがわからん」

「じゃあ八雲呼んできてくれ」

クパッ

「呼ばれて飛び出てジャジャジャ〜ん、八雲紫登場！」

「・・・めえ、よくもやってくれたな・・・」

「あなたよく生きてたわね、私なら三回くらい死んでるわよ？」

逃げることに全力を注いだからな、それでも死にかけだ。

「とりあえず妖力分けてくれね？死にそうだ」

さつきから身体が再生する気配がない、相当ヤバイ状態だろう。

「私ももう残ってないわよ」

「・・・仕方ない、試作品のあれを使うしか・・・！」

おれは空間を取り出しあるものを取り出す。

「テッテレー！　これの名前は妖力丸！説明しよう、妖力丸とは自分の妖力を固形化して保存しているものだ、これを飲めば妖力が回復する、副作用が少しあるがそれは今の状態に比べればなんてことなゴハア！！」

おれは血を吹いて倒れる、冗談抜きで死にかけているぞこれ、なんか痛み感じなくなってきたもん、ってか痛みどころか地面の感覚もないし・・・あ、意識がなくなってる・・・。

「うおっ！」

おれは目が覚める、周りを見ると・・・。

「・・・なんでおっさんがいるんだ」「神じゃ」

「ユキちゃん久しぶり！」

「あ！おにいちゃんだ！久しぶり！」

「どうだ？おっさんには祝ってもらえたか？」

「うん！」

「それはよかったよかった」

おれはおっさんに向きなおる。

「おぬしが意識を失ってることだしおぬしに少し忠告をしようと思
つての」

「ほう、その忠告ってなんだい？」

おっさんからの忠告は初めてだな・・・。

「可能な限り負の感情を表に出すな」

「・・・？」

意味が分からん。

「いい方が悪かったの、あまり激怒しないようにしろ」

「なんでだ？」

「その方がいいからじゃ、さて話は終了じゃ」

おっさんがそう言ったかと思うと周りが光り・・・、ベッドに寝かされていた。

紫SIDE

「副作用が少しあるが今の状態に比べればなんてことなゴハァー!!」
と、サツキが言ったと思うと、血をはいて倒れていた。

「八雲、これは相当ヤバいんじゃないだろうか？」

「あら、奇遇ね、私もそう思っていたところよ・・・」

「・・・とりあえず治療をしましょう！」

私は妖力をサツキに流しこみ、自然回復力をあげた。

「妖力は無いんじゃないのか？」

「あんなの嘘に決まってるでしょう、それよりサツキがさっき出してた丸いやつ貸してちょうだい」

道満がそれを拾いあげ私に渡す。

ガリッ！　ゴクン

私はそれを噛み碎き飲み込んだ、するとサツキから妖力を受け取ったときと同じように私の妖力が増えた。

「治癒結界」

「・・・治癒仙」

私と道満が回復の妖術を使う。

「私は出来ないよ！スイマセンでした！！」

「別に期待してないわよ、私たちだけで充分よ」

サツキの傷は徐々に塞がり、顔色もよくなって来ている。

「・・・清明も覚えるべきだと思う、派手じゃないとかそんなの覚えたくない理由にならないよ？」

「うっ、ううう、わかったよ・・・」

サツキの傷が随分塞がったようだサツキの家に運ぶことにしよう。

「あ、道満と清明はそっち持ってちようだい」

私は両足を、道満と清明が手を一本ずつもち、空間に投げ入れた。

だれがベッドに寝かしてくれたんだ・・・？

おれは立ち上がる、そしてある事に気付いた。

「・・・傷が塞がっている・・・？」

おそらくあの三人のうち誰かがやったのだろうが、妖力が感じれない、もう随分たっているようだ。

ガチャ

「起きたようだな」

ダッ！

ガッ！

「逃げるな！」

「嫌だ！死にたくない！！」

「別に殺しはせんから抵抗するな！」

ドタバタ ギャー

数分後

「・・・なにしてるんですか、早く来てください」

部屋に入ってきた道満に捕まった。

「あゝ死ぬのかな」

「だから殺さんと言うとるのに」

少し歩き、別の部屋に入ると紫が寝ていた。

「・・・何してんだ？」

「身体中が痛い」

「・・・まさかあれ飲んだのか・・・！？

「まさかとは思うが」

「飲んだわよ？」

「アホ！！あれは飲むと数日間筋肉痛になるんだよ！！ってか副作用うんぬん言ってただろ！！」

「あなたを治療しようと思って飲んだのよ！？」

「・・・まあ、話を戻そう、妖力丸を飲むと筋肉痛になるんだ」

「ええ、現在進行形で痛みが走っているわ」

「ちなみにそれはおれの場合だ、ふつう他人の妖力を取り込むのはダメなんだぞ？」

「どういうこと？ なんとか妖力受け取ったと思うけど？」

「妖怪同士の受け渡しはいいんだ、ただ物と妖怪の受け渡しは大変危険でな・・・治るまで何ヶ月かかるんじゃないかね？」

妖怪同士の受け渡しの場合妖力の波長が自動・・・ってか無意識的に自分に合うように変換されるものだ。

「！何とかしてよ！！」

「無理、おれは匙を投げました」

「サツキ、どうにかならんのか？数日ほどこいつの痛みで叫ぶ声がうっとおしいんだ」

「・・・睡眠不足です」

あれ？おれって数日意識なかったの？

「・・・命蓮寺ならなんとかあると思う、あそこにあるものを使えばいいと思う」

本編にこそまだ書きちゃいないが裏で何度か行ったことが・・・はっ！おれは一体何を？

「だったら早く持ってきてよ・・・」

「無理、持ち出し禁止だからお前も来い」

「・・・え？」

聞き逃したのかよ・・・、もう一回言ってやるか。

「・・・持ち出し禁止だからお前も来い」

「いや、聞き逃したとかそういうわけじゃないのよ、この身体で行くの？」

「まあがんばれ、おれを間接的に半殺しにした罰だと思え、さあ、行くぞ！」

おれは紫の手を掴み引っ張りあげる。

「痛だだだだだ!!」

「清明!道満!行ってくるぜ!」

「おう、早めに戻れよ」

「・・・できれば二日ぐらいでお願いします」

おれは部屋の窓から飛び出し翼を広げる、すこし違和感を感じたが気のせいだろう。

「さあ、行くぞ!」

第二十話 話し合いの後日（後書き）

質問があります、できれば答えてくれると嬉しいです。

1. 登場人物紹介は消したほうがいいと思う？

1 さっさと無くすべき

2 無くさないで良い

3 オリキャラのみ書く

2. キャラのステータス（強さのランク付け）を作るべきかな？

1 さっさと作れよ

2 いらん

3 そっち（うp主）にまかせる

答えてくれると嬉しいです。

第二十一話 八雲の治療、命蓮寺へ・・・（前書き）

どうも、葉っぱです。

前回の質問に今のところ解答がついてないのでこのままなにもなかった場合は自分が適当にやっときます。

第二十一話 八雲の治療、命蓮寺へ・・・

家を出てから数時間後、日射しが厳しくなってきたため木陰で休憩することにする。

「身体中が痛いわ・・・」

「ところで今思ったんだがよ、妖力丸をおれに飲ませるって言う方は考え付かなかったのか？ ほら、粉々に砕いて流しこむとか」

「・・・・・・（。ー。）」

いま気付いたんかい・・・。

「ま、無理させてひどくするわけにもいかないしな、もともとおれの責任だし」

アイテムの説明なんてしなけりゃよかったなあ・・・。

「サツキ・・・なにか柔らかい敷物ない？」

「おう、ちょっと待ってろ」

おれは能力を発動し、ベッドを作り出し紫に放った。

クパッ！ ズズズズズ・・・ ゴトン

ベッドは空間に飲み込まれ紫のすぐ隣に落ちてきた、そしてそれに紫が乗り、寝転がる。

「なあ、紫おまえと戦ったときになんかアイテム使ってたけどあれなんだ？」

「ああ、妖力を封じたカードに術式を書き込んだ簡単なものよ」

目の前に空間が開きカードが数枚落ちてくる、おれはそれを拾いカードを見る。

「よく分からん術式が書いてあるな・・・」

カードにはなんか幼児が初めて書いた文字のようなものが書いてあった。

「え？ この術式が分からないの？」

・・・。

「全く分からん」

「そう・・・、じゃあ今度気が向いた時に教えてあげるわ」

「おう、そのときはよろしく頼むぜ」

さて、すこし曇って日射しも弱くなったしそろそろ行くか・・・。

「ねえ、サツキ」

「ん？ なんだ？」

「このベッドを担いで飛んで行くことはできないの？」

盲点でした・・・・・・・・。

清明SIDE

「・・・そう言えば清明、長男に子供が生まれたらしいね」

「そういえばそうだったな、忘れてたよ」

「・・・もう、お祝いしないとだめだよ、名前はなんていうの？」

「確か・・・」

私は記憶の中に埋もれている名前を引っ張り出す。

「安部泰成だったかな」

「いやゝ何かに乗せて飛んでいくなんて発想はなかったね、うん」

「はぁ・・・あなたってこんなところではバカね」

イラッ

ユツサユツサ

おれはベッドを揺らすことにした、そうすると勿論・・・。

「痛だだだだ！ごめん！許して！」

おれは数秒続けた後揺らすのを止める。

「ほら、もうすぐつくぞ」

「ん？ 結構いい場所ね」

「ああ、ここの景色はいいな」

空から見ると綺麗な川と山があり、ちらほらと動物を見かける。

スタッ

「痛っ！」

「あ、スマン、衝撃は一応最小限に止めたんだが・・・」

「ええ、大丈夫よ」

おれは紫を抱きかかえ能力でベッドを消す。

「・・・」

「どうした紫」

「なんでもないわよっ！」

まさか痛かったのだろうか？それなら悪いことをした。

「あなたこの人とは知り合いなの？」

「まあ一応な」

コンコン

「すいませーん！」

しばらく待つと扉が開きネズミの妖怪が出てくる。

「はいはい、あ、サツキさんじゃないですか、そちらのかたは？」

おれが抱きかかえている紫を指差す。

「治療してほしいんだ、アイツに会わせてくれ」

「はいはい、分かりました、ついてきてください」

おれと紫は寺に入り、案内をされる、実際のところおれは知ってるから知らないんだけどな・・・、見ない顔^紫がいるから案内をしているんだろう。

「はじめまして、え〜と」

「八雲紫よ」

「八雲紫さん、わたしはナズーリンと言うものです、妖怪としては弱い部類ですが私は素早いですよ〜」

ナズーリンがおれが抱きかかえている紫と会話しながら前を歩いている。

「え〜と、今日は何の治療で？」

「ああ、それなら・・・」

おれはちらりと紫を見る、すると紫は・・・『問題ない』というアイコンタクトを送ってきた。

「おれが作成したアイテムを使って身体を壊したんだ」

「え!?! サツキさんのアイテムを使っただけですか!?!」

「オイコラ、それどういう意味だ」

おれは身体を動かそうとし、やめた。

「ベ・・・別に何でもありませんよ、ほ・・・ほら、つきましたよ、どうぞ」

誤魔化されたか・・・今度じっくりとお話をしよう。

おれと紫は中に入りおれはアイツの姿を探す。

「このまえば天井にいたんだけどな・・・」

「・・・どこの忍者よ」

「忍者じゃないぞ、でてきてくれ〜!」

ドンッ!!

突然床の畳からなにかが飛び出してくる、紫はおれが抱きかかえている状態で身構えた。

「呼ばれて登場!」

「・・・」 「・・・」

「無言はやめてもらえるかな?」

「へいへい、聖、こいつの治療頼む、あの巻物貸してやってよ」

「ええ!? またですか!」

数百年前この辺りで修行した際何度もあの巻物で治療してもらった記憶がある。

「ほら、妖力やるからさ」

「でもあなたの妖力は少ないでしょう？」

よし、かかった！！

「ふっふっふ、おれは低いけれどもね・・・こいつはたくさんあるんだぞ！」

（紫、妖力解放だ）

（・・・！？ 了解）

おれにいきなりささやかれ少し驚いたようだが一瞬後にはおれとは比べ物にならないほど大きな妖力が出現する。

「な・・・なんですかこの妖力は！」

「治療したらこの妖力が分けてもらえるだろうになあ・・・まあ、嫌みないだし自然に治るのを待つかなっ」と

「治療しましょう！困っている人・・・じゃない妖怪を見たら治すしかありませんよね！」

「え？でもさっきは嫌がってたような気がするんだけどなあ」

「なにいつてるんですか、幻覚でも見たんですか？」

「きっとそうですね、それじゃあお願いしますよ」

（まるで詐欺師ね）

（何のことやらわからんなあ）

もらえるであろう妖力を想像して目を輝かせる聖をおいて、おれと紫はこそそと話していた。

「さて、治療をするわけだが・・・何年かかる？」

「え！？日じゃなくて年単位なの！？」

「うーん、詳しい検査をしてないのでなんともいえませんが最低でも10年かと」

「え？完全無視！？」

うるさい紫は置いて話を進めることにする。

「じゃあ検査頼むよ、おれはしばらく出歩いてるから」

「はーい」

パタン

おれが部屋を出て数秒後、紫の悲鳴が聞こえた。

「さて、ナズーリン追い掛け回すか・・・」

おれは索敵能力を発動するが寺にいるからか妖力を消しているのか知らないがまったく感じる事が出来ない。

「チッ、あきらめるか・・・」

追い掛け回すのをあきらめ部屋に戻る事にした。

「おゝい、終わったかゝ？」

『終わりましたよ』

「りょーかい」

おれはその場で数秒待ち、扉を開けて入る、すると予想通り紫の攻撃が飛んできた。

「キャンセル！」

おれは妖力弾を打ち消した。

「で、検査はどうだった？」

「随分ひどいね、20年〜25年かかるよ、たぶんサツキのアイテムを使った事意外にかなりの負担を身体に抱え込んでる」

おれの頭にある光景がよぎる、黒い羽を生やした紫の姿だ、あれを習得するのに身体にかなりの負担をかけたのだろう、そしておれがその状態の紫に大打撃を与えた・・・。

・・・まさかおれと戦ったときか・・・？

「そうか・・・、ごめん・・・紫」

「・・・あなたが気にすることじゃないわよ、あの技を使ったのは私の勝手だし」

ガシッ

おれの手が掴まれる。

「そして」

おれの腕に力が込められる。

「痛ッ」

「あなたも身体に大きな負担を抱え込んでいる、あなたたち最近全力で、いや、身体の限界を超えた行動をしなかった？」

おそらくあの状態だろう。

「なに言ってるんだ？おれはなんとも痛ッ！」

「あなたが来たときにはもう疑ってた、でもさっき腕を握ったときに確信した、私はあんまり力を入れてないわ」

・・・。

「見破られたか、やっぱりすごいな」

「まあナズーリンが教えてくれたんだけどね、あなたの身体の調子をね」

「・・・」

索敵できなかったのはそれほど身体にかかっている負担が大きかったからだろうか？

「まあとりあえず二人ともしばらくここにいなさい、この寺にいますだけで回復できるわ」

おれと紫は二十年ほどここで世話になることになった、もちろん清明たちにはおれの分身を送ってそのことを教えた。

最初の数年はまあ修行をしてたわけだが・・・聖に止められたためやめる事にした、いまは武器の作製をしているところだ。

現在 5 年目

「えーとこれをこうして」

「ねえ、なに作ってるのよ」

「武器・・・いや、ここはこうしたほうが」

「・・・なんで作ってるのよ」

「ん、まあいろいろあってね」

ポイツ

「あ！なんで投げ捨てるんだよ」

「ちゃんと相手してよ！暇じゃない！」

「・・・暇だったら最初からそう言えよ・・・」

「なんか言うのはプライドがあれだったから」

「いや、もう言ってるからな」

「それよりなんで作ってるの？」

「手・・・おい待て、その作りかけの槍でおれをどうするつもりだ」

「別にあなたの血をみてみたいわけじゃないわよ？」

紫は笑みを浮かべながらこっちを見ている。

「だ・・・だよな、その槍をおろしてもらえませんかね？」

「・・・無理」
ニコッ

「ですよね、（ニコッ）」

ダッ！

「あ！こら、待ちなさい！」

「嫌だ！止まったら刺される！」

「刺さないから止まりなさい……！」

[illegible]

数十分後

おれと紫は正座をしていた、なぜかって？　それは……。

「聞いてるんですかサツキさん！」

「聞いてます」

聖に見つかってコテンパンにやられました・・・。

「あなたたちは身体を治す気がないんですか？」

「いえ、あります」

「あります」

「だったらなんで暴れてるんですか!!」

「こいつが全面的に悪い！」

「なによ！あなたが詳しく教えないからでしょ！」

「おまえが槍持って追いかけて来なけりゃ教えたよ！」

「私はあなたが

「両成敗です」

おれと紫の頭に聖の拳骨が落ちた、意識が飛びかけた。

「ぐおおおおおおおおおお」

「ああああああああああ」

「これに懲りて今度からは暴れないように、いいですね？」

「・・・あい」

「・・・わかったわ」

数年後

現在 13 年目

「よし、全種類の武器ができた・・・」

「で、結局なんで作ってたのよ？」

「ああ、お前と戦ったときに気付いたんだがおれの武器で剣以外は妖力の塊なんだよ」

「・・・？」

「だから、脆いわけよ、本体がないから」

「ああ、なるほど！」

「おまえもう少し勉強しろ、世界ひとつ作るんだから支配者としてもう少しな・・・うん」

「はいはい、わかったわよ、勉強しますよ」

12年後

現在 25 年目

おれと紫の身体の蓄積したダメージをしつかりと抜いてくれた聖に妖力を渡すことにする、なんだか妖力で若さを保っているらしい。

「・・・よし、できたよ」

「こっちもできたわ」

「ありがとうございますいます結構消費したから助かりました、数十年分はありそうですね・・・」

その中の十分の一程しかおれのは入ってないだろう。

「ま、こっちも助かったよ、ありがとな」

「妖力を渡すだけでこんなにしてくれるのね、いいところだわ」

「ほかの方には秘密にしてくださいよ？」

「もちろんだ」「ええ、わかったわ」

おれと紫は寺から出て空を飛び都に帰ることにする、家に帰ると清明と道満が重大な話を持ちかけてきた。

「九尾の妖怪が現れた、被害は見てのとおり都の東は全滅だ」

ついに現れたか・・・。

第二十一話 八雲の治療、命蓮寺へ・・・（後書き）

次回予告 九尾VS妖怪四人＋陰陽師にしようかと思ってます、でも戦う前になんかいろいろしたいなあ・・・。

第三十二話 九尾の出現（前書き）

どうも、葉っぱです。

登場人物紹介は消すことにしました、下の方にまとめて置くことにしようと思います。

第二十二話 九尾の出現

「九尾か・・・」

「うむ、戦闘能力自体は私たちと同じぐらいだ、しかし幻術と周りの兵士が邪魔でな」

味方が邪魔になるとは・・・戦闘能力が高い故の悩みだな。

「仕方ない、参加するか・・・、おい紫」

「なによ？」

「なについて話聞いてただろ、九尾と戦うんだよ」

「はあああああああ！？ なに言ってんのよ、私今まで生きてきて九尾なんかと戦ったことないわよ！？」

フツ、それはおれもだ、戦うどころか五本ぐらいのやつまでしか見たことしかないな。

「・・・だから戦闘能力は同じぐらいですよ？ 幻術をすべて突破するかスイッチしていいいいことですよ」

スイッチとはMMOとかで仲間と狩りをする際に大技で相手の隙を作りほかの仲間と入れ替わることだ。

・・・そういえばゲーム作ってたけどあれどうなってるかなあ・・・。

おれは頭につけてモンハンに三人でダイブしたやつで作っていたゲームを思い出した。

「ま、スイッチは無理だな」

「・・・どうしてですか？」

「火力が足りない、それにおもしろくないだろ」

おれと清明の場合は力より技術と手数だし、紫は防御特化で攻撃力がおれと同程度か少し高いくらいだ、そのためスイッチができる火力があるのは道満だけだ。

「む、そう言えばそうだな、確実にできるのは道満だけだな」

「ってかサツキ、おもしろくないって何よ？」

「はあ、紫はこの二十年ほど暴れてなかったのを覚えてないのか？」
おれが指摘すると紫はいま思いだしたとばかりに身体を奮わせた。

「それもそうね・・・！」

「おう！今回は暴れるぞ！」

「「（・・・）最優先は都を守ることなんだけどな・・・」」

二人の声は聞こえなかったことにした。

「さて、作戦会議だ、清明と道満は一度手合わせしてるんだろう？」

「ああ」「・・・はい」

「相手のタイプはどうだった？」

パワータイプかテクニックタイプかスピードタイプか・・・これだけで作戦の立てかたが随分変わる。

「・・・おそらくバランスタイプです、九尾のため全体的に能力が高いバランスタイプです」

ゲームで言う万能タイプだな・・・。

「幻術もなかなかのレベルだ、あれを破るのに数秒かった」

おそらく周りの兵士の幻術を解いたからだろう、でなければ清明がそんなに時間がかかるわけがない。

「なるほど・・・厄介だな」

「バランスのどこが厄介なのよ？」

「紫・・・おまえは何も分かってないのな・・・」

「・・・まったくです」

「少しは戦術の勉強をするべきだぞ」

グサツ　という音が紫から聞こえたような気がするほどに・・・

「そこまで言わなくてもいいじゃない・・・」

紫が凹んだ。

「ま、説明してやる、バランスタイプって言うത്『中途半端』という印象を持ちがちだがそれは大きなまちが・・・どうした、紫」

なんだか図星をつかれたと言わんばかりに紫が沈んでいる。

「・・・なんでもないわ・・・、続けてちょうだい・・・」

「・・・ああ、分かった、まあ大きな間違いなんだ」

視界の端で清明と道満が頷いている。

「まあおまえの中途半端っていう考えも一応間違いではないんだ、ただな、中途半端ってことはほとんどの戦術に『ある程度』は対応

できるということだ」

「・・・！」

紫はおれの言いたいことがやっと分かったようだ、もうすこし勉強してほしいものだ。

「それに幻術を組み合わせるから厄介なのね？」

「・・・まあその考えに至る時間を考えなければ合格点は上げられますね」

「ああ、完全に時間切れだがな、サツキがいった『厄介だな』という言葉を聞いて数秒でその考えに行き着いてほしいものだ」

「ま、分かってもらえて何よりだ、せめて九尾のバランスがどこかに傾いてくれてりゃよかったんだがなあ・・・」

いい戦術が見つからないな・・・。

「・・・簡単じゃないの」

「「「え!?!」」」

おれたち三人は紫の方を見た。

「自分たちで傾ければいいじゃない、道満と私ををぶつければ簡単に傾いてくれるわ」

「どうやって傾けるんだ？」

清明が紫に質問をする、それはおれも気になっていたことだ。

「教えてもいいけど報酬がほしいわ、九尾を私の式にさせてくれな
いかしら？」

「・・・まあ従えてくれるのなら文句はありませんね」

「ありがとう」

紫は満足という笑みを浮かべ戦術をおれたちに伝授してくれた。

「おまえって頭いいのか悪いのか分からんな・・・」

「見かけによらないということか？」

「・・・いつもこれぐらい頭が切れればいいのですがね・・・」

「なによ！そんな目で私を見ないでよ！」

この作戦ならいけるかもな・・・、あとは準備するだけだ。

次の日

おれたちは軍隊に交渉をしにきていた。

「だからあんた等がいると邪魔なんだよ」

將軍らしき男とおれは話している。

『貴様ら妖怪が我らを侮辱するか！ まさかお前らあの狐とグルだな！』

まわりから兵士の声があがる。

「なんでそうなるんだよ、おれはお前らが幻術にかかっていると邪魔になるってことを伝えてるだけだ」

『ぐぬぬぬぬ！ 我らが戦力外だとも言いたいのか！』

あゝ面倒になって来たな・・・わざわざ遠回しに言ってやってたのに・・・。

「・・・そうですね、よくできました、100点満点です」

『貴様ア!!』

將軍が剣で切りつけてきたのでこちらの実力を少し見せることにしよう。

「ウェポンブレイク」

おれは手を軽くふり剣の平にぶつける。

ギン!

という鈍い音が響く。

クルクルクルクル・・・サクッ!

「・・・・九尾の実力はおれ達一人一人と同じぐらいだ、この状態のおれに傷ひとつつけないで敵うとも思っているのか?」

將軍らしき男は信じられないとも言うように剣を見つめている。

「ま、分かってくれたら二日後の戦いには顔を出さないでくれ、邪魔どころか足手まといだ」

足を引っ張る味方は敵よりも性質が悪い・・・という事を聞いたことがある、いまのこいつらにぴったりだ。

『しかし』

「ま、明日戦うってんなら止めはしないけどな」

おれたちはそれだけを言って次の場所に向かった。

「……にしてもすっかり昼だな」

「あいつらの説得に時間がかかったからな」

「……軍隊はプライドが高いので扱いにくいです……」

「サツキ、今はどこに向かってるの？」

紫がそう聞いてきたのでおれはそれに答える。

「定食屋」

「「「……え？」」」

おれは扉を開け中にはいった。

「おっちゃんいるか？」

「カズマとサキしかおりませんよ」この店におっちゃんは一人居ないよ」

後ろから三人が入ってくる。

「おいサツキ、この店になんかあるのか？」

「・・・ただの定食屋みたいですけど・・・」

「ん？この店開いてるのは妖怪だぞ？」

「いや、『ただの』定食屋に突っ込んでほしいんじゃない、この店に來た理由だ」

「飯を食いに」

「はぁ!？」

「というのは冗談で協力要請」

「サツキがおれ達にお願いするのは二回目だな」

「あの時はクモだったな、あん時は助かったよ」

「気にするな、何をすればいい？」

「簡単なことだ、九尾を二日後の昼まで足止めしといてくれればいい・・・あ、もしかしたら軍隊が来るかもしれないからそのときは別にいいよ」

「ああ、わかった」

後ろからバカを見るような視線がおれに襲いかかる。

「なんだお前ら、おれは九尾を倒せなんて一言も言っていないだろ、足止めだよ、足止め」

「じゃあおれは行ってくるよ、サキく手伝ってくれ！」

それだけ言ってカズマが外に出るとサキの妖力をそとに感じた。

「さて、おれはなに食べるか決めとこ」

「おいサツキ、足止めをどうやってしてもらうんだ？あいつらはそんなに強いのか？」

遠くで一瞬だけ強い妖力を感じた。

「んく、強いのと能力が優秀だ」

「・・・どうやって足止めするんですか？」

「それはだな・・・」

ガラガラ

「終わったぞく、報酬はサキに武器作ってやってくれ」

「りょーかい、あ、C定食お願い」

「ほいほい」

「サツキ！さっきの話の続きは！？」

「あゝ、本人達にしてもらってくれ」

カズマは料理を作っているためサキに三人があつまる。

「できたぞ」

「ありがとうございます」

「いやゝあいつは戦うと面倒だぞ？ 幻術がウザったい」

「ああ、だからその準備で足止めを頼んだんだ」

「二日後でよかったんだよな？」

「ああ、ちゃんと二日後の未来に飛ばしてくれてたら問題ない」

モグモグ・・・ゴクン

「それにしてもお前らの能力は一人でも厄介なのに二人揃ったら凶悪だな」

「ほっとけ」

カズマは苦笑した。

「たしかお前が時間に干渉できるんだっけ？」

「おう、自分の時間をもどして妖力消費前の状態に戻せる、他人には少ししか干渉できないけどな」

「サキが空間に干渉できるから二人揃うと時空に干渉できる凶悪な能力だぜ、おれの能力なんかゴミみたいなもんだぞ？」

これで分かっただろう、足止めⅡ未来に飛ばしてもらおうである、二人で未来に飛ばしてもらった、それだけだ。

「ま、またなんかあったら来てくれよ」

「おう、ごちそうさん」

おれはお金を払い店を出ようとするが・・・。

「おいサツキ、あいつ等を置いていくな」

カズマに捕まった、あいつ等の世話を押し付けようと思ったのに・・・。

「ところでカズマ、サキとはやっちゃったのか？」

カズマの顔が赤くなる。

「バツ、なに言っただよ急によ・・・！？　　そんなことあるわきやなあふいあが」

訳わからんこと言ってるが今がチャンスだ。

よし、今のうちに逃げよう！

おれは外に逃げ出し家に帰った。

後で紫たちに怒られました。

次の日

昼ごろ、おれたちはすこし開けた場所にきていた。

「さて・・・捕縛陣の用意をするぞ」

「封魔陣だ！」

「切れるなよ清明・・・間違えただけだろ？」

「・・・今日六回目ですけど？」

「はははは、気にするな」

「いや、サツキは気にするべきだと思うぞ？」

おれは地面に魔法陣を描き始める、ここに九尾を追い込めば紫も簡単に式にできるだろう。

「そういえば清明、おまえ達ぐらいの力を持つ人間を育てるのはしているのか？」

「うむ、山奥の神社にいた巫女だ、たしか博麗って名乗ってた・・・博麗の一族を私たちの分身が育て上げている」

あ、お前たちが直接いるわけじゃないのな・・・。

「・・・最初から私たちがいても何の役にも立たないのでまずは分身を・・・ということですよ」

「あ、なるほど」

最初から強すぎる指導者は意味ないもんな。

「それよりもサツキも妖力を練りこんでくれ・・・この大規模封魔陣はたくさんの種類の妖力とか魔力とかがあるほど強力なんだ」

「へいへい・・・でも明日の影響がない程度にしかないからな」

「それだけで十分だ」

おれは目を閉じ封魔陣に手を当て集中し妖力を流しはじめる、一瞬手の周りに集まっていたがすぐに全体にまわっていった。

「…………できた、おれはここまでだな」

全体の6割ほどの妖力を流しこんだ、今日は早めに寝よう。

「こっちも完成した、あとは隠蔽妖術をかけるだけだ」

清明と道満がなにかブツブツ言ったかと思うと、封魔陣が視認できなくなり、そこに何かがあるという感覚もなくなった、すごい能力だおれの索敵能力でやっと感じる事が出来るぐらいだからほとんどわからんだろう。

「…………さ、八雲さんと合流しましょう」

今さらになるが紫には戦場の下見に行ってもらっている。

「そうだな、早めに合流しておこう」

おれたちは戦場、もとい合流地点に向かった。

「あら、終わったのね、意外に早かったじゃない」

「うむ、あとはあそこに追い込むだけだ、それで力が弱まるから式にしな」

「ありがと、それにしても協力的ね、なぜかしら？」

「私は信頼できる相手には協力するからな」

それはつまり信頼できない相手には力を貸さないということだろう。

「ま、もう夕方だし帰りながら戦場視察の結果を聞かせてもらおう」

「わかったわ」

おれたちはおれの家に帰り始めた。

「なるほど、隠れるような場所は無しか・・・」

まあもともと作戦に入れるわけじゃないから問題ない。

「・・・ですがそれは劣勢になっても相手の攻撃をやり過ごせないということですね・・・」

「もともとそのつもりはないさ、だがもしも最悪のケースになったらおれがなんとかしてやる」

「一人で何とかしようとするな、仲間をもうすこし頼るべきだぞ」

清明がおれを非難する。

「ん、それもそうだな、すまない」

「分かればいい、だが今はそんなことより勝ちに行くための作戦を考えよう」

「そうだな」

おれたちはそれから一時間ほど作戦会議をした、作戦はある程度でき、あとはその場その場で臨機応変に対応しようということになった。

「さて、寝るか」

清明と道満は帰り、おれの家にはおれと紫だけになっていた。

「そうね、寝ましょう」

「・・・・・・」

「なによ？」

「お前って自分の家とかないの？」

「あるわよ？」

「・・・・・・」

「だったらなんでおれの家に？」

あの能力なら家に帰るのも楽なはずなのに・・・・。

「うーん、何となくかな、おやすみ」

「あ、ちょっと・・・・寝やがった・・・・」

呼び止める前に部屋に入り寝てしまっていた、流石に部屋に入って

起こすのもあれなので・・・。

「まあいいか・・・」

おれはそうつぶやき自分の部屋にはいり、睡眠を始めた。

次の日

「さて、みんな集まったな」

「ええ」「うむ」「・・・はい」

「作戦の大まかなところの再確認だ、まずは紫と道満が九尾のパワーバランスを崩す、そしておれが技を誘導して九尾にぶつける、そして清明が全力攻撃、そして捕縛陣に誘導だ」

「封魔陣だ、いい加減覚えろ」

十二時まであと五分、おれと清明は少しはなれたところに移動し隠

れる。

「じゃあ二人とも任せたぞ」

「・・・もちろんです」

「任せときなさい」

おれと清明はおれが作った透明マントを羽織って隠れる、そして数分後・・・。

グニャアアアアア！

空間が歪み、時間がずれて・・・。

『グオアアアアアアアアアアア！！！』

戦いが始まる。

第二十二話 九尾の出現（後書き）

感想くれると嬉しいです、ありがとうございました。

あ、それから東方創滅記の続編というか・・・なんというか・・・、
東方は関係なくなりますがなんか作ろうと思ってます、こっちがある程度進んだら作ろうかな〜と思ってたりします。

第二十三話 VS 九尾 そして裏は動き出す（前書き）

どうも、葉っぱです。

この前納豆食べたら賞味期限が切れてました O T L
お腹を壊すことはなかったのよかったです。

第二十三話 VS 九尾 そして裏は動き出す

「はじまったか・・・」

「しかし私たちの出番はまだあとだ」

清明は大技のための術式を組んでいる、太陽を利用するらしい。

「さて・・・GOODタイミングはまだかな・・・」

紫SIDE

九尾の尻尾が唸りをあげて向かってくる。

「二重結界!!」

ゴスッ!

鈍い音が周りに響く。

「・・・ライトブラスト!!」

私の後ろから道満が光の衝撃を放つ。

『カッ!!』

九尾が炎弾を打ち出してくるが・・・。

ヒュボッ!

道満の衝撃に飲み込まれ炎と光の衝撃となって九尾を襲う。

ゴォ!!

『クギヤアアアアアアアア!!』

さっきから数回こんなことを繰り返している・・・。

「・・・なかなか攻撃方法を変えてきませんね・・・」

「今は耐えるのよ、じゃないとサツキのほうが最大限に力を発揮できない」

その後数回繰り返すと九尾の妖力の質が変わった。

「道満、気付いたかしら?」

「・・・もちろんです、尻尾が太くなってきました」

『クオオオオオオオオ』

「さて・・・私はここから本気出さないとね・・・」

ズンッ！

九尾が地面を蹴り私に接近してくる、そして手を振り上げた。

「四重結界！」

私は二重では無理だと判断し結界を四つ展開した。

ズ・・・ン！ バリバリバリ！

「道満！お願い！」

「・・・——準備できました！ 青龍！」

道満の近くに魔法陣が展開されそこから龍が飛び出してくる、それは九尾に巻きつき締め上げる。

「無双封撃！！」「弾幕結界！！」

二人の大技が炸裂し、九尾が吹っ飛んでいく。

まだよ・・・サツキ・・・。

『グオウルルルルル・・・』

砂煙に隠れて見えないが九尾の声が聞こえた。

結界は三枚割られ、四枚目はかろうじて形を保っていただけだった、手で押すだけで崩れたためあと一瞬技が遅れたら九尾の爪が私を切り裂いていただろう。

「動きがない・・・？」

「・・・まだ生きています、気を抜かないでおきましょう」

私は相手が動くのを待った。

『紫！幻術だ！結界をはれ！！』

そんな声が聞こえた気がした。

私はとっさに目の前に結界を作り後ろに下がった、その一瞬後に結界が潰れる、しかし何もいない・・・。

トンッ

道満に肩を叩かれ幻術から覚める。

「・・・やっと起きましたね・・・叩くまで起きないなんてどれだけ幻術が強いのでしょうか・・・あの時は本気じゃなかった・・・？」

どうやら私は幻術にかかっていたようだ、私が全く気付かないレベルの幻術を戦いの最中にかけるなんて・・・。

「いまさっきまで幻術に気がつかなかったわ、ありがとう」

「・・・大丈夫です、次から声に気をつけてください」

『グルルルルル!』

九尾が少し離れたところで警戒しながらこちらを見ている。

「声？」

「・・・ええ、声が聞こえたでしょう？」

「ええ、砂煙が巻き上がったときに」

「っ！ 青龍!! 玄武!!」

道満が腕に二つのオーラを集め九尾の攻撃をガードする。

「八雲出傘!!」

私はオーラを傘に集め九尾の腕を殴りつける。

『グアッ!?!』

九尾は後ろに下がり再び距離をとった。

「・・・助かりました」

「私は防御専門だったのに防御しなかったからね」

『カアアアアアア!?!』

その声と共に九尾の口に何かが集まり始める。

それは超高密度の妖力弾だった、色が黒っぽく見える。

「あれに当たったらヤバイわよ!?!」

正直黒死蝶状態でも耐えられる気がしない。

「サツキさん! 技を借ります……青龍ドラゴンブレスの殺息!?!」

そしてほぼ同時に九尾の炎弾が発射される。

ゴォ!!

そしてそれは数秒均衡する、そして破れたのは……道満のほうだった、炎弾が殺息ブレスを切り裂きこっちに向かってくる。

「……一瞬じゃ力が……!」

『よくやった!! マジックリード!!!!』

炎弾が私たちに当たる直前に緩やかなカーブを描く。

そしてそれは九尾に向かって飛んでいく。

『クォ!? グアアアアアアアアアアア!?!?!!!』

「おれ登場!」

九尾が作り出した炎弾をおれは見ていた、あれは紫でも防ぎきれないだろう……。

『青龍の殺息!』

道満が呼び出した青龍が青い炎を吐き出す、それは数秒炎弾を止めたが……。

「力が足りてない……!」

発射準備からばっちりした九尾と一瞬だけしか力を溜めてない道満とでは威力が違う。

おれは炎弾の発射ルートにマジックリードを発動し九尾にぶつけようとした。

「なっ! 貫かれた!?!」

スピードが速すぎるのか炎弾は曲がってくれない。

「私が行こう！チャージは不充分だがなんとかなる！」

「行くな！おれが何とかする！」

おれは紫たちの方に走り出した。

「だがばっちりだぜ道満！マジックリード！！」

今度こそスピードの落ちた炎弾は緩やかなカーブを描き九尾に突き刺さった。

「おれ登場！」

「おそいわよ！」

「・・・後少しでやられてましたよ・・・」

「ここからは任せろ！紫は封魔陣に、道満は援護頼む！」

「了解！」

道満が後ろから拡散弾^{ブラスター}を発射する。

「ダークネスブレード！」

おれは漆黒の剣を二本作り、空を飛び回りながら九尾に無数の傷を作り出す。

『グオアッ！！』

九尾が巨大な炎弾を打ち出してくる、・・・しかし密度が足りない！

「ソニックブラスト！！」

おれは剣を二本同時に数回振り高威力の衝撃波を打ち出す。

シュッ！

炎弾に一瞬だけ空間ができる、おれはそこを通り抜け・・・。

「オールデリート！！」

両方の剣を頭に叩きつけた。

『グオオオオオオウ！！』

九尾が大きくのぞける。

「フラッシュ！！」

カッ！！

おれは大技で隙を作り出す。

「清明！！」

「もう準備はできている！！」

清明は九尾の上に飛びあがり魔法陣を複数個直列に展開し・・・。

「サンライトブレイカー!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!!

『グオアアアアアアアアアア!!!!』

よしっ!後は誘導するだけだ。

「清明!道満!こっちだ!」

おれはあらかじめ用意していたルートに二人と一匹を誘導し始める。

「清明、道満、残り妖力は?」

「約6割だ、起動は簡単にできる」

「・・・私は3割です、殺さずに戦うのはとても疲れます」

「おれは7割残っている、誘導はおれに任せて先に行け」

おれの7割〓道満+清明の残り妖力なのだが言わないでおこう。

「了解!」

二人は先行し、紫の元に向かった、さて・・・おれは牽制しながら行きますかね・・・。

「フレアレンス！」

おれは炎の槍を作り出し九尾に数本投げつける。

『コウツ！』

しかしそれは九尾の息で簡単に吹き飛ばされてしまう、もうすこしギアをあげないと警戒してこないかもしれないな……。

「サウザントスピア！ビッグハンマー！」

名前どおり千本の妖力の槍と巨大なハンマーが九尾に襲いかかる。

ヒュカカカカカカ！

まず最初に千本の槍が突き刺さる。

『グウウウウウ』

あんまり効いてないな……これでどうだ！

そして九尾の頭にめがけてハンマーを振り下ろした。

『ウゴウツ！』

バキッ！

「うおっ！ハンマー破壊しやがった！！」

しかも破壊したハンマーの飛んでくる方向までおれに固定していやる。

「消えろっ！」

おれは消滅のオーラを飛ばしハンマーを消す。

誘導もめんどくさいもんだぜ・・・。

そのまま数分ほど続けていると変化が起きた。

「・・・？」

九尾がおれを見ていない、おれの少し後ろを見ている。

おれは後ろを向いた。

「この将軍のアホ！！なんでいるんだよ！！戻れ！壊滅するぞ！」

『われらは天皇の命令で退治しろという命令を受けている！妖怪一匹の命令になぞ従うか！！』

おれが何か言おうと考えていると・・・。

『突撃だ!!!』

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!ドドドドドドド
ドドドドド!!

「このアホどもが!!」

おれは出遅れたせいですこしだけ戦闘と差がついている、2~3秒で追いつけるがこの場合はその2~3秒が命取りとなった。

『グオウ!!』

ゴオオオオオオオオ!!

『『『『『『『『ぐあああああああああ!!』』』』』』

炎の息を吐き出した、妖怪のおれは少しやけどをする程度だが兵士達はそうはいかない。

「っち! サンクチュアリ 神々の聖域!!」

おれは自然回復、回復量増加、自然回復力倍化のフィールドを作り出し、一番前に立った。

「おい、將軍のアホ」

「な・・・なんだ」

近づきすぎた事により偶然、放射状に広がる炎から難を逃れたよう

だ。

「一分ほどで大体の兵士は回復する、一分ここはおれが支えるからすぐに逃げろ」

おれは九尾と向き合う。

「アイスブレス！」

『グギャウ!!』

おれの氷のブレスと九尾の炎のブレスが空中でぶつかり合う。

「……………（ファイブカード）!!」

おれの分身が四人現れる、おれは四人と交代し、広範囲に妖力で作り出した粉状にした回復薬をばら撒く、すると兵士達は数秒もしないうちに起きあがった。

おれは九尾に背を向けアホに話しかける。

「おいアホ將軍、兵士は回復した、今すぐ逃げろ」

「お・おいアンタ！」

「なんだ！さっさと逃げ」「後ろだ!!」

おれは後ろに殺気を感じ、剣を振りおろす。

ザシュ！

『ギャアアアアア!』

「っち……右腕をやられたか……」

ドクドク……ポタポタ……。

「お……おいアンタ、大丈夫なのか!？」

おれの腕は九尾の牙で貫かれていた、穴が5箇所ほどぽつと見るだけで分かる、さつき兵士を回復させるためにかなり使ってしまったため、再生には時間がかかるだろう。

「創造も九尾の妖力が邪魔でできないしな……」

さつきから作ろうとするたびに傷口が開く、おれの妖力を使って広げているようだ。

『グギャウウウウウ!』

しかしおれの剣も九尾の右目のまぶた辺りを切ったみたいで血が流れ出て右目がよく使えないようだ、右目のために右腕一本か……高い買い物だぜ……。

「ゴホッ……出血が多いか……アイスシールド!」

おれは氷の大盾を作り出し受け流しをすることにした。

「おい、アホ將軍、何故逃げない」

「命の恩人を見捨てるわけ我らだけ逃げるわけにはいかない」

「アホ將軍じゃなくてバカ將軍だったか、ははは」

さっきのおれの攻撃のためか九尾は近づいて攻撃せずに妖力弾をたくさん打ってきている、受け流しがやりやすいが目が見えるようになれば接近戦になるだろう。

「我らは何をすればいい、さっき我らが突撃した時にお前は我らが壊滅するといった、その指示を受け入れていればお前は腕を失わずに楽に戦えただろうに・・・すまない」

九尾は目が見えるようになったみたいだ、出血しているおれの気が途切れる瞬間をねらってくるようだ。

「・・・どうやらお前らに協力してもらうかもしれないな」

「なんだ！？教えてくれ！」

「ここから一キロ先に少し開けた場所がある、お前らだけでそこまで逃げてくれ」

「逃げるのか！？おぬしを見捨ててか！？」

「違う、協力だ、おれが言った場所には大規模の封魔陣がある、そこにはあいつを抑え込めるだけの妖力を持った妖怪、あいつよりも強い妖怪がいる」

あいつは本気を出せばおれなんかすぐに負ける、あいつは甘いから・・・。

「おれはお前らが逃げるまでここであいつを抑える、行ってくれ、おれの意識が残っている間に」

さつきから左腕に力が入りにくい、出血が多いようだ。

『お前ら！いまから撤退する！あそこまで走れ！』

よし・・・これでこいつらは安全だな・・・。

『この赤髪の妖怪を連れてな！』

「・・・！？　は！？」

ガシッ

おれは屈強な兵士に抱えられた。

「おまえら何してるんっだ！」

おれは持っている氷の大盾を九尾に向かって投げつけ数秒の時間を稼ぐ。

「バカ將軍だからな、お前のいった言葉の意味がよくわからなかったんだ、だからその意味を教えてもらえるまでお前に死んでもらうわけにはいかんだ、はっはっは！」

「なるほど、おまえはバカ將軍じゃなくてバカの王だな」

「言ってる、それより九尾がどんどん近づいてくるんだが・・・」

「当たり前だろ、お前ら、おれを後ろに向けて走ってくれ、おれが九尾を牽制する」

兵士達はおれの体の向きを変える。

「・・・アクセルスピード！」

おれは兵士達全員に補助魔法をかけて牽制を開始する。

「メテオブラスト！」

ゴォー！！ パァン！

おれの妖術は出血で威力が弱くなっているため九尾の爪で弾かれた、そしておれはある事に気付いた。

・・・おれ一人で誘導してたときよりも積極的に突っ込んでくるな・・・、まさかこいつらがおれが誘導してた理由と思っているのか？
だとしたら・・・こっちは必死で逃げていることをアピールしなければ・・・。

「くっ！ ストーンキューブ！ モンスターメーカー！」

おれは岩で進路妨害をし、岩の巨人であるゴーレムを作り出し、時間稼ぎしてますアピールをする。

すると予想通り九尾はそれとびこえて標的をおれだけに絞っている、封魔陣の中心まであと二十メートル、九尾までの距離はあと七メートル、微妙な距離だ。

「おまえら！ここまででいい！あいつはおれを標的にしている！」

「そんなもん最初から知っとるわ！！」

「仮にも兵士だ、殺気が誰にいつてるかぐらい分かる！」

こいつら・・・最初からおれを守ろうとしていたのか・・・？

『グギャアアアアア！』

九尾が飛びかかり距離を一気につめてきた、シールドか！！

「アイスシールうおっ！」

シールドを出す瞬間、急に体勢が崩れた、原因は・・・兵士の体力が持たなかったことだった。

「ここで・・・終わるか・・・」

おれはこいつらだけでも生き残らせるために虹龍の鎧を纏おうとした、その瞬間。

『封魔陣起動！！』

おれたちのいる場所に封魔陣が起動した。

『ギイイイイイイイイイイイ！！』

九尾の身体を拘束するようにおれ、清明、道満、紫の妖力の色をし

た鎖が現れた。

「こ……これは……」

「危なかったな、起動が間に合ってよかった」

「……こちらの兵士の方たちがあなたたちのことを教えてくれました」

「とりあえずあの九尾を式にしに行ってもいいかしら？」

「……ええ、どうぞ、まだ暴れる可能性があるので気をつけてください」

「わかったわ」

紫は服からあの時おれを苦しめたお札を取り出すと、九尾に押し付けた。

「……清明、サツキの回復を手伝って」

「む？了解した」

道満と清明がおれの右腕に手をのせる。

「痛ッ！」

おれは痛みから逃れようと動こうとした。

「……暴れないでください、治療ができません」

「でも痛いんだ・・・能力を使っても回復ができない・・・」

「おまえの妖力はもうほとんど残ってないからな、治療できるわけないだろう、さあ、治療再開だ」

「くっ！」

おれはまた痛みを負けて逃げる。

ガシッ

「・・・清明、押さえておくからやっちゃって」

「了解した」

清明が両手に白色の優しい光を集め近づいてくる。

「ちょ！おまっ！」

おれは逃げるために暴れる、しかし・・・。

「普通青龍使うか!？」

「・・・あなたは逃げようとしてはからね」

「覚悟しろサツキ！」

「おまっ！それは敵に使う言葉ギアアアアアアアアアアアア
！！」

おれが叫ぶのと同じタイミングで九尾が紫の式にされ始めたのをおれは知らなかった。

傷口に清明が手をつける、最初の方は痛かったがしばらくすると気持ちよく・・・違う！おれはそんな性癖じゃない！！本当に痛みが取れてるんだ！

「・・・どうですか？サツキさん」

「ああ、痛みがとれて気持ちよくなってきた」

「そうだろう、私も練習したんだぞ、それをお前は逃げ回って・・・」

「・・・私も回復にまわりますね、清明一人では流石にその傷を直すことが出来ません」

「ああ、すまない」

おれの右腕の貫通した傷は少しずつだが塞がっていく、少したって紫と尻尾が九本で人型の妖怪がやってきた。

「式神にしたわよ」

え？あれ九尾か！？

「・・・目的はなんだ、なぜ私を式神にする」

「だからさっきから言ってるじゃない、優秀な式がほしかったのよ」

「それにしても紫、早かったな」

「サツキのほうがおかしいのよ、普通式神にするのに数十分もかからないわよ、この子がいい証拠よ、数分で終わったわ」

「へいへい」

「・・・紫さんも治療を手伝ってください、右腕が貫通していて治療がなかなか進まないんです」

「うむ、さっさと手伝え」

「わかったわ」

紫も参加したことでおれの腕の治療は少しずつだが進んでいった、しかしなかなか穴が塞がらない。

「・・・私にさせてくれ、私がつけた傷だ、治す方法ぐらいわかる」

「・・・本当ですか!？」

「そう言ってサツキを殺す気じゃないだろうな？」

「そんなことするわけないだろう、こいつの式になったんだ、これからのことを考えるとお前たちに認めてもらわないといけないと思っ
ってな、さ、私に任せてくれ」

そう言うと三人はおれの腕から離れて九尾一人が残る形となる。

「九尾さんと呼べばいいかな？強かったな」

「八雲藍だ、八雲と呼ばれるわけにはいかない、藍と呼んでくれ」

「そうかい、藍さん、よろしく頼むよ」

「藍でいい、任せておけ」

藍の両手に薄い黄緑色の光が集まる。

「っ！・・・傷の治りが早いな」

「自分でつけた傷だ、対処方法ぐらい簡単だ」

おれの腕の穴はさっきまでの数十倍の速度で進んでいる、この調子なら数分もかからないだろう。

「・・・ふう、終わったぞ」

「藍、ありがとな」

おれは立ち上がろうとする、しかし頭がくらくらしてうまく立てない、すると・・・。

「私の妖力をやる」

藍が妖力を分けてくれた、足りないのは血なんだけどな・・・、まあいいか。

「モンスターメーカー…ミニゴーレム」

おれたちより一回り大きいぐらいのゴーレムを作り出しおれを抱きかかえさせる。

「さて・・・帰りましょうか」

紫がそう言った。

「・・・そうですね!」

「サツキ、私はお腹すいたぞ、なにか食べたい」

「へいへい、じゃあなにか作るからおれの家に行こう」

九尾との戦闘も終わった、これで障害になるような妖怪はいなくなるかな。

サツキは裏で進む計画に気づくことが出来なかった。

??? SIDE

「そうか、九尾はあいつが味方につけたか・・・」

「申し訳ありません、九尾の出現の情報が入った頃にはもうすでに彼女たちが交戦しております・・・」

「まあいい、こちらも強い妖怪はたくさんいる」

自分は周りを見渡した、数百年かけて集めた妖怪の軍隊だ、クラスアベレージは中級妖怪の下、数は二千ほど、自分が知っている中で最強の軍隊だと思っている。

「妖怪と人間が共存？ あの子もふざけた事をするもんだ、妖怪と人間は潰し合う関係なんだよ」

「それから彼女たちの情報が入っております」

「なんだ」

「彼女たちのなかに一人、男性がいるようです」

「ほう、あの陰陽師のチビ二人だけじゃなかったのか、どんなやつだ？」

「名前の情報は入っておりませんが赤髪の男性のようです」

「・・・そいつのことを徹底的に調べ上げろ、名前を知っておきた
い」

「はっ、わかりました、お任せください」

「期待しているぞ」

「ありがたきお言葉です、それでは」

そして彼女は自分の前から姿を消した。

「・・・まさかあの時の妖怪じゃないだろうな・・・」

自分は考え事を始めた。

第二十三話 VS 九尾 そして裏は動き出す（後書き）

はい、最後の人当てれたら結構すごいね、まあヒントはあるけどね。

今回のお話どうでしたでしょうか？感想いただけると嬉しいです。

番外編 紫メインとなります（前書き）

どうも、葉っぱです、なんか早く終わったので出すことにしました。

番外編 紫メインとなります

「さて・・・妖怪たちとの交渉は清明たちが行ってくれてるからおれとお前は勉強だぞ」

と、サツキは言った。

「え？勉強！？やりたくない」

「うるせ、九尾・・・いや、藍だったな、藍と戦ったときみたいにあれだけの作戦をいつでも出せるように戦術の勉強だ」

「ぶーぶー！」

「ブーイングするな」

ちえり、寝ときたかったのに・・・。

「紫様、サツキ様、私しばらくお暇をいただいてもよろしいでしょうか？」

「サツキでいい、ってかそう呼べ」

「えーと、どうしてかしら？」

「え・・・えと、その・・・お恥ずかしいのですが妖怪としての本能が・・・」

あ、なるほど、式になってまだあまり時間がたっていないから妖怪と

しての本能がまだ残っているというわけか。

「わかったわ、いってきなさい」

無理に拘束していきなり暴れられても面倒だし、ガス抜きぐらいさせてあげないとね。

「あ、それでは二日ほど行ってまいります、明日の昼までには帰ると思います」

「わかったわ」

「藍、出かけるならこれ持ってけ」

そう言ってサツキは袋を手渡した。

「えと・・・これは？」

「転移結晶、妖力を流せばすぐに都に戻るからギリギリまでガス抜きして来い」

「ありがとうございます！」

そう言って藍は出かけていった、家には私とサツキの二人となった。

「ま、二人になったがいつもどおりするぞ」

「え!？」

「ん?どうした?」

「な、なんでもないわ」

・・・私と二人きりになったのにサツキは何も感じないのかしら・・・？

「ま、はじめるぞ」

「ひっ！」

サツキがそう言って昼前まで勉強は始まった。

「あゝ、疲れた」

「紫、ちょっとでかけてくるから留守番頼む」

「わかったわ、どこ行くの？」

「森近んとこだ、なんかいいもん仕入れたらしいから行ってくる、昼飯遅くかもしれないが待っていてくれ」

そう言ってサツキは家を出ていった、家には私一人が残される。

「・・・私を作ってみようかしら・・・？」

私は冷蔵庫を開け中から食べ物を取り出す、サツキが料理を作るところを何度も見ているから私にもできるはずだ。

「・・・カレーというものを作ってみましょう」

八雲紫の数十分クッキングが始まった。

ようやく野菜を切り終えた私は手を見る、手から真っ赤な液体が流れている、野菜はすべて真っ赤だ。

「血ぐらい大丈夫よね・・・」

私はそう解釈し野菜を鍋に入れ焼き始める、ちなみに肉はもうやっている。

えーと、次は水を入れて加熱して熱湯で数分・・・。

「ウォーター、フレイム」

鍋に水を満たし、炎で加熱する。

「これでいいわよね・・・」

私はしばらく鍋をみてカレールーを入れていく、よくわからないから箱二つぐらい入れておこう、どうせ二人だし問題ないだろう。

そうしてカレーを調理し終わると同時にサツキが帰ってきた。

「ただいま、ん？ カレーの匂い・・・？」

「私が作ったわ」

「ああ！すまない、ありがとな」

私は器にカレーをいれ、サツキに差し出し席に着いた。

「・・・このカレー真っ赤なんだがトマトでも使ったの？」

「使っていないわよ？」

「・・・そうか、いただきます」

そう言ってサツキはカレーを口に運んだ。

「・・・やっぱりな・・・紫、手、見せてみる」

「え？」

「いいから」

グイッ

サツキに強い力で引っ張られ、手がサツキの前に出される。

「・・・やっぱりな・・・ヒール！」

手の傷が塞がった。

「・・・ありがとう」

「料理初めてか？」

私はコクリと頷いた。

「ま、気にすんな、失敗は誰にでもある」

サツキはそう言って食事を再開する、そして私もカレーを一口食べた。

「っ！」

・・・初めての料理は血の味がしました。

「さて・・・午後は自由時間だ、おれは研究開発するから好きにしたいってくれ」

そう言ってサツキは部屋に入った。

「・・・寝ましようかね・・・」

私はやることもないので昼寝をする事にした。

夕方

「ふああああ うーん」

目が覚めた私は起き上がり身体を伸ばす。

「お、起きたか」

「あ、サツキ、おはよう、なに作ってたの？」

私はサツキが手に持っているものを指差しながら聞いた。

「ん、これか？」

私は黙って頷いた。

ザクッ！

「ちょっと！サツキ！何してんの！？」

私は回復させようと思って近づくがサツキが手で制した。

「おれが作ってたのはな、こういうものだ」

サツキは手に持ってたゼリーのようなゲルのようなものに手を入れる。

「傷が塞がっていく・・・？」

「ああ、名前は・・・治癒ゼリーだ」

「へー、それすごいわね、それがあれば回復妖術いらないんじゃない？」

「いや、これは使い捨てだからダメだな、妖力充填式とかならないんだが・・・ゲームと違ってなかなかうまくいかない」

「そっか、開発も難しいのね」

「ああ、これができればおれたちが妖力使い果たしても回復可能なんだが・・・」

サツキはそう言った後なにかわけわからない言葉をブツブツ言い始めたのでとりあえず放置しよう。

「いいアイデア思いつかないからもう食事して寝る！」

「はいはい、もう盛り付けているわよ」

私は昼に作ったカレーを出した、血の味がするはずなのに何も言わずに食べる、食べる、食べ続ける。

「ねえ、血の味とか気にならないの？」

「んゝ、慣れてるからなゝ」

「血でも飲んでるの？」

「ちげーよ、おれは吸血鬼じゃないし、ただ昔おれも料理してたときこんな風になったんだよ」

サツキは失敗した料理のことを話し始める、リンゴの皮を向いても真っ赤だったことや米を炊いたときに血が入っているのを忘れていて赤飯になったこととかを話し始めた。

「なるほどね、サツキも昔はこんななっていたのね」

「ああ、そうだぞ・・・まあアイツのおかげだけだな・・・」

サツキは時々何かを思い出しているような顔をする、まるで別人のような顔だ。

「・・・あ、別になんてことないぞ？」

「え、ええ、そういえば血で思い出したんだけど、サツキって人間を食べたことないの？ 式じゃないから妖怪としての本能があるはずでしょ？」

「んー、本能か、別に理性で押さえつけれるぞ？ 修行ばっかしてたから精神力がいつの間にか鍛えられててな、がんばれば三大欲求とか言われてるやつもなんてことはない、むしろアイテム開発をまわりに取り押さえられるぐらいまでやりたくなるぐらいだ」

これはいい事を聞いた。

「ありがと、今日はもう遅いし寝ましょう？」

「ん、そうだな、今日はもう眠いし寝よう」

私は部屋に行こうとしているサツキの後について行く。

「どうした？ お前の部屋はあっちだが？」

「・・・サツキは鈍感なのだろうか？ 料理を作った時点で気付いてほしいものだったんだけど・・・」

「なんの問題もないわ、ええ、なんの問題もないわ」

私はサツキの境界を弄る、『理性と本能の境界』を・・・。

「なにが問題ないんっ・・・！」

サツキが身体を抑えるかのように右手で左腕を、左手で右腕を抑えている。

「えっと、サツキ、いまはどんなきぶ」「今すぐ帰ってくれ・・・早く」「え？」

私はきつと襲いかかろうとするのを我慢しているのだろうと思い意味が分からない振りをする。

「早く・・・おれが・・・おまえを・・・殺してしまわないうちに・・・！！！」

サツキの目の色が少しずつ変わり始める、黒い目が少しずつ赤くなっていく。

「・・・っ！」

私はサツキの肩を叩き、弄った境界を元に戻す、すると赤くなりかけていたサツキの目が少しずつ黒色に戻り始める。

「その・・・」

「なんでもない、本能を押さえつけるのを失敗しただけだ」

「さっきのは」

「今日はこの家にいないほうがいい、おれがいつ暴走するかかわからない、明日の朝までに万全にするから明日の昼ごろにきてくれ」

「・・・わかったわ」

私はスキマを開きもとの自分の家に帰る。

「・・・悪いことしたなあ・・・」

サツキはこう言っていた、『本能か、別に理性で押さえつけられるぞ？』と、その理性を私が崩したのだ、私は自己嫌悪におちいりながら睡眠についた。

そのころ・・・

「・・・よし、これで大丈夫だ」

おれはカズマのところに行き時間を戻してもらっていた。

「ありがとな」

「気にするな、お前がおれたちの分まで押さえつけてるんだ、ただ疲れただけだろう」

カズマは腕輪を指差しながらそう言った。

「そうか、・・・じゃあ今度からは休もうかな！」

「ははは、そうだそうだ、お前はがんばりすぎだぞ、修行も勉強も程ほどにな」

「たった10時間しかしてないぞ？」

「いや、やりすぎだろう」

「え!？ これぐらい普通じゃないのか!？」

「ちよつとまで、その前に質問をさせてもらう、お前は毎日何時間寝ている」

「三時間弱」

「・・・過労だな、最低でも六時間は寝ろ」

「えゝ」

「おれが無理やり寝かし付けても・・・」

「遠慮させてもらおう、おれ一人で行ける」

「ならいいんだがな」

「じゃ、今日は帰らせてもらうよ、それじゃな」

「おう、そういやもうそろそろおれでも抑えることが出来るんじゃないか？」

「あゝ、そう言えばそうだな、まあ今度外してみな」

おれは家に帰り過労で抑える事ができなかったとは言え紫に襲いかかろうとしたことで自己嫌悪に陥りながら睡眠についた。

そのころ・・・。

「赤髪の妖怪の名前が分かりました」

「誰だ？」

「サツキという妖怪のようです」

「なんだと!？」

ガタンッ!

自分は立ち上がる。

「知り合いなのですか？」

「一応な、命の恩人だ」

「そうですか・・・どうします？」

「もちろんこっちに引き込みたい、あいつの能力はかなり優秀だ」

「しかし近づくのは難しいのでは？」

「楽さ、あいつと顔見知りだからな」

「そうですか」

「ああ、今度外に出た時に私が出よう、お前も来い」

「はっ、分かりました」

自分は服を着替え、妖力の大きさを調節した。

番外編 紫メインとなります（後書き）

さて、紫がやったことは後々の話の流れである原因を作ってしまうですが・・・。

それから裏で進めている人物はサツキも知っている人物です。

第二十四話 時間は一気に進みます。(前書き)

どうも、葉っぱです。

時間進めました。

第二十四話 時間は一気に進みます。

九尾を仲間にした後数百年が経過した、おれの妖力はほとんど増えていない、おれの妖怪としての成長はどうやらここが限界のようだ、しかし戦闘技術はいくらでも成長するので修行して損はない。

「さて・・・そろそろ本格的に取り掛かるぞ」

「めんどくさい」

「はっはっは、剣で刺すぞ？」

おれがそう言うのと紫は立ち上がりおれの前に来た。

「予定地に住む妖怪の交渉も済んでいるんだ、さっさと合流するぞ」

別行動中の清明と道満がやってきました。

おれたちは外に出て清明達の所に向かうことにした。

「いやゝ迷子だぜ」

「あなたってバカ？　あなたってバカ？」

「なんで2回聞くんだ！？」

「なんとなくよ」

「バカだがなにか？」

「うわ、開きなおったよ・・・」

「はっはっは、それがおれクオリティー！」

「それより迷子なのはどうすんのよ、これ空飛べない場所よ？」

この辺には枝や葉っぱが尖っている木がたくさんあり森の上まで行けないのだ、不便な場所だ。

「ほら、それはあれだよ」

「なによ？」

「適当に歩こう」

ドゴッ！

「あがっ！」

「殺すわよ」

「まて、疑問系じゃなくて言い切っているのが怖い！」

おれたちがギャーギャー言っていると黄色い髪の女性が近づいてきた、妖力があるから妖怪だろう。

「道に迷ってるの？」

「・・・そうですが・・・どちらさま？」

「あれ？私のこと忘れたの？」

口ぶりから察するにどこかで会っているらしい。

「・・・わからん」

「サツキってどうでもいいことは覚えてるのに妖怪のことをなんで覚えてないわけ？ この子の妖力になにか覚えはないの？」

おれは索敵モードに入る、そして目の前にいる黄色い髪の妖怪の妖力を調べる。

「・・・！ ルーミアか！」

「うん！ そうだよ！ 私だよ！」

「久しぶりじゃないか！ 妖力が大きかったから分かんかったぞ」

「私は成長が早かったからね、多分今はサツキよりも多いと思うよ？」

もしかしたら私の方が強かったりして・・・と、ルーミアが言った。

「ああ、おれの二倍ぐらいあるぞ、すげえな、おれなんかもうほとんど成長止まってるのに・・・」

「えへへへ、私も強くなったんだよ」

「そういえばなんでここに？」

「私この森にすnderからケンカしてる声がしたから来たんだよ、何してたの？」

「ああ、この森の先に集合するんだが道に迷った、道が分かるなら案内してもらえとうれしい」

「うん、わかった」

おれと紫はルーミアに連れられて道を進み始めた。

「それにしても湖の森に来るなんて物好きなんだね」

「ああ、まあ気にするな、それよりもういじめられることはなくなつたのか？」

「うん！ 集団でやられることはもうないよ、でも時々強い妖怪から襲われてるから逃げたりしてるけどね」

「ほお、そりゃあよかった、逃げ切る力があるなら安全だな」

「うん！」

「・・・・・・」

「紫？ どうして黙り込んでるんだ？」

「・・・・周りの妖怪の数が多くてね・・・・襲われる可能性を考えているわ、あ、少しずつ離れてるわ」

紫に言われておれも周りに注意してみる。

「・・・・ほんとだな、ルーミア、おれたちから離れるなよ」

「・・・・うん」

ルーミアは紫に近づき隣を歩き始めた。

「・・・・ルーミア、紫、ストップだ」

おれは二人にそう言って歩くのをやめる、数秒の時間の後一人の妖怪が現れた。

「・・・・」

「こんにちは、よく気付いたわね、隠蔽妖術かけてたのに」

「おれの索敵能力を舐めるな、近くで隠蔽しているやつがいりや・
・敵か偵察のどちらかだろ、おれたちが止まっても逃げなかったこ
とからおれはお前を敵とみた」

「サツキ、手伝うわ」

「いや、いい、紫はルーミアと先に行っててくれ」

「そう、わかったわ」

「大丈夫なの？」

「ああ」

ルーミアはおれにそう聞いた後、紫と一緒に森を進み始めた、ここ
にはおれと敵の誰かさんがのこされる。

「名は？」

「そうだな、自分の名前はレヴィルだ、サツキ」

「・・・どうしておれの名を？」

「情報ぐらい入るさ、九尾とあれだけ派手に戦えばな」

「なるほど、まあ探りあいはこちらまでにしよう」

「フッ、そうだな」

おれとレヴィルは構える。

数キロ離れた場所、サツキは戦闘中で索敵能力も制限されここまで届かない。

紫は突然立ち止まったルーミアに話しかける。

「あら、どうしたの？」

「・・・いや、そろそろ始めようかなと」

「なにをかしら？」

ザクッ！

八雲紫の右腕にサツキの剣とは違う、黒い剣が突き刺さる、サツキの剣とは違い、その剣は光りを吸い込んでいるような、打ち消しているような、そんな色をしていた。

「フフフフ・・・死んでもらうわ」

周りからたくさん妖怪が現れる、森にいたときにたくさんいた妖怪達だ。

サツキとは少し離れた場所で、もうひとつの戦闘が始まっていた。

そのころ、サツキは・・・。

「アイスショット!!」

「グラビレイ！」

おれの放った氷の弾は不可視の何かによって起動を外される。

「チツ、面倒な能力だぜ！」

「それはお互い様だ！　グラビティフレイム！」

「ファイアブラスト!!」

おれは炎の衝撃を打ち出し、相手の高密度の炎と相殺させる。

「拉致が開かないな・・・」

持久戦に持ち込まれればおれは不利になる、できるだけ早めに決着をつけたい・・・。

「ダークネスブレード!!」

おれは二本の剣を作りだし、被弾覚悟でレヴィルに突っ込む。

「・・・攻撃がこない・・・?」

「グラビティフィールド!!!!」

その瞬間、すべての動きは鈍くなる、発動者であるレヴィルを除いて。

「グワッ!」

おれはいきなりスピードが早くなったレヴィルに殴られ地面に落ちる。

ズンッ・・・!

身体が重い・・・!?

「・・・重力系の能力か!」

「ご名答、それはつまり重力を自在に操れるということだ!!」

前から後ろから横から、高速で攻撃を仕掛けてくるレヴィルに動きの鈍くなっているサツキは反撃ができない。

・・・受け流すので精一杯だ・・・！

おれはシールドを作りレヴィルの攻撃を受け流しているがいつ破られるかわからない、なにか対策を考えなければ・・・。

重力・・・おれは重くなり動きが鈍くなり発動者であるレヴィルは軽くなって動きが早くなっている・・・、重力を自在に操れる能力・・・。

「なるほど・・・分かったぜ！」

その瞬間氷の盾は破壊される、しかしそんなことはどうでもよかった。

「来たッ！　グラビティブロー！」

サツキはすでに重力なんて関係なくなっていたのだから。

「チェインバインド！！！」

サツキの手から、地面からたくさんの鎖がレヴィルに巻きつく、封魔陣の発動していたものを見て自分で作ってみたものだ。

「ぐっ、動けな」

「・・・スペル発動」

サツキはその場から数メートル後ろに移動し、カードを取り出す。

『滅符 デリートブラスト』

スペルカードの発動の際には使用者の能力によってカードが変化する、八雲紫ならカードが空間に飲み込まれる、安部清明と芦屋道満ならカードが四色に変化する、そしてサツキは・・・カードが端の方から消え、手に消滅の力が集まった。

「食らえ」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

おれの放ったスペルは地面を抉り、森林を破壊し、消滅させながら発射され、巨大な岩山に当たったところでおれは放出をやめた。

「やりすぎた・・・死んだかもな」

おれはレヴィルを探しに岩山まで行く、数分後、サツキが見つけたのは片腕を無くしたレヴィルだった。

「チェックメイトだな」

おれは剣の切っ先を突き付け、そう言った。

「・・・フフフフ」

「・・・何がおかしい」

「この勝負、私の負けだがチーム単位では私たちの勝ちだ」

チーム単位？ 何を言っているんだ・・・。

「答えろ、チーム単位とはどういうことだ」

「・・・まあ、言ってもいいだろう」

おれは剣を突き付けたままレヴィルの話しを聞く事にした。

「今回お前たちを襲ったのは私だけじゃない、むしろ私がメインじゃない」

「・・・」

レヴィルはおれを満足そうな目で見て話しを続ける。

「今回私がしたのは時間稼ぎと距離を稼ぐことだ、ただお前を倒すだけならこんなやられたりはしないさ、お前を殺すのは上から止められていてね、能力もフルに使っちゃいない」

「おれが聞きたいのはそういうことじゃない、おれのほかに誰を攻撃したかだ」

「八雲紫さ」

「っ！」

おれは索敵モードに入る、すると紫の近くに二千程の妖怪の反応があった。

「さて、私は帰らせてもらおう」

ボンッ！

レヴィルはなにか地面に投げつけ逃げたようだ。

ダッ！

「アクセルスピード！！」

おれは紫の元へと走り出す、幸いまだ決着はついていない、間に合ってくれ！

紫SIDE

私は後ろに飛び距離をとり、妖力を解放する。

「あなた、何者かしら？」

私は刺された右腕を回復させながら聞く。

「お前の目的を許せない妖怪だよ」

先ほどまでとは全然違う黄色い髪の毛・・・ルーミアという妖怪はそう言った。

「あら、夢がもう少しで叶いそうな妖怪がいるから妨害するってこと？」

「いや、お前を殺す、妨害じゃない」

そう言ったルーミアは手を上に上げ振り下ろす、するとたくさんの妖怪たちが現れた。

「なっ・・・」

「・・・やれ」

ルーミアがそう言うと同時に妖怪たちが私に向かって襲ってきた。

おれは走る、自分の全速力で森を駆け抜ける。

「あと二キロ・・・」

紫の妖力がどんどん減っていつている、それに合わせて周りの妖怪の数も減っているが多勢に無勢、ほとんど意味がない。

邪魔者^{おれ}が入るのを防ぐためか途中何度も妖怪に襲われた、残り妖力は六割ほどだ。

囲みの一番外が見え始める、あそこを中心に紫がいるはずだ。

おれは剣を二本持ち、突破を始めた。

紫SIDE

「はぁ・・・はぁ・・・」

私はたくさんの妖怪に襲われながらも少しずつだが倒していた、サツキがくれば突破は楽にできる。

いきなり遠くが騒がしくなった。

「ちっ・・・邪魔^{サツキ}者が来たか・・・」

「あら、形勢逆転かしら？」

「ふっ、サツキ一人で形勢逆転？　はっ、笑わせるな」

「私が防御に徹すればあいつらの攻撃とおらないわよ？」

「・・・まだ攻撃していない妖怪がいるだろう」

「あら？　あなたが私を倒せるとも言うのかしら」

妖力は上級妖怪レベル、サツキの二倍はあるが清明にも道満にも届いていない。

「これだからダメなんだ、妖力操作というものの可能性を考えてないヤツはな・・・！」

ルーミアの妖力が上がりはじめる、その妖力は清明たちの妖力を越え、そして私の妖力を越えて止まった。

「さて、サツキが来るまで耐えられるかな？」

「抜けたっ！」

おれは二つあるうちの囲みのひとつ目を突破した、二層目の連中はおれに気づいていない、一気に突破してやる！

「ファイアトルネード！！」

『ん？あ？うおおおおおおお！！！！』

『うあああああああああ！！』

『ぎゃあああああああああ！！』

全く備えていなかった妖怪たちは一気に吹き飛ぶ、そのおかげでこれは囲みの三分の二は突破することが出来ていた。

「フラッシュ!!」

カッ!

おれは目くらましをし、おれが突破している方向にいる最前列の妖怪の頭を踏んづけ飛びあがる。

「ブラスト!」

おれは後ろに衝撃波を発射し・・・最後の囲みを抜けていた。

「紫!どこだ!」

おれは紫の姿を探す、索敵もこれだけの妖怪に囲まれてちやうまくやってくれない。

「そこだよ」

おれは声の主が指した方向を見る、そこには・・・

「紫い!!」

剣が突き刺さっている、八雲紫の姿があった。

「・・・お前がやったのか・・・?」

おれはそう聞いた、それにルーミアはこう答えた。

「そうだけどなにか？」

おれはルーミアを睨む。

「・・・どうしてだ、どうしてお前が・・・」

「こいつの夢が受け入れられなかった、それだけだ」

ルーミアはそう言いきった。

「・・・そうか、・・・そうか・・・」

・・・殺す。

「お前にはあの時の恩があるし今回は見逃してやるよ、さっさと帰りな」

ルーミアはそう言って身を翻し歩き始める。

「・・・スペル発動、デリートブラスト」

「っ!？」

ルーミアに向かって撃ったおれの攻撃は避けられた。

「おれは今からお前を殺すよ、倒すんじゃない、殺す」

ルーミアSIDE

突然後ろから飛んできた攻撃を私は避ける。

「おれは今からお前を殺すよ、倒すんじゃない、殺す」

「なにを言ってるんだ？」

私はサツキのほうを見た、その目は色が少しずつ変わっていた。

黒色が赤みを帯びる。

「はははははははははは」

赤みを帯びた黒が血のように赤黒くなる。

「はははははハハはハ」

そして・・・目は赤く染まる。

「はははははははは」

赤い目に色々な模様が現れ・・・

「ハハハハハハハハハハ！！！！！！」

サツキの精神は狂気に染まる。

第二十四話 時間は一気に進みます。(後書き)

裏の正体はルーミアでした、次回はサツキが暴れます。

裏第四話 クモ退治（前書き）

どうも、葉っぱです。

この物語の本編はもうそろそろ終盤にさしかかります、本編が終わった後も番外編としていろいろ書くのでお願いします。

裏第四話 クモ退治

「三人で討伐するのか？」

おれは思わずサツキに聞き返した。

「ああ、そうだ」

「おれらはまだ下級妖怪なんだが・・・？」

「知っている」

「だったらなんで？」

「勘かな、お前らなんか強そうな気がする」

・・・剣道と空手か？

「いやゝおれってあのときのクモにも負けちゃうようなやつですよ？
足手まといじゃあ・・・？」

「いや、おまえはあのクモより強いよ、妖力じゃなくて戦闘技術と
いうかなんというか・・・、あの枯れてた木であの妖怪と戦ってた
んだ、おまえが弱いはずがない」

「・・・でも武」「装備はおれが用意しよう」

詰んだ・・・。

「カズマ、もう行きましようよ、能力も言っちゃいましよう、私の能力は空間に干渉できる能力よ、よろしく」

「おれは時間に干渉できる、たとえば・・・妖力が空の状態から妖力が満タンの状態まで回復できるな」

本に書いてあったことだ。

「ま、今日の夜にでも行く予定だから頼むよ」

「了解した」

おれたちは夜まで休むことにした。

夜・・・サツキから武器を受け取りおれたちは三人で森の洞窟に入っていた。

ズバァ！

妖力を全て込めたおれの剣がクモを真っ二つに切り裂く。

おれは自分の時間を戻し、妖力を回復する、しかし傷は塞がらない、時間が戻るのには形ない物だけのようだ。

「よし・・・もうすぐ最深部だ、休憩しよう」

おれたちは洞窟の壁にもたれかかり休憩をする。

「・・・なあ、このクモたちって本当に強いのか？」

「さっきからあんまり手ごたえがないと言うか・・・なんというか・・・」

「・・・おまえらやつぱり強いよ、運動能力も異能力もな」

・・・。

「まあ休憩はもういいからさっさと行こうぜ？サツキ」

「・・・そうだな」

おれたちは洞窟の最深部に飛び込んだ。

「「「・・・」」」

突入したおれたちが見たのは数百匹のクモと巨大なクモとなんか動いてる白い物体（多分クモの子供）だった。

「・・・ずれろ!!」

サキが空間をずらしクモを一気に殲滅しようとする、しかし妖力が足りない。

「おれが妖力を分ける、カズマはおれの時間を戻し続けてくれ」

「わかった」

おれは時間を一瞬前に戻し続ける、そのためサツキの妖力が全く減ることなく、サキに妖力が流しこまれる。

ゴゴゴゴゴ・・・ズバァン!!

「ふう・・・」

なんだか空間が不安定になったぞ・・・？

「サキ、空間がなんか不安定なんだけど・・・」

「・・・あ、ずらした後戻し忘れてた」

そう言って空間のズレとゆがみを元に戻しはじめる。

「おれは先に突っ込んどくぞ」

そう言ってサツキがクモの群れに飛び込む。

「モンスターメーカー！ ゴーレム！！」

岩の巨人が現れクモ達を潰しはじめる。

「・・・サキ、おれたちも行くぞ」

「・・・なんか力が溜まってんだけど・・・」

「え？」

そう言われてサチの手を見ると白いオーラのようなものが集まっていた。

「なんだこれ」

チヨン ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「あばばばばばばばばばば」

自分の身体が高速で振動を始める、全く止まらない。

「指、離したら？」

そう言われておれは初めて指を離す、すると身体のゆれが止まった。

「ふう・・・、これ続けたら酔うぜ・・・」

「あなたが揺れるってことは空間をずらしたことで発生した地震か

な？　じゃあ行ってくる」

そう行ってサキがクモたちに突っ込み、どんどん吹っ飛ばしていく。

「……おれも行く!!」

おれは剣に妖力を流しクモをズバズバ切り始めた。

数分後、巨大なクモだけが残った最深部でおれたち三人は対峙していた。

ズドドドド!

クモの足がおれたちを地面に突き刺さる。

「おらぁ!」

ズバン!

おれは足を一本切り落とし、妖力を回復する。

「消し飛ば!」

ボン！

サツキの攻撃を受け、足の先から消えていく。

「ずれろ！」

ズバァン！

サキの能力で足が切れる。

「あゝこいつ強い！」

「なんで足が切れても動けるのよ！？」

「妖怪だからな」

ちなみに上からおれ、サキ、サツキだ。

「なあサツキ、一撃必殺の技ってないわけ？」

「あるよ？」

「・・・・・・・・」

「ん？」

「早く使ってよ！」

「そうだぜ！」

「だってまだ不安定なんだよ」

「「いいから!!」」

「……出でよ! レッドドラゴン!!」

サツキがそう叫ぶと辺りがすこし暑くなる。

空中に炎が集まり……龍の形をとる。

「「……」」ポカーン

『グオオオオオ……グギャギャギャアアアアアアアアアア!!』

ドラゴンが巨大なクモに襲いかかり……数秒もかからずクモは死んだ。

「サツキ……安定してるじゃん」

「それよりこれ強すぎよ」

「そうか？」

炎のドラゴンは咆哮をあげて……おれたちに向かってきた。

「「「え?」」」

ゴオオオオオオオ!!

ドラゴンの口から炎が吐き出される。

「うおおおおおおお！」

「逃げよう！」

「安定してねえ！！」

おれたちは逃げ帰り、神社に戻った。

「つかれたぁ・・・」

「お前なら疲れる前の状態に戻せるだろう」

「あ、そっか、ラッキー」

「ずるいわよ！」

「んなもん知るか！」

おれは時間を戻し回復する。

「そういえばサツキ、あのドラゴンどうするのさっ..」

「ああ」

洞窟

「諏訪子！そっち行ったよ！」

「くらえっ！鉄の輪！！」

ゴオオオオオオオオオオ！

「「うわああああああああああああああ！！」」

「あの二人が何とかするんじゃない？」

「あはは、なんだそれ・・・」

「あの2人はいい神様だったわ」

「まだ死んだわけじゃないけどな、ってかもうすぐ消えるし」

「ふうん、そっか・・・」

朝日が登りはじめる、もう朝になるようだ、おれたちは部屋に戻り睡眠を始めた。

数百年後

おれは神社に元陰陽師の2人と人間2人、そしてサチと一緒にいる、結果がはられ関係者以外は外部からは絶対に見えないようになっているため、いい場所だ。

「サキ、ちょっと外に出ないか？」

「いいわよ、気分転換に散歩にでも行きましょう」

「そうだな」

おれたちはこの気分転換が最悪なものになることなど夢にも思わなかった。

25話、最後のシーンへ続く。

裏第四話 クモ退治（後書き）

実は幻想郷作った後のストーリー少し考えてます。

第二十五話 サツキの狂気（前書き）

どうも、葉っぱです。

サツキがチート状態です。

第二十五話 サツキの狂気

ルーミアSIDE

「ハハハハハハハハ！！！」

私はその姿を見て恐怖を感じた、数百年ぶりの感情だ。

「クツクツク・・・ああ・・・いい気分だ」

サツキはこちらを睨む、その目にはすざましい殺気が籠っていた、私は目を逸らすことが出来なかった、動くことが出来なかった、余計な動きを見せれば目の前に現れ身体を剣が貫く、そこまで想像できるほどだった。

「ルーミア様、何をしているのですか・・・早く帰りましょうぜ？」

私に幹部のディーが話しかける。

「・・・・・・・・」

「あの妖怪がどうかしたんですかい？」

「・・・・・・・・」

「おれが殺してきますよっと」

ディーは最上級妖怪、レヴィル同様、私が信頼している妖怪だ、私の前に立ったディーの背中では小さく見えた。

「行くな！」 ドスッ！

そう叫んだのはディーが飛び出し、サツキの青白いオーラが出ている手に貫かれた瞬間だった。

「が・・・」

バタッ

「アハハハ・・・弱いな・・・殺すつもりでやったらすぐこれだ・・・」ニタリ

サツキは殺すことを楽しんでいるかのように、血を見るとニタリと笑った。

『ディー將軍！！ 貴様ア！ よくも！！』

『お前ら！ ディー將軍の弔い合戦だ！！』

『『オオオオオオオオオオオオオオオオ！！』』』

「あゝ？」

サツキは動かなくなったディーから離れると突撃して来た私の部隊に突っ込んだ。

『『『ぐあああああああああ！！』』』

「ハハハハハハハ！！ 最ッ高だぜ！ 全員死にやがれええええ

「!!!!」

部隊が壊滅するのにそう時間はかからなかった、ほとんどの仲間が一撃、または攻撃に巻き込まれ動けない怪我を負うレベルのダメージを受け戦闘不能となっていた、そこで初めて私は八雲を殺したことを後悔した。

「デュー！　生きてるか！」

「・・・へへへ、ええ、なんとか・・・」

デューの能力は物理攻撃を軽減する能力だ、その能力による攻撃力減退とデュー本人の防御力を上回るほどにサツキ攻撃力はすぎましいのだ。

「いったん引け、私が出る！」

私はほかの部下に指示をし、デューを後ろに下げた。

クルッ

化け物はこちらを向いた、それに私は剣を構え、能力を発動した。

『闇と光を操る能力』

サツキの闇を味方にしてやる！！

「・・・・・・・・あゝ？　来ないならこっちから殺しに行くぞ」

「ちっ・・・・・・・・」

私は自分の闇の力を解放し、周りの空間を夜にし、サツキと対峙した。

「・・・行くぞサツキ！」

「・・・フン」

「ムーンライトレイ！！」

「・・・」

月の魔力を借りて撃った攻撃はサツキに突き刺さる。

「・・・あゝ痛いな」

しかし全く効果がない、少しの血を流したぐらいだ、本気で攻撃をしなければ・・・！

この状態で本気になったのは初めてだ、私は闇の翼を展開し、自分の真の姿へと変化する。

「この状態を見せるのはお前が初めてだ・・・」

「うるせえよ」

ゴオオオオオオオオオオ！！！！

巨大な妖力砲が私のすぐ隣を掠めていく。

「さっさと殺させろ」

とりあえず戦わせろってことだろう。

「すぐにでも戦ってやる！ ナイトバード！」

数十匹の闇の鳥がサツキに殺到する。

「フッ」

ズバババババババ！

「なっ・・・！」

私の闇の鳥はサツキの手ですべて切り裂かれた。

「はじめて、妖怪としての本能を解放してんだ、もっと楽しませてくれよ」

「っ！」

私は剣を構え、攻撃に備え

ズバッ

私はその音が何かと気付いたのは私の腕が飛んでいくのを見た後だった。

「うあああああああああ！！！！！」

痛い痛い痛い・・・！

「今まで暴れなかったぶん暴れないとなあ・・・」

ギンッ！！

サツキの剣と私の剣がぶつかり合う、実力差は大きい、私に無数の刀傷が増えていく。

「ぐぐぐぐう・・・」

「フンッ！」

ズンッ・・・！

「がっ・・・！」

ドーン！！

私は空中から地面に叩きつけられた、この状態でここまでやられるのははじめてだ。

「・・・・・・」プイッ

サツキは私に背を向け手に力を集め始めた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

その力はどんどん膨れ上がり、巨大な力の塊となる。

「これをどうするかぐらい分かるだろ?」

「っ! やめろ!」

「・・・・知るか」

サツキが手を振ると同時に、この森の右半分が消し飛んだ、その方向は、私の仲間が逃げた方向だった。

「あゝ、キツイな、妖力すくねえし」

サツキはなにか丸いものを口に含む、すると妖力が一気に膨れ上がった。

「楽しませてくれよ?」

私は身体を再生し、戦闘を再開する。

「ミッドナイトバード!!」

ズバン!

「攻撃っていうのはこうやるんだぜ？ カオスフレイム！」

私の周りに黒い炎が現れる。

「カオスフィールド！」

私は自分を強化し、攻撃を受ける。

闇と闇の炎がぶつかり合い、周りの森林が燃え始める。

「・・・今を防ぐとは驚きだ、本気で力を込めたんだけどなあ・・・」

あれが本気なら・・・引き分けまでは持ち込める可能性がある！

「グランドクロス！」

私は闇の空間から武器を引っ張り出す、十字架の形をし、魔を退ける効果を持った巨大な剣だ。

「っ！・・・厄介だな・・・ダークネスブレイド！！」

私とサツキは剣をぶつけ合う。

ギンッ！ ガァン！

「セイント！」

「カオス！」

私は目の前の敵に対してこう感じた、勝てないと。

「カオスウィング
暗黒龍の翼」

サツキの背中から黒い何かが飛び出す。

「シンデクレ」

「っ！ 闇と光の二重結界！！」

「カオスブレイド
暗黒の破壊剣」

サツキが黒い剣を持って突っ込んでくる、私はそれを自分の持つ最高の防御技で受ける、しかし確実に破壊されるだろう、目の前のそれはそれだけの力の差があった。

『アースグラビドン！！』

ズドオオオオオオンッ！！！！！！

剣が私の結界を破壊しながら私の右肩から右腕と右足を吹き飛ばし

ながら地面に落ちる。

「グウ・・・ダレダ・・・！」

「・・・間に合ってよかったです・・・ゴホッ」

暗闇から現れたのは私が一番信頼している部下のレヴィルだった、彼女の腕は片方がなくなっており、かなりのダメージがあった、その身体でここまで歩いてきたのだ。

「おまえ・・・腕が・・・」

「・・・大丈夫です、とり合えず一旦引きましょう、皆さんは無事です、それにこの身体じゃいつまでも抑えられないです」

「そうだな」

私が引き返そうとした瞬間いきなりサツキが身体を抑え始める。

「ウガアアアアア！ ナニヲスル！ ヤメ・・・うぐっ・・・ぐっ・・・はぁ・・・はぁ・・・、派手に妖力使いやがって・・・もう一割ぐらいしか残ってねえ」

私はこの勝負は勝った、そう確信した。

「サツキイイイイイ！！」

ザシュッ！

私は残っていた左手で剣を拾い、何度も突き刺した。

「・・・もう痛覚がイカレてるな・・・何も感じねえ・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・、レヴィル、妖力を少し分けてくれ」

「ええ、勿論です」

私はこいつの闇を味方につける、そう考えた、戦闘中はうまくいかなかったが今ならサツキの闇を奪えるはずだ。

「・・・よし、これでいい」

私はサツキに手を置き、闇を引きずり出す、するとついさっきまで戦っていたサツキの形をした何かが傷口から飛び出した。

「・・・ナンノヨウダ」

「私の仲間になれ」

「コトワル、マ、ダシテモラッタオンハアルシシバラクハテツダツ
テヤルヨ」

私は闇のサツキを連れ、アジトに帰ることにした。

痛みを全く感じない、それほどに私の体はヤバイのだろう、さっき剣を突き刺されても何も感じなかった、しかしダメージはあるように歩くことが出来ない、しかし身体はなにか清々しい、闇が抜かれたからかな・・・？

ズリッ・・・ズリッ・・・

おれは地面を這ってある場所に向かった。

「・・・紫・・・すまないな・・・」

「・・・」

しかし返事はない、この出血量を考えれば当然だろう、意識があるほうがどうかしている。

「・・・おれがちゃんとしてればこんなことにはならなかったのかな・・・」

「・・・」

しかし返事はない。

「お前だけは助けてみせる」

おれは紫の身体に手を乗せ、残っている妖力ほとんどを使う。

「ダメージカット」

紫の身体から傷が少し消え、放置していれば致命傷レベルの傷が普通のダメージに変わる。

完全に消せないのは残念だがこれがおれの限界だ。

「ダメージペースト」

おれの身体にたくさんの傷が生まれ、血が流れ始める。

サンクチュアリ
「聖域・・・」

残った妖力を全て使い、紫の身体をなんとか覆うレベルのフィールドを作り出す。

ポツ・・・ポツ・・・ポツ・・・ポツポツザアアアアア

「ははは・・・、雨が振ってきやがった・・・、・・・・・・もう少し早く降ってればよかったのになあ・・・」

おれの意識は雨に打たれながら消えた。

カズマSIDE

「・・・サキ！おれの妖力でサツキたちを回復してくれ！」

森から巨大な妖力を感じたおれたちは森の中に入り、死にかけているサツキと八雲紫を発見した。

「わかってるわよ！ ヒール！」

サツキたちの傷が塞がり始める。

「サキ、こいつらを神社に運ぶぞ」

おれは森から見える神社を指差した、距離は数百メートルも離れていなかった。

皮肉にもそこは清明たちとの集合場所だった。

第二十五話 サツキの狂気（後書き）

読んでくれてありがとうございます、感想くれると嬉しいです。

第二十六話 力の解放（前書き）

どうも、葉っぱです。

今回からサツキの性格が変わります、闇がなくなったのと押さえつける必要がなくなったためです。

第二十六話 力の解放

カズマSIDE

おれはサツキと八雲紫を神社に運ぶ、清明たちに治療してもらわなければならない。

神社への階段を登り結界を通り抜ける、それと同時に四人が飛び出してくる。

「おまえら！説明は後だ！治療をしないと死んでしまう！」

サキの回復能力じゃ応急処置がせいぜいだ、清明たちの力が必要になる。

「わかった！道満！博麗の巫女！治療を始める！霧雨はこいつらを寝せる場所を用意してくれ！！」

「・・・わかった！」 「わかったわ！」 「了解だぜ！」

清明の指示で三人が動き出す、おれはサツキと紫を地面におろし、能力の準備をする。

「「「治療結果！！」」」

ブウウウウン

回復の結界が三個展開され、回復が始まる。

「傷が塞がらない!？」

「・・・もしかして呪いの武器ですか!？」

「効果が薄いわ・・・!」

傷があまり塞がらない、おれは清明たちに言った。

「八雲紫から治療しろ! サツキは後に回せ!」

「なんだと!」

「力が二つに分散されて効果がほとんど呪いに打ち消されてるんだよ! このままじゃ二人とも死ぬ!」

おれがそう言うのと三人は結界を狭め、サツキを結界から外す。

「サキはおれと一緒に応急処置だ!」

「わかってるわ!」

おれたち二人はサツキの治療を始める、隣では八雲紫の傷が少しずつ塞がっている、おれは時間を戻し妖力を回復させる。

数分たつと紫の傷が完全に塞がり顔色が少しだけよくなる、次はサツキだ。

おれは暗い場所にいた、たぶんおっさんのところだろう、この感覚に覚えがあるし。

「おっさああああああん!!」

おれは叫ぶ。

「神じゃといつとるじゃろおおお!!」

向こうか。

おれはそっちに走り出す。

「おっさん! 今回は何のようだ?」

「おまえは意識を失う前のことを覚えておらんのか・・・」

おっさんはため息をつく。

「覚えてるさ、身体が勝手に動いて・・・何かに支配されてた」

「そのとおりじゃ、激怒するなど言ってたのじゃがあん状況ではしかたがないの・・・ま、今はお前を支配してるヤツはおらんがの、ルーミアが連れて行ったのは幸運じゃったな、あ、それから性格に

少し変化があるな」

「なんでだ？」

「起きればわかると言っておきたい所じゃが教えてやろう、おまえの妖力が解放されている」

「あ？ おれの力は別に前から」

「前からあったがお前の中の闇を抑えるために無意識に力を使っておったんじゃ、妖力は今までの数倍になっている」

「あ、もしかしておれの妖力が増えてなかったのは闇の力が大きくなっていたからか！？」

「そうじゃ、おぬしはずっと成長しておるし、妖力も上級妖怪の上の方だったんじゃがお・・・あの黒い剣あるじゃろ」

「ダークネスブレードか？」

「そうじゃ、その剣と黒い翼が闇の力を増やす原因だったんじゃ、もう使うことはできんからの」

「まじか！？ 剣が使えないならどうすりゃいいんだよ！」

剣はおれが最も力を発揮できる武器だ、まあ他の武器でもある程度は使えるわけだが。

おれがそう言うとおっさんが指をつき付けおれの額を小突く。

「うおっ！」

「情報を送ったぞ、別の技が使えるはずじゃ」

『情報 ダークネスブレード↓シャイニングブレード ダークネス
ウイング↓エンジェルウイング』

光……？ これがおれの闇の封印に使われて使えなかった技か・
。。。

「シャイニングブレード！！ エンジェルウイング！！」

おれがそう叫ぶと手には神々しい光に包まれた金色の剣が握られていた、背中には純白の翼が生えていた、正直言ってダークネスのやつより強い。

「……おれはこんな力を捨てていたのか……？」

この力があればあの時レヴィルをすぐに倒して紫を助けることが出来たかもしれない、その可能性を放棄したのはおれ自身だ。

「諏訪大戦の時から闇が侵食を始めていた、それを防ぐためにその二つが守ってくれてたんじゃよ、まあそれを激怒することで闇を増大させて封印が解けたわけじゃがの」

「うっ！」

おれは痛い所を突かれたとばかりに苦笑いする。

「……闇の力が全て消えた今だから言っておいてもいいじゃろ、

驚かずに聞け」

おれはおっさんから言われた言葉に驚きを隠すことなど到底無理なことだった。

カズマSIDE

治療は終わったが目を覚ましてはいない、おれたちは清明たちと話し合いをしていた。

「・・・サツキたちがやられていたのはここから数百メートル離れた場所だった、この結界を貼ったのはミスだったのかもしれない・・・」

清明が落ち込みながら話します。

「でもこの結界がなけりゃこの場所は今頃サツキたちをここまで追い込んだ妖怪たちにやられてる、結界を貼っていたのは間違いじゃ

ない、正解だ」

最強の矛と最強の盾の二人だ、正攻法じゃほとんど勝ち目がない、多分二人を引き離していたんだろう。

「・・・でも気づくことが出来なかったのは痛いですね・・・、二人が死んでいたら私たちが妖怪になった理由がなくなってしまいます」

「終わったことよりこれからどうするかを考えるべきだぜ？ 過去より未来をどうするかだろ、それを・・・今後悔しても意味ないぜ！」

「そうよね、一応死なずに済んでるんだしこれからを考えましょう」

おれたちは数時間話し合いを続けることになった。

おれは目を覚ました、どうやら布団に寝かされてるようだ、隣には空になった布団がしいてある。

「痛ッ！」

起き上がろうとしたが身体が痛みを訴える。

「仕方ない、這って進むか・・・」

おれは身体を半回転させ、両手両足が折れたあの時と同じように障子まで這って進み始めたそのとき・・・。

ガラッ

障子が開いた、おれはそのまま上を向き・・・。

「白？」

「ッ！」

ガンッ！！

「ギアアアアアアアアアア！！」

踏みつけられた。

「・・・痛い・・・」

「その・・・すいません、驚いてしまって・・・」

おれがいた部屋にぞろぞろとみんなが集まってくる、紫はもう普通に動けるようだ、よかったぜ。

「サツキ、なに下から覗いてるんだよ、何色だっもゴフツッ!!」

「カズマ、なにやってんだ・・・」

カズマはサキに腹を殴られ悶えている。

「・・・何色？」

小声で聞いてきたので答えてやることにする。

「白色だっもゴフツッ!!」

殴られた、痛い。

「ほく今日は白色だったのか、昨日は水色だっもグエツッ!!」

金髪?の男が巫女さんに殴られおれたちのそばに倒れる、おれとカズマは近づき小声でささやく。

「「その話あとで詳しく頼む」」

「任せろ」

そのあとおれ達が殴られたのは言うまでもない。

「さて、私とこのエロ男はあなたに自己紹介してなかったわね」

「エロ男じゃない！　ちよいエロだ！」

「ま、この男は無視して進めましょう、私の名前は博麗霊奈、この神社の巫女で最強の陰陽師二人に鍛えられた巫女よ、年は18歳、よろしくね」

「へー、アンタが清明たちが鍛えてくれた？」

「そうよ、ほら、アンタも自己紹介」

「おう！　おれの名前は霧雨涼、普通の魔法使いだぜ！　年は21だ、よろしく頼む」

「いや、エロい魔法使いでしょ」

と、霊奈が訂正？する。

「それはないだろ！　おれはいたって普通のだなあ」

「ま、おれも自己紹介と行かせてもらおう、おれの名前はサツキ、消滅と創造の能力を使えるて・・・妖怪だ、今は戦うどころかまともにも動くことすらできないから妖力を分けてくれるか回復してくれると助かる」

「わかったわ、治癒結界!」

おれの体が淡い緑色の結界に包まれ、身体の蓄積ダメージが消えていく、気持ちいい。

数分そのまま続けてもらい回復をしてもらったおかげで身体は普通の生活をできるぐらいには回復した、ここまですが限界らしい。

「ありがとう、助かるよ」

おれは礼を言った、のこりは数日休むかカズマから妖力もらえばなんとかなるだろう。

「それじゃあ私は行くわ、何か用があったら言ってちょうだい」

「わかった」

霊奈はどこかに行った、と同時に霧雨が小声で話しかけてくる。

「アイツは今から女子組で天然の温泉に入るんだぜ」

「へー、この辺に温泉があるのか、のぞ・・・入ってみたいな」

おれの言葉を聞き逃さなかったようで涼が真面目な顔で話しかけてくる。

「さて・・・今から覗きに行くわけだが・・・お前もくるよな？」

おれはそれに真面目な顔でこう答えた。

「勿論だ、その話のった」

別にもう理性と妖力で闇（とか本能）を抑える必要はないわけだし・
・元・男子高校生としてこの話にのった！

ちなみにカズマもこの話に乗ってるらしい。

作戦会議（別名…覗きの会）

「フツ、このおれ、発明家のサツキにかかれば姿を隠すことが出来るから堂々と覗けるぞ」

「なんだと、それは三人分あるのか？」

「独り占めはよくないぞサツキ、平等にやるべきだ」

ちなみに上からおれ・涼・カズマだ。

「フン、大丈夫だ」

「ほうほう、それで発明品とはどれかな？」

「いい物を作ったようだね、サツキ」

元は隠密行動用だったんだけどね？

「この薬を飲めば30分間姿が消える、消滅能力を利用して姿だけを消せる、カズマ、これがほしいならおれの妖力回復頼む、涼は道案内な」

「勿論だ、道案内は任せろ」

「妖力を流しこんでいるけどお前しばらく会わない間にすごい妖力になったな・・・、よし、これでいいか？」

妖力満タンだ、これで身体を治せる。

おれは身体を回復し、立ち上がる。

「お前たちにこれを3粒やる、効果は30分だが25分に一回飲むようにしろよ？ 万一効果切れて見つかったら・・・わかるだろ？」

「ああ、死ぬな」

「あのメンバーに勝てる気がしない」

よし・・・覗きの準備完了！ あとは妖力隠蔽マントだな、渡しとこう。

おれはマントを渡し、装備した、デジカメ作って写真とろうかな！
うん！これは敵が来た時の決定的証拠を抑えるためのものだから持
っててもいいよね！

番外編に温泉のやつは書きます。

「なにか言いたい事があるなら聞きます」

「・・・私も聞きたいです」

おれたち三人は畳の上に座りながら五人の女性に見つめられている。

「「おれは悪くない」」

おれたち三人は現在進行形で死の危機に陥っていた。

「まさかここまで否定するなんてね・・・」

「現行犯なのにな」

「・・・石のせる？」

「「これ以上は足が折れる!!」」

ちなみに畳Ⅱ石畳です、対妖怪の性能があるのかかなり痛いです。

サツキの場合

「涼とカズマはともかくサツキがするとは思わなかったわ・・・」

「おれも性格が変わったって事でひとつ」

実際変わってる気がする、いままでだったらこんな話に乗ることはしない。

「いや、納得できるわけないでしょ」

「二人に誘われたんだから仕方ない」

おれは迷わず二人を犠牲にする。

「まあサツキもそれに乗ったってことは同罪だと思うぞ？」

清明 ええええええええええ！！

「・・・そういえば試したい技があるんですけど丁度いい敵がほしかったんでした・・・勿論相手してくれますよね？」

「ことわ・・・拒否権があると思ってるんですか？」 らずに受けさせていただきます」

「・・・よろしい」

おれは道満に外まで引きずられる。

「あとで私も頼むぞ」

「私は特にないからいいわ」

あ、紫がなんか天使に見える・・・。

おれは引きずられながらそう思った、隣をカズマが引きずられてる、おれは声をかける。

「生きてまた会おう」

カズマの場合

「サキ、おまえなら分かってくれるとおれは信じているぞ」

おれはサキをまつすぐに見る。

「そういえばサキって可愛いよな。顔も性格も最高だぜ！ うんうん」

「それはありがとう」

おれは顔を輝かせる。

「だったらおしおk 「でもそれだからってお仕置きをしないわけにはいかないよね？」 スイマセン！！」

おれは石畳に額を擦りつける、プライドなんてどうでもいい、生きる事を考えよう。

「そういえば拳に力を纏わせて人型妖怪を殴ってみたかったんだっ
た、その威力試してみようか？」

サキが石畳をどけおれを外に引きずっていく。

「嘘だよな？
おい、
な？
な？」

しかしサキは答えない。

「嘘だと言ってくれええええええええええ！！！」

隣をサツキが引きずられていくのがみえた、おれに話しかけてくる。

「生きてまた会おう」

涼の場合

「さて・・・何回目でしょうね？」

おれは記憶を辿り回数を数え答える。

「14回目だぜ!!」

「・・・それだけやってまだ懲りないのかしら・・・!?!」

霊奈が不気味な笑みを浮かべおれの頭を紙がついたよくわからん棒
(名前忘れた)で小突いてくる。

「許して・・・クレナイカナ？」

おれは笑顔を浮かべそう言った、霊奈の答えは・・・。

「うん、それ無理」

あれ？ 少し前までこれで許してくれたんだけどなあ・・・。

「涼にはもうお仕置き何回もしてるしなく、うん、これがいかな
！」

霊奈はおれに服を差し出してくる。

「これを着るのか？」

「うん」

「おれが？」

「うん、それ着てあの二人応援してあげてね？」

縁側を見ると引きづられていく二人が見えた、ご愁傷様です、いや、おれがご愁傷様だぜ……。

服は巫女服だった、涼子とでも名乗るべきか……？

サツキの場合

おれは現在進行形で殺されかけている、やばい。

「おいおいおい！落ち着け！」

「……青龍」

ズドン！

おれが隠れていた後ろの木が破壊される。

「・・・はやく翼と剣を出してください、本格的に攻撃ができません」

「断ったら？」

「封印しま「シャイニングブレード！ エンジェルウィング！」・・・え？」

おれの背中に純白の翼が、手には神々しい光を発する金色の剣が握られている、いつもと違うから驚いたのだろう。

「驚いてる暇はないぞ！ シャイニングフレア！！」

光り輝く炎が青龍を襲い焼き尽くす、道満は信じられないという顔でこっちを見ていた。

「・・・しまった・・・テクニクタイプのおれが一撃で倒したら怪しまれる・・・！！」

道満がこっちに近づいてくる、いいわけを考えよう。

「・・・その力、どうしたんですか？」

「え・・・えと・・・その・・・目覚めたというかなんというか・・・封印されてた力が解放されました」キリッ

「サツキ、その剣貸してみろ」

清明がそう言ったので剣を渡す、ちなみに紫は背中の翼を触ったり剣を覗いたりしていた。

「重っ！　こんなもん振り回せるか！！」

ガンッ！

「いてえよ！　なんで殴るんだ！」

「私のお仕置きと思ってくれ」

「ならいいや」

「サツキ、あなた妖力が増えてるわ、何があったの？」

「・・・封印されてた力が解放されたらしいです、死にかけたからでしょうか・・・？」

「サツキ、妖力解放、さっさとしなさい」

「・・・わかった」

おれは妖力を解放する、すると妖力は今までの量を軽く越え、清明と道満と同じぐらいになった。

「その剣があればもっと出せる、それが完全解放のトリガーだな」

「む、そうか、じゃあ返そう」

清明がおれに剣を返す、すると妖力は紫より少し少ないぐらいの大きさになった、三人とも眼を丸くして驚いていた。

「サツキにたくさんの妖力があつたら無敵じゃない！」

「あの技術にあの破壊力、短期決戦ならほとんど負けないサツキに膨大な妖力が加わると・・・」

「・・・長期戦もできるようになりましたね」

あゝたしかに今までは少ない妖力でどれだけ効果的に戦えて破壊力を上げれるかの技術を磨いてきたな、と、いうことはおれ強くなつたんじゃね！？

「今度からはサツキと修行しなきゃいけないわね・・・、真面目にしないともう勝てないわよ」

「サツキ！ 私に修行をつけろ！」

「・・・おねがいます」

処刑が修行になってよかったと思うサツキだった。

カズマの場合

ズーン！

「ちょ！ おれ丸腰！ 武器無しでどう戦えと！」

「一流のハンターは装備に頼らないんじゃないの？」

サキはおれが言っただけのことをつぶやく。

「武器は重要だよ！ 頼らないのは防具だよ！ さっさと武器をよこせ！」

「大丈夫、武器があっても意味ないから」

キュパン！

空間がずれ、地面が割れる、たしかにこれなら武器があっても意味ないよなく、折れるし。

「さあ、覚悟して」

考え事をしていて意識が別のところを向いていたおれの目の前にサキが立っている、これは死んだな。

おれは目を瞑り衝撃に耐える準備をする。

「……………」ギュー

「・・・あはははははははははは!!」

「・・・?」パチッ

眼を開く、するとサキが笑っていた、おれは助かったと思い力を抜く。

「いや、あんたからかうのおもしろいわね」

「・・・からかったのかよ!」

「だって反省してるんでしょ?」

「・・・してる」

「だったらいいわ、もうしないでね」

「・・・うん」

助かってよかったとおれは思った。

その頃

「霊奈、もう二人とも終わったからおれも終わっていいかな?」

「ダメ、応援は終わっていいから神社の掃除するわよ、その服で」

「・・・おれのこの姿を見て何の得があるんだあああああ！！！！」

涼のお仕置きは終わっていなかったようだ。

「さて、まずは技術からだな、おまえらは武器を使わないから妖力弾とかだな」

おれは簡易の戦闘技術教室を開いた。

「「「・・・」」」

「まずおれの戦いかただが・・・多数の小規模攻撃を扱って攻撃の向きを変えたり全発着弾させたりしている、でもお前らじゃまだ無理だから一個の妖力弾の操作からをマスターしよう」

おれは妖力弾を一つ作り出す、三人もそれをみて妖力弾を作り出し、手に留める。

「おれの妖力弾の動きを真似してみてくれ」

おれは妖力弾を小さく8の字を描くように動かす、三人も同じように動かす、一つは余裕なようだ、二つにしてみよう。

「じゃあ次はそのままもう一つ作り出して8の字を描いてくれ」

二つ目・・・クリア

おれは少しずつ数を増やしながら進めることにした。

「清明が14個、紫が9個、道満が8個か・・・パワータイプの道満はともかく紫はこれができたほうがいいと思うぞ、結界だったら攻撃防ぐとき妖力たくさん食うだろ」

「妖力が多いから大丈夫よ」

「つい最近その妖力をたったひとり相手に使いきったんだろうが」

「うっ！」

「清明か道満、おれに妖力砲とか発射してみろ、妖力弾でもいい、おれがやめろと言うまで撃ちまくってくれ、紫はそこで見てろ」

「む？ いいのか？」

「・・・何かあるんでしよう、私が妖力砲、清明が妖力弾でお願い」

「そのとおりだ、おれがスタートって言ったら始めてくれ」

おれは清明たちから十メートルほど離れ戦闘状態の集中をする。

「・・・スタート」

その言葉と同時におれに妖力の攻撃が襲いかかる、おれはそれを・・・。

「シールド！」

まずは道満の妖力砲を斜めで受けたシールドで曲げる、その攻撃を利用して清明の妖力弾を撃ち落とす、撃ち漏らしたものはペンライトほどの大きさの妖力弾を横からぶつけギリギリぶつからないレベルに攻撃をずらす、そしてシールドで止めた妖力砲を遠隔起動の小規模妖力砲をぶつけこれもギリギリぶつからないレベルにずらす、この間1秒弱である。

「二人ともどんどん続けていいよ、紫、これが技術だよ、結界は本当必要なときに使うんだ、結界使用中は動けないから攻撃を受け続ける必要があるんだ、この技を見ても結界に頼ると言うか？」

おれは話しながらも二人の攻撃をずらし続ける、おれの立っている場所以外は地面はもう吹き飛んでいる。

「・・・結界だけじゃだめなのね・・・私もそれができるようになりたいわ!」

「・・・二人とも、止めてくれ」

おれの声で攻撃が止む、二人は息が上がっているようだ、おれはこれぐらい何の問題もない。

「とまあ、これがおれの技術だな、攻撃しても良かったがこれは戦闘じゃなかったから思考だけ戦闘モードでやったよ」

「はぁ・・・はぁ・・・手加減してその強さか・・・どうなってるんだ?」

「はぁ・・・はぁ・・・疲れました・・・攻撃が通らないから精神的にも疲れます・・・」

「休憩するか?」

「「「そうさせてもらいます」」」

おれたちは休憩をすることにした・・・のだが・・・?

「こらぁ!! 神社破壊したのは誰!?」

霊奈がこっちに走ってくる、おれはそれに「「コイツです」」裏切りやがった!!!!

「ほぉ・・・博麗の巫女の神社を破壊するなんていい度胸じゃない・・・」

強烈な殺気がおれを襲う。

「・・・どれぐらい強い・・・？」

おれは清明と道満に質問をする。

「・・・怒ってるときは無敵です」

「死なないよう頑張れよ」

「見学に徹するからがんばって、技術を見せてもらおうわ」

・・・。

戦闘が開始される。

たくさんのお札が飛んでくる、おれはそれを同じ数の妖力弾で全て撃ち落とす。

「落ち着け！　ちゃんと元に戻すから！」

「うるさいわよ！　そういう問題じゃないの！」

「どういふ問題だ！」

おれは攻撃を避けながら質問をする。

「・・・酒蔵が吹っ飛んだのよ！！！」

「酒ぐらい何とかするから攻撃をとめろおおおお！！！」

「そういうもんだいじゃない！！　封魔陣！」

ギョルギョルギョル・・・ビシッ！！

「ぐっ！」

「捕まえたわよ・・・！　覚悟しなさい・・・」

霊奈が詠唱を始める、おれを殺す気かアホ。

「ブラスト！」

「きゃっ！」

手を全力で動かし霊奈を吹き飛ばす。

「だあああああああ！！！」

おれは妖力を流しこみ封魔陣を破壊する。

ビシビシビシ・・・バリーン！！

「なっ！ 破壊した！？」

「フレアランス！」

おれは炎の槍を作り出し連続で攻撃をする、霊奈はそれを結界で防ぎ始めた。

「・・・！ 5連突き！」

おれは五連続で結界の一部分に集中攻撃をする。

「シャイニングブレード！ シャイニングフレア！ クイックブレイド！」

おれは連続攻撃を繰り返し霊奈の動く暇を与えない。

「パワートウルー！！」

おれは剣を後ろに引き妖力を剣に集め・・・貫く！

ズバユ！

おれの剣は結界を霊奈の顔を掠めるように貫いた。

「と・・・投了よ」

霊奈は両手を上げお札を地面に置く、おれはそれを見て武器を消した。

「・・・怒って戦ったのが間違いだったな・・・怒らずに戦えばいい勝負ができただろうに・・・」

「・・・悪かったわね・・・、それよりお酒どうにかしてちょうだいよ」

「米酒？ 芋酒？」

「両方をたくさんで、あと大きな蔵建ててちょうだい」

「おいおい、それが目的か・・・」

「ばれましたか、でもお酒は必要だから」

「へいへい」

おれは創造の能力を使いいろいろな物を作り始めた。

夜

「紫、藍はどうした？」

おれは紫の元に行き、聞いた。

「いま鬼と話し合いしてるわ、用事があるの？」

「いや、別にいなくても構わない、お前に用事があった」

「な・・・何かしら？」

なんで顔が赤くなるんだ、夢の話なのに・・・。

「お前の夢の国をいつ作るかだ」

「・・・・・・・・」

なんかイラッとしてる・・・？

「なんだ？ 作らないのか？」

「作るわよ」

「だったらいいが・・・いつごろ作る予定だ？」

「・・・あと5年は待っておくわ、彼女たちを倒さないと安心できない」

「・・・そうだな、だったらちゃんと修行しような、サボりやがって・・・！」

「え？ そ・・・それはがんばろう！！！」

「明日からがんばろうな」

おれはそう言って今日は寝ることにした、今日は疲れたなあ・・・。

そのころ・・・

「うっ・・・！ 痛いです・・・」

「レヴィル、頑張ってくれ、腕を治している」

私の傷は闇ですぐに治るがレヴィルたちはそうはいかない、回復をするか時間を掛けるかしないと治らないのだ。

「ルーミア、ディーの治療が終わったぞ」

後ろから誰かが話しかけてくる。

「手伝ってくれ、私じゃ力不足だ・・・」

「フン・・・任せろ」

「すまないな・・・」

「クリエイション」

そうつぶやいたかと思うとレヴィルの腕が治っていた。

「早いな・・・回復が得意なのか？」

「イヤ、ただ作ったただけだ、回復はしているわけじゃないから一週間ぐらい安静にさせてろ、それよかいつ攻め込むよ？」

「そうだな・・・5年以内には攻め込みたいと思っている」

「そうかい、だったら忠告しておく、今回と同じと思って攻めたら負けるからな」

私は忠告してくれた黒髪の男に礼を言うことにした。

「ありがとな、サツキ」

第二十六話 力の解放（後書き）

読んでくれてありがとうございます、この話もう終盤です、最後まで読んでくれると嬉しいです。

番外編 覗きの会（あんまエロくない）（前書き）

どうも、葉っぱです。

あんまエロイもんじゃないです、やっぱ難しいです・・・。

番外編 覗きの会（あんまエロくない）

おれたち三人は誰にも見つからないよう完全隠蔽状態で走っていた。

「あとどれぐらいだ」

おれは戦鬭を走る涼に質問をする。

「もうすぐ着くぞ」

「あと五分ぐらいじゃね？」

「そうか」

おれはそれから言葉を発さず後ろをついていく、え？ 何してるかって？

・・・覗きです。

「よし、あの木の上だ、あそこが一番のスポットだ」

涼が木を上り始めたためおれはあわてて止める。

「なにか忘れちゃいないか？」

「え？　なんだ？」

「ヒントはカズマだ」

涼が周りを見渡す、当然ながらおれしか見えない。

「薬飲んでもっと近づきやいいだろうが」

「あ！！」

涼はいま思い出したと言いたげな顔で叫んだ。

「じゃあいくぞ」

おれは能力で、涼は薬で姿を消し温泉に近づいた。

紫SIDE

誰かに見られてる、私はそう感じ、周りを調べる、しかし誰もいない、気のせいだろうか……？

「どうした紫、はやく入るぞ」

清明にそう促され私たちは温泉に入る。

「……湯気で見えないんだが……」

おれは写真をとりながらそう呟いた、すると隣の涼が話しかけてくる。

「それがいいんじゃないか、湯気でぼやけて見えるレベルの覗きを楽しむ、これが普通だろ」

「……なんか損した気がするような……してないような……」

「？」

「・・・涼、カズマ、おれ帰るわ」

「おいおいおい！なんでだ！？」

「なんか嫌な予感がしてな」

おれは温泉の逆方向に一步踏み出したそのとき・・・。

ギュルギュル・・・バチーン！！

「「うおおおおおおおおお！！」」

二人が捕まった、封魔陣のようだ。

「二人のことは忘れない、頑張って生きろよ」

ガッ！

歩きだしたおれの両肩が二人に掴まれる。

「おいおいおい！おれたち置いてどうする気だ！」

「一人で逃げるのは許さない！おれも連れてけ！」

「離せ！おれはまだ死にたくないんだあああああああ！！！」

奴等がくるのにもう時間がない、急いで逃げなければ！

「見つかる前に逃げさせろ!!」

「いっしょにいてやるよ!　ひとりぼっちで逃げるのは寂しいもん
な!!」

「杏子さんの真似か!？」

「過去のバカなおれをどうにかしてくれ!」

「そっちはまどかか!？　生憎おれは時間移動できねえよ!!　カ
ズマが自分で何とかしろ!」

そのまましばらくギャーギャー騒ぎ続ける、するといきなり二人が
静かになる。

「「あ・・・・・・・・」」

視線はおれに、いや、おれの後ろの空間に向けられていた。

「・・・・・・・・?」

おれはゆっくり後ろを向き始める、するとそこには・・・。

「ちよーっとおはなししようか?」

「温泉に浸かりながらでもいいぞ、頭を温泉に沈めるが」

女性組が勢ぞろいしていた、おれたち三人は逃げるのをあきらめた。

「「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああ!!!」」

終了

番外編 覗きの会（あんまエロくない）（後書き）

ありがとうございました。

第二十七話 戦闘訓練、得意なものを教えよう（前編）（前書き）

どうも、葉っぱです。

なんかスランプ？になってるみたいです、思うように書けません・・。

第二十七話 戦闘訓練、得意なものを教えよう（前編）

「修行するぞ！」

おれはみんなにそう言った、みんなが　はあ？　って顔でこちらを見る、その顔はもっともだ、ここにいるメンバーはすでにそこらの上級妖怪に引けをとらないどころか圧倒できる实力はある。

「どうして修行をするんだ？　おれたち強いぞ？」

カズマが聞いてくる、おれはそれにこう答えた。

「おれと紫が死にかけたのを覚えてるか？」

「・・・ああ」

「そいつらがまた来る可能性があるってことだ、来ないならこないで未来の強敵が現れた際の先行投資ってことでいいし、来れば備えていたことが役に立つ、ダラダラしてるよりはやってみても損はないと思うが？」

おれ自身最近修行ができていなかった、戦闘技術はどれだけあっても役立つことはあっても困ることはない、ダラダラして待つのは愚策だ。

「・・・それも一理ありますね、くるとしたら今度は確実に殺せると考えてくるはずです、死体がないのはもう確認してるでしょうしね」

「もう時間はないな・・・各自得意なことを教えるのはどうだ？
ちなみに私と道満は召喚だな」

「おれは圧縮と収縮だぜ！」

「私は封魔・・・かな？ それとスペルカードね、紫の術式が雑だったから書き換えたわよ？」

「ちょ！ 勝手にしたの！？」

「四人は賛成のようだな、ちなみにおれはいろんな技術だ、妖力弾の操作とかだな」

おれはそう言い、残りの三人を見る。

「賛成よ、あの時みたいになられたくないわ、結界とかシールドの防御は任せてちょうだい」

「おれは武器の扱いだ、特に刀だな、まあサツキは教えてもらわなくてもいいだろ、おれと組み手してくれ」

「私は拳法かな、かなり強いと思ってるわ、涼と靈奈は接近戦の手段持つといったほうがいいと思うわよ」

全員賛成だな、それじゃあ修行メニュー考えるか！

「今日のところは無しにしよう、おれがメニューを考える」

「」「」「賛成！！」「」「」

「やっぱお前らランニングだけしてこい、湖五周な」

湖一周5キロはあると思う。 5×5＝25キロだな。

え？おれが走ったか？ もちろん走ったさ、朝に10周ぐらい。

「・・・こんなもんかな」

おれは作ったメニューを書いたポスターを壁に貼る、食事はおれが創造でやるから問題ない。

「さて・・・時間余ったし・・・」

おれも湖軽く10周してくるか。

湖で走り終わったおれは湖で泳ぐことにしている、湖が冷たくて気持ちいい、みんなも泳いでいるようだ。

「お、そうだ」

おれはあることを考え実行をする。

「・・・ブラスター」

おれは湖の中に溶け込み、したから妖力弾を全員に撃ちこんだ。

『うおおあああああああああああああああ!!』

HIT!! 声からしてカズマだろうか・・・? 他のみんなは避けたのになんで当たってるんだ・・・。

『どこだ!?!』

『・・・敵です! 索敵お願いします!』

少し遅れて声が聞こえる。

『落ち着きなさい! 水につかってちゃ動きが鈍るわ! 陸に上がるわよ!』

さすが清明と道満、反応が早い、ほかはおそいな・・・ん？ あれ？
水中に誰か・・・？

少し離れたところにいる霊奈を見る、口が少しだけ動く、おれは読唇術でなんて言ったかを推測する。

「・・・むそうふういん？」

そう推測したと同時に無数の光の弾が発生する。

「・・・・・・・・・・／（＾Ｏ＾）／」

ドオオオオオオオオオン！！！！

おれの体は湖を飛び出し宙を舞った。

「死ぬかと思った・・・！」

お酒の時の比じゃない、どう考えても紫・清明・道満より強い、師匠を越えるってどういうことだ、あの二人現役どころか全盛期がず

っと続いているはずなのに・・・！

そんな考え事をしていると後ろから声を掛けられ、肩に手が置かれる。

「死ぬかと思ったんじゃないのよ？」

声の主は霊奈だった、霊奈は微笑んで言葉を続ける。

「・・・これから死ぬのよ」

その言葉を言ったときの笑顔はとても綺麗だったことを覚えている。

一つだけ言っておこう・・・

・・・博麗の巫女を怒らせるな。

戦闘結果は・・・・・・・・本気出して死にかけたの久しぶりだよ、うん。

次の日

生傷・骨折・大量出血の大ダメージのおれは修行を休ませてもらい、
霊奈と涼の二人が修行を担当する。

「まずはおれの方からさせてもらうぜ」

・・・おれは見学に徹しよう。

「まずはおれの技を見てもらおうかな」

涼は杖を構え魔力を集める、数秒後・・・。

「マスタースパーク!!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!
・・・ドツゴオオオオオオオ!!!

「・・・なんつー破壊力だ・・・」

「技ってより力の塊じゃないか？」

涼の発射した圧縮砲は地面を削り、山を一つ破壊した、おれ？無理だよ。

「と、まあこんなもんだ、これがおれの圧縮砲、戦闘はパワーだぜ!!!」

「ま、やりすぎだと思うわよ？ 次は私ね、スペルカードの術式を書き換えてみたわ、涼、使ってちょうだい」

「おう！」

涼がスペルカードを受け取り発動をする、涼のスペルカードは光り輝いて消え、力が残る。

「マスタースパーク!!」

ゴオオオオオオオオオオ!!

さつきより威力は低いが消費魔力の面を考えるとこっちの方がいいだろう、決め手には自分でやる、普通はカードを使う、いい方法だ。

「このカードはかなりいい、霊奈、みんなの分用意できるか？」

「ん、報酬さえもらえればなんとも」

「よし、立派な神社を「もう一声」・・・立派な鳥居もつけよう」

「もうすこし!」

「よし! 階段と道を整備して賽銭箱もつけよう」

「のった!」

「・・・よし、わかった、まずおれの傷治してくれ、じゃないとで
きない」

「治癒結界」

おれの体が一瞬で治る、すげえ!

「じゃ、約束どおり・・・といきたいところだがこのまますると中
の物が消えるぞ?」

「! すぐ何とかするわ!」

霊奈が神社に入って数時間後、裏には中の物がすべておいてあった。

「じゃあはじめるか！」

おれは神社を完全消滅し、神社を建て直す、そのあとほかのを作った。

「よし、これでどうだ？」

「一晩でやってあげるわ」

ガシッ！

おれと霊奈は握手を交わし、別れた。

火曜日

「ようし！ 今日はおれとサキがやるぜ！ サツキはおれと組み手だ！！！」

そういつてカズマがおれに切りかかってくる、おれはそれを・・・、

「シャイニングブレード！」

ガァン！

叩き落とした。

「まだまだだな、おれのほうが強いぜ」

「ま、こつちも本気だしちやいねえよ、組み手再開しようぜ」

「全力ですか？」

「いや、身体に負荷を掛けてからやろう、本気でやったらこころ一帯吹っ飛ぶ」

「・・・そうだな、負荷掛けるぞ」

「よろしく」

おれは負荷を掛け、斬れない剣を二本作り出し、一本ずつ構える。

ちなみに負荷はランダムだから互いにどこに負荷がかかってるかとは分からない、戦いながらそれを見つけるのだ。

「いくぞっ！」

おれとカズマは戦闘を開始する。

右か・・・左か・・・。

おれはカズマの動き・・・いや、初期動作を見逃さないように集中モードに入っていた、周りの音が遮断される。

右足の踏み込み・・・上段か！？

ザッ！　ダッ！

おれは右に避け、前に飛び出しながら剣を斬りつける。

「ぐっ！」

おれの斬撃はカズマの腕を掠めながら空ぶる、流石にこれじゃダメか。

剣が少し動く、おれはその場にしゃがむ、その一瞬後に剣が一瞬前に頭があつた場所を通り抜ける。

「しまっ「もらつたああああ!!」

おれは剣の平を頭にぶつけ、体勢が崩れたところに剣を首に突き付ける。

「おれの勝ちだな」

「へいへい、降参ですよ」

周りの音が戻りはじめる、おれは握手をしてカズマとの修行を終え、サキの方を見ることにした。

サキSIDE

少し離れた場所で二人が撃ちあっている、状況を見るにサツキの勝

ちだろう、私は分かりきった結果を見るわけもなく、こちらでも修行を開始することにする。

「えーと、まずはじめに・・・私は自衛の手段を教えようと思うわ」

「え？ 倒す手段を教えてくださいるんじゃないのか？」

と、涼が聞いてくるので、それに答えることにする。

「それを教えるとなると十年以上かかるし・・・それに自分の得意なことでも相手を倒したいでしょ？」

「うーん、確かに一理あるわね、一応倒す手段は持っているけど接近戦はあまりできないのよね」

さすが霊奈、よくわかっている。

「なるほど！ 頑張って覚えるぜ！！」

私は修行を開始することにした。

「え〜とまずは涼、前に出てきて」

私がそう言うのと涼が前に出てくる、私は拳を寸止めで放った。

シュッ！！

「うつ・・・！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ん？」

涼が恐る恐る目を開ける、私は涼の頭を軽く小突く。

コツン

「目を瞑っちゃだめよ、相手の動きが見えなきゃどんな技術を持ってもなにもできないわ」

サツキを除いて。

「だからまずは目を瞑らないようにしないとだめよ」

「でもいきなり目の前に攻撃がくると怖いぜ？」

「だから修行するんでしょうが」

私はそう言った後・・・

ダッ！ ヒュッ！

霊奈に拳を寸止めで放つ、霊奈はそれを目を瞑らずに、そして手に持っている棒を拳に添えていた、離れているところからやったとはいえかなりのスピードだ、それをここまでするのはかなりの動体視力があると言うことだ。

「危ないわね・・・、サツキと戦つてよかったわ・・・」

「ああ、酒蔵破壊の？」

「いえ、湖の妖力弾」

「ああ、あのときのサツキだったのか」

私は笑いながら話す、霊奈はある程度できてる、でも純格闘タイプの相手がくるとやられる、これは断言できる、なぜなら本気でやっていないからだ、今回は『確実に』当てない、それが分かっていたが、実践ではフェイントと本命の一撃を混ぜながら戦う、それを体験しないとだめだろう。

「霊奈、あなたはある程度出来てるわ、でもそれじゃダメ」

「どうして？」

「フェイントの存在を知らないから」

さっきの攻撃の最善の対処方法は後ろに一気に下がっていきながら

牽制の攻撃をすることだ、あの棒じゃ本気の一撃をずらすことは出来ても当たらない事はない、それは確実だろう。

「ま、いいわ、これからしばらく教えるから覚悟しなさい！」

「わかったわ」「わかったぜ！」

水曜日

「今日は私の結界よ！！」

その言葉からはじまった今日の修行はおれはやらないことにして自主トレをすることにする、なぜかって？ おれは昔の紫と戦うために防御の才能を全て捨てたからだ、防御技術（受け流しなど）はあるが防御力（結界・シールド）は高くない、それがおれだ。

紫SIDE

サツキは私の言葉の後すぐにどこかに行ってしまった、しかし私はそれになにも言わない、防御の才能を放棄させたのは私だからだ。

「・・・はじめるわ」

「サツキはいいのか？」

「サボりだぜ〜？」

「いいのよ、彼は結界とか使えなくても別の手段で補っているから」

「それもそうね、私が湖でサツキと戦ったときはとても疲れたわ・・・」

「まあそれよりはじめるわよ」

第二十七話 戦闘訓練、得意なものを教えよう（前編）（後書き）

更新をできる限り早くしようと思います。

第二十七話 戦闘訓練 得意なことを教えよう (後編) (前書き)

どうも、葉っぱです。

.....おれの.....一週間以内投稿記録が.....!!!!!!

第二十七話 戦闘訓練、得意なことを教えよう（後編）

おれは森に来ていた、いろいろな仕掛けをするためだ。

おれは一定間隔に一つずつ撒いていく。

「こんなもんなかな・・・」

おれはこの作業を数時間続け、ようやく終了したところだ。

そろそろ一休みするか・・・。

紫SIDE

「結界は妖力をたくさん消費するし展開にも時間がかかるわ、でもね、何点かシールドよりも優れた点があるの、わかるかしら？」

「わかんねえ」「わからないぜ!」「知らないわ」

・・・よし、後でカズマ・涼はお仕置きね、霊奈は別だけど。

「・・・全方位防御ですよね」

「そうよ、さすが分かってるわね、ほかはわかる?」

「・・・わからないです」

「そうね」

わたしは二つ目の利点を分かりやすく説明するための手段を考える、数秒後一つの案が出た。

「カズマ、涼、サツキ連れてきてちょうだい」

「「断る」」

「あら? サツキの代わりに実験台になってくれるのかしら?」

「「よろこんで行ってきます」」

ドッゴオオオオオ！！

「うおああああああ！　いきなりなんだ！？」

地面がいきなり爆発し、爆風に巻き込まれ吹っ飛ぶ。

「サツキィ！！　覚悟しろお！！」　「スペルカード発動だぜ！」

「おまえらかああああああああああ！！」

涼がマスタースパークを連発し、それをカズマが回復させる・・・、
凶悪なコンビだ・・・。

「マスタアアアスパアアアク！！」　「時よ戻れ！！」

「うおおおお！！　当たったかどうか？　死ぬだろう
！！」

「知るかぁ！！　サツキを連れて行かないか？　おれらが死ぬんだっ
つ！！」

「おとなしく俺らに捕まるほうが身のためだぜ！」

「捕まったらおれが死ぬんだろうが！！」

「「そのとおりだ！！」」

「肯定すんな!! おれも攻撃すつぞコラァ!!」

おれは剣を作りだし、地面を蹴る。

ガチッ!!!

「え……?」

おれの手……いや、腕に結界が生えている。

『これが結界の利点の一つ、座標展開よ、こうやって相手の動きを止めるのよ』

『なるほど』

『……ためになります』

『難しそうだな』

『ほかには何があるんですか?』

おれは声の聞こえた方向に顔を向ける。

「……お前らもグルかあ!!」

そう叫んだ瞬間もう片方の腕を何かが貫いた。

『これは座標展開の応用でね、こうやって相手を貫けるのよ、それからさっきのも結界で切断できるから』

その言葉と同時に腕が下に落ちる。

「説明なんてどうでもいいんだよ!!」

おれは結界を破壊し、身体を再生させ紫たちに突っ込む。

『最後はこうするのよ』

ドゴッ!! 「あがつ!!」

いきなり目の前に何かが出てきた。

「結界か・・・!!」

おれは結界に激突し、閉じ込められた。

「さて、サツキを連れ帰るわよ、カズマ、涼、ちゃんと連れてくるのよ」

「了解です」

おれは結界の牢獄に閉じ込められた状態で神社に運ばれた。

「いい加減に機嫌なおしなさいよ・・・」

「・・・・・・・・」

おれは紫の言葉を見無視する。

「えと・・・無言はやめてもらえる・・・？」

「・・・・・・・・」

お、紫が涙目になってきた。

ちなみにこのやり取りは神社に着いた頃からずっとだ。

「その・・・何も言わずに実験台になってもらったのは謝るわよ・・・その・・・機嫌なおして？」

「・・・・・・・・」

おれは立ち上がり、庭に出る。

「・・・・・・・・」

紫が涙目でこっちを見ている。

「・・・・・・・・紫、おれの技の実験台」

「・・・・・・・・え？」

「新技やるから結界貼れ」

「わかったわ！」

紫は結界を数個設置し、離れる。

「絶対にまわりに気付かれないようにしてくれ」

おれは紫にそう言い、技の発動を開始する。

「・・・・・・・・ふう、疲れた・・・・・・・・」

おれはその場に座りこむ。

「・・・サツキ、今は・・・？」

「新技」

おれは状態変化を解き、槍を振り回し始める。

「そうじゃなくて！ あの状態って・・・」言うな、誰にも

おれは紫の言葉を止め、槍技の練習もする。

「ストーム」

おれの槍に風の刃が出現し、結界を傷つける。

「・・・その状態のこと・・・いつでもいいからちゃんと教えてね・
・・・」

「・・・ああ」

紫は部屋に戻り、おれ一人が庭に残される。

おれは明け方近くまで修行をし、睡眠についた。

次の日

「清明と道満は何か教えてくれないのか？」

そんな涼の言葉からはじまった修行は・・・。

「力を借りる・・・？」

「そうだ、私と道満が戦うときに使っているだろう」

青龍とかだな・・・。

「へー、そりゃたのしそうだぜ」

「どうやってするんだ？」

カズマが清明に質問をする。

「・・・簡単に言えば精霊と交渉してください」

「なるほど、わからん」

「右に同じく」

「私にも分からないわよ」

「……………」

清明と道満がおれの方を見る。

「……………はぁ……………おまえら、おれが今からそれをしてみるから見てろ」

おれたちは森に移動した。

「……………このあたりかな」

おれは森の中の湖に来ていた、ここは妖精たちがたくさんいるから力を借りるのは他の場所よりは楽だろう、それからここには強い存

在がいる。

おれは白い翼を展開し、湖の中心（半径1～2キロある）まで飛び、力を貸してくれそうな妖精を探す。

「どこかなつと・・・」

おれは周りを見渡し妖精の姿を探す、しばらくすると二人の妖精が現れた、おれは二人に話しかける。

「ちよいと、その妖精さん」

「・・・ん？アタイたちになんか用？」

「チ・・・チルノちゃん、そんな言葉遣いしちゃダメだよ」

なるほど、青いほうの妖精はチルノっていうのか・・・。

「えーと、チルノっていうんだね、おれはサツキ、・・・妖怪だ、べつに取って食おうって訳じゃないから安心してくれ」

おれは妖怪と紹介した瞬間二人の顔が険しくなるのを見て最後のを付け加えた、逃げないところを見ると一応は信用してくれるらしい。

「妖怪がアタイたちになんの用事？」

「力を借りたい」

おれはまどろっこしいことを言わず、二人に言った。

「なるほど！　さいきよーのアタイの噂を聞いてきたんだね！」

「・・・まあそんなとこだ」

おれは嘘をついてるが、この妖精たちが力を持っていることは間違いない、この大きい湖の温度を下げるほどの力と、温暖なところにしかないはずの妖精が一緒にいる、おそらく二人の妖精の属性は氷と風だ。

「ようし！　じゃあアタイたちと勝負をしてからだ！」

「えと・・・、チルノちゃん、止めといたほうが・・・」

「大丈夫だよ大ちゃん！　アタイはサイキョーだから！」

あるえ？　なんか戦いに来たことになってる・・・？

「ヘイルストーム！！」　「ソニックブーム！！」

吹雪が吹き荒れ、視界の悪いところに不可視の風の斬撃が飛んでく

る、視界さえよければ空気の流れである程度はわかるんだが・・・。

「ファイアウォール！」

おれの目の前に炎の壁が現れ、吹雪を完全に溶かし、風の斬撃を取りこみ威力を上昇させる。

「トルネード！」

おれは炎の壁に向かって風の竜巻を打ち出す、すると炎の壁を巻き取り、炎の竜巻・・・ファイアトルネードが完成する。

「おらぁ!!！」

おれはそれを妖精たちに投げつけ、他の技の準備にとりかかる。

炎の竜巻は炎が消え、ただの竜巻となる、おれはそこに尖った石を数百個ほど作り出した、その石が混ざり、竜巻の中には石がたくさん回転している。

「これぐらいの攻撃アタイたちには当たらないよ！」

「でも結構強い竜巻だよ？」

「エクスプロージョン!!！」

ドゴオオオオオ！

おれは黙って竜巻の内部の石を一つ爆発させる。

「うわっ!」「きゃっ!」

「石の破片は痛かったかい?」

おれは竜巻を内部から破壊し、石をばら撒いた、それだけで十分な攻撃となる。

「いきなりなにすんのよ!!」

「いや、戦いだよね?」

「そうだよ!」

「.....」

だめだ、話に通じてない、負けてやったほうがいいかな.....?

「チルノちゃん、もうやめようよ.....」

「だいじょうぶだよ、パーフェクトフリーズ!」

おれは飛んできた妖力弾を最小限の動きで避ける、どこが凍らせる
なんだ.....?
フリーズ

おれは弾を全て避けきり、チルノの方を確認する。

「.....まだ続けるのか?」

「そうだよ!私の必殺技をくらえ!」

チルノは氷の塊を作り出す。

「グレートクラッシュャー！！！！」

スピードは（おれにとっては）あまり早くない、時速100kmぐらいか・・・？　これなら簡単に避けれるな・・・横に避けるには結構動く必要がある・・・後ろに下がろう。

ドンッ

「なっ！？」

おれは背中になんかがぶつかったのを感じ、後ろを振り向く、そこにはさっきの妖力弾が空中に固定・・・いや、空中で凍って止まっていた。

おれは避けるのは無理と判断し、防御を取ろうとチルノのほうを向くが、遅かった。

ドガシャアアアアアアアアア！！

おれは正面から攻撃をまともに受け、大ダメージを受け、後ろにのぞける。

「アイシクルアタック！！」

「ぐあっ！！」

後方に向かってのぞけていたおれの胴に、弾丸のような速度でチルノが突っ込んでくる、おれはそれをまともに受け、凍った妖力弾

を突き破りながら後方に吹っ飛んで行く。

「まだまだだよ！」

おれが体勢を整えようとした瞬間、さっきまで凍りついていた妖力弾がおれに向かって飛んでくる。

おれはそれ避けることも受け流すこともできずそのまま食らう。

・・・強いな・・・、本当に妖精なのか？

「妖精女王・・・」
ティターニア

おれはそう呟いていた、この強さもそれなら納得できる、妖精にしては強すぎるのだ。

「あれ？ 生きてる・・・？」

接近したチルノがそう言ってきた、この言葉が出てくるってことは今までの妖怪はこの攻撃で死んでたのだろうか・・・？

「・・・ああ、生きてるぜ」

「アンタかなり強いね・・・」

「まあな」

「気にいったよ！ 力貸してあげる！」

「戦いはもういいのか？」

「うん！ 強い妖怪と分かったしね！」

「あっちの大ちゃんとかいう妖精も力かしてくれるのか？」

「大丈夫だよ、ねっ大ちゃん」

「はい、チルノちゃんが認めた相手なら大丈夫です」

「よし、契約するよ」

ん・・・？ そういえば・・・

「おれ、契約の方法知らねえ・・・！」

せっかく力かしてくれるのに・・・！！

「契約しないの？」

二人はなにか丸い球体の物を取り出している。

「するよ！ いや、したいけどやりかたがわからない！！」

ちくしょおおお！！ 気が変わったらどうするんだ！？ 清明の

アホ！！ 道満のバカ！！

「っ！！」

強烈な殺気がいきなり発生した気がする・・・。

そのころ

「どうしたんだよ、早く教えてくれよ」

「いや、なんかイラッときてな」

「・・・イラッときましたが早く続けましょうか」

「それにしてもサツキ何してるのかしらね」

「いや、わざと遠くに行かせて教えないなんてな」

「契約の方法知らないんですか？」

知ってる言っじゃあ早くやれ言われるのはだめだな・・・正直に言うしか・・・。

「・・・知りません」

「知らないのか、じゃあ教えてあげるよ」

おおお!!! チルノさんありがとうございます!!!

「ありがとう! 教えてくれ!」

「指の先でいいからちよっと切つてよ」

「りょーかい」

シュッ! ドクドクドク・・・

あ、切りすぎた。

「この後どうするんだ?」

「これに血を垂らしたら契約完了です」

二人が球体の物を差し出す、おれはもう一本指の先を切る。

「なんで切つてんの?」

「・・・同時契約だな、一人ずつ契約だとなんかあれだろ」

上下関係ができるやつだ、上司と部下の。

「さく、落とすぞ」

おれは指を球体の上に差し出し、血を垂らす。

ピチャ・・・カッ!!

一瞬光ったかと思うと、両手になにかのマークが浮かんでいた、なんだろう？

「契約完了です、私の契約は風の攻撃の威力が上がるのと、私自身の召喚です」

「アタイは氷の攻撃力が上がるのと、アタイの召喚だよ、妖力たくさん使うから使うときは気をつけて」

「ありがとな、さっそく戻ったら召喚するよ」

おれは二人に別れを告げ、清明たちの元へ向かった。

「契約して来たぞ」

「え!？」

「・・・教えてなかったのに!？」

「おいコラ、チョキでしばくぞ」

わざと教えてなかったのかよ・・・。

「おう、どんなヤツと契約してきたんだ？」

「おれは魔法の威力を上げてくれる霊だぜ！！」

「妖精二人だ」

「妖精ってかなり弱いわよ？」

いやいやいや、おれが湖の真ん中に向かった理由が分かんのかね、こいつらは。

「それは召喚を見てからいうんだな！！」

おれは手の刻印に妖力を流しこむ、すると二人の妖精が姿を現す。

「アタイ登場！」

「チ・・・チルノちゃん、落ち着いて」

「どうだ！？」

「「・・・！！」」

「「よわそうだな」」

「妖精って気まぐれなのよ、本当に契約してたのね・・・」

清明と道満は潜在能力に気付いたな・・・。

「涼、カズマ、二人と戦って見ないか？」

「弱いものいじめにならないか？」

「そうだぜ」

「二人は大丈夫だよな？」

「大丈夫だよ！」

「もちろんです！」

「だそうだ、逃げるのか？」

「・・・よし、やるか」

「泣くんじゃないぜ」

2VS2の戦いが湖上で始まる、さて・・・二人はどこまで戦えるかな。

カズマSIDE

「カズマは能力使用禁止な、マスパ連発されたらここら一帯吹っ飛ぶ、それから二人ともスペルカードは禁止だ」

「能力は自分にもダメなのか？」

「いや、自分になら構わないぞ」

「だったら余裕だ」

サツキはなに考えてるんだ？　こんな妖精二人おれだけで大丈夫だぜ……。

「チルノ、大ちゃん、おれの妖力はいくら使っても構わない、全力でやれ」

「わかった！」 「はい！」

「おい、涼、どうするよ」

「どうするも何も……やるしかないだろ……」

「だよなあ……」

「おい、開始するぞ」

おれと涼は湖の上を飛び、構える。

「始め!!」

「先手必勝! 一撃必殺! マスタースパーク!!」

巨大なレーザーが数十メートル先の二人の妖精に向かって突き進む。

ニヤリ

青いほうの妖精のチルノが笑った気がした。

「涼! 攻撃をやめろ!」

「あ? 何言ってるんだぜ、このままやれば」

「マイナスK!!」

涼のマスタースパークが突き刺さる瞬間、チルノが手で触れたところからレーザーが凍り始める、涼も異変に気付き、放出をやめた瞬間レーザーが全て凍りついた。

「な・・・!」

「あの二人強いぜ・・・」

サツキの妖力は全く減ってない、あの攻撃を妖精自身の妖力で発動させたのだ、舐めてかかると確実に負ける。

「あゝ、今のでやったと思ったんだけどなあ・・・」

「あの二人もなかなか強いみたいだねゝ、五割ぐらいの力で十分かな」

あれで本気じゃないというのか・・・、おれたちはヤバイやつを相手にしているようだ。

「ソニックブーム！」

ッ！！

シャツ！・・・ブシャアアアア！

半身をずらして、ギリギリ回避したおれの肩から血が吹き出る、どうやらあの距離からここまで飛ばしたようだ、風の攻撃は特に当てにくい攻撃なはずなのに・・・、サツキに近い技術を持っている・・・。

「さゝて、本番開始するかな、二人も本気でやってきてよゝ」

「そうですねゝ、サツキさんのほうが強いですよ」

・・・。

「降参だ！ おれたちの負けだ」

「はぁ！？ 何言ってるんだ、まだ負けちゃいないぜ！」

「力の差に気づけ！！ おまえのマスタースパークも右手一本で！
妖精自身の妖力だけで無効化されたんだ！」

「っ！ そ・・・それは、ほら、あれだよ、たまたま」

「納得いかないならおまえ一人で戦うか？ おれは止めないぜ」

「ねー！ 続けないのー！？」

チルノが巨大な氷の槍を空中に数百本ほど浮かべ、大妖精のほう
その槍に風の刃を付加している。

「よよよ呼んでるぞ、涼、行ってこいよ」

「ちちちちよつと腹痛だから遠慮しようかな」

やべえ、身体の震えが止まらねえ・・・！

「じゃあこっちから行くかー、アイスランサー・サウザント」

「・・・／＼（＾Ｏ＾）／」

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!!!!!」」

「どうよ清明！ おれの妖精は！」

「うむ、かなり強いな」

「・・・どうやって契約したんですか・・・」

「ああ、まあ軽く戦ってな、・・・あそこまで強いとは思わなかったが」

自称最強なだけはある、十分に強い。

「チルノ、だいちゃん、ありがとな、これはお礼だよ」

おれは板チョコを数枚ずつ手渡す、二人はそれを受け取った後湖に戻って行った。

さて・・・、

「二人の治療終わったか？」

「終わるわけないでしょ！ あんたらも手伝いなさいよ！！」

二人の治療を始めよう。

夜…博麗神社

シュシュシュ！ シャツ！

「・・・くっ！」

おれは庭で分身相手に技術を磨いていた、おれ自身が相手だから同じレベルの技術を持っているわけで、すんごい早く上達できる。

しばらく続けていると声がかかる。

「いつまで続けてるんだよ、もう4時だぜ？」

「早起きだな、涼」

「・・・ま、おれも修行をしようと思ってな」

「ほう、いい心がけじゃないか」

「妖精相手に負けちゃったからなく、契約した奴と特訓するぜ」

「どんなやつなんだ？」

「悪霊」

「・・・は？」

「ん？ あ・く・りよ・う」

「・・・いや、お前がいいならいいんだ、うん」

「ま、修行してくるからくんなよ」

「ああ」

「・・・おれもそろそろ寝るかな。」

午前6時

「お、紫、おはよう」

「あら、早起きね、いつごろ寝たの？」

「4時だぞ」

「・・・え？」

「4時だ、二時間近く寝たから十分だ」

人間の頃は寝てない日とか一週間に2～3日あったからなあ。

「今日は誰が担等だっけ？」

「・・・清明！道満！ちよつと来て！！」

少したった後に二人がやってくる。

「なんのようだ・・・、まだ6時過ぎじゃないか・・・」

「・・・もう少し寝させてくださいよ・・・」

「サツキが大変よ!」

「「・・・いつものことじゃないか(ですか)」」

「失礼だぞ、お前ら」

「いや、いつもおかしいけれど・・・、今回は本当にあれなのよ! サツキ二時間も寝てないわよ!」

「「っ!?!」」

「いや、毎日のことだぞ」

おれの言葉に三人が更に驚く。

「・・・大丈夫なんですか」

「ああ、大丈夫大丈夫、ときどき意識が飛び欠けたりしばらく飛んだりするぐらいだ」

あゝ、なんか妖力がうまく操れねえ、調子悪いな・・・。

「「「重症だ!!!!!!」」」

「だからいつものこと「今すぐサツキを寝せろおおお!!」」 うお ああああ!! なにすんだこらあああ!!」

いきなり光の弾飛ばしやがって・・・あ、なんかクラクラする。

おれは頭を押さえながら三人と対峙する。

「ソニックショット！」

「「「・・・・・・・・」」」 「あれ？出ないぞ？」

おれは集中するために目を瞑り・・・・・・・・目を瞑り・・・・・・・・
・あ、一瞬意識飛んできた。

おれの身体はすでに捕まっており、廊下を引きずられながら、寝室まで連れて行かれる。

紫SIDE

「ZZZ・・・」

「引きずられたまま寝たぞ」

「・・・どんな技術でしょうか・・・？」

「サツキは私たちの予想の上どころか別の次元に入っているわよ・
・」

私たちはサツキを寝室に放り込み、部屋を後にした。

ちなみに一時間後に庭で槍を振り回していたサツキを捕らえたのは
余談である。

第二十七話 戦闘訓練、得意なことを教えよう（後編）（後書き）

チルノたち強すぎかな・・・？ でもアンサイクロペディアでなんか色々書かれてたから問題ないよね。

番外編 サツキの一日（観察者：霧雨涼）（前書き）

どうも、葉っぱです。

あんまり楽しくないと思います、この話にも一応伏線のようなものがあるので読んでくれると嬉しいです。

番外編 サツキの一日（観察者：霧雨涼）

今回はこのおれ！ 霧雨涼が裏の主役だぜ！ いつでも起きてるサツキの一日を観察するぜ！！ このノートに記録しておくからあとで投稿してくれよな！

朝4時 神社裏庭

おれは神社の柱に隠れて観察中だぜ！

「サンダーブレイド！」 『メテオレイン！！』

バチバチバチバチ！！

お、あの技カッコいいな・・・パクろう。

「うおらああああ！！！！」 『だああああ！！！！』

サツキ（本体）が巨大な炎の球を雷の力を圧縮し剣に付加した剣で切り裂き・・・火の玉の塊の半分が広場に落ちて行った。

ズドドドドドガツツシャアアアアアアアア！！！！
ラアアアア！！！！ 『コ

『おれは分身だから本体に任せたぞ！』

「裏切るのかてめえ！！！！」

『ふっ、おれは自分の命が大事なんだ、それじゃな!』

「くそおおおお!!!!」

「『くそお』はこっちのセリフよ!　　なんと破壊するつもりよ!!」

「げっ!」

ぎゃああああああああああ!!!!

ふむふむ、午前4時から4時半まで修行・・・4時半から意識不明の重体と。

6時 神社近くの森

サツキは森に入り、大きな木の前に立っていた。

ダッ!

サツキはいきなり走り出す、気付かれたかと思ったが、その後の行

動でその考えはすぐに破棄した。

ダダダダダダ！

「木を走って登るのか」

ズルッ！ 「うあああああああ！！！！」

・ ・ ・ ドオオオン！

あ、落ちた。

「もう一回だあああああ！！！！」

6時〜7時前 エンドレスで木を走って登る。

7時 森の広場

「モンスターメーカー 魔物創造！！ ランダムモード！！」

その言葉と同時にたくさんの妖怪？がサツキに向かって攻撃を繰り出す、おれは加勢しようか迷ったが上空から見物することにする。

「鷹目！」

おれは魔法を発動し、サツキを見る。

・・・攻撃が当たってない・・・？

サツキは魔物の攻撃を全て数ミリの空間を残して全て避けながら倒している。

数時間後・・・血まみれのサツキ（全て返り血）が一人立っていた。

「さして、帰るか・・・」

サツキは翼を広げ神社の方向に飛んで行った。

7時～10時 実戦形式の特訓。

11時 神社

サツキに遅れる事三十分、おれは神社へと帰宅した、おれはサツキのいる部屋に耳を傾ける。

「霊奈、中と外どっちに出せばいい？」

「中に決まってるでしょ、汚れるじゃない」

おいおいおいおい！ なにしてんだよ！！ 霊奈もなんか言えよ！！

「じゃあ中にするぞ」

「うん、お願い」

よし、事故を装って扉を吹っ飛ばそう、うん。

タタタタ

おれは扉から少し離れて魔法を発動する。

「メテオアタック！！」

ゴォッ・・・ドバァン！！

メリッ！ 「ゴベッ！！」

そんな音が似合うほどドアがサツキの頭に突き刺さった。

ドクドクドクドク・・・。

おお、部屋の中が真っ赤に染まる・・・ついカッとなってやった、後悔はしていない。

「ちょ！ 何してんのよ涼！！」

「え？ 服を着てる？ エプロン？」

「料理中なんだから当たり前でしょ!!」

おれは周りを見渡す、すると作りかけのハンバーガーとゲチャップの容器がサツキの手に握られていた。

ダラダラダラ（汗）

おれの体からものすごい勢いで汗が流れる。

サツキはピクリとも動かない。

「・・・どうすんのよ涼」

「治療してあげてください」

「まあするけど・・・さ」

ぱああああ・・・

緑色の光がサツキの傷を癒していく、おれはその隙に部屋から逃げ出した。

11時～11時半 料理中に大ケガ（原因…おれ）

12時 食事

「なんか頭が痛い、でもそのときの記憶がない、ケチャップを中と外どっちに出すかを霊奈に聞いてた記憶だけはあるんだけどなあ・・・」

「なんか血の味がするわね・・・霊奈料理中に指切った？」

「切ってないわよ、ねえ涼？」

「そそそそそそうだぜ、霊奈がケガするわけないぜ」

「ん？ 涼は調理場にいたっけ？ おれ記憶がないんだけどなんか知らねえか？」

「涼が知ってるわけじゃないか、こいつ料理できないじゃないか」

「それもそうだな・・・、ちょっと頭がクラクラするし午後の修行は休もうかな・・・そういえば紫、藍はどうしてんだ？」

「んゝ、鬼と天狗の所で修行中よ」

「・・・九尾も修行ですか・・・死にかけてるんじゃないですか？」

「鬼相手だからな・・・」

「あゝ、鬼と戦ったときは全身の骨が折れたな・・・、一箇所に攻撃を集中させて最後に上空からの全力の蹴りで引分けにまで持ち込めたよ・・・」

「私の時は結界が全て破壊されたわ・・・」

・・・やばいやばいやばい！！　いい出せなくなったあああああ！！！！　鬼相手に引き分けの相手に言えるかあああああ！！！！

12時～12時半　食事終了

13時　居間でゲームを・・・（メンバー　おれ、サツキ、カズマ）

「おれにアクションゲームで勝てると思うなよ！」

「じゃあ今回はシューティングゲームしようじゃないか！」

「よっしきたあああああ！！！」

おれたちはヘルメットつぽいものをかぶり、ゲーム内に入り込む。

初期位置は草むら、武器はスナイパーライフルとハンドガン・・・
他爆発物・・・強い武器じゃね???

ガサガサ・・・

おれは草むらから銃身を出し、スコープを覗き込む。

「・・・普通に立ってるな」

「そうだな」

・・・え？

「うおおおお!! カズマああああ!!」

おれはハンドガンホルダーから引き抜き「まで待て!! 味方だから! 組んでサツキを倒すぞ!!」

「・・・信じよう、お前の武器は?」

「小型マシンガン二丁とロケットランチャーだ、爆発物はお前と同

じだろう」

「なるほど・・・よし、殺るぞ」

おれはライフルのスコープを、カズマはマシンガンを構え引き金を引く。

パン！ ギン！ ズダダダダダダダダ！ カカカカカッ！

「・・・なんで銃弾を切れるんだあああああ！！！！」

叫びながらも撃つのはやめない、カズマはロケランを取り出しサツキに撃ちこんだ。

ドオオオオオオン！！ モクモクモク・・・

黒いけむりに覆われサツキのいたところが見えなくなった、・・・
やったか？

ブアアアアッ！

けむりの中からサツキが飛び出してきた、ロケラン当たったよな・・・？

「うあああああああ！！！！」

パン！ パン！ ズダダダダダダダダダダ！ ドツゴオオオオオオオ！

数秒後・・・

「おれの勝ちだ」

「・・・投了だ・・・」

首筋に剣を突き付けられたおれたちの図があった。

13時～15時 サツキ無双

16時 アニメ観賞

「おう、サツキ、なに見てるんだ？」

サツキがアニメを見ているとカズマがやってきた。

「魔法少女まどか○マジカ、今一話だ」

○の位置が卑怯だぞ、サツキ。

『ぼくと契約して魔法少女になってよ!』

「よし、一話終了、次は二話だ」

『交わしたやゝくそく、忘れないよ（ry』

『ティロ・フィナーレ!』

「三話」

『早く僕と契約するんだ!』

『その必要はないわ』

ドオンドオンドオン!!

「・・・マミさあああああん!!!!!!」 「マミッたあああああああああああ!!!!!!」

「でも、無双シーンは参考になる・・・今度練習しよう」

「敵に首を食われないようにな」

「そんな敵いねえよ」

「それもそうだな」

このアニメ契約ばっか言ってるな・・・、ノルマでもあんのか？

「よし、全話見終わったから三話の無双シーン再現してくる」

「おう、おれもつきあうぜ、とはいっても見学するだけだな」

よし、おれもこっそりついていこう。

「よし、モンスターメーカー、ランダムモード」

たくさんの魔物が無作為に選ばれ出現する。

「おれはマスケツト銃使えねえし剣でいいかな、さやかさんも剣投げたし」

そう言って練習を開始する。

数十分後

「うおおおお・・・、まさかおれにこんな才能が・・・！」

「ずるいぞサツキ！ おれもやりたい！！」

「いや、おまえ刀五本しかもってないだろ、あのシーンの再現どうするんだ？」

そう言いながら手を振り剣を出現させたり身体から剣を出したりしている。

「刀五本でがんば「がんばるがんばらないじゃなくて数の問題だろ？」だよなあ・・・」

「まあ諦めろ、これはおれの能力限定の技だ」

「ちくしょおおおお！ おれもすごい技編み出してやるからな！

「！」

「おう！ おれを驚かせてみてくれ！！・・・暗いしもう帰ろう」

15時～21時 アニメ観賞＋無双シーン再現

21時30分 説教

「食事の時間になってもリビングに来ないなんてどういうことかしら？」

霊奈がすごい顔で怒っている、くそお・・・霊奈の手料理食べそこねたぁ・・・。

「サツキは！」

「はいっ！ 修行してまし「ホームिंगアミュレット！」ぎゃあああああああ！！！！」

お札がサツキに突き刺さる、痛そうだ。

「カズマは！」

「えっ！？ えとその・・・修行をけんが「パスウェイションニードル！」ぎゃあああああああ！」

針(?)がカズマの身体に突き刺さる、つぎはおれか・・・。

「涼はなんでかしら？」

おれは倒れている(意識はない)二人を見てこう答えた。

「サツキの観察日記をつけていまし「妖怪バスター」ああああああああああ！！おれの観察日記があああああ！！」

霧雨涼へ

残りは破けて読むことが出来ませんでした。

葉っぱより

番外編 サツキの一日（観察者：霧雨涼）（後書き）

サツキたちと戦う敵についてですが・・・能力と名前が決まらない！
なにか案のある方はいませんか！？

ルーミア 光と闇を操る能力

レヴィル 重力を操る能力

ディー 攻撃を軽減する能力

闇サツキ 希望と絶望を操る能力

??? 能力を下げる能力

??? 攻撃を操作する能力

??? は名前が決まらないキャラです、それから能力は変わる可能性あります。

第二十八話 幻想郷創造戦：開戦（前書き）

どうも、葉っぱです。

バカテスの二次創作をやりたくなって来た今日この頃・・・。

第二十八話 幻想郷創造戦…開戦

おれは目を覚ます、いい天気だ、おれはリビングに向かいみんなと食事をとり始める。

「……あと一時間か……」

おれは遠くに感じる数千の妖力の反応を感じる。

「……そうですね」

おれたちは黙り込む。

時間は少し遡る……

夜中の3時、森でランニングをしていたおれのところに……、

「宣戦布告をしに来た」

と、言いに来たのは数年前、おれの身体から分離したおれの闇だった。

「おれを殺すのなら無駄だぜ？」

そう言っておれを見た。

「はっ、おれたちを舐めるなよ、どれだけ修行したと思っている」

それぞれの得意分野を数年間教えたんだ、物量作戦とか人海戦術の軍隊相手に負けてたまるか！

「楽しみにしてるよ、勝つのはおれたちだ、お前たちにや負けねえ」

「それじゃあ明日の午前11時にはそっちを攻めさせてもらおう、もし逃げれば・・・」

「おまえらの夢はおれたちが終わらせる」

おれは神社に戻りさっきの話をみんなに伝えることにする、そこで集合をかけた。

「話ってなんだ？」

「修行中だぜ」

「・・・眠いです」

「私も眠いぞ」

「ZZZ・・・」

「夜更かしは肌に悪いんだぞ」

「つまらない話だったら針で刺すわよ？」

「・・・なんつゝ結束力のなさだ・・・!!」

「はぁ・・・まあ話は簡単だ」

ブスッ！

「痛い!!　爪裏ネイルじゃないか!!」

おれの指の爪の間に細い針が突き刺さる、これじゃカイジと同じじゃないか！　おれは事務所に忍び込んでいないぞ!!

「簡単な話で睡眠時間を削るな」

そういいながら別の指にどんどん針を刺していく、そろそろ（互いに）キレそうだ。

「宣戦布告だよっ！」

「なっ!」「ぜっ!?!」「ZZZ...」「なんですって!?!」「針刺してごめん」

清明と道満（人間の頃13歳で妖怪に転生）は小学生の睡眠として納得できるが・・・紫は起きてろよ!

「治癒結界」

おれの指の傷が一瞬で回復される。

「回復ありがとう、攻めてくるのは明日の11時、今日の修行は休んでおもしろい睡眠しよう、解散!」

みんながぞろぞろと布団に戻っていき、睡眠を始める。

「・・・ファイブカード」

『』『』『さて、寝るぞ』『』『』『』

おれたちは五人で睡眠を始めた。

「・・・寝れないなあ・・・」

おれは今までの癖で睡眠ができなかったがな。

朝7時

寝るのを諦めたおれは普通に寝ている分身4体に睡眠を任せ、技の作成に取り掛かっていた。

技名はシフトチェンジ、自分と対象の位置を入れ替えるものだ、これができれば今回の戦いも楽になる・・・と、思う。

「やっぱりうまくいかないなあ・・・」

おれは数メートル離れたところにある岩とさつきからやっているが成功する気配がない。

「・・・なにか見逃しているのか・・・それともただできないだけなのか・・・」

術式は完璧だ、霊奈に見てもらったから間違いない、だとすれば対象が悪いのか・・・？

おれは部屋で寝ている分身のほうを見る。

「・・・やってみるか」

おれは部屋にいる分身一人に向かって技を発動させる。

「シフトチェンジ！」

ビュン！！！！

視界が一瞬ぼやけたかと思うとおれは布団に入っていた、おそらく条件として

- ・妖力（魔力）を持っている
- ・意思がある
- ・生き物

の3つのうちどれかが必要なだろう、それなら岩でできなかったことが納得できる。

おれはもう一度シフトチェンジをして庭にいる分身と入れ替わる。

「シャイニングブレード」

おれは剣を作りだし数メートル離れた場所に置き、発動させる。

・・・しかし効果が現れない、妖力があるだけじゃダメなのだろう、ここで第三の条件が必要であることが分かった、一と二はどうだろうか？

「モンスターメーカー、ゴーレム」

おれは岩の巨人であるゴーレムを作り出し、シフトチェンジを発動させる。

・・・効果は出ない、魔力を持って意思があるが、生き物ではない、これで第三の条件は絶対に必要だという事が分かった、この修行は収穫ありだ、さて、アイテムのメンテナンスだけして寝るかな。

おれはゴーレムを戻し、部屋に籠っていままでの発明品のメンテナンスと改良を始めた。

現在午前8時 戦いまで残り27時間

涼SIDE

サツキがシフトチェンジの修行中・・・別のところでも特訓があった。

「はあ・・・はあ・・・まだまだ！」

ギユウウウウウン・・・パシーン・・・！

・・・失敗か・・・。

『また失敗かい？ アドバイスはいるかい？』

「ああ、頼むぜ魅魔さま」

おれは強くなるためならアドバイスでもなんでも聞くし、どんな奴にも頭を下げる。

『素直な子は好きだよ』

「それよりアドバイスくれよ」

『はいはい、わかったよ、で、どんな事が聞きたい？』

「うまく力が剣の形にできない、やりかたを教えてください」

『圧縮収縮は得意分野じゃないのかい？』

得意なんだが・・・なんかうまくいかない、杖に魔力を集めてぶっ飛ばすことはできるんだがなあ・・・。

「集めれてもそこから剣の形にできないんだ、なんか方法ないか？」

『そうだねえ・・・魔力の固定化・・・かな』

固定化・・・？なんじゃそりゃ？

『あんたは今まで集めて圧縮して飛ばすだけだった、しかし今回やるのは集めて魔力を剣の形にする・・・それをやるのは難しいものだ』

「・・・それでもこの技は完成させたいんだ、今日中には！」

『・・・どんなにきつくても辛くても頑張れるかい？』

「あいつらと肩を並べて戦うことが出来るなら！ 足手まといにならないで済むのなら！ おれは何だってやってやる！！」

みんなの中でおれは一番弱い、技術ではサツキと清明が、一撃の火力では道満とカズマが、対妖怪では靈奈が、接近戦ではサキが強い、でもおれは・・・ほかの人より少しばかり魔力を集めたり圧縮できたりする程度だ、集める時間もほんの少ししか違わない。

『よく言った、今からあんたの中に入る、簡単に言えばアンタにとりつく』

おれの体に魅魔さまが入ってきたかと思うといきなり身体が勝手に動き出した。

『いまから私がアンタのやろうとしていたことをやって見せる、教えはしないから感覚で覚えな』

おれの杖に魔力が集まりはじめる、集まった魔力は形が少しずつ変わりはじめる。

「いつもここまでしかできないんだ、どうやってするんだ？」

ギユウウウウウン・・・！

『いいから見てな』

なんかの感覚があったと思ったら魔力が剣の形を作っていく。

バチバチバチバチ・・・！

『・・・完成だ、あんたがやりたかったのはこれから先だろ？』

「・・・そうだけど・・・まずはこれからマスターする、時間はないけど焦るわけにはいかない」

『わかった、それじゃあ一回憑依を解こう』

おれの体から魅魔さまが出てきた。

「いくぞ・・・！」

ギユウウウウウウン!!

ここからだ、ここからが問題だ!

おれはさつき感じた感覚を思い出しながら剣を形作っていく。

バリバリバリ・・・!

『ちょっと不恰好だけどまあギリギリ合格点かね』

「・・・うおおおおお!!」

おれはそこに魔力を流しこむ、すると剣の形が少しずつ完成されていく、二段階の魔術完成だぜ!

バチバチバチバチ・・・!!

「どうだ!? 魅魔さま!」

『合格だよ、次はそれを発動するまでの時間を短縮しな』

「おうっ!!」

おれは修行を再開した。

・・・さっきから森で魔力の乱れを感じる、誰かいるのか・・・？

おれは森に向かうことにした。

『うおおおおお！！』

・・・涼か？

おれは木の陰から覗き込んだ。

バチバチバチ・・・！！

魔力が圧縮されてできた剣が涼の手元にある、あの剣・・・強いな。

「どうだ！？ 魅魔さま！」

『合格だよ、次はそれを発動するまでの時間を短縮しな』

「おうっ！！」

涼は修行を再開する、しかしあまりうまくできていない、アドバイスをするべきか・・・？

『(そこの木の陰にいる妖怪・・・サツキというやつかな、この子の作った魔法剣は強いかい?)』

! ?
・・・テレパシーか・・・。

「(ああ、おれの作る剣よりも破壊力がある、でも安定していないな、手伝ったほうが良いか?)」

「(いや、この子の努力を無駄にするわけにはいかない、だからアంతが私にアドバイスをくれないかい?)」

「(りょーかい、じゃあ魔力を剣に纏わせる方法は――――」

涼SIDE

「よっしやあああああああ! ! ! !」

『よくやったね、一日で技を完成させるなんてやるじゃないか』

「魅魔さまのおかげだぜ! ……うおっと」

気が抜けると同時に疲労がおれを襲った。

「アゝホ、休憩ぐらい挟め」

「えっ!? サツキ! どうしてここに!?!」

「いや、あんな巨大なもん見たらふつう確認にくるだろう」

話を聞くにあの技は大きいようだ、使いどころを見極めないとな・
・・。

「それより明日が戦いなんだ、寝るぞ」

そろそろ寝ないとあれだしな。

(じゃあ今日は帰るぜ、魅魔さま)

(ゆっくり休みな)

おれは神社に戻り睡眠につく、明日の戦いに備えて……。

夜11時 戦いまで残り12時間

朝、おれは目を覚ます。

「あと4時間か・・・」

時計を確認したおれはとりあえずみんなを起こしに行くことにした。

「って、もうみんな起きてんのかよ」

「あと涼が起きてきてないけどね」

「紫、そこで寝転がってるなら起こしてきてくれよ」

「仕方ないわね・・・」

紫は嫌々ながら身体を起こし涼の部屋に向かった。

「おい、おまえら————」

「おはようだぜ……」

「おう、とりあえず飯食おうぜ」

おれはみんなにそう促すが、食べようとしないう、なんでだ？

「よく食べれるわね……」

「この状況で食べるのはすごいな」

……？

「いや、別に大軍と戦うだけだし、そこまで気にすることか？
戦

いが始まったら食えないし今のうちに食っとくべきだと思うぞ?」

おれがそういうとみんなも食べ始めた、ただし無言で。

しばらくの間静かな空間となる、しかしそれをおれはぶち壊すことにした。

「おい、紫」

「……え?」

「九尾の……藍だ、アイツに鬼と天狗連れてくるように連絡しとけ、式神なんだしできるだろ?」

「ああ、そうね、後でするわ」

再び沈黙が訪れる、しかし今度はこの空気を壊すものはいなかった。

午前9時 戦闘開始まで残り2時間

おれたちは初期位置に移動し時間がくるのを待っていた、軍団はもう見えはじめている。

「あと少しだ、全員最高の状態で戦いを始める、とりあえず簡単な作戦だ」

みんなが静かに聞きはじめる。

「まず開始直後の大技は禁止だ」

「え？ マスパ使っちゃだめなのか？」

「向こうも対策ぐらいしてるだろ、別の攻撃でするんだ、それにおれも罠を仕掛けているしな」

おれはその言葉の後に空間に手を突っ込みあるものを取り出す。

「これをお前らに一個ずつ渡しておく」

「・・・これって副作用がひどい奴ですよね？」

「涼には二個だ、消費が激しいだろ？」

「言うまでもないとばかりに無視したな」

副作用ぐらい・・・少ししかないよ？

「涼、それからこれも渡しておく、スイッチを押せば発動するからな。それからその妖力丸だが絶対に一粒ずつ飲むんだ、これは忠告じゃない、命令だ」

おれは身代わり君とあるものを涼の手に握らせる、涼はそれらを帽子の中にしまいこみ帽子をかぶった。

「それから霊奈と涼と紫はある程度経ったら戦線を離脱しろ、時間は……20分だ」

「何言ってるのよ、夢を叶えるのはあいつらを倒してkPIPIPI
IPIPIPIPI!!

おれの時計のアラームになる、どうやら時間のようだ。

「おまえら！　今から戦いだ！　ペアを組め！　それから絶対に仲間を助けに行くのは禁止だ！」

その言葉と同時に全員……ルーミアの軍団も動きはじめる。

午前11時 戦闘開始

ルーミアSIDE

「ルーミア様、戦闘を開始しました、やはりと言いますか・・・こちらの劣勢です」

「気にするな、予想の範囲内だ」

「それから・・・あの二人は別行動をさせておりますが・・・ほんとによろしいのでしょうか？」

「もちろんだ、あくまでも予想だが・・・」

あいつら・・・いや、八雲紫はすぐに戦線離脱をする」

サツキは自分の作戦を半分まで読まれていることを知るはずもなかった。

第二十八話 幻想郷創造戦..開戦(後書き)

サツキを登場させる(主人公ではない) 物語とバカテス二次創作・
・迷う!!!!

幻想郷創造戦：序盤《オープニング》（前書き）

どうも、葉っぱです。

スランプから抜けられない・・・！！

幻想郷創造戦：序盤《オープニング》

おれたちは二人一組に別れ、違う場所から突っ込み、20分が経過した。

「アイスカッター！！」

ズバズバツ！！

『『ぐわあああああああ！』』

おれの作り出した氷の刃が敵の妖怪の身体を切り裂く、チルノとの契約で威力がかなり高くなっているようだ。

「弾幕結界！」

ズバババババツ！！

紫の妖力弾が妖怪を貫き、絶命させる。

「後ろがら空きになってるわよ！」

「アホ、お前に背中を任せてんだっよ！」

ズバツ！

話しながらも剣を振るう手は休めない、倒した妖怪の数はもう百体はあっただろうか、倒しても倒しても次からどんどん現れる。

「もう20分だ！ 離脱するぞ！」

「わかったわ！」

おれは霊奈と涼に連絡をし、神社に向かって走りだした。

カズマSIDE

「サキ！ ずらすぞ！」

「OK！ 範囲指定！ 高度固定！ 空間変更！」

サキの言葉が多数の妖怪の死刑宣告となる。

「ずれろお！！！」

ギ・・・ギギギギ・・・

「カズマ！ 横から全力で！！！」

「おう！」

おれは刀に妖力を全て流しこむ。

「おおおおあああああああ！！！」

ズ・・・ン・・・ズバァア!!

おれの横からの攻撃でサキの空間がずれ、その空間にいた妖怪の体が真っ二つになる。

おれは時間を戻し、妖力の量を元に戻した。

「そろそろ20分ね、連絡来た？」

「いや、まだだ、もうすぐくるだろ」

『あゝあゝ、みんな、おれが渡した石は持っているか？ 持っているということまで話を進める。今紫を神社に戻している、あと2分で仕掛けが発動させるからその石を持って通話モードにしておけ、時間より少し早くなったり遅くなったりする可能性もある、以上』

「サキ、もうすぐ本番だ、気を引き締めよう」

「ええ」

もうすぐ神社だ、後一分も走ればつくだろう。

「サツキ！ もうすぐ神社だけどどうするの！？」

・・・。

「・・・お前の夢をかなえる結界を作り出せ、何時間かあれば出来るだろう？」

「この状況でどうするのよ！？」

・・・それをおれたちが作り出すんだよ。

おれは足を止める、少したって紫も足を止めた。

「どうしたのよ、後少し走ればつくんだから急ぎましょーよ」

おれの後ろからは妖怪たちが追ってきている、いまは目でやっと見えるぐらいだが、あと少しでここまで来れるだろう。

「いや、お前とはここでお別れだ」

「・・・え？」

「アホ、あいつらは全員お前を狙っている、お前が前線に出れば集中攻撃されるだろ」

「ねえ、何言ってるの？」

おれは紫に背中を向ける、妖怪たちはもうすぐ近くに迫っていた。

「それじゃあ……夢を叶えろよ」

「待って！ 私も！」

「来るなあああああ！！」

紫がこっちに走ってきた、おれはそれを防ぐために仕掛けを発動させる。

ゴウンゴウンゴウン！！

地面からたくさんの柱が出現し……おれと紫の間にとても高く、硬い壁が現れた。

ダンダン！

『ねえ！ サツキ！ あけてよ！！』

「それはできねえよ、おまえが結界を作ったら……そっちに行くさ」

音が止む。

『……絶対に帰って来なさいよ』

「……約束はできないな」

『だったら！　ここを開けなさい！』

壁を叩く音が復活する。

「……でも……絶対負けないさ」

『……わかったわ』

その言葉を最後に紫の妖力が遠ざかって行った。

「バカかアイツは……負けない保障なんか……死なない保障なんかあるわけないだろうがよ……！」

おれは目から流れた液体を指で拭った。

「……さて……この先は関係者以外立ち入り禁止なんだ、だから……」

おれは空間からシャイニングブレードを取り出し、構える。

「……ここからは本気だぜ？」

紫SIDE

「・・・絶対に帰って来なさいよ」

私は言いたい言葉を飲み込んでこの言葉だけと言った。

『・・・約束はできないな』

「だったら！　ここを開けなさい！」

私は壁を叩き始めた。

『・・・でも・・・絶対負けないさ』

サツキが断言するということは嘘ではないのだろう、だったら私は言われたことをやるだけだ。

「・・・わかったわ」

私は神社に向かって走り出した。

一分ほど走って神社に着く、そこには霊奈と涼が魔法陣の準備をしていた。

「どうしてここに？」

「説明は後、さっさとサツキに言われたことをやりなさい」

「警備はおれたちがするぜ！」

「・・・ええ、わかったわ」

私は陣の中央に立ち、結界の作成に取り掛かる。

みんなが無事に帰ってくることを祈りながら・・・。

涼SIDE

「・・・霊奈、結界作成に入ったようだぜ」

「ええ、そうね、さて・・・私たちは・・・」

おれたちは階段の方を振り返る。

『ああ？　ここにいるのは八雲紫だけじゃなかったのか？』

『どうやらあの男に読まれてたようですぜ、ですが人間二人を置くなんてバカでしょう』

「侵入者の排除を開始するわ！」 「侵入者の排除を開始するぜ！」

清明SIDE

「道満！　頭を下げる！」

ゴオオオオ!!

頭を下げた道満のすぐ上から封魔砲を妖怪の集団に撃ちこむ、それはさっきまでと同じように数体の妖怪を消し去り、封印するはずだった。

グニャア ビュン!

「・・・「っ!!」」

ズドオオオオン!

自分の攻撃がこちらに飛んできた。

『どうやら強い敵がいるみたいだね、攻撃力が高いようだけど・・・』

どうやらアイツに攻撃を跳ね返されたようだ。

『当たらなければ問題ないよねえ・・・?』

「朱雀!玄武!」「青龍!白虎!」

私は朱雀と玄武のオーラを纏い、道満は青龍と白虎のオーラを纏う。

どうやらこの敵は・・・

「全力でやる必要がありそうだ!」「・・・全力でやる必要があるようです!」

おれは地面から上に飛び出すように岩の柱を作り出し、飛び上がる。

ビュン！

「クリエイション！ サウザントナイフ！」

空から千本のナイフが妖怪たちに降り注ぐ、一撃で倒すことはできないが、行動を制限させることのできるダメージは与えられたようだ。

「ソードレイン！」

空間を開き、作り置きしておいた剣を降らせる。

よし・・・20は撃破したな・・・。

グンツ！

「っ!?!」

おれの体が地面に向かって落ちていく、何かに引っ張られたわけでも攻撃を受けたわけでもない、おれはシールドを作り出し、衝撃に備えた。

ドオオオオオン!

「・・・この感覚は・・・!」

この感覚は数年前のあの時の物と同じだ、紫とおれが襲撃されたときに戦った・・・。

「レヴィルか・・・!!」

『ご名答、意外だったかしら?』

・・・正直言ってコイツがくるのは予想外だった、予想ではおれの闇かルーミア自身がくると思っていたからな。

「・・・お前一人か?」

「ええ、あなたと『本気』で戦うのに他の奴らなんて邪魔なだけよ」

「・・・そうか」

おれは剣を構える、一度勝ったことがある相手とはいえそのときにコイツは本気を出していない、全くの別の敵として戦ったほうがいいだろう。

「・・・油断も驕りもないのね、普通は一度勝ったら生まれるものよ？」

「・・・残念だったな、おれは一回勝ったからといって努力をやめるような奴じゃないんでね」

「だから・・・」「そう、それじゃあ・・・」

「本気でいかせてもらう!」「本気でいかせてもらうわ!」

おれとレヴィルの戦闘が始まる。

カズマSIDE

「お・・・おい・・・嘘だろ・・・?」

「・・・どうして・・・ここに・・・?」

「はははは、それじゃあ勝負といこうか」

目の前の男は黒い剣を取り出し構えた。

幻想郷創造戦：序盤《オープニング》（後書き）

あゝ、戦闘についてですが・・・サツキ以外全員同時刻に開始するという設定です、サツキは若干早く開始している設定です。

幻想郷創造戦：サツキVSレヴィル（前書き）

どうも、葉っぱです。

遅くなってすいません、テストやら兄の引越しやらでパソコンに手がつきませんでした。いい訳なんだろうかね・・・？

幻想郷創造戦..サツキVSレヴィル

「・・・まずは周りのゴミどもを片付けないとな・・・！」

アニメの技術披露会だぜヒャッハー!!!

おれはマントを身体に巻き、さやかさんのように剣を（空間から）出現させ、目の前の一人に投げつけた。

ドスッ！

『ぐぎゃあああああ!!』

『なっ！ 貴様なにしやが ドスッ
ぎゃあああああ!!』

・・・よし、全員が襲ってくる・・・！ 一対複数の練習の成果を見せてやる！

『』『』『うおおおおお!!』『』『』

おれは空間から剣を取り出し、敵の真ん中へ突っ込んだ。

『おらっ！』

目の前の妖怪がハンマーをおれに振り下ろしてくる。

スカッ！ ズン！ ドスッ！

『ぐああああ！』

今の行動は、妖怪がハンマーを振り下ろす↓おれが当たるまで数ミリのところを突っ込み刺す瞬間にハンマーが地面に刺さる↓おれの剣が心臓を貫く・・・だ。

おれは空間から剣を取り出しながら居合い切りの要領で妖怪を数体纏めて上と下に切り分けた。

「二本めえ！！」

おれは左手に空間から取り出した剣を持ち、居合い切りの大きなスキを埋めるように回転切りをし、投げつける。

ここまでレヴィルと接触してから40秒、倒した妖怪は刺突で1体、居合い切りで3体、回転切りで3体、投擲で2体だ、レヴィルを警戒しながらの戦いでペースが落ちている、攻撃をしてこないようだが気を抜くことはできない。

おれは妖怪たちの足元のあまり大きくない隙間に滑りこみながら妖怪たちのBOX状態になっている中心から大剣を取り出しぶっ飛ばし、ブーメランのように投げつける。

よし！ 距離ができた！！

「スイッチオン」

ピッ しかし何も起こらない。

『なんだあ？ なにがスイッチオンなんだ？』

そう言い、命を捨てたい妖怪が一步踏み出す、その瞬間

『オルヴオオオオオオ . . .』

ガシッ

妖怪の両足を何かが掴んだ。

『な . . . なんだこの手！ 離せ！』

妖怪はつかまれた足を動かし、拘束を解こうとする、他の妖怪はその光景に目を奪われている。

ガシッ ガシッ

手がどんどん増え、妖怪を地面に引きずり込み始めた。

『うわあああああ！ やめてくれー！！』

暴れたせいか妖怪がバランスを崩し、両手を地面につく。

ガシッ

そしてその両手をおれの仕掛けが掴む。

「『ホームンクルスダストフィールド人造人間の廃棄場』　いまのこのフィールドの状態だ、動いた奴からああなるぜ？」

『誰か助け　ボキッ！！』

辺りを沈黙が支配する。

『遠距離化から攻撃をすれば大丈夫だ！　やれっ！』

たくさんの妖力弾がこちらに飛んでくる、おれは一つの技を発動させる。

「デイストーション」

ぐにやああああああ

空間が歪み、おれに飛んできていた妖力弾が全て別の方向に飛んでいく。

「・・・さて、こっちから行きますか」

おれは手に風をいや、嵐の力を纏わせ、横に振るった。

ゴオオオオオッ！！

『『うあああああああ！！』』

ガシガシガシ

『『ギャアアアアアア！！』』

スイッチOFFつと。

「いまはスイッチを切っている、逃げたいなら逃げな、ただまだ刃向かってくるなら容赦しない」

おれがそう言うのと、ほとんどの妖怪が逃げ出した、それを見てレヴィルは何も言わないところを見るとこいつらがおれに勝てないのは分かっていたのだろう。

おれは周りの妖怪へ消滅のオーラを飛ばし、絶命させた。

「さて・・・見物は終了だぜ？ レヴィル」

「流石だな、あれだけの敵と戦って息一つ乱れていない」

「当たり前だ、今まで修行し続けたおれだ、あれぐらいの運動ウォーミングアップになるかどうかとも分からないぜ」

おれは手にハンドガンを作り出す。

戦闘開始の合図はそれで十分だった。

パンパンパン！

おれの手のハンドガンが弾丸を数発吐き出す。

「残念ながらとどかん！」

ピシピシピシ！

弾丸が下に落ち、岩にめり込む。

「ちっ！ 面倒な能力だぜ・・・！」

自分自身に重力はかからないがおれの攻撃にかけられるか・・・、妖力は温存したいんだがな・・・！

「『魔力弾の連発銃』」

カチャ・・・

「フルバースト！」

ズダダダダダダダダ！！！！

「なっ！？ くっ！ クラビティウォール…アイス！」

最初の数発はヒットしたが、残りは圧縮された氷の壁によって阻まれた、だが・・・

計画通り！！

「レッドドラゴン！この剣に力を！！
メテオインパクト 紅色の剣！！」

おれは剣を振り上げ・・・壁を解いた瞬間を狙い剣を叩きこんだ。

ドオオオオオオ！！　ゴオオオオオオオ！！！！

「ぐっ・・・！」

おれは剣を持っていた腕・・・いや、腕だったところを見る。

ちっ、やっぱ吹っ飛んだか・・・。

「クリエイション・・・！」

おれは腕を再生し、レヴィルのほうを見る、あの程度で死んだとは思えない。

おれは周囲の索敵を開始する・・・後ろ！？

ドゴッ！

「ぐあっ！」

おれは前に吹っ飛ばされながら後ろをみる、しかしその瞬間に横からの攻撃を受け、さらに吹っ飛ばされた。

「くっ、早いのに・・・攻撃が重い・・・！？」

攻撃を受けた箇所は、全力の一撃をまともに受けたようなダメージがある、普通はパワーとスピードは反比例するものなのに・・・なぜだ？

おれはアクセルスピードを発動し、加速する、するとどうして早く

重いのがわかった。

自分自身に重力をかけているのだ。

レヴィルの腕は何度も脱臼したようなあとがあった、おそらく自分の攻撃の威力に耐えることが出来ないのだろう。

「はははは！ もう見破ったか！ こんなに早く見切られるとは思ってもいなかったぞサツキ！！」

「残念だったな！ 攻撃の手段が分かった以上さっきまでのようにはいかない！！」

おれは攻撃を仕掛けてくるレヴィルに合わせて、強烈なカウンターパンチをお見舞いする、そこまで酔うく攻撃をしていないにもかかわらず、レヴィルの身体には大きなダメージが刻み込まれる。

「うぐっ・・・！ だあああああ！！」

さらに速い速度でおれに攻撃が叩きこまれ、おれの体は吹っ飛ぶ、そしてレヴィルの腕も壊れていく。

「・・・どうしてだ！ どうしてお前はそんな怪我までしておれと戦う！！」

「決まっているだろ！ ルーミア様の夢を叶えるためだ！ そのための道になれるのなら私はここで死んでも構わない！！」

「・・・惜しい、レヴィルがこっちの味方だったならどれだけ信頼できただろうか、敵なのが惜しい。」

だがこつちにも叶える夢がある、おれもお前と同じなのかもな、おれもアイツの夢を叶えられるのなら妖怪としての一生を終えてもいい。

だから・・・

「エンジェルリンク『天使化』！！！！」

今回だけは全力で戦う！！

バサッ！バサッ！

おれの頭の上に輪っかが、背中に一对の翼が現れる、汚れ一つない純白の翼だ、これは妖力で作ったわけではない、真正正銘の本物の翼だ。

おれの手に一本の剣が握られる、それと同時に身体が白銀の鎧に包まれる。

「すまないな、レヴィル、おれも叶えなきゃいけない夢があるんだ」

おれは剣を持った右腕を上上げる、それと同時に空中にたくさん光の刃が出現する。

「ここで眠っていてくれ」

おれは右腕を振り下ろす、それと同時に光の刃がレヴィルに殺到した。

・・・。

「ぐっ・・・！」

・・・まだ起きていたか。

おれはレヴィルのところまで歩いていく、その歩みはレヴィルにとってどう見えたかは分からない、でも一ついえるのは全力の戦いをしてもらった、それだけだ。

こちらをにらみつけるレヴィルの肩に手を乗せる。

「『光の封印槍』 死ぬ事はないから安心して眠りな」

その言葉と同時にレヴィルは目を閉じた。

「・・・ふう・・・、さて、『天使化』解くかn 『うあああああああああああ！！！！』」

いきなり通信石から叫び声が聞こえた、この声は・・・カズマとサキだ。

おれは索敵を開始する。

・・・あっちだ！！

おれは反応のあった方に走り出した。

そのときレヴィルの指が動いたのにサツキは気付かなかった。

グッ・・・。

「まだ終わっちゃいないぞ・・・サツキ・・・！」

サツキは眠りについたらと思っていたがレヴィルはまだ起きていた。

ズボッ！！

「あぐっ！！！」

身体に刺さっていた槍を引き抜く、腕に刺さっていなかったのは幸いだった。

「・・・走って行った方向は・・・アイツのほうか」

私はサツキが走って行った方向に向かって進みだした。

幻想郷創造戦..サツキVSレヴィル（後書き）

さて、今回のサツキの『天使化』エンジェルリンクこれはサツキの転生に関わる重要なことです、最初の方にある伏線を貼っていたので、少しでも回収です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6604t/>

東方創滅記

2011年10月18日20時45分発行